
涼宮ハルヒの絶望

ハム太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの絶望

【Nコード】

N7453G

【作者名】

ハム太

【あらすじ】

いつも通りハルヒのわがままに振り回されるキョンだったが、いつしかそんなことにも慣れてゆき、非日常なことも日常になりつつあった。キョンはずっとそんな日々が続くと思っていたが、ある日を境にキョンの平穏な日常はまたしても崩れ去ってゆく。

1 時限目（前書き）

キャラの性格が完全に崩壊してます。原作のイメージを壊したくない方や、二次創作が嫌いな方はすぐに引き返してください。

1 時限目

放課後、俺はいつもと同じくたいした活動もしていないSOS団の部室で、いつもと同じく好青年古泉一樹と将棋をしていた。ハルヒが部室にいない時はこうやって小泉とゲームをしていることが多い、最近のブームはもっぱら将棋だった。ブームといっても、俺と古泉、二人きりの寂しいブームではあったが。

古泉の中飛車が、中央を突破し俺の美濃囲いの陣形を崩そうとした頃だったと思う。

「お茶がはいりましたよ」

子猫が喋り出したかのような声でそう言いながらいつもと同じくお茶を運んできたのは朝比奈ミクルさんだ。

俺はいつもと同じく「ありがとう、朝比奈さん（俺のため『だけ』にこんなおいしいお茶を淹れてくれて）」と言おうとしたが、そのセリフは朝比奈さんがどうやったのか知らないが、摩擦力十分の平面上で足を滑らせたことによって「ありがと……」までで遮られてしまうこととなった。

「あ、ごめんなさい……すぐにタオル取ってきてま……」

立ちあがろうとした途端、今度はお茶で濡れた床で足を滑らせて転んだ。メイド姿の巨乳美少女が服を濡らしながら床に倒れている光景など、AVや同人誌以外の世界ではそうそうお眼にかかれるものではない。俺はこの幸運をもたらしてくれた神に心底感謝した。こんな朝比奈さんが見れるのなら、昨日洗濯したばかりの制服にお茶をかけられようが美濃囲いが水攻めにされようがお茶が熱くてちよつと火傷しようが、それは正当な対価というものだろう。お茶が灯油だったとしても許す。神が許さなくても、俺が全力で許す。

古泉が俺のイスに座ってなくてよかった。もし古泉と俺が逆の位置に座っていたら、こんな幸運には巡り合えなかったろうから。

「これ、使って」

今までずっと『回想のビュイック8』から目を離さなかった長門が、俺にハンカチを差し出した。

「そんなに気を使っていたかなくても……」

と言いつつ、内心では狂喜乱舞する俺。まあ、普段からハルヒのわがままに付き合わされている身分なので、たまにはこういうボ－ナスがあってもいいと思う。

「はやく拭かないとお茶がしみ込みますから……」

健気な朝比奈さんは立ち上がって俺の代わりに差し出されたハンカチを取ると、すぐに俺の制服の黒くなった部分を拭き始めた。腕が、朝比奈さんの胸の双子山に何度も触れそうになった。

「ではこの勝負は僕の勝ちということで、もう一度初めから指し直しますか」

古泉の勝ちなのが気に入らなかったが、そんなことはもはやどうでもよかった。なぜか、俺の心の中は勝利したかのような快感で満ち溢れていたからだ。

「なあゝにやってるの、ミ・ク・ルちゃん！」

ハルヒが突然部室に入って来た。機嫌がよさそうだったが、俺と朝比奈さんが楽しそうに戯れている光景を見て、その表情は一変した。

「キョンなんか雑巾で十分よ！」

いきなり俺の顔に掃除用の雑巾を押し付けてきた。

「待て、そこは濡れてな……うお！」

容赦なく押しつけられる雑巾に俺は声を詰まらせた。やばい。このままだと呼吸もできなくなってしまう。

「アハハハ、お二人とも楽しそうですね」

古泉が勝ち誇ったような笑顔でそう言った。いや、もちろん目は雑巾で隠されていたから実際に顔が見えた訳ではなかったが、俺の心の目ではバツチリそれが見えていた。

1 時限目（後書き）

重大な誤字を発見したw w
ごめんなさい ごめんなさい

本当にごめんなさい。

2時限目

窒息死を免れた後、いつも通りマツタリとした時間が流れ下校時間も間もなくという頃――古泉は将棋で俺をコテンパンに叩きのめし（古泉は本当に将棋が強かった。予知能力でもあるんじゃないのか？）、「なかなか白熱した勝負でした。今日はもういい時間なので、そろそろ帰らせてもらいますね」と言い残すとさっきの憎たらしい笑顔をぶら下げて颯爽と部室を後にしていった。

ハルヒは……おそらくトイレにでも行っていたのだろうか、小泉が帰宅した時は部室にいなかった。

部室には、窓から差し込む夕日で三つの長い影が壁にまで達していた。ひとつは俺。ひとつは朝比奈さん。ひとつは長門ユキ。

ずっとこの状況が続くものだと思っただけで疑わなかったし、むしろそれを望んでいたかもしれない。ずっとハルヒのわがままに付き合わされるのだろうが、それはそれでいいような気がした。ここにいる皆とのかけがえのない思い出は、今は何でもないようできて、きつと一生の……ワインというのがふさわしいかもしれない。時間が経つほど価値を増してゆく宝物だ。もちろん、俺はまだ未成年なのでワインなど飲んだこともなかったのだが、とにかく、そうなるであろうことをこの時は信じながら、朝比奈さんが淹れ直してくれたお茶を一口すすった。

「長門さん……」

朝比奈さんが目の前に立ってそう問いかけても、長門はほとんどページの残ってない『回想のビュイック8』から目をそらすことなく

「何？」

とだけ短く答えた。そういや、この本は確かステイブ・キングという人が作者らしい。

「ひとつききたいことがあるんです……」

この人、海外では超売れっ子作家らしいが、俺は海外の小説なんて特に興味ないので長門に教えられなければ一生知らないままだったかもしれない……日本の小説でも大して興味がある訳ではないのに。名前に“キング”が入っているが、別に王侯貴族とはなんの関係も無いことだけは長門に聞いて知っていた。

「それと、質問する前に、二つだけ約束してもらっていいですか？」

「何？」

窓から差し込む夕日に照らされている二人の美少女……それだけで古泉に将棋でボコボコにされた傷は癒され、ハルヒに雑巾で痛めつけられた眼球も癒されてゆく。

「まず、わたしの質問に正直に答えてください。それと、もう一つは、もしかしたらわたし、すごく失礼なことを言ってしまうかもしれないです……だけど、決して悪気があつてそう言うわけじゃないんです」

「分かった。言つて」

最後のお茶をすすする。お茶を飲み干した後に見えた湯飲みの底は、今でも色鮮やかなまま記憶の片隅にへばり付いている。この後、世界が大きく変わってしまうというのに——俺はこれからもいつもと同じ日常が続くと思ひこんで、呑気にお茶をすすっていたのだ。

「本当に正直に答えてくださいね」

「早く言つて」

長門の言葉に珍しく感情が現れたように聞こえた。

「さっきお茶を運んでいるとき、わたしに足をひっかけましたよね？」

一瞬地獄が凍りついたような静けさが部室に漂った。『足をひっかける』？長門が？

確かに、位置的にそれは十分可能だったが、それを言えば朝比奈さんが何の突起もない平面上で転ぶ確率も十分ある訳でして——

「そんなことはしていない」

長門は俺の予想通りそう答えた。そりゃそうだ。長門は無口だが決してそんな悪いことをするような人間……ではないが、とにかくそんなことは絶対にしない。むしろ、ハルヒの方がやりそうなことだぞ、それは。もちろん、ハルヒはそのときまだ部室に来てなかった。

「そんなことをしても何の利益にもならないし、そもそも身に覚えが――」

「どうしてそんな見え透いた嘘をつくんですか？」

朝比奈さんは長門の無実の訴えを途中で容赦なく遮った。

「もう、あなたしかいないですよ。ふふ、宇宙人って嘘をつくのが下手ですね。いつもは無口な長門さんがこんなときだけ必死になって否定して。すぐにわかりました」

「私は本当に足なんてひっかけてない。信じて」

長門の訴えは、半分はこの状況を静観している俺に向けられていたのかもしれない。俺は止めようと思った。きっと、朝比奈さんは普段からハルヒのおもちやにされてストレスが溜まっていたのだろう。だからこんな風に長門に当たっているだけだ――この時は無邪気にもそう考えていた。

「しかもなんですか、あれ。ハンカチなんか取り出して。見え見えのアリバイ工作に引っかけるとでも？」

アリバイとは現場不在証明のことで、この場合は使い方を間違っている。朝比奈さんが言いたかったのは『疑いをそらすための偽装工作』あたりだろう。

「違う。あれはキョン君が火傷しそうだったから――」

「宇宙からわざわざ友愛の精神を講義しに来るなんて、人のいい宇宙人なんですね。そうやって必死に否定するから嘘がばれるんですよ」

夕日を浴びて真っ赤になった朝比奈さんがニコツと笑った。

もう、ここらへんにしとこう。憎たらしい笑顔は古泉だけでたくさんだ。俺は空になった湯飲みを机の上に置くと、二人を止めるた

めに立ちあがった。

「ただいま〜！あれ、三人ともどうしたの？そんなところでボーツとしちゃってさあ」

ハルヒがタイミングよく帰ってきてくれた。おかげで、この地獄のような修羅場を何とか切り抜けることができそうだ。

「さあ、ミクルちゃんも着替えて着替えて！今から帰る準備をしなきゃね」

俺は黙って部室を後にした。

また、明日になればいつも通りの日常が始まるのだろう。いや、そうに決まっているさ。

朝比奈さんもまたいつも通りに戻って、世界は同じように回り続ける——そうに決まっているさ。決まっているはずなんだ。

3時限目

授業終了の鐘が鳴ると同時に、俺はまた文化部棟にある部室へと足を運んだ。もし、今日も朝比奈さんの様子がおかしければ何らかの対処法を考えなくてはならないだろう。どうやら朝比奈さんがやって来た遙か未来においても、ハルヒのセクハラまがいの暴虐に対する有効な防衛方法は見つかってないらしい。だったら、現代にいる人間で何とかするしかない。

ハルヒの性格や行動はもはや矯正不可能だとしても、朝比奈さんの受けたストレスは早く何らかの形で発散させてやった方がいい。そうでないと、朝比奈さんまでハルヒのような性格に……それは無いかもしれないが、やっぱり朝比奈さんがかわいそうだ。

部室へと続く長い廊下を歩いてゆく俺。

部室前まで来て気づいた。なんだ、半ドアになっているじゃないか。

俺がそのドアの隙間から部屋を覗き込んだのは、決してうっかりドアのカギを締め忘れた朝比奈さんの生着替えを見たいからではなかった…… いや…… やっぱり正直に言おう。

正直、1割ぐらいはそんな希望的観測があった。それが男のロマンというものだし、打席に立ったバッターは常にヒットを狙っているものだ。もし、君たちが俺のことを変態豚とかおっぱい星人だとか覗き魔だとか呼びたければ、どうぞご勝手に。好きに呼んでいたいてけっこうだ。

だが残りの9割は、純粹に何かいつもと違う感覚がしたからだっただ。半ドアにも関わらず、そのドアは開けられることを拒絶しているかのように俺には感じたのだ。

中にいる人間（離れたやつ）に悟られぬよう、そっと覗きこむ俺。

そこにいたのがメイドに変身中の朝比奈さんであつたならどんな

に良かっただろうか。それをハルヒに見つかって変態呼ばわりされて2、3発殴られるなら、どんなに良かっただろうか。必死に言い訳している最中に古泉がやってきて冷たい微笑で見下されるならどんなに良かっただろうか。

残念ながら、そこにいたのは口に白い棒状のものを咥えている朝比奈さん（変身済み）と口から煙を吐き出す古泉と、その二人の傍らで相も変わらず無表情で椅子に座って読書に耽る長門ユキの三人だった。

俺は信じたくなかった。古泉が手に持っているのは紛れもなく煙草だったが、朝比奈さんが咥えているのはチュッパチャップスの棒か何かだ、きつと。美少女は甘いものを欠かさない。それが世界の公式のはずだ。

「ゴホゴホッ」朝比奈さんは世界の公式を完全粉碎しながら、むせて煙を吐いた。

「昔のひとつてこんなものを吸ってたんですねえ」

「お味はいかがでしたか？」古泉がたずねる。

「うーん……正直言つと……あまりおいしいとは感じませんね……」

「そうですか……残念です。ちよつとでもストレス解消になれば、思っていたのですが」

おいおい、そんなものでストレスを解消させようとするなよ。これによつては、俺だって黙ってないぞ。

「古泉君は、よくむせずに平気ですね」

「ええ。まあ、慣れてますからね。それに超能力は脳に非常に負荷がかかるんです。それを和らげるためには、煙草というのは非常に効果があるんですよ。もちろん、健康には随分と悪いみたいです。が。まあ、僕は脳が疲れたときに一・二本吸うくらいですから、大した影響はないでしょう」

このまま放つて置いたら将来麻薬にも手を出すのではなからうかいや、脳が疲れたときのリフレッシュに、大麻はちょうどいいん

ですよ。LSDやモルヒネもなかなかいいですね。アヘンやコカインも強力で疲労がたまった時なんかには効果を発揮しますが、何せ値段も高いし強力なので初心者にはお勧めできないですね。などと言いながら。毎日が小春日和であるかのような微笑をたたえて。

「そろそろ涼宮さんが来る時間ですね」

そう言つと、好青年はポケットから携帯灰皿を取り出して短くなつた白い棒をそこにねじこんだ。

「朝比奈さんも、そろそろ」

だが、美少女メイドは古泉の差し出した灰皿を無視して長門の方へつかつかと歩み寄つた。

「その本、そんなにおもしろいんですか？」

「まあまあ」

「どのあたりがおもしろいんですか？」

「ユニーク」

朝比奈さんはブチギレた。それは、ハルヒのように感情を表に出すようなタイプのキレ方ではなかった。朝比奈さんの表情はキレる前と後で何の変化もしていない。それこそ、ヒューマノイド・インターフェイスみたいに。

朝比奈さんは長門がページをめくろうと手を伸ばした瞬間に、まだ長いままの煙草を思いっきりそのページに押しつけた。ページの焦げた部分から白くて細い一筋の煙があがった。それは、本が助けを求めて差し出した細い腕のようにも見えた。煙の先には、昨日に夕陽の中で見せたのと同じ微笑をたたえた朝比奈さんの顔があつた。

「謝ってください」

> i 2 6 3 7 6 — 2 6 8 9 <

朝比奈さんが手を離れた後も、煙草は地面に突き刺さつたミサイルみたいに本のページにそそりたつたままだつた。さらに顔を近づけて言う。

「昨日のこと、早く謝ってください」

無言のままの長門。目線も本から動かさない。

「朝比奈さん、それは少しやり過ぎですよ」

古泉が仲裁しようとしたのだろうか、朝比奈さんに近づこうとした瞬間だった。

「きゃあああああ！！」

長門は素早く本に刺さった煙草を拾いあげると、朝比奈さんのクリクリした瞳に撃ち返したのだ。あまりの苦痛に両手で顔覆い隠す朝比奈さんだったが、長門はその隙を見逃す気はないようで、から空きになった胴体みぞおち部分にいつの間にか閉じたハードカバー本を叩きこんだ。

「ぐえっ」

およそ美少女キャラに似つかわしくない呻きを漏らすと、朝比奈さんは体の自由すらきかなくなっただのか、床に倒れ込んだ。長門は無言で立ち上がると、本を大上段に振り上げ――振り降ろそうとしたが腕は動かなかった。なぜなら、その時には流石に俺も静観している場合ではないと思って部屋に入り、振り上げられた長門の手首を掴んだからだ。そのまま放っておいたら、間違いなく朝比奈さんの頭には今頃ステイブーン・キング著『デッド・ゾーン』ハードカバー版（回想のビュイックはもう読み終わったらしい）がゾンビの頭の斧みたいに突き刺さっていたことだろう。

「落ち着け、長門！」

「放して、キョン君。こいつはここで殺さなきゃだめ」

俺の拘束を全力で振りほどこうとする長門だったが、それを許す訳にはいかない。長門の気持ちも十分良く分かる。やってもない悪事でネチネチ言い寄られ、拳句この暴挙。本当に朝比奈さんはどうしてしまったのだろうか。

だが、こんな方法じゃ根本的には何も解決しない。もっとちゃんとした形で――

“甘いですね”

ん、何だ？ 急にどっかから声が……今流行りの天国からの手紙か？ 俺の両親はまだ元気なはずだが……

“違いますよ、僕ですよ、僕。古泉一樹です”

な、急に何なんだ、これは？

“俗に言う、テレパシー、というやつですよ。今、僕はあなたの脳に直接メッセージを送り込んでいる”

「大丈夫ですか、朝比奈さん」古泉が駆け寄る。

「ふえ……」

「これは酷い……」

テレパシー？ お前、そんなことできたのか？ だいたい、能力は閉鎖空間内だけじゃなかったのかよ。

「早く病院で診てもらわないと……」

“なぜか最近、急にいろんな超能力が僕に備わってしまったんです”

ハルヒが望んだから？

“詳しい原因はわかりませんが、おそらくそうでしょう。もちろん、能力を涼宮さん本人の前で使わないというのは変わりませんが”

“じゃあ、どうして今頃テレパシーなんかしてきたんだよ。”

“二つあります。まず、このお二人の決着はそう簡単にはつきません。なぜかは後で詳しく説明しましょう”

んで、もう一つは何なんだよ。

“もう一つは……さっきのことを内密にお願いできませんか？”

さっきって……煙草のことか？

“そうです。バレたら色々まずいですし、僕としても吸いたくて吸っている訳ではないんです。いわば、超能力の副作用的なものでして”

分かった。内緒にしておく。

“ありがとうございます”

お前に感謝されても、ちっともうれしくないね。

「キヨン君、放して」

そういえば古泉とテレパシーしている間、ずっと長門の手首を掴んだままだった。

「放すから、朝比奈さんにこれ以上何もしないと約束してくれ」

「分かった、約束する」

俺の頭には、手を離れた瞬間、ハードカバー本を振り下ろす光景がよぎったが――

“大丈夫です。長門さんはあなたに対して決して嘘をついたりはしませんから”

勝手に人の頭に入ってくるな。それにどうしてそんなことがお前に分かるんだよ。

“これも詳しくは後で説明しますが、長門さんはあなたに対して特別な感情を抱いている”

とにかく、俺は長門を信用して手を離れた。

古泉の言った通り、長門はゆっくりと手を下すと机の上にハードカバー本を置いた。

「痛いですう……助けてくださあい……」

「自業自得」

一遍の慈悲もなかった。

「とにかく、早く治療しないと……最悪の場合失明ということも

……」

“すいません”

何だ？

“長門さんに、情報操作で朝比奈さんの傷を治してくれるように頼んでくれませんか？”

それは猫に魚の手術を頼むようなもんだ。それより早く医者に診て貰おう。

“さっきお話したとおり、長門さんはあなたに特別な感情を抱いています。あなたの言うことなら、さっきのようにすぐに聞いてくれるはずです。それに、この怪我……現代医療では完治は厳しいでしょう。これは同時に朝比奈さんのためでもあるんです”

「とにかく、一刻を争う事態です」

古泉が声にだしてそう言ったのは、長門にも聞かせるためだった

のだろうか。

「助けて……くだらあい……」

もはや考えている時間などなかった。確かに、長門なら何とかしてくれそうだ。破壊された教室を一瞬で元に戻し、野球大会でホームランバットを製造した長門なら、朝比奈さんの眼の治療くらいどうつてことなさそうだ。

「長門、気が進まないことだとは思うんだが、朝比奈さんの傷、お前の情報操作でチャチャツと治してやってくれないか。もう十分苦しんだし、反省している」

「でも、わたしの心の傷は治らない。たとえどんな情報操作をしても」

「う……」

俺は言葉に詰まってしまった。確かにそうだが、いくら自業自得とはいえ朝比奈さんも可哀想だった。

「条件がある」

長門の方から条件を持ち出すなんて珍しい。

でも、それは俺に何とか出来ることなのか？ まさか、俺の目を引き換えにとか、寿命が半分になるとか、そんなんじゃないだろうな……

「キスして」

「え？」

俺はまたもや返答に窮した。これは本気で言っているのか？この非常事態において……

“いっそ抱いたらどうですか？”

うるせえ。お前は少し黙ってる。他に方法はないのかよ……

“一応言っておくと、長門さんのあなたに対する感情は90%の好奇心と10%のエロスが入り混じったようなものですな”

何か納得いかねえ……

“まあ、長門さんもようやく人間らしくなってきたということでは、何とか条件を聞いてあげてくれませんか？”

「キヨン君がキスしてくれたら……わたしの心も癒されるから……」(ちよつと顔を赤らめる)

くっそー、しょうもない知恵ばかり身につけやがってアバズレ宇宙人め……小説と現実の世界をこつちやにしてやがる。

“早くしてください”

はいはい、やればいいんだろ、やれば！

“あなたも素直じゃないですねえ”

うるさい！ とにかく黙ってる！

俺は長門の肩に両手を置き、目線を合わせた。

「本当に、朝比奈さんを治してくれるんだな？」

「安心して」

後で考えると、『約束を守るから安心して』とも『ただのキスだから安心して』とも、両方の意味で取れる意味深な言葉だと思った。

「痛いですう……」

苦痛に呻く朝比奈さん。

早くしなければ。

俺は覚悟を決めると、息を吸い込んでから一気に長門を引き寄せ、てそつと唇を重ねた。

> i 2 5 3 0 3 — 2 6 8 9 <

え？ どんな感触だったか、て？ それは教えない。どうして、俺のことを変態豚とかおっぱい星人とか、挙句に覗き魔呼ばわりするやつに教えなければならんだ？ これは当然の報いだ。自業自得だ。

「朝比奈さん、大丈夫ですか？ 朝比奈さん」

古泉の呼びかけに対し、しばらくは何の反応も見せなかった朝比奈さんだったが、すぐに眼の痛みが消えたことに気づいたようだ。

「あれ？ 急に痛みが……それに、視力も戻ってる……」

良かった。まだ問題は多く残っているが、これで問題解決の土俵には立てたわけだ。俺が二人をどうやって仲直りさせようかと考え始めたときだ。

「へえ、なかなか上手じゃない。どこで覚えたの、そんなこと」
声をする方を眺めてみると、そこにはSOS団暴君であるハルヒ
閣下がじつとこちらをご覧になっっているではないか。

「覚悟は出来てるわよね？ 変態豚ヤロウ」

“大丈夫ですよ。いざという時は、また長門さんに何とかしてもらいましょう。アハハハハ”

笑ってないでどうかしてくれ！

3 時限目（後書き）

なんとなく挿絵を挿入。下書きだが、いつかちゃんと清書しようとは思っている。とりあえず、小説完成させてから……

4時限目

そうやって俺の平穏な学園生活は、このときから音を立てて急速に崩れ去っていった。俺もハルヒがSOS団を作ってから少々のことは覚悟していた。これを読んでいる君たちは、きっとハルヒが巻き起こすドタバタでちよつと思議で爽やかで青春な冒険を期待していることだと思う。しかし残念ながら、これから俺が話すのはそういう『どこか非日常的な学園コメディ』とは少し違うようだ。ここで繰り広げられるのは、ファックでシットでビッチな学園暴力闘争の断片、それも不完全で不格好な断片にすぎない。それでも続きを読みたいと言うなら、どうぞ、先へ進んでもらって結構だ。俺の見てきたことを教えて差し上げよう。さあ、ついて来てくれたまえ。ああ、そういえばあいさつを忘れていたな。

ようこそ、我らがSOS団へ。

翌日から、毎日の歯磨きは針に糸を通すような作業になっていた。昨日のあのクソ女が放った左フックは、俺の顎先へと誘導ミサイルみたいに見事に命中した。拳が当たったと思った瞬間、俺の目の前はドラクエのゲームオーバー画面みたいに真っ暗になった。本当に死んだかと思ったが――どれくらいの時間がたったのか知らないが、ようやく目を覚ましたときには並べたパイプイスの上に横たえられていた。最初はぼやけていた視力が元に戻ると、すぐ近くに例のうすら笑いを浮かべた古泉の顔があった。

俺の顔は姉ちゃんのケツか？と言いたかったが、すでにそこそこではなかったものでそれは言わずにおいた。どうやら、俺がゲームオーバーになった後に古泉が被弾個所に氷を当てて冷やしてくれたみたいだったが、のちの結果から見ると、文字通り焼け石に水だったらしい。まあ、あのまま部室の床にほったらかしにされるよりは数

段マシだと思つて神と古泉に感謝するしかない。

その日、俺は昼休みに校舎裏のベンチで古泉と待ち合わせをしていた。やつが言っていた『後で説明する』とか言つてたことを説明してもらつたためだ。

ここは校舎の日陰になつていて、この暑くなりだした季節にはちょうどいい気温だし、集まつてくる生徒も少ないから落ちついて話をするには絶好の場所だった。おしゃべり女子は教室にいるだろうし、大抵の男子は運動場へ行く。不良がたむろしてシンナーでも吸つてそんな場所ではあるが、俺の通つていた北高はそこそこにお行儀がよかったのでそんなやつはいなかった。ただ、俺が先に到着して古泉を待つている間、いつの間になつてきたのか鬱陶しいアベックが隣りの席でいちやつきだした。

だが俺が心底『この世から消えてください』というような目でしばらく見つめていると、思いが通じたのかすぐにどこかに消え去つた。俺にはテレパシーの素質があるのかもしれない。

古泉はそれからすぐにやつてきた。

「やあ、お待たせしました」

こう言つ時の古泉の笑顔はまた一段と憎たらしく見える。やつは俺のベンチの隣りにドカツと腰をおろした。

「昨日は災難でしたね」

「顔を近づけすぎだ」

「おっと、失礼」

「とにかく、お前の知つていることを全部教えてもらつぞ」

「そう焦らずに。そうですね……どこから説明しましょうか」

確かに、昨日は訳の分らないことが多すぎた。俺は喋るだけでも口の中が痛んだので、なるべく口を動かさないようにして言った。

「まず、長門なぐさと朝比奈あさひさんの関係からだな」

自分でも情けない発音だが仕方ない。

「いくらなんでも、あの大人しい長門があんなに怒つたところを俺は見たことが無い。前から恨みでもあつたような感じた。あの嫌

がらせは、前から続いていたのか？」

その可能性は高いと思った。実際、長門は俺が止めたときに『ここで殺さなきゃダメ』とまで言っていた。『ここで』ということは過去から継続して、つまり過去完了ということだろう。

「ふふ」

「何だ、気色悪い笑いを……」

「御名答です。まず、朝比奈さんがやって来た未来の状況についてお話ししよう」

古泉が専門用語を散りばめて（人類がシエフィールド推進装置を開発して銀河中心部まで進出するようになったところ、その中心部でダークマターの質量変化によってはじめて存在が観測された……うんたらかんたら、どうたらこうたら）話したことを要約すると、朝比奈さんがやって来た未来には、人類は今では考えられないような効率的・反則的スーパードエンジンを開発し、銀河の中心部へと航海できるようになったらしい。そこで新たな新天地を見つけた人類は平和的繁栄を築き上げました、メダタシ、メダタシ、で話が終わってくればありがたいことだったのだが、銀河中心部にたどりついた宇宙船は有史以来の人類の悲願とも言えるものを発見してしまう。そう、地球外知的生命体、それも人類とは異なる形態の知的生命体だった。

そして人類はその知的生命体と仲良しになって隣人愛を育みながら共に繁栄を築き上げるのであった、メダタシ、メダタシ、とは問屋が卸さなかった。（その時代に問屋があるかどうかは知らないが）とにかく、色々なスタタモンダがあった末に人類はその知的生命体と銀河の覇権を巡る全面戦争に突入してしまったのだ……

口が痛いので、色々聞きたいことはあっても黙っていた俺だったが、ここまで話が進んだところで俺は郵政民営化について熱く答弁する政治家よろしく、大げさな身振り手振りで話す古泉一樹首相を途中で遮って一つの疑問を投げかけた。

「ちよっと待て。話が全く見えん。それがどうして朝比奈さんと

長門の確執につながるって言うんだ？」

「鋭いあなたなら、もう薄々感づいていると思っただけだ」
うーん……

ダメだ、分らん。というか、こいつらの言ってることはもう一般高
校生の思考の範疇じゃ理解できんだろ。

「もつとよく考えてください」

そう促されても、分らんもんは分らん……いいや、ちょっと待
てよ。

「何か気付いたようですね。多分それで当たりだと思っています」

横を向くと古泉が、一般的女子なら運命の鼓動と甘酸っぱい恋の
予感を感じるに違いない魅力的な笑顔を、俺の顔から5センチの
ところで浮かべていた。

「とりあえず、近すぎだ」

「これは失礼」

「お前の言いたいことが分かった。その地球外知的生命体という
やつが長門の種族である、情報生命体という訳なんだな。しかも、

長門一族と人類は――

歴史上の異文明どうしの接触を鑑みるに、何らかのイザコザを抱
えている。それも、戦争という最悪の形で。

「お察しの通りです。しかも――たちの悪いことに、戦時下に成
長した朝比奈さんは宇宙人を悪者と教えられて育った。いわば、未
来から送られてきた宇宙人撃退用ターミネーターと言う訳です」

そういうことだったのか。とりあえず、その未来人の類まれな人
選センスにはお礼を言っておきたい。できれば、あと2、3人ほど
朝比奈さんのような美少女ターミネーターを追加してもらえれば感
謝の極みである。

「第二次世界大戦の時の日本が、アメリカ建国時代にスパイを送り
込んだようなものか。ワシントンを殺害しようとして」

「全くその通りです。長門さんはこの時代でハルヒと接触すること
によって、停滞していた情報生命体の自立進化のカギを見つけたん

です。朝比奈さんの目的は、長門さんがその“カギ”を見つける前に宇宙へ帰ってもらうことです。そうすれば、未来における情報生命体は数段弱くなる……なにせ、彼らは進化できなかったことになるのですから」

なるほど。朝比奈さんも、未来の宇宙戦争が生んだ悲しき犠牲者という訳なのか。いや、俺達がそう思っているだけで、案外当の朝比奈さんには被害者という感覚自体がないのかもしれない……

「それにしても、現代人にとっては迷惑もはなはだしいな……」

校舎の向こうの校庭から、学生の無駄に元気な声が響いていた。たぶん、くだらない玉蹴り遊戯で盛り上がっているんだろう。黙ってそこで野グソでもしてる。

「ええ、確かに。我々現代人の意図なんてお構いなしの、時空を超えた代理戦争ですからね、これは」

「お前の所属している『機関』は、どんな風に考えているんだ？」

「お偉方の方針は、基本的に以前あなたにお聞かせしたのと変わりません。ハルヒに事実を隠蔽する、もしものときは僕の新しい能力を駆使してでも。それに加えて、長門さんと朝比奈さんの闘争にもし一般現代人が巻き込まれそうになったら、それも全力で守る」

「その、なんて言うんだ、お前の能力を使って、二人の仲裁をするとか、そんなことは方針にはないのか？ただ、自分たちの身を守るだけなのか？もしかしたら、未来から来た朝比奈さんの攻撃で長門が地球人嫌いになって、その結果、宇宙戦争が起こった可能性もあるじゃないか」

「なかなか鋭いところを突いてきますね」

ニートが働き出したかのような目でこちらを見て言った。

「『機関』でも一応その意見は出ました。二人を講和させれば問題は根本的に解決するのではないかと。しかし——そうですね。仮に二人の現代における闘争が原因で、未来に宇宙戦争が起きたと仮定してください。次に、さっきあなたが仰ったたとえ、戦争中の日本が建国時のアメリカにスパイを送り込んだと仮定してみます。そ

して、そのスパイは見事ワシントンを殺害することに成功します。その結果、アメリカと言う国も建国されなかった、とします」

俺は腕を組んで考えていた。

「おかしいな」

「そうですね。もし、アメリカが建国されなかったなら、そもそも日本とアメリカの戦争そのものが起きなかったことになる。そうなれば、当然スパイを送り込む必要性もなくなる……」

「スパイが送り込まれなければ、アメリカは歴史通り成立し、結局日本との戦争は避けられない……」ということか。矛盾してるな」

「そうです。仮に、僕たちが朝比奈さんと長門さんの講和に成功したとする」

古泉がこちらを見て言う。

「そもそも宇宙戦争は起きたことにならないから……」
俺はそう言いながら古泉を見つめ返す。

「朝比奈さんが現代に来たという事実が消滅する」

さつきとは違って、一件、何の矛盾もないように見える。朝比奈さんがやって来て嫌がらせをしたから宇宙戦争が起きたのであれば、朝比奈さんが現代に来たという事実とともに未来の宇宙戦争という事実も消え去るからだ。二つは同時に消え去る。天秤の両方の重りを同時に取り去るだけだから、天秤の均衡は崩れない。もちろん、朝比奈さんがいないことになってしまうのは寂しいことだが、未来の多大な犠牲は避けられる。それに、朝比奈さん自身は（戦争のなくなった）未来で有意義な人生を送るだけだし、現代を巻き込んだ代理戦争も避けられる。何も矛盾はないように見えたが……

「しかし、ここで涼宮ハルヒという存在が大きく僕らの前に立ちはだかつてくる」

古泉が俺を指さして言った。テレビに出てくるクイズ番組の司会者みたいに。さあ、こちらのパネルをご覧ください！ドン！

「そうだな……あのハルヒがマスコットキャラたる朝比奈さんの消失を望む訳がないか」

「もう一つ考えられることは、未来の宇宙戦争は別の原因で起こった、ということです」

「もしそうなら、長門と朝比奈さんが仲直りしたとしても——相変わらず未来の宇宙戦争は避けられない……」

ふと、ひとつ疑問が浮かんだ。というより、思いだした。それはこの議論が始まった時に訊いておくべきことだったのだが、議論のトリッキーな成り行きに完全に取り残されていた。

「お前、どうやってその未来のことを知ったんだ？まさか、それもお前の超能力のおかげなのか？」

「いえ。まあ、超能力というのは当たっていますが、『機関』に所属する他の超能力者にも僕と同じような現象が起こりました。その内の一人が身につけた予知能力によって、遥か未来のことが観測できるようになったんです」

「じゃあ、そいつに頼んで順番に歴史を追ってもらえば原因もはつきりするんじゃないのか」

「それも試してみました。が、残念なことに観測できる未来は、なぜか朝比奈さんのいた時代『以降』なんです。それ以前については急に霧がかかったみたいになってよく観測できない。まるで切り取って来た映画のワンシーンみたいに、そこだけよく見えるらしいんです」

「じゃあちなみに、宇宙戦争の後はどうなるんだ？」

ここではじめて古泉は俺の目から視線をそらした。おいおい、やめてくれよ。その道端で猫の轢死体見てうわ、みたいな目を。

「果たして、僕がそこまでお話ししていいかどうか……」

「おい、それはないだろ。ここまで話したんだから——知ってることは全部話してくれよ。秘密は絶対に守るから」

気が付けば俺の方から古泉に顔を近づけて懇願していた。もしあのバカップルがいたら、俺たちを間違はなくホモだと思っただろう。それより、ここでテレビのクイズ司会者よろしく長いCMに入られてはたまったもんじゃあない。

「そうですね。ここまで話したのなら、あなたには最後まで聞く権利がある。でも覚えていてください。この話を聞いたら、もう後には引けない義務があなたにのしかかってくることを」

「分かった」

「では言いますね。数百年に渡る宇宙戦争は、最初の方こそ地球側の優勢だった。しかし、情報生命体は瞬く間に人類のテクノロジーの対処法を開発。自立進化を獲得していた情報生命体は、戦争初期で得た新たな人類の情報をもとにその後は有効な攻撃方法・防御方法を次々と編み出してゆき、反転攻勢。最終的には、最後まで抵抗を止めない人類を滅ぼしてしまえます」

「おわり？」

きつと間抜けな声で俺はそう問い返したのだろう。

「ええ、お終いです」クイズはもうこれでお終い、だから今日は早く寝なさい、かわいい坊や。

「ですが、不幸中の幸いというのでしょうか、その予知能力者が見たところによると、人類が滅んだ日も地球そのものは今と同じく青いままだったそうです。情報生命体は意外にもエコロジストだったんですね。なるべく地球環境を傷つけることなく人類を滅ぼしたようです。その人は、その後もしばらく黒い宇宙空間に浮かぶ地球の映像を見たそうですが、やがてその映像も真黒に塗りつぶされて――しまいには何も見えなくなったそうです」

「じゃあ、宇宙戦争『以降』って言っても、実質そこだけじゃねえか！」

語気を荒げた瞬間、口の中を針で突かれたような鋭い痛みが襲ってきた。傷口が歯に触れたのだろう。俺は思わず頬に手を当てた。

「我々も正直驚いています。まさか、人類がこんなことで滅亡するなんて」

俺も全く同感だ。平凡な市立高校で起きた嫌がらせが、未来の人類滅亡の要因になっているかもしれんとは。神様も無慈悲なことをしてくれたものだ。

「一応、機関の最終的な結論では『おそらく涼宮ハルヒによるものだろう』とみています」

ああ、そうだな。未来で宇宙戦争が起こったのもハルヒのせいだし、古泉が変な超能力を身につけたのもハルヒのせいだし、世界同時不況で株価が下がったのもハルヒのせいだし、谷口がツタヤのピンののれんを平氣の平さでくぐって得た戦利品を若い女性がいるレジカウンスターへと自慢げに持って行くのもハルヒのせいだし、地球が温暖化するのもハルヒのせいだし、ドラクエが予定通り発売延期になったのもハルヒのせいだし、派遣が首を切られるのもハルヒのせいだし、俺の妹が最近反抗的な口を利くようになったのもハルヒのせいだし——ついでに俺の成績が急降下したのもハルヒのせいだ。

「まあ、最後まで聞いてください。我々も、根拠なく何でも彼女のせいになっているわけではないのですから」

「しかし、長門と朝比奈さんのケンカがハルヒに悪影響を及ぼして、というのも考えられんことはないだろう。その場合は、やっぱり大元の原因は朝比奈さんになるんじゃないのか」

「急いで結論を出す前に、まず状況を整理しましょう」
頭まで痛くなってきた俺には大助かりだ。

「朝比奈さんがやって来た未来において、人類と情報統合思念体との間で戦争が始まった。そこで、人類は勝利するために朝比奈さんを、統合思念体が自律進化を獲得した現代へと送り込んだ。目的は、ハルヒと接触して長門さんが自律進化の“カギ”を手に入れることを阻止する。これが一つ目の“時間の輪”です」

「いままでさんざん説明してきたことだな。それで、時間の輪・第二弾でハルヒのお出ましということか」

「そうです。お待ちかねの第二弾は、涼宮さんが何らかの理由で人類に絶望したことで未来の人類の歴史そのものが改編されてしまった、ということです。本来は滅びずに繁栄してゆくであろう人類の未来が、情報統合思念体と宇宙戦争に発展し結局滅ぼされるとい

う方向に。一個目は未来から現代へ向う輪っかでしたが、二個目は現代から未来へ向う輪っか、というわけですね」

「あいつが人類に絶望する理由なんてたった一つだろ」

「そうですね。考えられることは、不思議が足りない。不思議欠乏症なんですよ。彼女の心の中では人類は存続するに値しない種族だとみなされ、結果、近い将来で人類は滅亡することになる。それも、彼女が考えうる最も派手な亡び方で。もちろん、朝比奈さんがやって来た時代より前だと朝比奈さんの存在そのものが消え去ることになりますから、それより少し後の時期が人類滅亡にちょうどいいと思ったのでしょう」

「だから、本格的にハルヒが絶望して、今すぐにこの世界を改編する前に何とかしよう、てことか」

「そうですね」

何だ、結局いつもと変わらないじゃないか。やることは一緒だ。今度はそれに朝比奈さんと長門の講和条約締結が加わっただけだ。

「もつとも、今回は一つだけ——可能性は低いですが——懸念があります」

なんだ、まだあるのか？もうやめてくれ、おなかいっぱいだよ。

「もし他の普通の人間が予知能力を身につけて、もし人類滅亡の未来を知ったらどうします？」

「あ」

それは非常にマズイ。世の中には終末論をかざすキチガイ予言者の類がウヨウヨしている。彼らがもし本当の予知能力を身につけてしまつて、本当の未来を見てしまつたら……

「予知能力が無い私たちでも、確実によくないことが起こるのは簡単に予測できますね。どうせ滅びるなら、と捨てバチになった人間は何をしでかすか分かったもんじゃあないですからね。まあ、いくら何でもそのせいで人類が滅亡することはありえないでしょうが。しかし、今のところ超能力が身に着く人間、身に着く能力には何の規則性もありませんから、可能性としてはあり得る、と考えた方が

いいでしょう」

タイミング良くチャイムが校舎中に響き渡る。昼休みが終わったようだ。

「もうこんな時間でしたか。話が長くなってしまいました。ではまた、後ほど部室でお会いしましょう」

古泉はベンチから立ち上がると、ボールを持って走り去る男子の一団に合流し、そのままコンクリートの校舎へと吸い込まれていった。

5 時限目

ふと眼が覚めると、そこは古典教師の子守唄が響き渡る教室だった。昼休み後の授業ということもあってか、日頃から生存率の低い古典の授業の生存率がますます低くなっていた。とりあえず起きているのが半分——その内意識がはつきりしているのはさらに半分とあったところか。

腕枕でしびれている腕に鞭打って無理やりシャーペンを握りしめる。

ノートには古典の板書の代わりに、AとDまでの選択肢が確かに俺の字で書かれていた。BとCの間の紙はふやけていた。きっと、寝ている間に涎が垂れたのだろう。

A・あきらめて素直にハルヒに不思議を提供する

B・長門か朝比奈さんのどちらかに帰ってもらう

C・かっこいい超能力使いの古泉君が何とかしてくれるだろう（色々パワーアップしてるし）

D・これは全て夢である。うつそぴょーん

Dだ。これがベストアンサーだ。俺はしびれが取れず、持っていたという自覚さえまだなかったシャーペンの先をノートに押しつけると、夢見心地のままDのところにグリグリと丸をつけた。ふとその下に目をやると「ファイナルナンサー？」と書かれていた。ああ、そうさ、ファイナルアンサーだよ。古泉君がどうにかできる訳ないだろうし、Aはまだ何とかなるだろうが面倒くさいし、Bは実行不可能だろう。

“逃げちゃ駄目ですよ”

「うおー！」

俺が思わず上げた声で、古典教師の子守歌が一瞬で鳴り止んだ。同

時に、今まで眠っていた者たちが沼から復活したゾンビのように起き上がってこちらに視線を向けた。

「どうした？ 久しぶりに怖い夢でもみたのか？」

ギャハハハハハ。古典教師の古典的なジョークに、クラスの全員がサディスティックな笑い声をあげた。俺の後ろに座っている涼宮ハルヒも、さっきまで隣で大砲が鳴っても起きないと思われる程爆睡していたのに関わらず、いつの間にやらこの笑いの輪に加わっていた。それも、ひと際大きな笑い声をあげて、だ。

「じゃあ、教科書の今説明したところの漢文を読み下し文にしてもらおうか」

俺はクラスの期待を背負って立ちあがった。もちろん、この期待というのは失敗してさらに笑いのネタになってくれという期待であり、真後ろの席の奴からは特に熱い期待が寄せられていた。

じつと黒板を見る。そこには7×5列の漢字の塊と、その傍に何やら訳の分からぬ記号が振られていた。俺が読めるのはカタカナだけだぞ。

……まさに四面楚歌だ……もう、素直に諦めるか？ 俺が無条件降伏の言葉『分かりません』を口にしようとしたとき、救世主が舞い降りた。

“力は山を抜き気は世を蓋う……”

古泉、お前、分るのか？

“ええ、昨日やったところですからね。ノートにそう書いてありますよ”

ありがとう、古泉……心の友よ。お前が死んでも、俺はお前のこととを3か月くらい忘れないだろう。

“まあ、僕も少し責任を感じてますので。あと、勝手に殺さないで下さい”

すまん、つい、でき心でな。

“僕が言った後に復唱してください。それではいきますよ”

「力は山を抜き 気は世を蓋う」

時に利あらずして 離逝すいかず

離逝かざるを奈何いかんすべき 虞グや虞なんじや若を奈何せん」

開いた窓から、初夏の湿った風がカーテンをふわりと揺らしながら舞いこんできた。

教室は、しばらくの間晴れた日の太平洋みたいに静まり返っていた。みんなの期待を無残にも裏切った俺は、このままでは非常に気まずかったので、自分の方から言い訳してみた。

「いやー、俺って超らつきーだなあ。昨日、ちょっと予習しといたとこがたまたま出るなんてさ」

交通事故があつたので見に行ったところ、怪我人も誰もいなくてむさいおっさん二人が言い争いしてただけで『なんだ、誰も死んでねえのかよ』と思って立ち去る野次馬の心境が、今、正にこの教室において3Dで完全再現されていた。特に後ろの奴ね。

「じゃあ、ついでに和訳してみろ」

あまりの沈黙に、古典教師も若干とまどいを隠せないでついそんなことを口走ってしまった。だが、今思い返すに、この時は普通に『分かりません』で通つただろう。書き下し文には出来たわけだし、和訳については『よく分かりませんでした』で古典教師の2、3の厭味な小言を聞くだけで済んだはずなのだ。しかし、救世主が俺の心を惑わせた。

“和訳もノートに書いてあります。僕が読みますので、さっきと同じように復唱してください”

俺は寝起きだったこともあってか、判断力が鈍っていたのだろう。考えるのも面倒くさかったなので、いとも素直に古泉の言う通りに従った。

「力は山を抜き、気は天下を覆うほどだったが、時の勢い悪く負けてしまい、敵陣の最中で脱出することすらできない。しかもセフレの虞姫が妊娠した、どうしよう」

俺が自分で何を言った、いや、言われたのかを理解したのは、数秒たって教室が爆笑と失笑に包まれた頃だった。男子は、特にお

っぱい大好き谷口君はだいぶ受けていた。まさか、古典の授業でコイツがこんな爆笑しているさまを拝見できるとは思ってもいなかった。腹に手をあて、体をのけ反らせ目に涙を滲ませながら机をバン叩き「もう止めてくれ！限界だ！」と言いながら爆笑していた。女子のほうは、これはもはや笑いというより侮蔑に非常に近いクスクス笑いであって、特に後ろの奴は全く笑ってなんかいなかった。

“アハハハハ。すいません、ついでき心で”

お前、ハメやがったな！ここにも笑っている奴がいたか。

「確かに、それは困るな。お前も、和訳以外のときもうつかりミスには気をつけるようにな。それと、昼間は遠慮しとけよ、そういう夢は」

古典教師の婉曲的下ネタに、またもやおっぱい大好き谷口君をはじめとする男子全員が笑い、女子が乾いた笑い声をもらした。

古典教師は、笑い声が完全に消えて静かになるまでたつぷり5秒は俺をクラスの晒しものにした後、ようやく満足そうな表情で

「はい、座っていいぞ。まあ、確かに予習してきたようだから、平常点5点つけといてやるよ」

と言い渡した。

“羨ましいですね。今のだけで平常点が5点ももらえて。僕も古典はあまり得意でないので、すこし分けて欲しい位ですよ”

誰が分けてやるか！だいたい、今のだったら50点くらいはもらわんと俺の気がすまん。

“いいじゃないですか。何の努力もしないで寝ていただけで5点ももらえたんですよ。感謝されこそすれ、恨まれるのはお門違いというものです。という訳で、後で3点分けてくださいね”

ちやつかり多く取ってんじゃねえぞ！くっそー……しかも後ろから強烈な非難の視線を感じるし。

古典教師は俺をさんざん痛ぶって満足したのか、上機嫌で授業を再開した。この騒動のせいで、もはや誰も眠りにつく者はいなかつ

たので、それも上機嫌の一因だった。チラッとハルヒの方を見ると、ものすごく不機嫌そうな表情だった。谷口はこっちに向けて親指を立てた拳を突き出して微笑んでいる。俺はこのときだけ谷口が羨ましかった。谷口なら、下ネタを言ってもいつものことだから気にもされなかっただろう。

おい、古泉。まだいるのか？

“はい、何でしょうか？”

だいたいお前、何の用があつて俺にテレパシーしてきたんだ？

“すいません、すっかり大事な用件を忘れるところでした”

この騒動のせいで、夏休みが来るまでクラス中からいやなあだ名で呼ばれるのだろう。特に谷口は下ネタの時だけIQ180くらいはありやがるからな。考えただけで憂鬱になつてきた……

“今日はオセロと将棋、どっちにします？”

どっちでもいいよ……好きな方を選べ。

俺は、心の中で投げやりにそう答えた。

まあ、どうせそんなオチだろうとは思ってたよ……

6 時限目（前書き）

なんか久しぶりの投稿になりました。

前話投稿時には一応書くだけ書いていたんですが、全く推敲する気がなくなっていて気がつけば1年半以上経過していました。

たぶん、どこかで誰かがキングダムゾンでも発動したんだと思っています。

6時限目

6時限目の授業が終わり、俺はいつもと同じように部室へと向かった。部室に入ると、すでに朝比奈さんはナース服に着替えていて、長門は椅子に座って『スタンド・バイ・ミー』を読んでいた。二人の表情には、今のところ闘争の気配はない。多分、隠しているだけだろうが。

朝比奈さんがお茶っ葉を缶から取り出してポットに入れ、ガスコンロの上に置いた。

チチチチチ。

火花の音がしてコンロに火がついた。お湯なんて湯沸かし器でも使えばいいのに思っていたが、朝比奈さんが言うところによれば（これは一昨日の事件より前に聞いた話だ）ガスコンロで沸かした方がおいしくお茶を淹れられるそうだ。もっとも、今となつては朝比奈さんがコンロについているガスボンベで長門を攻撃するために、そうしているようにしか見えないが。ライターで火をつければ、簡易火炎放射器の出来上がりというわけだ。

もっとも、長門がそんなチャチャな攻撃でへバるとは思えないが、嫌がらせ程度にはちょうどいいだろう。

古泉はと言えば、もう机の上に盤を開き、将棋の駒を並べていた。「遅かったですね。さあ、早く始めましょう」

いつもの笑顔は、春先の新緑のように爽やかだ。この初夏の湿った熱気にも関わらず。

「結局また将棋か」

カバンを机の上に置いて椅子に腰を下ろす俺。

「ええ。また新しい戦法を仕入れて来ましたから。正直、ちょっとワクワクしています」

全くワクワクしないシチュエーションだったが、俺だってそう簡単に負けてやる訳にはいかない。特に、今日は古典の授業の仇を取

らねばならないのだから。

“ 始める前に、一つ聞かせてもらえませんか ”

古泉が俺に、振り駒の5枚の歩兵を渡す。

そんなことより、俺の約束がまだだろう。昼休み約束したはずだ。洗いざらい全部話してもらう、つてな。

掌で駒をよく振る。ここが肝心なところだ。ここを怠ると武運が逃げてゆく。

“ あれで必要な情報は全部話しましたよ ”

いや、長門のことはまだ聞いてない。一昨日の約束じゃあ、確かに長門がビッチになった理由と、朝比奈さんの変節について説明してもらったはずだ。確かに朝比奈さんの変節については説明してもらったが、長門の変節の方はまだだ。まさか忘れたなんて言わないだろうな？

“ いえ、ちゃんと覚えていますよ ”

駒を盤上に投げた。歩兵がギリギリと回転する。

じゃあ、話してくれよ。

“ 長門さんについては、少なくともあなたの方が詳しいんじゃないでしょうか。いろいろと個人的にも会ったりしているようですし。我々ができるのは正確な情報がない以上、不確かな推測でしかありません ”

表が2枚、裏が2枚。もう一枚は、勢いよく盤上から転がり落ち、隣に置いた俺のカバンに当たって止まった。

“ とりあえず、あなたが知っている長門さんのことを話してくださいませんか。その後、あなたの情報を分析して、わたしの『より正確になった』推測をお話しましょう ”

古泉は盤からこぼれた駒をつまみあげると、俺に渡して言った。

「これで表が三枚。あなたが先手ですよ」

長門は、正直かわいいけど、ちょっと変わった子だと思っていた。

文芸部員という、一種のマイナーな文化部の中でさらに本だけが友達
達の孤立した人間だと、最初はそんな風に考えていた。

とはいえ、夜に自宅に来るように誘われたときに、ありえないと
分かっていながら俺も全く期待しなかったわけではなかった。俺は
この時点では、長門にも普通に両親がいるだろうから、どうせこの
訪問はたわいない世間話をして終わるに決まっていると思っていた。
でも、たとえそうだったとしても、こんなかわいい少女の部屋を見
る機会など、そうそうあったとしても、俺は、自分はなんて幸運
なんだろうと思っていた。もし朝比奈さんみたいに過去に戻るの
なら、その時の自分に教えてあげたいよ。そいつはクソビッチだっ
てな。

もう分かっているだろうが、そこで長門が話し始めたことは世間
の常識から何万年光年も離れた、NASAもビックリ、インド人もカ
レーを吹き出し、ウルトラマンも思わずジユワ！て叫んでしまうよ
うな話だった。

最初、長門が自らを宇宙人だとたまった時には、恐怖すら感じ
た。自分は「生まれてから3年しかたつてない」と言ったときには、
これは新手の宗教の教義でも聞かされているのだろうかと思った。
この地球はじつは神的存在の宇宙人が創ったものだとか言ってもお
かしくなかったし、この部屋に勧誘員が潜んでいて、帰ろうとする
俺を無理やり奥の部屋へ連れ込むのではないだろうかとまで考えた。
しかし結局、その日は俺が心配したようなことは何もなくて、いつ
もよりちよつと遅く家に帰ったせいで母親に「晩御飯が冷めた」と
か、そんな小言を言われただけで済んだ。

俺が、長門を本当に宇宙人だと信じるようになったのはある日の
出来事からだった。

事件自体はお前も知ってるだろう。

狼の縄張り争いにチワワが巻き込まれた。まあ、とにかく、朝倉
に追い詰められた俺の脳内にシヨボイ走馬灯が駆け巡る頃長門が助
けに来てくれて、なんとか一命をとりとめることができた。長門は、

その時の戦闘で俺をかばってナイフやら折れたパイプやらを体中に刺されたりしたが、何とか朝倉を破壊することに成功した。

だいたい俺が経験したことを要約するとこれだけだ。

今思うとあの時の傷の後遺症か何かが長門を変えてしまったんだろうな。修理しようにもバックアップ自体は長門が文字通り粉々にブツ壊したから修復しようもなかったんだろう。

え？ 他に何かなかったか、て？ いや。今のが全てだ。

あ、いや、待て。そういえばその後しようもないことがあったな。長門が教室を元通りにした直後、谷口が忘れ物を取りに来たんだよ。自作の、これまたあいつ自身と同じくらい出来の悪いしょうもない歌を歌いながら。あいつが教室に入ってきたとき、ちょうど俺は倒れ込んだ長門を起こそうとしたところだった。

そしたらあいつ、何か勘違いしてすぐに教室を出て行ったよ。まあ、俺と長門が放課後の教室で学園モノＡＶ的なことをしてるとでも思ったんだろうな。

ああ、これで今日の古典誤訳事件と合わせて、俺はしばらく卑猥なあだ名で呼ばれ続けることになるんだろうな。

あ、待て、そこに角を打つのは禁則事項だ！

クソ。お前は相変わらず痛いところを突いてきやがるな……

7 時限目（前書き）

かなり長くなっていますがご容赦ください。

7 時限目

「ええ。美濃圀いはこの角筋が弱点なんですよ。しかし、まだ勝負は最後まで分かりませんよ」

その時点で、すでに古泉の三間飛車の戦法は俺の美濃圀いを滅茶苦茶に切り裂き、竜馬を作って圧倒的優勢を築き上げていた。

それで、今の話で何かわかったのか？ 別に目新しいことなんてなにもなかっただろ。

「うーん……」

早くしろ。

“いえ、あなたの説明はどうも主観的な事柄が多くて、理解するのに時間がかかってしまいますね。『NASAもビックリ』だとか『朝倉に追い詰められた俺の脳内にシヨボイ走馬灯が駆け巡る』だとか。『この地球はじつは神的存在の宇宙人が創ったものだと言ってもおかしくなかったし』のくだりは長すぎですね。あなたのその時の考えはどうでもいいんですよ。もう少し、事実だけを簡潔に述べるようにした方がいいでしょう。あと、ウルトラマンはどんな時も『ジユワツ』しか言わなかったはずですよ”

国語の授業ならもう十分間に合ってる。お前の文章論はどうでもいいから、長門がどうしてビッチになったかを『簡潔に』説明してくれ。

“いいでしょう。それでは説明しますね”

ピーーーー！とポットが鳴った。お湯が沸いたようだ。

“まず、事件以前の長門さんの性格ですが、多分、無口な文芸部員そのものと考えていいでしょう。しかも涼宮さんの調査に来た宇宙人なので、少なくとも地球人の考えるような感情はほとんど無かっただろうし、ましてエロスなんて全く無かったでしょう。ここまではいいですね？”

俺は長門の方をちらっと見て心の中で言った。

ああ、それは何となく分かる。調査に感情やエロスは邪魔だからな。

“そうですね。そのような邪魔でしかないものが長門さんの身に付いたのは、明らかに事件の後。結論から言いますね。長門さんは故障しているんですよ”

長門が本から目を上げた。こつちと目線がかち合う。すると、まともや長門の頬が少し紅潮し、急いで目線を本のページに戻した。何を想像しているのか知らないが、勘違いも甚だしい。読んでいる本も実は表紙だけ真面目な小説で中身は官能小説なんじゃないだろうな？

“聞いてますか？”

故障してる、ていうのは聞かなくても10万年くらい手前から分かってる。それにしても、あの時傷は完全に治ったと思っていたのだが、実はそうではなかったらしい。さすがの長門もバックアップなしで完全に元通りになるのはキツかったみたいだな。

でも、見た目には異常はないし、どうして地球人のお前に故障した、なんていうのが分かるんだよ。

“最初に言った通り、これはあくまで『可能性の高いと思われる推測』なんです。ただ、今のあなたの話でいくつかの状況証拠はあがりました。

まず、朝倉さんとの激しい戦闘。このとき受けた傷の回復は、おそらく長門さんの能力では治癒しきれなかった。なぜなら情報生命体は、既存の情報を操作することはできても、涼宮さんのように無から新たな情報を作りだす、そういったことは不可能だからです。そういうときのためにバックアップがいるのですが、そのバックアップがバックアップを必要とする事態を生み出したのが今回の事件ですから、皮肉なものです。そして、治癒しきれないとなると――僕も宇宙人の専門家でないのでよく分かりませんが――おそらく人間としての形態を保つことができなくなってしまうはずで――

バックアップがアップアップしているお前の文章のほうに余程わ

かりづらいと思うね。

俺は勘付かれないように、そつと盤上から長門の方に目線だけを動かしてみた。

またもや思いつき目が合った。

表情のないはずのヒューマノイド・インターフェイスが焦ったように視線をそらす。

思いつきり人間の形態じゃねえか。明らかに既存の長門じゃない情報が上書きされているようだが、これはいったいどういうことなんだ？

“そうです。あなたから話を聞くまでは、そこが一番大きな謎だった。一応、他の人間から必要な情報をコピーして取り込めば応急処置ぐらいにはなるでしょうが――

長門は確か慎重派だったからそんなことはしそうにないな。

“ええ、なんといつても、あなたは涼宮さんに多大な影響を与える重要人物ですからね。蚊の吸血でもマラリアのような感染症にかかることもある。僅かでもリスクは取れないでしょう。今までは長門さん自身が消滅してしまう影響も考慮して、やむなく――そう、あなたから情報を拝借したと考えられていました”

それは大いに矛盾している。今の長門を電子顕微鏡で覗いてみても、ケツから生クリームを出すほどお上品な俺の情報は痕跡すら見当たらないじゃないか。そのうえ大事なバックアップは長門自身がぶっ壊した。

“そこがどうしても分からず、今まで不確定な推測の域を出なかった訳です。しかし、さっきのあなたの話に颯爽と登場した、ある一人の人物によって、ようやくその謎も解けたというわけです”

ああ、そういうことか。さもあらなん。

“そう、忘れものを取りにきた谷口さんです。たまたま近くを通りかかった彼の情報をほんの少し拝借したんですね。彼の性格は……古典の授業で見た通りでいいんですよね？”

まだ二乗しても足りないくらいだ。要するに、頭のネジが少々ぶ

っ壊れたので谷口のピンク色のネジを拝借してきたというわけか。

“ ええ。おそらくは、お察しの通りでしょう ”

やれやれ。厄介なことになったもんだぜ。

「王手」

古泉がピシヤリと竜馬を切り返す。かなり不利な状況だが、完全に打つ手なし、と言うわけではない。

部室のドアがゆっくりと開いた。ハルヒが部室に入って来たようだ。

俺は王将を逃がすか、それとも金将を上げて守るか、どちらにするか考えていた。

「ねえ、キヨン」

いつもとは違って、ハルヒの口調は落ち着いた様子だった。いつもの語尾にエクスクラメーションマークを5つくらい表記したくなる勢いも、ドアを吹っ飛ばすように開ける勢いも無く、でもまあ、ハルヒにだってたまにはちよつと元気の無い日くらいあるさ、とそんな程度に考えていた。

「何だ？ 俺は今、古泉に追い詰められているところだから何か話があるならちよつと待ってくれ」

「別に大した用事じゃないの。さっきの古典の授業について、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「何だ、珍しいな。まさかお前が勉強の話をしてくるなんて」

ここは金将を上げておくことにしよう。その方が後々役に立ってくれそうだ。

俺は駒を持ち上げ、パチツと盤上に置いた。

まあ、どうせハルヒのことだから、「次のテストで平均点を取れなかったら赤点なの！！」どうにかしなさい、キヨン！！」とかそういう類の話だろう。

「このノートに書いてあるA〜Dって何なの？」

俺は一瞬、背筋にうすら寒いものを感じた。

体は、全く動かない。というより動かせない。金縛りにあった人

間というのは、きっとこんな感覚なんだろうと思いつながらなんとか首だけ動かして見ると、そこには確かに俺の筆跡で、余白の異常に多い俺の古典ノートにAとDの選択肢が書かれていた。Dのところに丸をつけた跡まであった。その下に書かれている「ファイナルアンサー？」が「無条件降伏、イエスかノーか」と問いかけているように見えた。

「ねえ、何なの？ 早く答えてくれない？ それとも、何か答えにくい事情でもあるの？」

前にテレビで見た情報によると、確か金縛りにあった人間は声すら出せなくなるらしい。俺は放課後の昼下がり、起きながらにして金縛りにあってしまったようだ。

「ねえったら。他人が訊いてるんだから何か言ったらどうなの？」ハルヒが、俺の座っているパイプ椅子の脚をガンガンと蹴りはじめた。

「ねえってば」

ガン、ガン、ガン、ガン……

もうすでに俺の頭の中から将棋のことは消し飛び、いかにこの場をうまく取り繕うかでいっぱいになっていた。それにしても、いつの間にノートを盗られたのか……。きつと5時限目と6時限目の間の休み時間に盗られたのだろう。隙はいくらでもあった。

「まあ、どうしても答えられない、て言うならしょうがないわ。

わたしの方から説明してあげる。絶対言い訳できないようにね」

ハルヒは、ノートを俺の方に広げたまま、選択肢のBを指した。

「まず、このB。これはキヨンがユキとミクルちゃんに二股かけてた、てことを意味していて、どちらかに帰ってもらう、つまりどちらかと別れる、てことを意味しているのね」

おいおい、出発時点ですでに論理が飛躍しすぎだぞ。

「それはこのノートだけ見れば飛躍しすぎかもしれない。でもキヨンの、授業中に寝ぼけてした発言。確か『セフレの虞姫が妊娠した』だっけ？ クラスのみんなも古典の禿げ茶瓶も『グキ』て発音し

たと思っているようだけど、わたしの耳だけはごまかせなかったよ
うね」

朝比奈さんは、いち早くハルヒの怒りの波動を感じたのか、沸いたポットをほったらかしにして部屋の隅に避難を開始していた。

「わたしには、はつきりと『ユキ』で発音しているのが聞こえたわ」

確かに、口の中の怪我のせいで『グキ』とはつきりした発音にはなつてなかったかもしれない。もしかしたら『ウキ』に近い発音だった可能性もあるが、でも『ユキ』とは絶対に言つてない。きつと、朝比奈さんと長門の鬭争のあの日に見た光景が忘れられず、そういう風に聞こえたというだけだろう。

「つまり、Bはセフレのユキと、ミクルちゃんと二股かけてたけど、何らかの原因でそれが二人にばれてしまった。それでどちらか一人と別れよう、てことを意味しているの」

もう嫌になつてきたな。なんならお前を妊娠させてやろうか？

「ここまで分かれば後は簡単だったわ。まずA。これはわたしにバレないようにカモフラージュすることね。まあ、あんたみたいなチンカスがわたしの望むような不思議を提供してくれたらS O S 団をつくるまでもないけどね。そしてCは、超能力つてところがよく分からなかったけど、とにかく古泉君なら一応副団長だし何とかしてくれるかも、て思ったんでしょね。最後の、あんたが選んだD。これは『もうこの現実から逃げたい』で意味で間違いなさそうね」

その通り。最後だけ大正解だ。平常点5点やるから、もう見逃がしてやつてくれないか？ 俺はもう限界なんだ。この恐怖に耐えるので精神が限界に達して、発狂しそうなんだ。ある意味異世界の人間になつちまうかもしれないけど、さすがのお前でもそんな異世界人はいらんだろ？

「そう考えると三日前の長門とアンタのアレ（つまり、俺の淡い甘酸っぱい青春のページのことだ）も納得できるわ。ミクルち

やんに『俺たちはこんなに仲いいんだぜ』てアピールしてたわけね」でも人間の、それも成長した人間の精神というのは、そう都合よく壊れてくれるようには出来てないらしい。とにかく、このまま黙っている俺がハルヒの言い分を黙認したと取られかねないので恐怖でカラカラに乾ききった舌を、傷の痛みに耐えながら何とか動かすことにした。

ハルヒが俺の真実の訴えを遮って投げたノートは、ひらひらと白いペー지를優雅にはためかせながら、将棋の駒を盤上から蹴り落として着地した。

「意外と勉強熱心なのね」

ポットが、内部から吹き上げる蒸気に耐えきれず悲鳴を上げていた。沸点をとうに超えたお湯はポットそのものを内部から揺さぶり、ガタガタと音を立ててさえた。

朝比奈さんはすでに、来るべき惨事に備えて机の下で頭を抱えて座り込んでいる。

「早く素直に土下座したら？」

「待ってくれ、本当に俺は何もしてない！ それに、お前が言ったことは全部ただの推測じゃないか。俺は無実——」

古泉の的確なアドバイスのおかげで、俺はハルヒのパンチを辛うじてかわすことができた。でなければ、今頃はさっきのポットと、

仲良く部室の床の上で日向ぼっこしていたに違いない。

「違う！本当に何も無いって！それはただの暇つぶしに書いただけだ！」

「本当に？」

「ああ、本当だ。その二人に聞けばわかる！」

「確かにそうね。分かったわ。二人の話を聞いたうえで、もし何もなければ、今回は特別に『疑わしきは罰せず』てことにするわ」
良かった。頭の中にウンコでも詰まっていそうなハルヒクソ女だって話せば分かってくれることがある。俺はほっと胸を撫で下ろした。

“油断しないで下さい！”

「なんて、うつそぴょーん。偽証罪で死刑」

“今度は左ジャブからのアッパー狙い！おそらく、部屋の隅に追い詰める気でしよう”

とにかく、避けるだけで精一杯で、俺はハルヒの目論見通り部屋の隅のコンロ前に追い詰められた。チラツと机の下にいる朝比奈さんを見ると、もう今にも心臓発作で死んでしまうかと思われる程震えあがっていた。しかも、ちょうど胸元のボタンが外れているせいで、魅惑の谷間が丸見えではないか。

「その熱湯に額をつけて土下座するなら、今からでも考えてあげてもいいわ」

ポットの周りは少しだけ黒く変色していた。きっと、余りに熱くなったお湯のせいで少し焦げたのだろう。まだもうもうと湯気が上がっている。とにかく、今はチラリと垣間見える朝比奈さんのピンクのブラジャーを見ている場合でないことだけは確かだ。

「おい、長門、朝比奈さん、黙って見てないでお前たちからも言っつけてくれ！」

「問答無用！くらえー！」

“一発目はフェイントです！そのままダッシュで扉まで逃げてください！”

心の友、古泉の助言に従って俺はアンパンマンのごとく勇気を振

り絞ってハルヒの拳へとダッシュした。頭の中に、朝倉涼子に襲われた時と同じシヨボイ走馬灯が駆け巡ったものの、俺は死亡フラグを見事乗り越えて部室の扉——自由への扉の前まで到達することができた。

ハルヒはこの状況でフェイントが読まれたことに驚き、そのときの戸惑いが俺に逃げ切るための0.1秒を与えることになった。

果たして、ハルヒがどれ程の俊足を誇るのか知らないが、一度この部室を出てしまえば俺の勝ちほぼ確定する。なぜなら、古泉のテレパシーの超能力がある以上、俺には最新式偵察衛星が味方してくれているに等しいからだ。

俺がドアノブに手をかけようとした瞬間——

“危ない、伏せて！”

ドアを開けた不幸な来訪者が入って来たのと、しゃがんだ俺の頭の上をハルヒが全力投球した椅子がかすめて行ったのは、ほぼ同時だった。

何か嫌な打撃音がしたかと思うと、その不幸などこかで見たことがあるような人は鼻から血を噴出して真後ろへと、勢いよく倒れた。あの衝撃ではもう二度と起き上がらないだろう。

「部長、部長！　しっかりしてください！」

この面々は知っている。と言うより、これだけオタク臭い濃いメンツは忘れようがなかった。

「あれ、またコンピ研が喧嘩売りに来たの？　今取り込み中だから後にしてね」

「そうはいかない！」

部長氏はきつと後半終了間近に相手にゴールを決められてグラウンドに倒れ込んだサッカー選手が雨の中ロスタイムにもう一度立ち上がる様な悲壮な決意を込めたもりだろうが、顎先まで濡れている鼻血のせいで下着泥棒に失敗した変態にしか見えなかった。しかもアオリで見ている俺にとっては、夕日を反射してキラキラ光る鼻血は滑稽にしか映らなかった。

「何勝手なこといつてるのよ」

お前が言うな、と俺の雑用以外の主要業務であるツッコミを心の中でごなす。

「だいたいノックはしたの？ 勝手にわたし達の部室に入ってくるなんて、主権侵害よ！」

「ノックならこつちの拳が痛くなるくらいしたよ。君たちがノックに気づかない程お取り込み中だったただけだ」

しかしこの部長、中々タフである。ハルヒ会心の椅子投げを喰らってこれだけ早く立ちあがれるとは。前世はサンドバックか何かだったに違いない。

「とにかく、君たちに勝負を申し込みたい」

「どうせまたインチキするつもりでしょ」

「いいや、今回はインチキなんて全く出来ないものを選んだ。この勝負は完全に公平なんだよ」

卑劣なサンドバックのいうことだ、どうせまた自分たちの土俵で戦うつもりなのだろう。イチローが小学生相手に「公平に野球で勝負しようぜ」と言ってるのと同じだ。

部長氏は、いまだ屈んだままの俺の領空に手を伸ばし、ハルヒを指して言った。

「アーケードゲームだ。これで全ての決着をつける」

敵の大群に向かって突撃してゆく指揮官を気取っているのかもしれないが、せめて鼻血を拭いてからにしてはどうだろうか。これではチョコレートを喰い過ぎた変態にしか見えない。

しかしハルヒもそれを聞いて無下に出て行けとは言えなくなったように、つかつかと部長氏の方に歩み寄った。もちろん、ハンカチを渡すためではない。

「望むところよ。アンタ達に決定的敗北というのを教育してあげるわ。SSS団の授業料がいかに高額か、思い知ることになるでしょうね」

「せめて学校の授業よりおもしろいのを頼むよ。あんまり退屈だ

と居眠りしてしまうからね」

俺の領空を飛び交う言葉のミサイル。これを撃ち落とすパトリオットは流石に朝比奈さんの未来にも存在しないだろう。まあ、あったとしてもどうしようもない。この二人は、お互いを傷つけあうことでしか交流できないのだから。言いたいだけ言わせてやるがいいさ。

「あと、条件が一つだけある」

「何？ 怖気づいたんなら今が撤退するチャンスよ。わたしは寛容な精神の持ち主だから、背中を向けて無様に逃げる者に追い打ちをかけたりはしないわ」

ウソつけ。たった今必死に逃げる俺に何をしたのか、忘れたとは言わせんぞ。

「その長門ユキという子。その子は参加禁止だ」

「どうしてよ！ ユキだって立派なSOS団員なんだからダメなんておかしいでしょ！ それともなに？ またインチキするつもりなの？」

「さつきも言ったとおり、アーケードゲームだからインチキなんて絶対に出来ない、あり得ないんだよ」

「だったら男らしく正々堂々と勝負しなさいよ。たった一人の女の子に怯えてるなんて、ちょっとはみつともないと思わないの？」

「実は、以前、試しにその子を借りたときに今回と同じアーケードゲームをやらせてみたことがある」

そういえば、たまに部屋にいないときがあつたな。まさかコンピ研の奴らと一緒にいたとは予想外だ。長門もそうやって少しでも周りに馴染んで行ってほしい。ハルヒと朝比奈さんの相手ばかりじゃさすがに疲れるだろうから…… 特に朝比奈さんの相手は……

「最初は操作も覚束なかったのに、見る見るうちに上達、1時間後にはそこら辺のゲーマーをなぎ倒していた。その後、試しに僕らと対戦したら見事全員にパーフェクト勝ちした。だから、その子を入れると最初から勝負にならないんだよ」

長門も意外と大人げないな……何もゲームでそこまで本気出さなくてもいいんじゃないか？ それとも、やっぱりそれだけストレスが溜まっていたのだろうか。たぶん、対戦相手を朝比奈さんに見立ててボコっていたのだろうと想像する。

「じゃあ、人数はどうするのよ」

「4人か5人。人数は対戦直前まで、そっちで自由に決めてもらってかまわない。助っ人に関しては、あの子とコンピ研以外の北高生徒なら誰でも可。これでいいだろ？」

「何か納得いかないわね」

「別にいいんだよ。逃げても。あれだけ授業料がどうのこうの言っておいて、結局自分じゃ勝負一つできないヘタレ団長さん」

「どうやら、本当にわたしと真剣勝負したいようね。今のうちに言いたいこと言っておいたら？ 後でボッコボコにしてやるんだから」

「ふん、そっちこそ、もう泣いたり笑ったりできないようにしてやるよ」

二人は俺の領空で視線を交わし、互いに睨み合っていたが、俺はやおら立ち上がったその二人を引き離れた。このまま放っておいたら、リアルファイトに発展しそうだ。

「まあまあ。落ちつけ、ハルヒ。それで部長さん、実際の対戦の日時とその他詳しい説明をお願いします」

「そうだったな。説明してやるから良く聞んだぞ」

部長氏がなぜか偉そうに喋り出したことによれば、対戦の日時は今月末。あと1週間といったところか。時間的な余裕は以前よりあるが、今回は複雑なアーケードゲームだから1週間でも厳しいだろう。長門の情報操作はあまり使いたくない。

そして、対戦する機種は格闘対戦ゲーム『ギルティ・キル』。通称ギルティ、またはGK。よくある2D格闘ゲームで、約20人のキャラクターの中から一人を選んで対戦。選んだキャラは途中で変更できない。勝負は3本先取の勝ち抜き方式。下手をすれば一人相

手に全員倒されてしまうこともありうるわけだ。

「まあ、せいぜい頑張りたまえ、SOS団諸君」

「ちよつと待ちなさい」

自信満々で鼻血を流したまま立ち去ろうとする部長氏に、ハルヒが待ったをかけた。

「何を賭けるか、まだ聞いてないんだけど」

「ああ、すっかり忘れていたよ。そうだな、夏の北海道合宿というのはどうだろう。君たち5人分。その代わりこつちが勝ったらパソコン5台、全部返してもらうからな」

「北海道か…… 中々いいわね」

もうすでにハルヒの頭の中には、富良野のどこまでも広がるラベンダー畑を駆け巡り、北キツネにルールールーと呼びかけながら餌をやつて、摩周湖のマリモで蹴鞠を楽しみ、網走の刑務所で心霊写真を激写するという強行ツアーが計画されていた。俺は北海道ラーメン食えたらそれでいいよ。あ、あと朝比奈さんと北キツネが戯れている様子も見たいなあ。ついでにカニも食いて」

「残念だけど、君の頭の中の都合のいい妄想が実現することはないよ。だって、最後に勝つのはこのコンピ研だからだ！」

闇の軍勢を打ち負かした光の勇者が兵士たちに勝利の演説でもしているかのような口調だったが、しかし垂れたままの鼻血のせいで『俺のアソコを見てみる！』と叫ぶ露出狂の変態にしか見えなかった。しかも最終的に部員の誰ひとりとして、部長の鼻血に対してハシカチ一つ差し出そうとはしなかった。

コンピ研の面々が立ち去った後には、脚がちよつと曲がっているハルヒの投げたパイプ椅子が夕日を浴びて寂しそうに廊下に転がっているだけだった。

とにかく、今回はコンピ研のみんなに感謝したい。俺は、ハルヒというライオンに追いかけていている仔馬だった。そこにコンピ研という、いかにもおいしそうに太った猪がやってきたのだ。もうライオンは仔馬よりも猪に夢中。おかげで、俺はしばらくの間ハルヒ

の標的にならずに済みそうだ。ありがとう、コンピ研。お土産はマリモのキーホルダーでいいか。

「あいつらには、お土産に『白い恋人』でも買ってあげるとして、俺は廊下に出て、転がっている椅子を拾い上げた。そして、部室に運ぼうと振り返った。

「とりあえず、有り金全部出さない」

ハルヒが右手を広げて俺の前に差し出している。握手するつもりではないようだ。

「ちよつと待て、何で俺が……」

「確かに、今回のことは決定的証拠がない」

部屋の中をぐるぐる歩きまわるハルヒ。

「でも、これだけの状況証拠がある以上、何らかの処罰が必要だと思うの」

止まってもう一度、俺の前に右手を差し出す。こいつ、生命線長いな。

「さ、大人しく速やかに出さない。さっきの対戦ゲームの軍資金として、SOS団のみんなで使うんだから。アンタの無駄遣いより余程有意義な使い道でしょ」

何となく古泉の方を見ると、肩をすくめて手をW字型に広げていた。

“まあ、仕方ないでしょう。今回は生きているだけでも儲けものですから。後で、経費で落とせるように機関に頼んでみますね”

「それと、この古典のノート」

ハルヒは将棋盤の上のノートを取り上げると、例のページをビリビリと破り取った。

「怪しいし、もし後々何かあったときの証拠品として預からせてもらうわね。隠ぺいされても困るし」

もう、好きにしるよ……

8 時限目

「あー、おしい！」

向こうのアベックが楽しそうにUFOキャッチャーで遊んでいる。

「ねえ、もう一回やらせてよ」

「しょうがないなあ」

日本が法治国家であったことをありがたく思え、バカッブルめ。

もしそうでなかったら俺の拳が火を噴いて、こいつらを殴り倒していただろう。なぜなら、俺の財布がハルヒに強奪されたせいで残金18円になってしまったからだ。

18円……手のひらを広げると天保山も嘆くであろう低い硬貨の山の頂上に5円玉が鎮座しており、真ん中の穴は悲しそうな眼にみえた。指でその5円玉をつまみ上げる。その穴越しにゲームセンタ―を覗いてみると、賑やかで、キラキラしていて、みんな今だけは日々の倦怠も忘れ、心から楽しく遊んでいるように見えるが――それは俺には別世界の出来事にしか感じられなかった。こんなのは現実じゃないさ。だって現実所持金18円だからさ。18円の嘆かわしい購買力で買えるものなんて、この平成の世においては5円チヨコとうまい棒くらいなもんだ。

文明社会全盛の真つただ中で、俺はまさに遭難寸前の状況だったわけだ。

「どうしたんですか？あまり楽しくなさそうですね。もつとここを楽しんでみてはいかがでしょうか」

古泉が5円玉を覗きこむ俺の後ろから声をかけた。手には両替した100円玉の塊があったが、すぐにポケットの中に消えていった。

「そりゃ、お前、所持金18円で楽しかろうわけがあるかよ」

古泉は急に、俺の残りの13円が乗っている手を掴むと100円の塊をバラバラと置いた。

「はい、これはあなたの分です。ちゃんと練習してください。何

せ、人類の未来がかかっているのですから」

と、5円玉の穴の向こう側から俺を覗いて言う。

あなたの分、て……お前がポケットに入れたのも元々俺の金だろうが。それと早く手を放せ。いつまで握ってる気だ。

「失礼。まあ、気落ちするのも分かりますが早く練習しないと。せめて今日中にこのゲームの基本操作くらいはマスターしないと、コンピ研に勝つなんて出来っこないですからね。それにさっきお話したとおり、あなたのお金は、後で機関に経費で落とせるように頼んでみます」

「それは絶対落とせるんだろうな？」

「まあ、調査費とでも報告しておけば何とかなるでしょう」

すごい爽やかな笑い。本当に何とかなるのか疑わしいところだが、ここは心の友の言うことを信じるほかあるまい。

「あー！またおいしいiiiiiiii！」

さつきからうるさいバカップルだな。ただでさえこのゲーセンという騒音の玉手箱のような場所で、そいつ、といってもブツサイクで全然おしくもなんともないバカ女の嬌声が、俺の脳内でガンガンと反響していた。

「もうちょっとだったのiiii！後もう一回、ラスイチ！！」

「しょうがないなあ、これで本当に最後だぞお」

硬貨を投入する男。またクレーンが動き出した。

「なあ、古泉」

俺は今からアーケードマシンへと移動しようとしていた古泉を呼びとめた。

「何でしょうか？何か気になることでも？」

「お前、念力って使えるのか？」

「ええ、まあ、たしなむ程度には。旅客機を地球の裏側に飛ばすだとか、ビルでドミノ倒しをするだとか、そんなことは到底できませんが」

そんなこと望むのはハルヒぐらいだよ。

「いや、あれを動かして欲しいんだ」

俺はちょうどリックマのぬいぐるみの真上で止まったばかりのクレーンを指した。

「あれを？　ぬいぐるみが欲しいんですか？　いいですよ。一個ぐらいなら」

「そうじゃない」

クレーンはゆっくりと下がって、その華奢な腕でラリックマの首を挟んだ。

「あのバカツプルが取ろうとしているぬいぐるみを叩き落としてやって欲しいんだ。さつきからうるさいし、このままじゃあ、気が散るからな」

古泉は一瞬わけが分からないといった表情で顔をしかめたが、すぐに納得したようで

「あなたも残酷ですね。まあ、僕もさつきから少し気にはなっていたんですか」

周りから見ればいつもと変わらない、爽やかな笑顔でそう答えた。

「ではいきますよ」

クレーンがクマの首をしつかりとつかんだまま上に持ちあがり、出口の方へ動きだす。

古泉は、伸ばした中指と人差し指を左右のこめかみに当てて、な

「3
2
1
……イグニッション！」

そのまま順調に白眼を剥いたクマは出口の穴まで運ばれると思つたが、次の瞬間にはアクリル板に顔をくつつけて早くも獲つた氣でいるブス女の目の前で、ポトリと落下した。

「ええええええええええ！！ありえなくなあ？？」

$$\begin{array}{r} 30788 \\ \hline 2689 < \end{array}$$

お前の存在がな。

「これで満足しましたか？」

「ああ、大満足さ。他人の不幸っておもしろい！」

「ろくな大人になりませんよ」

「お互い様だろ。実行したやつに言われたかねーよ」

「確かに、それもそうですね」

俺も古泉も久々に腹の底から笑いながら、空いたアーケードマシンへ向かって行った。

9 時限目

俺たちがアーケード台に向かうと、そこには渋谷台に向かって練習を始めた朝比奈さんとそれを指導するセクハラコーチがいた。

「だから、そこはそうじゃないって、もっとチャチャッとコマンド入力しないと！」

「ふえ〜、ちゃんとしますから、そんなとこ触らないでくださあい！」

俺は、皆の夢と希望が詰まった朝比奈さんの胸部のmatterホルンとマツキンリーを後ろから手をまわして驚掴みにしているハルヒセクハラ部長の後頭部めがけて、手刀を軽く振り下ろした。

「衆人環視の前で何やってるんだ」

「急になにすんのよ。ミクルちゃんがあまりにもドンくさいから、こうやって直々に指導してやってるんじゃない」

「だいたい、他人のことをとやかく言う前にお前はちゃんと練習できてんのか？」

「わたしだつて練習したいわよ。決戦まで時間がないし。でも、肝心の台が空いてないの！」

ハルヒが指さしたところを見ると、確かに台は全て、いかにもな感じの人々で埋め尽くされていた。もしかしたらコンピ研の卑劣なサンドバッグは、こうなることをあらかじめ予想していたのかもしれない。その知恵を少しは勉強に生かせばいいのに。

「あ、ミクルちゃんまた負けた。ちょっとは悔しいと思いなさい、この！」

「ふえ〜！」

「だからやめろつて」

負けるたびにハルヒが朝比奈さんの衆人の視線が特に集中する箇所を両手で揉みしだくものだから、また朝比奈さんもいい感じの悲鳴を上げるものだから、向こうの台に座っている対戦者はおもしろ

がつて台を離れようとしな。それどころか完全になめ切つて、わざと攻撃を喰らつておいてから最後に凶悪なコンボをキメてハルヒを煽る作戦に出た。空中で殴る蹴るの暴行を受ける画面中の朝比奈さん。体力ゲージが減つていくたびに、ハルヒの表情が険しくなつてゆく。最後の必殺技を喰らい、誰もが朝比奈さんの負けを確信したが、向こうの計算が狂つたのかほんの僅かに体力が残つていたようだ。

「ようし、いくわよ！今から大反撃よ、ミクルちゃん！」

「あ、気絶しちゃいました……」

体力ゲージはもう見えないくらいでもギリギリ残つていたようだが、攻撃を喰らい過ぎたせいでピヨリ状態になつたようだ。こうなるともうお手上げだ。反撃と言つても相手の体力は3分の2くらい残っているし、それもわざと喰らつたから実質的に朝比奈さんが与えたダメージは0に等しい。その代わり相手プレイヤーに多大な快感を与えることには成功しているが。

「『あ』じゃないわよ！はやくレバガチャしなさいって！」

ハルヒが朝比奈さんの手ごとレバーを掴んでガチャガチャし始めたが時すでに遅し、相手は一撃必殺の準備を終え、無情にも気絶から目覚める前に一撃必殺は見事炸裂、なんかド派手なムービーが流れ、それが終わった頃にはキャラクターは無残に地面を転がる屍と化していた。

「あーーーーー！！もう……！」

ハルヒが台を平手でバン、と叩く。

「次からは一回負けることに一枚ずつ脱がしていくから！」

「ええ……そんなの……嫌ですよ……」

「嫌だつたら絶対に勝ちなさい！ でないと本当に脱がしていくわよ」

それを聞いてギャラリーの眼の色が変わつた。もちろん、俺たち以外にハルヒについてよく知っているヤツなどいるわけはなかったが、この頭に黄色いヘアバンドをつけている騒がしい女子高生の性

格を、みんな何となく理解し始めていた。

つまり、こうして言ったことを本当に実行してしまうだろうと。向こうの台に座っている、いかにもな人（制服を着ていないからおそらく大学生だったのだろう）が、後ろの仲間と何やら話をしていた。

おい、何か知らないけど、勝ったら脱いでくれるらしいぜ——ああ、分かってる。俺に任せとけ、玉ねぎみたいに一枚ずつはいで素っ裸にしてやるよ——もう手加減する必要はないからな。とにかく全力で叩き潰せよ——分かってるって。それより、向こうへ行って写メの準備しとけ。絶対逃すなよ——了解。

騒音でほとんど聞こえなかったが、おそらくこのような会話をしていたのだろう。二人ともニタリと笑うと、後ろにいた仲間の一人がこっちの台の方にやってきた。

これで準備万端というわけだ。

画面には、相手キャラの勝利ポーズと決め台詞と一緒に「コンテイニュー？ 20...19...18...」とカウントダウンが刻まれていた。

ハルヒが急いで俺から強奪した100円硬貨を入れようとしたが、投入される前にその手を掴んだものがいた。

「ここは任せて」

「ユキ……でも、アンタは対戦に出れないし、今は台が空いてないからここで練習するしかないの」

一体いつの間にかやってきたんだ。全く気づかなかったぞ。 12...

11...10... カウントダウンが過ぎてゆく。

「それも任せて。私がここで全員を引きつけるから」

「そんなのどうやって——」

「任せて」

長門の強硬な主張に、ついにハルヒも折れた。コイン投入口から手を放す。

「ま、何を考えているのか知らないけど、ユキなら何とかなるか

もね」

6…5…4……

「どいて」

座ったままの朝比奈さんを見下ろしながら、無表情にそう要求する長門。

「いいからはやくどいて。わたしがやる」

俺はその光景を見て、ハードカバー本を振り下ろそうとする、あの日の姿を思い出していた。

一瞬、硬直していた朝比奈さんであつたが、すぐに台から離れるとそこに長門が滑り込んで、硬貨を投入した。

「2…1……ニューチャレンジャー!!」

それにしても、さっきの『わたしがやる』というセリフには、少し殺意がこもっているように感じた。『わたしが殺る』が正しい書き方だな。

対戦の結果は始まる前から見えていたが、問題は他の台に居座るやつらをどうやってどかすか、だった。

向こうの台に座っているやつは、かわいそうに、これからどんなことをされるかも知らないで、

俺はこっちのほうタイプだな——さっきより強そうだけど大丈夫かよ——まさか、俺に勝てるわけないだろ。たかだか女子高生だぜ。大丈夫、コテンパンにしてやるさ——期待してるぜ——それより、

二人分の写メ、準備しとけ——了解

などとかわいい会話を交わしていた。多分。

さて、肝心の対戦だったが、始まって最初の方は長門もまだ様子見だったこともあって、互角に近い勝負を演じていた。一回目に負けたときは、（それがそいつにとっての、本日初の黒星だった）「なあに、まだ決着がついたわけじゃない、三本先取のうち一本取られただけだ。それに倒せない相手じゃない。もう弱点は見きった」と大言壮語していたが、長門が大人げなく本気をだしはじめると様子は一変した。

何度やっても勝てないどころか、満足なダメージすら与えられない。コンボをやれば途中で抜けられる。逆に、長門のアクロバティックなコンボは面白いように決まっていた。

向こうの大学生らしき対戦者の表情が、みるみる内に変わっていた。額には、すでに脂汗がびっしりと噴き出していた。

結局、その勝負は長門が勝った。当然の結果だろう。相手の大学生らしき御仁は、もちろんすぐにコインを投入した。仲間に写メまで頼んだ以上、ここで引き下がる訳にはいかない。続けての試合は2対2にもつれ込み、最後の三本目は長門が辛うじて取った。が、これは後から考えるに、餌をおびき寄せるための罠だったのだ。

客観的にこの戦いを見てみると、一試合目は長門が相手に一本も取らせず完勝した。しかし、二試合目は互いにほとんど互角。どっちが勝ってもおかしくなかった。これで相手は長門のことを『思った以上に相手ごわいが、勝てないこともない相手』と見るだろう。しかも、一試合目より二試合目の方が接戦ということは、大学生側が調子を上げていると誰もが思う。もちろん、本人もそう思うし、周りの観衆もそう考える。

それが、長門の狙いだった。

キャラクターセレクトの画面に移り変わったとき、珍しく長門の方からハルヒに喋りかけた。

「涼宮さんにお願いがある」

「なんなの、ユキ。珍しいわね」

長門は、ハルヒにそつと耳打ちした。

「本当に大丈夫なの？まあ、ユキが言うなら大丈夫なんだろうけど」

長門は頷いて言った。

「まかせて」

ハルヒが少し笑った。

「おい、はやくキャラ選べよ」

大学生がハルヒ達を急かす。だが、これは長門も予想だにしてい

なかった幸運だった。向こうから喋りかけてくれたおかげで、怪しまれることなく自然に話しかけることができるからだ。

「ちよつと話があるの。賭けしない？」台越しに話しかけるハルヒ。

「ハハ、何言つてんだよ。ちよつと勝ったからって調子に乗つてんのか？まあ、勝ったらジューズぐらいおごつてやるよ。あの子の強さに敬意を表してな」

「ふゝん。写メ、撮らなくていいの？」

「は？何のことだよ」

だが、言つてることとは裏腹に、もうこの大学生は半分こつちの話に乗つてきているようなものだった。魚は餌に喰らいついた。後はリールを巻き上げるだけだ。もちろん、ここの力加減が最も難しいところではあるが。

「これから10戦して、もしこつちが一戦でも負けたらあたしたち3人、アンタの望み通り全員スポンポンになつてやるわ」

あたりから完全に人の声が消えた。他の台に座っている奴も、みんなハルヒの方に目をやる。ピロピロと鳴る電子音だけが、ゲーセンの中に響き渡る。

「あんたおかしいよ」

例の大学生が台から立ち上がつて言う。

「別にナンパするわけじゃあないが、あんた、見た目は中タイケてると思うよ。十分かわいい。でも、頭のネジは十分なのかい？それに賭けと言つたな。それなら、こつちは一体何を出せばいいんだ？俺のナニか？そんなんじやあ釣り合わんだろ」

「一万円」

こいつ、本当にバカだ。というより、こんな作戦を提案した長門も相当バカだ。やっぱり、朝倉涼子との戦いで頭のネジを数本持っていたかたらしい。しかも代わりに入れたネジが谷口のだから、もはや救いようがない。

「ちよつと待て。金はやばいって。まるで売春だよ」大学生の正

常な反応。

「売春じゃあないわ。それはここの全員が証明してくれる」

観衆の沈黙の視線は、大学生がこの賭けに乗ってくれることを欲していた。まあ、万が一のときは他人が不幸な目に遇うだけだから野次馬にとってはノーリスクでいいものが見れて丸儲けという寸法か。

「さあ、どうなの。まさか、今さら怖気づいたなんて言わないわよね？」

「君は露出狂か？その子がどれだけ強いかわからないが、10戦10勝はこのゲームじゃ無理だ。俺は君らのために言ってやってるんだぞ。止めるなら今のうちだと」

「負けるのがそんなに怖いのか？包茎短小」

また沈黙。ピロピロピロピロ……電子音がグルグルと鳴り響いている。誰もいない家についているテレビみたいに。楽しそうなメロディーを皮肉をこめて奏でながら。

「みなさん、聞こえたでしょうか？」

突然、大学生が大きな声で観衆に演説をし始めた。

「再三再四止めるように忠告したにも関わらず、ここのかわいそうな子は私の忠告に耳を貸さないどころか、挑発までしてきました。これでは受けざるを得ません。私は向こうのいわれなき誹謗中傷への、正当防衛としてこの賭けを受けます。いいですか。喧嘩を売ってきたのは向こう、こちらは仕方なくそれを受けた。その点についてご了承いただけるのなら、みなさん、携帯の電池をお確かめの上自由に観戦なさってけっこうです」

それから大学生は、台越しにハルヒを指さした。

「まあ、公衆の面前だから、素っ裸になるまでしなくていいよ。その代わり、お前ら3人の出来立てのパンツぐらいは置いていってもらうからな。後で高校生だからとか、そんな言い訳はもう通用しないぞ。最後にもう一度きく。本当にこれでいいんだな？」

「アンタの方こそ大丈夫なの？あとでお金ないとか言わないでし

よね」

大学生は黙って諭吉大先生が印刷された紙切れを、人差し指と中指に挟んでピラピラとはためかせた。

「じゃあ、はじめようか」

金と女子高生のパンツ。この二つの単語を聞いて無視できる健康な男子がこの世にどうか、いや、いるはずがない。

大学生が台に座り長門がキャラを選んだ途端、今までプレイ中だった者までがいつせいに観戦に集まってきたのだ。まるで生ごみ置き場に捨ててあったモツツアレラ・チーズにたかるドブネズミみたいに。その場の全員が、チーズに食い込まんばかりの勢いで画面を見つめている。ゲーセンの中は空調が効いていたが、それが局地的とはいえ一氣に外の暑さを上回る熱気に包まれた。

「さあ、ここは長門さんに任せて、そろそろ僕らも練習を始めましょう」

涼しげな笑顔を浮かべる古泉に引きずられ、俺は湿った人ごみの中を抜けていった。

“このゲームは始めてですか？”

俺は、騒音もうるさいし口の中の怪我もまだ治ってなかったのでテレパシーで古泉からゲームを教えてもらうことにした。例の台付近が騒がしいが、それは放っておこう。詰まるどころ、みんな長門のお人形遊びにつき合わされているだけなのだから。

まあ、初めてだな。

“では、基本的な操作からお教えしましょう。まず、それぞれのボタンにはパンチ、キック、スラッシュ、ハイスラッシュの4つの攻撃が割り振られています。これらをタイミングよく押していくことで、ガトリングという、まあ、一番簡単なコンボですね。とりあえず、それをやってみてください”

俺は古泉の言った通り、ボタンを押して金髪の剣を持ったキャラ

（さつき台に座っていたやつがほったらかしにしていた。おかげで100円得した）を操作した。古泉の言ったことは意外と簡単に来た。

何とかなりそうだな。

“次は必殺技をお教えしましょう”

朝比奈さんがさつき喰らった、ド派手なムービーが流れるやつか？

“あれは一撃必殺といって、このゲーム独自の、相手を一撃で葬り去る技です。あれはある特殊な状況下で特定の条件を満たした場合に使えるもので、今は覚える必要はありませんよ。必殺技は、普通の……波動拳は知ってますか？”

まあ、それくらいは。

“それが必殺技です。入力コマンドを必要とする技。大体の必殺技は、その波動拳と昇竜拳のコマンドとその応用で出せますから。

さあ、後は練習あるのみです”

練習練習、練習練習……日々繰り返す単調な日常より退屈な作業を、このゲーセンで金を払ってすることになるとは、人生とは皮肉なモンだ。暇だったので、画面端で一人飛んだり跳ねたりしている拳動不審の金髪キャラを操作しながら、俺は古泉に向かって心の中で話しかけた。

そつえば最近、ハルヒの閉鎖空間はどうなってるんだ？

“予想に反して、あまり大きな動きはありませんね。今では比較的静かですよ。長門さんも中々味なことをしてくれませうね。今回のこの無謀に見せかけた賭けも、涼宮さんのストレス発散には大いに役に立つでしょう。でも、さつきあなたのノートが見つかったときは少しヒヤッとしましたが”

俺の方はヒヤッとしや済まされないほどだったかな。三途の川の上流に立った気分だよ。

“でもまあ、涼宮さんのことです。きっとあのノートの切れ端もスカートと一緒に洗濯機の中に放り込まれるのでしょうね”

ぜひそうであつて欲しい。あ、それと頼みがあるんだ。

そのとき、向こうの台で大歓声が上がった。どちらにしても、もう俺たちには大して興味の無いことだ。ハルヒがアレに熱中してストレスを発散させて、ついでに一万円もらえればそれでいい。

“なんですか？”

古典のノート、後で写させてくれないか。久々にまともに板書したのに、ハルヒに持っていかれちゃった。

“お安い御用ですよ”

また大歓声。周りのギャラリーがっかりしているところを見ると、長門の凶悪なコンボが決まって逆転したのだろう。

“フフ、長門さん、頑張ってくれていますね”

たしかに。でも、結局練習できてるのは俺とお前の二人だけだな。

“まあ、そのあたりは長門さんの計算違いだったのでしょう。涼宮さんが挑発した後は、長門さん一人で相手する。その間、我々四人は空いた台で練習する。ところが、作戦がうまくいき過ぎた。あまりに多くの観客が押しかけたため、涼宮さんも朝比奈さんも物理的にその場から離れられない。それに、涼宮さんの挑発があまりにも挑発的過ぎました”

あれだけ自分の身体を賭けておいて、勝負の観戦もしないという訳にはいかんだろうからな。それにしても、あいつ、見てるだけなのに楽しそうだな。

“そうですね。古代ギリシャでも、自らの自由と引き換えにギャンブルをすることもあったようですから。それ程ギャンブルの魅力というのには凄まじいものがあるのでしょう。今回の一件で、涼宮さんもだいぶストレス発散になったんじゃないでしょうか。まあ、売春ストレスのギャンブルなんてあまり健康的なストレス発散方法とは言えません”

タバコ吸ってるやつが言うことかよ。

俺は観衆からチラチラと垣間見える長門の横顔を何となく眺めて

いた。
アーケード台に向かう長門の顔も、どことなく楽しそうに見えた。

10時限目

6月は祝日が無い月であり、あの日本で一番有名な小学五年生のび太君の最も嫌いな月でもあり、俺にとっては一年のうち最も落胆と失望の大きい月と言えよう。

なぜなら、俺の誕生日があるからだ。

古来からかどうかは知らないが、誕生日というのは一種のロマンを持って語られることが多いかともこれまたよく知っているわけではないが、この日本で行われている『誕生日おめでとう！』という歓声の中、ロウソクを吹き消すという恒例行事は、我々男子高校生にとっては遥か昔時の彼方に消えていった一発芸人と同じくらい縁遠いものになっているのであった、ゲッツ、アンド、タイン。

話は変わって、今日も昨日と同じくコンピ研との決戦の日に備え雨の中ゲーセンへ練習しに行くSOS団一味であったが、そこで俺の誕生日についての話題はもちろん一切なかった。一応、出かける前に一旦SOS団メンバーが部室に集合したとき、「実は俺、明日誕生日なんだ」とさりげなくアピールしてみたところ、「じゃあちようどいいじゃない。誕生日プレゼントは自分の手で掴み取るのよ、コンピ研に勝ってね！」というハルヒ団長の一言で俺の儂いロウソクの火は完全に吹き消されてしまったのであった。

そして今、奇妙な一団はハルヒを先頭にして下校途中の生徒の群れを切り抜け、ゲームセンター前に至る、というわけである。

正直、俺には今回の誕生日だけは、もしかしたら何かあるんじゃないかと期待していた。だって、昨日ハルヒは俺の財布から6300円を強奪し（そのとき残ったのが端数の18円だ）しかも大学生からもまんまと一万円を巻き上げることに成功したのだ。

ならば、俺に何らかのリターンがあってしかるべきではなかつかいや、しかるべきである。（反語）

だが、平平凡凡たるヒラ団員にそのような権利はなく、俺は今日も黙って古泉の隣りで、ひたすらギルティ・キルのコンボ練習をしていた。

もちろん、表面上一般人には黙っているように見えても、心の中では古泉と超自然的な会話中ではあるのだが。

それにしても難しいな、このゲーム……

果たして、約束の期日までに勝てるようになるのだろうか、いや、なれるわけがない（反語）

“熱心に古典の復習にいそしんでいる場合ではありませんよ”

ああ、お前の言うとおりだ。しかし、どうやったってこのゲームでコンピ研のやつらに勝てるとは思えないぞ。

だいたいにして、あまりに向こうの土俵すぎる。長門の情報操作を使えば勝てるだろうが、あれは最後の核のボタン、そう軽々しく押すわけにはいかない。

“そう悩むこともありませんよ。私はこのゲーム、意外と簡単に勝てると思います”

ほう。それはどうして。

“また新しい能力が備わりました”

俺は心の中でため息をついた。まあ、昨日だって何の前触れもなく念力を使えるようになっていたし、古泉の新能力獲得も、もはや驚くようなことではない。

どうせ涼宮ハルヒが望んだから、古泉に勝てそうな能力が備わったに違いない。

“機関でも大方、そのように考えています”

だろうな。

逆に大方以外の方はどのように考えているか、こっちがききたいくらいだ。

で、その能力って、どんな能力なんだ？

“10秒ほど先までの未来を予知できます”

これはまた便利なものを……

まあ、大抵の格闘ゲームでもそうなんだが、対人戦では読み合いがものすごく重要になってくる。例えば、上段ガードと下段ガード。上段攻撃は上段ガードでしか防御できない。下段攻撃も同様。どちらの攻撃が来るのか、古泉はそれを100%正しく正確にきっちりとした確信をもって絶対予測できるわけであるから、防御面で負けることはほとんどない。

あれだけ強調しておいて“ほとんど”というやや含みをもたせた曖昧な言葉を使ったのには訳がある。

実はこのゲームには上段と下段を同時に攻撃できるキャラがいて、（その攻撃は条件がそろえばだが）それをされると流石の古泉でもお手上げになってしまう。

だからそこら辺は、そういう状況に追い込まれないくらいの技術は最低でも身につける必要があるということだ。

そして、俺が見る限り、古泉の腕はその求められる技量におそらく到達していると思われる。

少なくとも、超能力を使わなくても今の俺より上手い。

“ ついでに、時を吹っ飛ばすことも可能です。まあ、こっちの方は使う必要はないでしょうが ”

未来を予知し、さらにその時間を吹っ飛ばす能力……

なんかどつかで聞いたことのあるような能力だったが、別に深く問いただすようなことはしなかった。

それより、今は目の前の画面にいる敵を倒すことが先決だ。

でなければ、コンピ研とは戦いにすらならないだろう。

今日はこいつを倒せるようにくらいにはなろうと、必死に操作する俺。

だが金髪の剣士は、あともう少しというところで筋肉山盛りの巨漢の投げ技を喰らって見事に逆転負けして——そこで俺のやる気も逆転負けした。

負けた瞬間、自分でも無意識のうちに大きなため息が漏れ、両手はレバーを放して両側にブラブラぶら下がっている。

「そろそろ帰りましょうか」

古泉がそう言ったのは、俺の心を読んで——ではなく、それこそ今の意気消沈した姿を見れば一目で分かることだった。これだけやる気なさそうに椅子に座っている姿は、学校の古典の授業くらいでしかお目にかかれまい。

それに、この騒音の中でも俺のため息が聞こえたんだろう。

今日はハルヒもお疲れのご様子だった。多分、この頃すでに飽き始めてきたのではないかと俺は思っている。そうでなければ、俺たちの早退をハルヒが許すだろか、いや、許すわけがない。（次の古典のテストで反語が出たら、きつと完璧に解けるだろうな）

疲れ果てた体に鞭打ち、今日の晩御飯は何なのかを考えながら自動ドアを通り抜けようとした時、後ろからハルヒに呼びかけられた。嫌な予感しかしなかったが、無視して立ち去るわけにもいかない。

「そうそう、キョン。早退許してあげるんだから、もう一人助っ人をスカウトしてきなさい」

「この時期にもう一人増やすのかよ……？」

「そうよ」

「どうして？」

「決定的な敗北感を味あわせるなら、4人より5人の方がいいでしょ」

だからどうしてこの状況でそういう発想がでてくるのだろうか。

しかしまあ結局のところ、俺はハルヒに逆らうことなどできない、ただのヒラ団員である。

新たな宿題を一方的に押し付けられた俺は、ハルヒがまだ練習中なのをこれ幸い、ゲーセンを抜けだし、朝から降り続く雨の中、家路へとついた。残ってたらまた新しい宿題が出るかもしれん。

途中、のどが渴いていたので、コンビニに寄ってジュースを買ってから、家路につく。

傘をさして黙々と歩き続ける超能力高校生と、普通の高校生。俺は適当に会話を装うのも面倒くさくなってきたので単刀直入にきい

た。

「勝てるのか？」

「勝てるかどうかではなく、勝たなくてはならないでしょう」

そこら辺には、まだ部活帰りの生徒たちが群れをなして俺たちと同じく家路へと向かっていた。こんな光景を見れるのは久しぶりだ。ハルヒの熱心なご指導のおかげで、ここ最近はやーセンを出たら日が完全に沈みきっていることが多かった。それも6月の一番日照時間が長い時期にこうなんだから、俺たちがどれだけハルヒに酷使されること馬車馬の如し、絞られること乳牛の如しなのか、（特に俺の財布だ）お分かりいただけただろう。

「いや、超能力者のお前でも、5人相手に勝てるのか？いくらお前でも、その能力を5人と戦っている間、ずっと使い続けるのはちよつとしんどいと思うんだが」

「正直、かなりしんどいですね」

「やっぱりな。」

「4人でも厳しいところですが、5人となると、さすがに集中力が持つかどうか……皆さんの力で、一人でも倒してもらえると非常に助かりますが」

「無理だな」

「絶対に？」

「絶対に無理」

長門のマネではなく、本音を正直に言うところになった。

あのコンピ研相手では、せいぜい戦いを演じるので精いっぱいだろう。それも、ハルヒにバレないように。

朝比奈さんに到っては、もっと絶望的だ。俺の目の保養にはなるが、それ以外のことで役に立つとは思えない。

商店街を通り抜けた横断歩道で、信号が赤にかわって二人とも足を止める。

「逆にくきたい、何人くらいなら超能力を維持して確実に倒せそうなんだ？」

「うーん、そうですね――」

「練習は進んでいるかな？」

突然の聞きなれない呼び掛けに後ろを振り返ってみると、そこには例の部長氏が立っていた。

おそらく大勢の生徒と同じ部活帰りに、俺たちとバッタリ出くわしたらしい。

まさか部長氏も、今回の戦いに人類の未来がかかっているなどとは、露ほども知らないであろう。

「お久しぶりです」

古泉がこのジメジメした季節とは違った、いつも通りの爽やかな笑みであいさつする。

「練習の方は――まあ、それなりにです」

「なににせよ、いい勝負になることを期待してるよ。あまりにあつさり勝負が着いたら、こつちとしても面白くないからね」

社交辞令以外の何物でもない言葉だった。あまりにあつさりボロ勝ちするためにこのゲームを選んだのだろうに。

車の動きが止まり、信号が青になった。

「本当に期待してるよ」

信号待ちの歩行者の群れが、関を切った水のように横断歩道に溢れだした。

「あの団長さんよりもね」

何だか意味深な言葉を残して立ち去る部長氏。表情はいつもと大して変わらないが、内心ではボロ勝ちしてハルヒから命乞いを受けるのを想像してほくそ笑んでいるのが超能力を使うまでもなく容易に見て取れた。

俺たちは数秒間、その立ち去ってゆく後ろ姿を眺めていたが、信号が変わらないうちにさつさと歩き始めた。4t車に轢かれちまえ、クサレサンドバックめ。

「んで、古泉、さっきの話に戻るんだが――超能力を使って確実に倒せるのは何人くらいなんだ？」

「確実に倒せるのは2、3人というところでしょうか。途中でニコチン補充タイムを入れてくれれば、4、5人くらい倒せるでしょうが」

「状況的に多分無理だな」

そんなことをすれば、多分停学か——軽くても一週間の謹慎はくらうだろう。まあ、古泉がそうなくてもいいというのであれば、または機関の力で学校に圧力をかけることができるのなら——実はね、そちらの学校に神である生徒さんがいるのですが、宇宙人の協力が得られなかったため、仕方なくうちの機関員がタバコを吸ってニコチン補給、超能力を駆使してコンピ研との賭けに勝ったんですよ、それも未来の人類を守るために——絶対無理だな。仮に古泉が停学覚悟でやったとしても、そんなことをすれば賭けをしていたこと自体が確実に学校にばれてしまう。下手すりゃコンピ研から奪ったパソコン5台を返す羽目になるかもしれない。

「やつぱり、長門にちよつとだけ手伝ってもらうか……」

横断歩道を渡りきった。ここで、俺と古泉は別々の帰路へと着く。

「しかし、長門さん、素直に協力してくれるのかどうか、少々疑問ですが。絶対に、何らかの見返りを要求してくるでしょうね」

「それも性的な……」

過去の一連の事件が思い出される——長門のやわらかい唇の感触と、ハルヒに殴られた口の怪我の痛みと……

「まんざらでもなさそうですね」

「クソツタレめ」

「何に對して、ですか？」

「全部だ」

古泉は両手をW字型にひろげて鼻でフン、と軽く笑った。

「まあ、とにかく、決戦までの残りの期間を頑張るしかないでしょうね」

ゲッツ、アンド、ターン。

結局、俺たちは何もいい案を思い浮かぶことなく、互いに別々の

方向へ歩き始めた。

しばらく歩いていくと、そこには傘をさしてアジサイの茂みを眺めている美少女（顔は傘に隠れて見えなかったが、絶対美少女に決まっている）がいた。

皆さんも身に覚えはないだろうか？

後ろ姿が気になる女性をさりげなく早足で追い抜かし、振りかえって顔を拝見したことを。大抵の場合、そこには期待と現実の絶望的なまでの落差を発見するだけであるが。

傘のはしから覗く制服を垣間見るに、同じ北高生徒のようだ。俺は必死になって顔を覗きこもつとしたが、どの道そんな必要はなかった。向こうから俺の不純な気配に気づいて振りむいてくれたからだ。

「あ」

「あ……長門……」

二人がそう呟いたのは、ほとんど同時だった。

……まあ、大抵こんなもんだ。それにしても、よりによって長門とは…… 確か、ハルヒと一緒にゲーセンに行ったものの、あれからすぐに帰ったはずだ。それに、長門の家はこっちの方角じゃない。俺が長門を架空のユニコーンと勘違いしたのも、それが原因である。長門がここにいるわけがない、という思い込みがハナからあったのだ。

「で、ここで一体、何をしてるんだ？」

長門が黙って視線をそらし、対象物を指さす。

「観察してた」

そこには角を伸ばしながら葉の上をゆっくり前進している、かたつむりの姿があった。

「ふーん。かわいいのか？」

「ユニーク」

長門が少し指先で突つくと、かたつむりは角を引つ込め、体を半分からい殻の中に隠した。それからしばらくすると、ゆつくりと元の状態に戻って、葉脈の上をのそのそと動き出した。

不覚にも、ちよつとかわいいかも、と思つてしまった。

これがあの情報操作の代わりに見返りを求め、谷口の性格が半ば上書きされている長門でなければだ。

しかし、それを差し引いても、今の長門は——少しかわいかった。『ユニーク』という言葉も、かたつむりにたいしてはピッタリな形容だ。奇妙な生き物でありながら、どこことなく愛嬌のある感じも、長門にすごく似合っていた。

「そういえば長門、どうしてここに——」

来たんだ？と言おうとしたが、その言葉はついに言うことなく終わってしまう。

「あ」

むしろ俺は、無表情な長門が少しでも驚きの感情を漏らしたことに驚いた。

起こったことといえば、葉脈にたまった水がカタツムリの頭を直撃し、驚いて殻に籠ったカタツムリがアスファルトの地面に落下しただけなのだから。

地球人にとって、それは梅雨時にはよく見られる何でもない光景だったが、宇宙からやってきた長門にとっては珍しいものだったのだろつ。おそらく、宇宙に進出していったという朝比奈さんの時代には、人類はこのようなことをたくさん経験しているに違いない。

長門はすぐに屈みこんで、壊れやすい真珠を摘むかのように、地面に転がるカタツムリの殻を指でそつとつまみあげた。

「死んじゃったの……？」

「いや、まさか。ちよつと手を出してみる」

「……………？」

「いいからちよつと手を広げて、出してみる」

長門は訳も分からず、といった感じだったが、とりあえず俺の言

うとおりに手を広げた。

「いいか、じっとしてゐるんだぞ。絶対動かないようにするんだ」
そう言つて、長門からかたつむりを拝借して、差し出された手のひらの上に置く。

しばらくは何やら訳も分からず見守っている感じだったが、やがてかたつむりがにゅうつ、と体を半分殻から出して、目を出し槍を出し角を出すと――長門の表情が少し変わったように見えた。

「ユニーク」

それはかたつむりの生態に関してなのか、それともかたつむりが手のひらを這う感触に対してなのかは分からない。多分、両方だと思ふ。

俺はかたつむりを長門の手から引き離すと、元の葉の上に戻した。そいつは、また何事もなかったかのように葉脈の上を這い始めた。

長門が、今度はまた別のかたつむりをつまんで、手のひらの上に乗せた。

だが、そいつはいつまでたつても殻から出てこなかった。

「多分、死んでゐるんだろうな」

原因は分からないが、冬眠中にそのまま死んでしまい、葉にひつついたままになっているのかもしれないし、天敵に食われたのかもしれないし、ただ単に寿命で死んでしまったのかもしれない。

「でも、さつきはこうしてると動いた」

「長門、死んでしまったものはもうどうしようもない。お前には少し分かりづらいかもしれないが……」

「情報生命体に死の概念はない」

だろうな。残念ながら、死の概念のない生命体と死ぬ運命にある人類とでは、勝敗は戦う前から決まっていたのかもしれない。

「まあ、地球上の生き物全ての宿命だな。一回死んだら、もう2度と動くことはないんだ」

俺の説明では、これが限界だった。

「少し、分かったような気がする」

「こいつは、元の場所に戻しておいてやろう。仲間もいるし、それが一番いいと思うぞ」

「死んでいるのに？」

「うーん……よく分からないけど、こいつが生きていたから、かな？ スマン、俺にもそこら辺はよく分からないな。とにかく、かえしてやるのがいいと思う」

「分かった」

長門は軽くうなずくと、トロトロと葉の上を這い進むさっきのかたつむりの隣りに、死んだかたつむりの亡骸を置いた。かたつむりは、いきなり現れた仲間の亡骸に、すこし戸惑いを感じたかもしれない、しきりに触角を伸ばしていたが、死んでいると分かれると方向を変えてまたノソノソと這い始めた。おそらく、かたつむりに人間に理解できるような感情などないだろうが、それでも触角を下げている様子は悲しそうに見えたし、仲間の死を悟って立ち去る様子は――雨のせいもあってか、本当にさびしそうに見えた。

「キヨン君も――」

周囲は、雨音と遠くで走る車がまき散らすドップラー効果のかかったエンジン音が、かすかに聞こえるだけだった。

「どうした、長門？　なんかききたいこともあるのか？」

長門はしばらく黙っていたが、すぐに間近で見ている分からないくらい微かに口を動かした。

「キヨン君もかたつむり好き？」

そんなようなことを、灰色の瞳をじつとこちらに向けて言った。

長門から『ある意味』こんなに答えにくい質問をされるとは思ってもなかった。かたつむりなんて長門と遭遇しなければ英単語並に俺の視界の隅を流れ去ってゆくだけの生き物に過ぎなかっただろう。

俺はしばらく考えた末、

「まあまあ、かな」

と曖昧でどうとでも解釈できる返事をしておいた。

「そう」

短くそう言つと、長門は視線を元の場所に戻した。

しかし、さっきのかたつむりは消え去っており、這った跡だけが葉脈に沿って草陰へ伸びているだけだった。

「それじゃあ、そろそろ帰ろう。俺も久々に早く帰ってゆつくりしたいしな。長門も、こんなところにずっといたら風邪ひくぞ」

そう言つて立ち去ろうとした時だった。

「明日、家に来て欲しい」

「え？」

俺は一瞬、訳が分からなくなった。

「誕生日、用意して待つてゐるから」

ああ、そういえばそんな日もあったな。我ながら今改めて思い出したのが恥ずかしいくらいだ。結局、部室での俺のさりげないアピールを聞いてくれていたのは『スタンド・バイ・ミー』を読みふけていた長門だけということか。

「ああ、別にいいぞ。ハルヒの特訓で遅くなるだろうけど、それでもいいなら」

「構わない。待つてゐるから」

そう言つて、長門は静かに雨の中へ消えていった。

俺が今まで述べてきたことの中で、もし先程のシーンだけを読んだものがいたら、これからは少し変わつていて不思議だけとかわいらしい少女、長門との微笑ましい心の交流が描かれるときと思うことだろう。

もちろん、そういう展開になることなどあり得ないのは、あのシーン以外の部分をちよつとでも読んだ方なら分かっていたはずだ。

にも関わらず、当の本人である俺はあの時、無防備にも長門の誘いに二つ返事でOKしてしまった。

ネズミがネズミ捕りにハマるように。キャサリンがボブのドライ

ブに気軽についていくように。

多分、ハルヒに課せられた特訓で疲れていて判断力が鈍っていたのと、長門のあの日の仕草や表情が、不覚にも俺の苦い記憶を忘れさせたからだと思う。前に家に行った時も怪しげな話を聞かされただけで実害は何もなかったのだから、今回も別にどうってこたないさ、と高をくくっていたのかもしれない。

何にせよ、その日の俺は、明日を少し——いや、かなり楽しみにしながら家路につき——そして眠りに就いた。

11 時限目（前書き）

少しはしゃぎ過ぎた感がありますが、あえてそのまま載せます……

11時限目

「ほんつと、あいつムカツクわ!!!」

部室に入って開口一番、ハルヒはそう言っただけで拳を机に叩きつけた。

「何が『あれえ』、まさかこれが本気だなんて言わないよね?」

よ!!! 厭味つたらしいことばかり言っただけ…… いい? 絶対勝

つの! 何が何でも勝つのよ!!! 徹底的に!!!! 容赦なく!!!

!!!

机に憎つくきコンピ研部長氏の顔が張り付けてあるかのように、

何度も拳を振りおろしながら（振りおろすたびに、パソコンの本体がガタガタ揺れた）言った。

（すいません、一体何があったんですか? ちよつといつもと違うような……）

古泉がいれば心の中で呼び掛けるところだが、残念ながらトイレでタバコでもふかしているのか、ここにはいない。俺は小声で、たまに近くにいる朝比奈さんに声をかけた。

ハルヒは相変わらずヒトラーばりの演説を続けている。

（実は……）

そう言っただけで朝比奈さんが小声で話したことを要約すると、昨日俺たちがゲーセンから帰ってすぐに、コンピ研の部長氏がやってきたらしい。部長氏はハルヒに戯れでひと勝負挑んだのだが、これが見事なまでにハルヒの完敗だった。まあ、当然と言えば当然の結果と言える。ほとんど抵抗する間もなく瞬殺、しかも、最後のラウンドでは気絶したところに敵ながら気持ちよくなるくらい一撃必殺が決まり、流石のハルヒも茫然としていたところに先のような捨て台詞を残して立ち去って行った、という。

それで帰り道、俺たちにあんな台詞を言ったわけか。

「本当に期待してるよ」

「あの団長さんよりもね」

確かに、朝比奈さんの話を聞いてから思い出すと、かなり厭味つたらしい言い草だ。偶然とはいえ、わざわざ俺たちにまで言うところが特にな。別に、俺たちを発見してもそのまま通り過ぎればよかっただけのことなのだ。やっぱり、部長氏の前世は卑劣なサンドバツクで間違いないだろう。

「二人で何楽しそうにおしゃべりしてるわけ？」

気が付いたら、ハルヒの演説は終わっていた。

「いや、ちよつと古泉がどこに行ったのか、きいてたんだ」

「それでキヨン、誰かいい助っ人はいたの？」

ああ、そういう昨日帰り際にそんなこと言ってたな……

「いや、昨日のことだからな。まだ探しているところだ」

ていうか、そんな早く見つかるわけがない。

「誰か目星付けてる人くらいはいるんじゃないか？」

「問題解決に向けて努力してまいりたいと思っております」

「まるで政治家答弁ね。今度は選挙ポスターにキスでもしてきたの？」

妙にトゲのある言葉だったが、今は無視しておくのが一番だろう。

「いや、それにしても昨日の今日だぞ。俺の友達でそこまでゲームする奴なんていないしな」

「谷口は？」

「アーケードに関しては俺ら以上に初心者だろうな。それにアホだぞ」

あいつがやるようなゲームはエロゲーくらいだ。それに、長門には谷口の性格が若干（それほど多くはないと信じて）上書きされているみたいだし、近づけることでさらなる悪影響が出るとも限らない。内面だけでなく、外面も上書きされたら……しかもそいつが「キスしてくれたら協力してあげる」とか言って迫ってくる……考えただけで洗面器3杯分のゲロを吐きそうな気分になる。

「まあ、アホならしょうがないわね。それにオールバックだし」
オールバックがどう関係してるのかよく分からなかったが、とりあえずこれも無視しといた。

「じゃあ、国木田は？」

「国木田に勝負事に勝つような闘争心があると思うか？」

「なさそうね」

「前もって言つとくが、俺の妹はUFOキャッチャーしかできんぞ」

その上反抗期でもある。俺に素直に協力してくれるとは思えない。この前なんて、たまたま目を覚ましたらベッドの横でハサミを持て立っていた。「図工で使うのゝてへっ」なんて言ってたが、あれは明らかに図工以外のことで使うような目だった。

「じゃあ、あの子でいいわ」

「あの子、て誰だよ？」

「ほら、ミクルちゃんワロスの同級生に自称天然美少女とかいうハイテンションテラワロスなガールがいたじゃない。名前なんだっけ、ミクルちゃん？」

「その人、知ってます。自称天然美少女とか言ってる、クラスでも話題になってました」

「だから、その自称天然美少女の名前は何なのよ」
グラントテラワロス
ヴォルカニックテラワロス

「クラスの人に『自称天然美少女は誰ですか？』て聞けばすぐ分かります。有名ですから」

「だから、その自称天然美少女の名前を聞いているの！」
グラントヴォルカニックテラワロス

ミクルちゃん、その自称天然美少女（グラントヴォルカニックテラワロス・ドラゴンインストールバージョン）と同じクラスなんですよ？」

「名前は知っていますよ。でも、名前より自称天然美少女（ライトニンググラントヴォルカニックテラワロス・ドラゴンインストールバージョン）の方がクラスで有名ですよ」

「正直に言ってるね。ミクルちゃん、自称天然美少女（新世紀ライトニンググラントヴォルカニックテラワロス・ドラゴンインストール

ルバージョン)の名前を忘れたんでしょ？ 同級生の名前を忘れたのを知られたくないのは分かるけど、キヨンみたいに政治家答弁に逃げちゃ駄目だからね」

「もちろん、覚えてますよ」

「自称天然美少女っていう子(新世紀ライトニンググランドヴォルカニックテラワロス ドラゴンインストールバージョン)、髪の毛がお尻の穴まで届きそうなくらいあって、おでこがツルツルしてて堅そうな子よね？」

「ええ、そうですよ」

「じゃあ、名前は？」

「そこまで分かっていたらば十分探せますよ」

「そんなことは問題じゃないの、名前は何なの？ 今度は！ 名前を！！ はつきりと！！ 答えてもらうちから！！！！」

「ふええ…… そんなに睨まないでください……」

「忘れたなら、素直に忘れたって言えば今回は許してあげるわ。それか、早く名前を言いなさい！ この」

「ふええ、やめてくださあい！！」

「どっちか素直に白状しなさい！」

ハルヒが例によって朝比奈さんの服を脱がせようとしたので、俺はついに口を開くことにした。

「こら、やめろ、ハルヒ。朝比奈さんが言ってるのは、鶴屋さんのことだろ」

だいたい、この前一緒に草野球したのを覚えてないのか、と言いたいところだったが朝比奈さんも覚えてないようなので、口に出すのは止めといた。ハルヒだけでなく、朝比奈さんまで馬鹿にすることなってしまう。それに、そろそろ止めないと内心でどこまで鶴屋さんをあざ笑うつもりなのか、少し心配になってきてたところだし。

「そう、そいつよ！」

そいつが犯人だわ！ て言いたそうな感じだな。

「早速スカウトしてこないと。ヤツの悔しそうな顔が目には浮かぶわ！」

「おい、ハルヒ、何も鶴屋さんがゲーム得意と決まったわけじゃ

ボタン！！タタタタタタタ………

行ってしまった。もう帰ってこなくていいぞ。

多分、鶴屋さんはゲームそのものをやったことがないと思う。名前をようやく思い出した喜びに惑わされて、完全に我を忘れている。あのさっぱりした性格の鶴屋さんであるからハルヒのスカウトを快く引き受けるであろうことは想像に難くないが、これで古泉のお荷物が増えることになった。

「ふう、やっと出て行きましたね」

朝比奈さんが誰に言うわけでもなく、そう呟いた。

「マスコットキャラを演じるのも楽しくないですね、聞いてますか、長門さん？」

そういえば、俺が来た時にはすでに部屋の端っこでステイブ・キング作の『デスペレーション』をずっと読みふけていた。いつも思うのだが、一体長門はいつ部屋に入ったのだろうか？いつも俺が来た時には部屋で悠然と本を読んでいる。中原を流れる黄河のように、はるか太古の昔からここにいた、とでもいうように。

「“備品”は楽そうでもいいですね。座って本を読んでもいいなんて、なんてうらやましい御身分でしょう」

空は梅雨の中休みで久々にスカッと晴れ渡っていた。部屋の窓辺で太陽の光を浴びて読書するのは気持ちいいことに違いないだろうが――

「少し静かにして」

部屋には早くも大雨をもたらしそうな積乱雲がモクモクとそこらじゅうを覆い始めていた。耳を澄ませば、雷鳴すら聞こえてきそうな感じだ。

「気が散るから」

「あらあら、すいません……長門さんの気持ちにも気付かずに」
もちろん未来においては戦争し合う敵同士なのだから、朝比奈さんに謝る気持ちは全くなかっただろう。つかつかとコンロの方に歩いて行くと、そのままヤカンのお茶を湯呑に入れた。あの、俺が世界の異変に気付いた時に飲んでいた湯のみだ。

「長門さんがもつと集中できるように、お茶の差し入れ……あ！」
そのまま、朝比奈さんは長門の頭上に差し出した湯呑を逆さまにした。ついに来た、と俺は思った。雨がやってきた。血の雨が降る前触れ。

ビチャビチャビチャとお茶が長門の髪を濡らし、長門の白い頬を伝ってゆく。その様は、読書して感動のあまり泣いているように見えないこともない。

「あゝ、ごめんなさい、長門さん……うっかり手が滑っちゃってすぐに拭くものもつてきますね」

ロッカーを漁ると、朝比奈さんは両手にそれぞれの獲物を持って長門に言った。きつとおとぎ話に出てくる湖の妖精も、こんな感じだったに違いない。

「モップの先と」金の斧

「雑巾」銀の斧

「長門さんが欲しいのはどっちですか？」

「……………」

何を思っているのか、眼鏡をお茶で濡らされても長門は無言だった。しかし、いくら情報統合思念体とはいえ、心の中は怒りで煮えたぎっているはずである。外は6月に似合わないカラリと晴れ渡った晴天だが、俺はジメジメした嫌な汗が溢れてくるのを止めておくことはできなかった。

「モップと雑巾、どちらがいいかきいてるんですよ？」

「……………」

「答えられないんですね、分かりました」

長門の対応につこり微笑んだ朝比奈さんは、モップの先端のあ

のモジャモジャと雑巾を無造作にそこらへんに投げ捨てると、ロツカーから——今度は鉄の斧を取りだした。金や銀の斧みたいな装飾用じゃない、木の幹でも牛の首でも簡単に切れそうな斧。

「この素敵なトイレ専用雑巾が一番ちよいどいいと思いますよ」

まるで平和の万国旗みたいに誇らしく広げられた例の雑巾の端を、指でつまんで言った。

これから何が行われるのか——それは樵が木に向かって斧を振りかざしているのと同じく考えるまでもないことだったが、あまりに現実離れしていたため俺は受け入れることができないでいた。

まさかトイレ専用雑巾で長門の顔を拭くなどとは。それもケツの穴を拭くが如く、執拗に。

朝比奈さんは雑巾を持って近づくと、その『受け入れがたい現実』を何の躊躇もなく行った。

まず手始めに、長門の頬を伝って本のページに滴り落ちているお茶を拭き取った。朝比奈さんが押し付けた雑巾をようやく顔から離れたときには、長門の眼鏡は異様な方向にねじ曲がり、斜めになりながら何とか顔に張り付いている状態だった。

次に、そのまま長門の後ろに回り込むと「どこかかゆいところはありませんか」と言いながら髪にかかったお茶を同じく執拗に拭き取っていった。

俺は、以前の事件の時を思い出していた。そう、長門が朝比奈さんの目に煙草の先を突っ込んで根性焼きにしたことを。

まさに目玉焼きだな。

俺はこんな状況にも関わらず、なんとなくそんなことを思った。

「わゝ、綺麗になりましたね」

額から、汗がダラリと流れる。

長門が本を閉じ、ゆつくりと立ち上がった。そして、おそらく軽く3桁は超えるであろう握力で朝比奈さんの首を締めあげ、机の上に押し付けた。さあ、ついに来た。このまま長門が朝比奈さんを放り投げ、窓を突き破って中庭へ落下していく映像が俺の脳裏をよぎっ

た。下のコンクリートに、踏みつぶされた虫みたいになって赤い血を飛び散らしている朝比奈さんの様子まで、リアルに想像できた。

「私の言うことをよく聞いて」

「くは……ッ……」

息が詰まって返事ができずないようだ。当たり前か。それにしても、長門の口調はどことなく子供にさとす母親のような感じがした。

「次はその窓から放り出す。聞こえた？」

朝比奈さんは首を縦には振らなかったが、十分に意思は伝わったとみて、長門は襟首から手を放した。しばらく咳き込む朝比奈さん。すぐに酸素の供給も回復したと見え、ようやく息も整いだした。

長門の方はすでにボサボサに乱れた髪と眼鏡も情報操作で元通りになっており、何事もなかったかのように鎮座して本の続きを読む始めている。

「はあ…はあ、ハア……」

ごくり、と唾を飲み込んで完全に落ち着きを取り戻してから、長門に近づいてゆく。

「どうしても宇宙に帰ってはくれないんですね」

「私は、涼宮ハルヒを観察するためにここにやってきた。途中で任務を放棄することはできない」

「奇遇ですね。私も任務を放棄することはできません。ところで、今日はどうして私をそこから投げ飛ばさなかったんですか？長門さんなら簡単にできたのに」

「今日はキョン君の誕生日だから。キョン君に汚いボロ雑巾になったあなたの姿を見せたくなかった」

「いつか後悔しますよ」

につこり。梅雨の晴れ間が、朝比奈さんのまつ毛一本一本にいたるまで、鮮やかに照らし出している。それこそ、太陽より眩しいくらいに俺には思えた。もちろん、それを取り囲む空間は宇宙空間よりはるかに濃い闇ではあるのだが。

チャイムが切りよく鳴った。チャイムの音と同時に、ようやく日常

世界があるべき姿を取り戻した。それが一時的な仮そめのものだと
しても。

「キヨン君も早く教室に戻らないと、授業に遅れちゃいますよ」
一部始終を傍観しているだけだった、いや、傍観することしかでき
なかった俺に、朝比奈さんはさっきの眩しい笑顔のまま、そんなこ
とを言い残して立ち去って行った。

俺もそろそろ教室へ向かうか。ハルヒが鶴屋さんをちゃんとス力
ウトできたかどうか少し気になるが、どうでもいいことだと思った。
立ち去ろうとする俺の背中に向かって、長門が言った。

「今日、準備して待つてるから」

俺にはこの梅雨の中晴れの出来事は、全て夢のように思えた。今の
チャイムの音で目が覚め、ようやく現実世界へ戻ってきたのだと思
ったのだ。

だが、もちろん、残念ながら、とでも言おうか、今起こったことは
全て動かしようのない現実だった。

おっと、忘れていたことがあったな。

ゲッツ・アンド・ターン。

部室のドアノブに差し出された手を止めて振りかえる。俺が生まれ
た日にも輝いていたであろう太陽が、床に放置されたままになった
素敵なトイレ専用雑巾と普通の雑巾とモップの先を照らし出してい
た。このままほったらかししておくのは、いかにもマズイだろう。
俺はそれら3つの斧を素早くロッカーの中に放り込むと、今度こそ
足早に部室を後にした。

退屈な古典の授業（兼、俺を含む8割方の生徒のための睡眠時間）
が終わった後、SOS団一行は鶴屋さんの行方を探索することにな
った。

俺が部室から教室へ戻って行った時に、すでにハルヒが席につい
ていたことから、何かあったに違いはないと思っていた。そうなけ

れば、アイツが俺より早く席についているなどあり得ない。表情から察するに、それほどいいことが起こったわけでもなさそうだし。最初は鶴屋さんにスカウトを断られたのかと思っていたが、どうやら鶴屋さんが学校に来ていないようなのだ。

放課後のチャイムが鳴ってから、真っ先に校門をくぐって坂道を下るSOS団。久々の陽光が気持ち良かった。ハイキングコースもこういう日には悪くないと思う。雨の日は傘をさすのも面倒くさいが。

「ミクルちゃんは、何か知らないの？ 一応、同級生でしょ」

ハルヒが『一応』という単語を強調してきいても、朝比奈さんはうつぶいて押し黙ったまま、答えようとしない。余程答えにくいことなのだろうか。おそらく、風邪の類ではなさそうだ。

「クラスの他の人に聞いたんだけど、その人も同じ反応だったわね。だから、何かあったのは確かなのよ」

その点は俺もそう思う。そういえば、古泉は鶴屋さんに何が起こったか知っているのだろうか？ そう思いながら、俺の横を歩いている古泉の方に顔を向けた。一瞬、古泉と目線が合った。

“ ええ、知っていますよ ”

やはり、知っていたか。だが、詳しい事情は朝比奈さんからここで聞けるだろう。朝比奈さんも、どの道ここまで来てしまった以上話さないわけにはいかない。ハルヒの好奇心は、もう誰にも止められないのだから。

「みなさん、新聞は読みますか？」

「何よ、急に。まあ、わたしはテレビ欄以外読んだことないけどね」

「自慢げに言うことじゃないと思うぞ」

「じゃあ、アンタはちゃんと新聞読んでるっていうの？」

そう言われると、答えに窮する。俺もだいたいハルヒと同レベルで、テレビ欄とポコちゃんくらいしか読んでない。

「まあまあ、お二人とも、今は朝比奈さんの話を聞きましょう」

会話が変な方向に流れるのを察知したのか、古泉が割り込んできた。

「そうね。で、鶴屋さんはどうなったの？ クラスの人も、いくらきいても教えてくれなかったしね」

朝比奈さんはそれでもまだためらっていたようだった。しかし諦めたのか、しばらくの間を置いて、ようやく話はじめた。

「鶴屋財閥が崩壊したんですよ」

聞いた瞬間、俺は嘘だと思った。いくら新聞を読まないというハルヒも、俺と同じことを思ったろう。（と信じたい）

鶴屋財閥と言えば、日本でも屈指の財閥一家であり、その傘下企業の売り上げを全て合わせると国家予算に匹敵するとか、どうとかどうか。しかしいくら不景気とはいえ、そんな鶴屋財閥が簡単に崩壊するなどは、にわかには信じ難かった。

鶴屋さんはその鶴屋財閥のご令嬢である。学校でもそれでかなり有名だった。名前を忘れているなんてやつは、現代の日本人でハルヒくらいなもんだろう。

だが、朝比奈さんがこんなところで嘘をつくわけもなく、そうやってくると鶴屋さんのことが本気で心配になってきた。家自体が日本屈指の大富豪だから、鶴屋さん一家がすぐに生活に困るということはないと思う。

とはいえ、鶴屋さんの心に甚大な影響を及ぼす可能性は、十分に考えられる。

「財閥崩壊は、少し前のことなんです。それから、鶴屋さんはいつも通り学校に来ていましたし、今日も来ていると思ったのですが……」

気丈な鶴屋さんのことだ、最初のうちは何とか平静を装ってはいたものの、だんだんと財閥崩壊の重圧がのしかかってきたに違いない。

「これは絶対に事件ね。事件の臭いがするわ。裏で誰かが鶴屋財閥崩壊を仕組んでいたのよ。何とかファンドとかファインダーとか」

ハルヒの目が輝き始めた。ちょうどゲームにも飽きてきた頃だし、いい暇つぶしのネタができて喜んでいる——だいたいそんなところか。

「私たちも鶴屋さんとは少々お付き合いがあるわけですし、様子を見に行くのもいいかもしれませんね」

古泉が、さも今知ったかのような口調で答える。

「一応、今日の分のプリントをもらってあります。家に行くのは、ちょっと気が重いですけど……」

「大丈夫よ！ わたしたちが行けば、きっとこの事件も解決よ！」
こいつは本当に、全く、一文字たりとも、新聞を読んでいないのではないだろうか？

そんな疑問がちらつと頭をかすめた。

12時限目

——鶴屋財閥——

こゝろやいばつ

鶴屋財閥は、鶴屋亀次郎よつて設立された日本4大財閥の一角を成していた、大財閥のことである。

江戸時代末期、16歳で江戸へ出てきた亀次郎は、両替商の丁稚奉公として働くことになるが、やがて店をついで独立。独立してからは銀行業などにも事業を拡大し、着実に富を築き上げていった。進取の気性に富み、幕末期には幕府によつて厳しく制限されていた貿易関係の方面にも進出、当時としてはまだそれほど有名でなかった坂本竜馬の元を訪れ、貿易会社兼政治結社「亀山社中」の設立に尽力する。社名の『亀』は鶴屋亀次郎の名前に由来するとも言われている。この頃から、類まれな商才と行動力を惜しみなく発揮している。性格もさっぱりとした大らかな性格であつたようで、この時知り合つた後藤象二郎が後に征韓論争で敗れて下野したときには惜しみなく資金援助するなど、助力を惜しまなかつた。三菱財閥創始者の岩崎弥太郎とも、このときの関係で親交がある。

維新後は解散させられた海援隊（旧亀山社中）の一部を引き継いで鶴屋商事を設立、武器や食料品など、あらゆるものを扱う総合商社として発展し、やがて政府御用達の商社と言われるほどの発展を遂げる。

亀次郎本人の性格もあつてか、事業拡大は当時はやりの石炭、鉄鋼、造船、紡績といった工業はもちろんのこと、電力、通信、海運、観光、果ては子供用の玩具など、あらゆる分野に拡大していった。このときの本業である銀行業の投資は、安田財閥の「天下一のとりしまりや」と呼ばれた厳しい投資に対して、「唯一無二の放漫投資」と呼ばれたほどだった。しかし、亀次郎の大局を見極める目はこのときも惜しみなく発揮され、投資のほとんどは莫大な利益を生み出すこととなり、銀行業を中心とする鶴屋財閥の基礎はこの頃に出

上がったと言っても過言ではない。

日清・日露戦争のときは、政府に歴大な武器・弾薬を供給するなど、戦争遂行に大きく貢献することになる。

戦争終結後の亀次郎は経営の第一線を退き、次世代の教育のためにいくつかの学校を建設、それは今でも残っている。更に晩年になると、財閥では珍しく子供用玩具の業界へ進出、日本ブリキ玩具（のちの京都アニメーション）を設立した。もともと、この会社は亀次郎が孫を喜ばせるために趣味ではじめたのがきっかけと言われている。

第二次世界大戦後は、亀次郎の孫の亀吉が3代目社長として就任。戦後の日本経済の成長に合わせて堅調にその業績を拡大してゆくが、やがてバブル期になると鶴屋財閥代々の放漫投資が裏目に出て、一気に莫大な不良債権を抱えることになってしまう。

それからは一時投資を控えるなどの対策を取り、苦しいながらも失われた10年を耐え抜く。しかし2008年、アメリカ発の金融危機によって、またしても莫大な不良債権を抱えてしまう。折しも投資対象を手詰まりになりつつある国内から国外へ移したときのことだった。また、タイミング悪く、鶴屋電機のリコール問題、それに端を発するグループ企業全体の株価乱高下による市場信用の失墜、機密情報の漏えいなどが重なり、金融も金融以外の部門も疲弊していった。

そしてついに201X年、鶴屋財閥は不良債権を支えきれないと判断、今まで鶴屋財閥の基盤となり続けた銀行は倒産、財閥傘下の企業もこれを機に傘下から散ってゆくこととなる。

（出典：フリー百科事典『Wikipedia』）

坂道を下ったところで電車に乗って何の変哲もない駅を降りると、そこは閑静な高級住宅地だった。

住所だけを頼りに東奔西走しながら、鶴屋家には全くかすりもしな

かった。何度も同じところを行ったり来たりしたせいで、黒塗りのベンツが置いてある和風の屋敷は伊集院さんのお宅であることがよく分かった。今度機会があれば行ってみようと思う。

で、肝心の鶴屋さんの家だが、結局は古泉の遠隔視によって俺たちはようやく目的地にたどり着くことができた。

「どうやら、ここがそうみたいですね」

朝比奈さんが3、4メートルはあろうかという何やら高級そうな石でできた城壁（塀と呼ぶべきなんだろうが、平民の俺にとっては城壁に見えた）を見上げながら言った。

「とにかく、インターホン押せば誰か出てくるでしょ」

ハルヒが人差し指を伸ばしてボタンを押す。

「執事とか出てきたりして」

「まあ、もしかしたらいるかもな」

「そいつが犯人かも。こういうのは意外と身内の中に犯人がいるものなのよ」

「だいたい、事件、ていうのは何のことなんだよ」

「決まってるじゃない、鶴屋財閥の崩壊のことよ」

「さつき朝比奈さんが説明してくれただろ。あれは不況だとかリコールだとか、経済的な不幸が重なってだなあ……」

「犯人はこの屋敷にいるに決まってるわ!!」

いきなり大声を出すな、と言いたい。インターホンより余程向こうに伝わるだろう。不審者が来たということが。

「これだけの財閥を崩せるとなると、黒幕自体、相当のお金持ちね。さらに黒幕に集まる天才ハッカーが株価操作、執事をスパイとして送り込んで機密情報をリークさせたと見るのが妥当な線ね。きつと鶴屋さんは黒幕に関する秘密を知ってしまったんだわ。もしかしたら、学校を休んでいるのではなくて、学校に行けない状況にあるんじゃないかしら」

推理というのは往々にして他人を納得させるためではなく、自分を納得させるためになされることが多い。このことのいい見本だ。

「なんか、ちょっと怖いです……」

朝比奈さんがチワワのようにぶるつと震えながら言った。しかしまあ、長門の顔面にトイレ専用雑巾を押し付けるこの人に、怖いものなどなかるうて。俺はチワワの仮面を外した朝比奈さんが一番怖いよ。しかし、その仮面を被っている間が一番可愛いんだよなあ。

未来人の人選センスは、やはり間違っではないなかった。

「もしかしたら、鶴屋さんは今頃どこかの地下に捕らわれてるのかも。そして、想像を絶するような拷問が鶴屋さんを……」

「ひえ〜！！ やめてくださあい！！」

「あははは！ みくるちゃん、怖がり〜」

どちらかと言うと、朝比奈さんは怖がらせる方が得意なんだけだな。平和な未来に戻ったら、ぜひと女優になることを強くお勧めしたい。もしAV女優になって『朝比奈みくる密着セックス24時間』なんてDVDが発売されたら、自分用、保存用、谷口への自慢用の3点購入することを約束しよう。

「それにしても、ちょっとばかり出てくるのが遅すぎませんか？」

古泉が言うとおりでた。

「ハルヒ、もう一回押してみろよ」

「どうしてよ。次はキヨンが押しなさい」

ピンポンダッシュかよ。しかし、ハルヒの言いたいことも分からないでもなかった。これだけの屋敷、鶴屋さんや家族の人がいなくても、誰か人がいるはず。それが予想外の沈黙で出迎えられたことに、ハルヒですらちよつとした戸惑いを感じたのだろう。実際、俺も戸惑っている。インターホンのボタンが、起爆スイッチになっているかのような、そんな感じがした。

「団長の命令は絶対だからね！」

こういうときだけ権力を使いやがって、クソめ。

さつきと打って変わって、騒がしかった住宅街の一角は、元の閑静さを取り戻していた。4人が無言で俺を見つめている。はいはい、押せばいいんだろ、押せば。

勇気を出して、インターホンに手を伸ばす。親指の爪の先が白くなるまで、しっかりとボタンを押した。

ていうか古泉、お前は遠隔視で中を見れるんじゃないのか？ どうなってるか、もう知ってるだろ？

“いいえ、前にもお話しした通り、超能力を使うのもけっこう大変なんですよ。最近はゲームでの消耗を補うのに、かなりの二コチンを補充していますしね”

なら仕方ないか。古泉の健康を一方的に犠牲にするのは忍びない。それにしても、この念話は大丈夫なのかよ？

“友人同士はタダなんですよ”

俺は電話番号を教えた覚えはないのだが。

「やっぱり、誰も出ないわね。これ、壊れてんじゃないの？ さっきから全然音鳴ってないみたいだし。もう一回押してみて」

今度はあまり抵抗なく押した。

ハルヒなんかは、インターホンに耳を近づけて音を拾おうと必死だった。おかげでこいつの生温かい吐息が俺の手にかかった。学校の授業もそれくらい熱心に聞けばいいのにな。

「やっぱり、何も音もしないわね」

数秒間、沈黙が続いた。結局誰もいないというのは少し疑問が残るが、ここらへんで引き上げなくてはなるまい。朝比奈さんが持ってきてくれたプリントは、郵便受けにでもいれておけばいい。

「こっちのドア、開いてる」

長門が久々に喋った。正門はしっかりと閉まっていたが、普段の出入り用の勝手口にあたる扉には鍵がかかってなかったのだろうか。長門が軽く引いただけで、意外にも安っぽいきしみ音を立てて、ドアは開いた。

「よゝし！ みんなで鶴屋さんの家に突撃よ！！」

俺は撤退した方がいいのではないかと思っただが、ハルヒの前でそのようなことを口にするわけがない。言いたいことが言えない状況は、人生ではよくあることだ。

それでも、庭を横切って行つて、家の扉に貼つてある『売り家、現在買い手募集中！』と書かれた張り紙を見つけると――どうせハルヒのことだし、言つても聞かなかつただろうが、それでも一応――引きとめておけばよかつた、と心底思つた。

家自体は3階建ての白い洋風高級住宅で、お姫様でもいそうな感じの家である。

俺たち5人は、梅雨のせいだろうか、端が微妙にふやけている張り紙の前で茫然と突つ立っていることしかできなかった。しばらくしてから、（数秒だったが、えらく長い時間に感じられた）ハルヒがようやく口を開いた。

「どうやら、誰も住んでなさそうね」

「そうですね」

古泉が言つた。『笑えばいいとも』の観客みたいに。

「プリント、どうしましょう……郵便受けに入れても、鶴屋さんは戻つてこないですし……」

「とりあえず、学校に持つて帰りましょう、朝比奈さん。これは、先生に任せた方がよさそうですよ」

俺はそう答えたものの、これをどうやって先生に報告すればいいのか、また、報告したところで退屈な授業をする以外に何の能もない教師がこの状況をどうにか出来るのか、皆目見当がつかなかった。多分、教師としても鶴屋さんからの連絡を待つか、御慰めのホームルームを開くくらいしかできない。この手のホームルームには「AV女優がイッたのでみんなでザーメンをかけましょう」程度の意味しかないと言々思っている。

俺は唐突に、野球大会に出場した日のことを思い出した。多分、この場の全員がそれを思い出していたのではないだろうか。なぜかそんな気がするし、それには妙な確信があつた。わけの分からない4択問題の答えに2を書くような、青春時代独特の根拠のない自信のせいでは、決してない。

ゴールデンウィーク前、五月晴れの日に鶴屋さんと一緒に白球を

追いかけた、その場面は今でも鮮明に思い出せる。今日と同じ、雲ひとつない晴天だ。鶴屋さんのおでこが眩しかったのを覚えている。長門の情報操作でホームランを打ったときに「うわ、私つてめがっさ才能があるじゃないかっ!!」と人一倍喜んでくれた鶴屋さん。それが今では二束三文の値段をつけられ、買い手募集中の札を貼られている。

目の前にあるものは、そういうことなのだ。今までに一度もお目にかかったことなどない鶴屋さんの家だけではなく、そこには鶴屋さんと過ごした思い出も詰まっているのだ。

「もう俺たちにはどうしようもないな。今日はここらへんで帰ろう」

「そうですね」と古泉。

お前は本当に『いいとも』の観客なのか？

“そうですね”

俺はしつこいギャグには突っ込まない主義なのでそのまま無視しておいた。

それに、肝心のゲストはここにはいない。あるのは空っぽになった屋敷だけだ。

「朝比奈さん、もうそろそろ帰りましょう。長門も、ハルヒも、みんなそろそろ帰ろうぜ」

「開いてる」

長門が、またしても扉を開けた。それは最初から開いていたのか、それとも長門が情報操作で鍵を開けたのか、今となっては分からない。

分からないが、ハルヒが鍵を開いているのを見て歓喜したことは間違いない。

「もしかしたら犯人の手掛かりが見つかるかもしれない」などと言いながら、驚くべきずずしきでスカズカと屋敷の中へ乗り込んでいった。

古泉が肩をすくめて両手を広げている。

仕方ない。どうせ中は人も物も何もない、空っぽになった家だろう。しかし、それでもハルヒは何をするか分かったもんじゃない。好奇心に駆られたやつを止めるために、俺たちは半ば仕方なく鶴屋さんの屋敷へ踏み込んで行った。

戸惑いを感じながらも扉を開けると、玄関どころか廊下の向こうの方まで、俺たちのつくった影が伸びていった。陽は、すでに傾きつつあるようだった。

13 時限目（前書き）

月イチくらいで連載していく予定です。

13時限目

誰もいないのは重々分かっていたつもりだったが、一応「邪魔します」と言ってから俺は玄関へと足を踏み入れた。当然のことながら、売り家には誰もいるわけもなく、ただでさえ広い家が余計に広く感じられた。晴れた日とは言え、電球もついてないとなると暗くて余計に不安になってきた。

「おい、ハルヒ」

「涼宮さぁん……」

朝比奈さんが健気に呼びかける。

「うゝ……やっぱり人のいない屋敷って、ちょっと怖いですね。なんていうか、不気味な感じがして……」

恐怖に駆られた朝比奈さんが、俺の腕を掴んで体をすり寄せてきた。特大マシユマロの感触が、服の上からも伝わってくる。

非常に残念ながら、その時だけは鶴屋さんのことは完全に頭から消し飛んでいた。いかなる神の幸運と不運の巡り合わせかは知らないが、腕に押し付けられた低反発クッションの感触に、俺は全神経を集中させていた、いや、させねばならないだろう。

古代ローマ人は言った。運、不運は神々の巡り合わせ、人の義務は巡り合った運を逃さずに掴むことだ、と。ならば、俺のやるべきことはこの幸運を掴んで離さないことではないだろうか。

「これは困りましたねえ。呼びかけても返事がない」

並のことでは動じない古泉ですら、やや困惑を隠しきれないようだった。

「仕方ない、中に入って探すしかないな」

靴を脱いだ。フローリングの冷たい感触。

朝比奈さんも、俺の腕をより一層強く掴みながらフローリングへと足を踏み出していった。当然、特大マシユマロもより強い力で俺の腕に押し付けられることになる。

俺はそうさせるために、わざと暗い屋敷の中に乗り込んで行き、恐怖心を煽ったのだ。しかもハルヒを探すという大義名分もあり、いかにも団員想いのように見える。

古泉や長門も、俺に続いて屋敷に上がり込んだ。

ハルヒがこの広い屋敷のどこに行つたのか、予想は全くつかなかった。とりあえず奥のほうに進んで行こう。廊下の突き当たりの部屋とか、かなり怪しそう。

長い廊下の途中、壁にキレイなイルカの絵がかかっていたが、屋敷の雰囲気のでいで醜悪な深海魚のように見えた。廊下の突き当たりまで進んでいくと、夕陽も差し込まないのでとても暗かったからだ。

長門ばかりか、4人とも無言だった。この時ばかりは古泉も心の中に話しかけてこなかった。

俺はみんなが見守る中、慎重にドアノブを引いた。一同無言ではあったし、やはりここは言い出した俺が率先してドアを開けるべきだと思ったからだ。

高級な屋敷に似合わない、情けない音を立ててドアは開いた。

中は真っ暗だった。

黒い壁が立ちはだかつてきたような、それくらいの暗さだった。かろうじて、鶴屋さんが以前使っていたであろう高級そうな家具類が闇の中、薄ぼんやりと見える。

「この中に入っていくんですか……？」

朝比奈さんのか細い必死の訴えも、暗い部屋の中へ消え去っていった。

「涼宮さん、いるなら返事してください」

古泉の呼び掛けも、虚しい木霊を生み出すだけだった。

「いませんねえ……」

「仕方ない、一応中に入ってみるか。朝比奈さんは、ここで待っていてください。アイツを探すだけなら、俺と古泉だけで十分ですよ」

「そんなあ……こんなところで待つなんて嫌ですよ……」

俺の腕を掴む手に、さらに力が入った。それに伴い、俺の腕は半ば埋め尽くされんばかりの勢いで特大マシユマ口に食い込んでいる。「わたしも一緒に探しますから」

そこまで言われて断れる意思力を持った人間など、この世にいるだろうか？女とホモを除いて。まあ、後から考えれば、このとき朝比奈さんが俺についてきたのは、長門と二人つきりになってしまうのが嫌だったからかもしれない。

何にせよ、このときはハルヒを探すので必死だった。このまま帰ってしまう訳にも当然いかないだろうし。

意を決して、何歩か足を踏み込んでいく。古泉や長門もついてくる。俺は転んでしまわないように、床の突起や何かに気をつけながら足を動かしていった。

中は想像した通り、相当広い。リビングだろうか。

だが、今一番探しているものは見当たらない。この暗い部屋には、もういないのか。

「古泉、そっちには何かあったか？」

「ええ、もう一つ扉があるようですね。開けてみます」

だが、その先はさらに暗い廊下が、この広い屋敷のどこかに伸びているだけだった。おそらく中庭に面した廊下なんだろうが、サッシには雨戸が閉められており、外の光は全く入ってこない。まあ、そのお陰で特大マシユマ口を心ゆくまで満喫できるのではあるが。

「さすがに、この奥には行っていないだろうな」

「そうだと思います。いったんここから出て、別の場所を――」

「きゃーーーーー！！！！」

朝比奈さんの特大の悲鳴が、古泉の言葉を完全に消し去った。

「何か……生温かいのがわたしの耳に！！ いやあ！ たすけてくださあい！！」

周囲が突然明るくなった。暗いのに慣れつつあったのか、一瞬眩しさに戸惑った。だが、すぐにハルヒが背後から強姦魔のごとく朝

比奈さんに抱きついて、耳にかじりついているのが見えた。

どうやら、長門が照明のスイッチを押したらしい。売り出し中とはいえ、まだ電気が通っているようだ。おかげで、朝比奈さんの特大マシユマロが俺の腕に当たって卑猥な形に大きく変形している様がよく見えて、ああ、俺の方が歓喜の悲鳴を上げそうな予感。

の女神に少し感謝してしまったくらいだ。

「あはははは！ みくるちゃん、ビビりすぎだって！ なにもそんなに驚かなくてもいいじゃない」

でなくとも誰だってビビるに決まってる。あの谷口ですら多分ビビると思う。

「あ、そうそう、みくるちゃん。キヨンにしがみついてるみたいだけど、止めといった方がいいわよ。こいつ変態豚だから」

「いや、ちよつと待てよ」

「いろんなものって……？」

部屋が明るくなったのと不審者の正体がハルヒだったのが解明されたせいで、朝比奈さんの恐怖も消えたのだろう、同時に特大マシユマロも俺の腕を離れていった。

「みくるちゃん、そこまで知らない方がいいわ。マジでヒクか

ら。それよりも」

そこまで言うと、ハルヒは様式化された植物の模様が織り込まれている高そうな絨毯の上を横切り、フカフカの皮のソファを踏み越えて、マッサージチェアにどっかりと腰を下ろした。

「さすが、鶴屋さんのお家ね。こないいいものがあるなんて」

まずは電源を入れてから指圧モードにし、肩と腰集中マッサージコースをさりげなく選択する。この指の動作をゲームに生かせれば、コンピ研ともいい勝負ができるのにな。高まるモーターが一度静まってから、チェアの中のアンマがゆっくりと動き出す。

「あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
」

子供が扇風機に向かっていっているような声。

「うん　ん　ん　ん　ん　ん、授業と部活で疲れた体には最高ね」

皆さんも分かっている通り、ハルヒは授業のほとんどを寝て過ごしていた上に、（不思議とやつはあてられることがないから余計に寝たい放題だった）部活もだいたい部員に押し付けている。そんなヤツに限って、である。

会社で大した仕事もしてないようなしょぼくれたオヤジに限って、仕事が終わると大した用もないのに居酒屋によく飲みに行く。そして、「酒でも飲まないとやってられねえ」とか言いながら同僚や家族の陰口を叩く。

大して保険料も払ったことのない年金暮らしのジジババに限って、政治家や最近の若者批判を滔々とはじめる。

授業中寝ているだけで、部活でも雑用を全て他人に押し付けるようなクソ女に限って……あとは言わなくても分かるよな？

それからハルヒは足にもマッサー機能が付いていることを超能力でも使ったのか一瞬にして悟り、すぐさま太もも揉みほぐしモードを選択、脚部アンマが動き出すと余程気持ち良かったのか、足の指をピクピク痙攣させていた。

「そうだ、みくるちゃん」

こいつがうれしそうに呼びかけるときは、大抵ロクな用事ではない。

「え？ なんですか？」

「そのリモコン取って」

朝比奈さんは言われたとおり、屋久杉の机の上に置いてあるテレビのリモコンを取るとマッサージチェアでくつろぐハルヒに渡した。

「はい、どうぞ」

「そうじゃないのよ」

「じゃあどうなんだよ。」

「せつかくこれだけの屋敷にいるんだから、それなりのシチュエーションを考えなきゃ駄目じゃない」

「シチュエーション……？ ええと……」

「たとえば、これだけの広い屋敷なんだからメイドさんの一人や二人くらいいてもおかしくないでしょ」

今度は朝比奈さんも納得した。

「はい、どうぞ。ご主人様。今日も一日、大変でしたね」

「ホント、一人馬鹿な部員を持つだけでどつと疲れるわね」

ハルヒが俺の言いたいことを見事に代弁してくれた。

「なんか、いい番組やってないかな」

ハルヒのエゲツナイ指さばきによって、映画のスクリーンかと思うほど大きな最新型液晶テレビの画面はナショナルジオグラフィックからイギリス国营放送へ変わり、地方放送局のくだらない御天気ニュースを一瞬ですつ飛ばし韓流ドラマっぽい映像を華麗にスルーして甲高い声で「何とお値段、セットで1万9800円！」と言うのが聞こえた頃にはハリー・ポッターが魔法のほうきでこちらに向かってきておりハリーがボールを掴もうとした瞬間に指揮棒を魔法の杖のように振りまわす映像とともにクラシックチャンネルに移り変わって指揮者が振り上げた腕を下ろしてオーケストラが最後の音を奏でる直前、山田君が楽太郎師匠の座布団を全部持っていくシー

ソに移り、そこでようやくハルヒの指は止まった。

「日本人なら、この時間に笑天は外せないわよね」

確かに土曜の夕方は笑天で決まりだろうが、まさかハルヒの口からその言葉が出るとは思わなかった。超意外だぜ。普通の番組に興味があるなんてな。

「菊三ラーメン、てやっぱりまずいのかしら？」

「そんなことよりハルヒ、もう帰るぞ」

「これ見終わってから」

お前は子供か。

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

この頃には、もはや完全に鶴屋さんを探すという目的は失われ、ハルヒの鶴屋敷乗っ取り計画がスタートしていた。

「決めたわ、今日からここがSOS団第一支部よ！」

おい古泉、お前からも何か言ってやってくれよ。一応副団長だろ
“私”が何か言ったところで焼け石に水です。解決策があるとすれ
ば、早く鶴屋さんを見つけることですね”

確かに古泉の言うとおりだった。そもそも、最初の目的はコンピ研との戦いの助っ人として鶴屋さんを誘おうとしたのだが、それが今や鶴屋さんを探すことに成り下がってしまった。しかもその『鶴屋さんを探す』ことすら、言いだしたハルヒ本人は完全に忘れて、三裕亭円楽師匠の大喜利で爆笑している。

肝心の円樂師匠の座布団は、全部持っていかれたが。逆にそれがさらなる笑いを生み出しているのかもしれない。

「第一支部、言つても、ここは鶴屋さんの家であつてだな、勝手に使つて不法侵入で訴えられるんだぞ。お前だつてこの前コンビニ研が部室に入つて来た時に『人権侵害だ』とかなんとか言つてたじゃないか」

「一応、インターホンは押したじゃない。それに、私たちは鶴屋さんプリントを持ってきたあげたの。鶴屋さんが取りに来るまで、

ちょっと待たせてもらってるだけだから」

ちよつと前まで名前も忘れていた癖に何言つてやがる。だいたい、お前のほうが余程政治家答弁たる。

そう言いたいところだが、ハルヒ相手では馬耳東風どころか火に油を注ぐ結果にしかない。余計意地になつて鶴屋屋敷に居座ろうとするだろう。

「朝比奈さん」

俺は小声でそう呼びかけた。

「はい？」

「鶴屋さんの携帯の番号か、メールアドレス知つてませんか？」

直接鶴屋さん本人に居場所をきいて、持つて行つた方がいいですよ」

「すいません……わたし、鶴屋さんの番号、知らないんです。アドレスも……」

よく考えれば、朝比奈さんも結局鶴屋さんの名前すら忘れていたのだし、当然と言えば当然か。

「古泉はどうだ？」

「すいません、僕も知りませんね」

でも超能力で搜索できるだろ？

“それだと、広大な範囲を遠隔視で搜索しなければなりません。おそらく、セブンスター1カートンは必要になるでしょう”

くそ、ニコチン大魔王め。

「じゃあ長門は？」

「知らない」

早くも捜査は暗礁に乗り上げた。

「おい、ハルヒ」

まさかの希望に賭けてみる。

「鶴屋さんの携帯の番号かアドレスか、知つてないか？」

「知つてるわけないじゃん。あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」
事件は早くも迷宮入りしてしまった。

その迷宮に、突如として予期せぬ客が現れた。

ノストラダムスでも予言不可能な、予期せぬ客だ。
閉じてあったドアがゆっくり開いて、そいつは入って来た。

「やけにくつろいでるじゃねえか」図太い、ドスの効いた声。

俺はとっさに声のする方へふり向いた。

そこには見たこともない柄の悪そうなオッサンが立っていた。黒服黒メガネ、ネクタイまで黒い。俺の初見の印象では『死神みたいなやつ』だった。年は40歳半ばくらいか。

「何よ、あんたたち。急に入ってきたりして」

「んだと。ここはガキの遊び場じゃねえんだよ」

もう一人、今度はいくらか若そうな男が入ってきた。30歳くらいか。こちら先程と同じく、黒服黒メガネである。不思議と、こっちの方はガラは悪そうだが死神とまでは見えなかった。排気ガスで膨らませた風船みたいな、町の安っぽいチンピラと言った感じが。「まあ、待て。そんな喧嘩腰になってもしょうがないだろう。多分、制服から察するに鶴屋の娘の友達かなんかだろう?」

「お察しの通りです」

古泉が答える。こういうときには、機関で大人との付き合いのある古泉に任せておく方がいい。いざとなったら超能力で何とかしてくれるだろうしな。

「今日は鶴屋さんが急に休んだようなので、みんなで家にプリントを届けに来たんですよ」

「お前ら外の張り紙が見えなかったのかよ」

ガラの悪い方の黒服が凄んできた。

「さつきから何なの、こいつ。喧嘩売ってるわけ? 友達のうちに遊びに来ただけじゃない」

「あんまり大人をなめない方がいいぞ。俺は女子供でも容赦しないからな」

「まあ待て、俺たちは喧嘩しに来たわけじゃない。いきなり俺らが入ってきたら、このお嬢ちゃんもそりゃびつくりするだろうさ」
そういうと、死神じみた方が小さい紙切れをふところから取りだし

た。

「まずは自己紹介からだな」

なぜかその紙切れを俺が受け取る。

「帝愛グループの……遠藤さんですか」

あまり、聞いたことのない会社名だった。

「早い話が金貸しだな。後は察しがつくとは思うが、貸した金の代わりにこの家を差し押さえたんだ。だから、所有権は帝愛側にある、ということだ」

だから、お前らは出て行けということだった。

「じゃあ、鶴屋さんが今どこにいるか教えてよ」

ハルヒも、ここはあまり深入りしないことに決めたようだ。内心では、せつかくの居心地のいい第一支部をもう少し堪能したかったのだろうけど、まあ、差し押さえられたんじゃない。仕方ないな。悔しいことに、理は向こうにある。

「知らねえな。鶴屋家からは、とれる物は全部とった。それでこっちとは完全に縁を切った。でも、律儀だと思うよ。会社の借金を、創業一族の最後の責任とか言って私財をなげうって返したんだからな。そうやって返せたのは借金全体のごく一部にすぎないにしてもだ」

なんだか、遠藤さんの説明を聞いていると、教師の説教を聞いているような気がした。

「残りの借金は会社の方から引つ張ってくるから、俺たちにすれば鶴屋家のその後の行方なんてどうでもいい。さあ、これで分かっただろ。分かったらさっさとここから出ていくんだ。もうひとつ分かっていると思うが――」

遠藤さんはもう一人のチンピラを指して、口元を少しゆがませながら言った。

「こいつは女子供でも容赦しない」

俺はハルヒが何か反論するものだと思っていたが、流石のハルヒも遠藤口ジツクの前では、一人の女子高生にすぎなかった。

気まずい沈黙が流れた。

「そんな事情があったのですか」

「ようやく古泉が口を開いた。

「今日のところはお騒がせしてすいませんでした。とりあえず、早く帰ることにします」

「それがいい」

俺たちは黙ってさっきの扉からぞろぞろはいでゆき、またしても長い廊下を玄関まで歩いて行った。

出ていくときにチラッとテレビの画面を見ると、菊三が司会にネタを先読みされて、座布団を全部持つていかれるのが見えた。

そしてハルヒも、極上の座布団を突然現れたガラが悪い山田君に奪われた、というわけである。

やゝね。

玄関の扉をくぐると、すでに外は暗くなっていた。と言ってもそれは日が完全に沈んだからではなく、あの晴れていたはずの空を今にも落ちてきそうなほど厚い黒雲が覆っていたからだった。

庭を横切って道路に出ると、『ヤ』のつく自営業者ご用達の黒いBMWが止めてあった。

「これ、あいつらの車かしら？」

「多分そうだろ。それにしても、やっぱりああいう人間はこういう車に乗ってるもんなんだな」

スーツも黒で車も黒とは。ガラの悪さを選挙カー並に宣伝して走り回っているようなもんだな。

「本当にムカツクやつらだったわね。どうせ安いチンピラのくせに」

ハルヒが車の中を覗き込みながら言った。スモークガラスでよくは見えないが、別に特筆すべきようなものはない。まあ、こんな見えるようなところにヤクやハジキを置いてくやつもないし、おそ

らく鶴屋屋敷の資産価値鑑定が目的でふらつと立ち寄っただけだろう。

「今頃は、お前の代わりにマツサージチェアに座ってるかもな」

「ようし、SOS団をナメたらどうなるのかを、教えてあげるわ」

「ちよつと待て、何をする気――」

言いかけた時には、ハルヒは右足を大きく振りかぶって、車のドアを思いっきり蹴った。

車体が見事にへこみ、同時にそこに映りこんでいた、驚きで呆然としている俺や古泉の顔も奇妙に変形した。俺の言ったことがハルヒを余計な怒りに駆り立てたのかと後悔したのも束の間。

「もう一発――！」

今度は前へ回り込んで足を大きく頭上に振り上げながら俺たちに純白のパンツを見せつつ、フロント部分にかかと落としを喰らわせた。高級ベントは、一瞬で事故車のようになった。何にせよ、ハルヒに狙われた時点で事故だと思って諦めるしかあるまい。

「さあ、みんな全力で逃げるわよ！ ほら、みくるちゃんも走って――！」

むろん、今までのどのピンポンダッシュより全力で走った。

遠藤さんには気の毒だが、ハルヒに狙われた時点で事故に遭ったと思って諦めていただくしかあるまい。

そう考えると、俺の人生はつくづく事故だらけだけだな。

14 時限目（前書き）

ギリギリ間に合った、てことにしとけ。

14時限目

電車に乗って家に帰ろうという頃、日は完全に沈んで辺りは真っ暗になっていた。帰宅する会社員にまぎれながら、SOS団員が一人、また一人と駅を降りていく。

最終的に、俺と長門の二人だけになった。俺の降りる駅が近づいてくる。

「今日、来てくれる？」

突然長門にこう切り出された時は、正直迷った。これ以上遅く家に帰ると、さすがにまずい。最近ずっとハルヒに付き合わされて遅くなっていた上に、今日も長門の家に寄って、ということになれば、間違いなく遅くなりすぎる。

「今日はいろんなちよつと色々あつたし、長門も疲れただろ。明日はちょうど休みだし、延期しないか？」

「誕生日は、その人が生まれたことを祝う日。今日でないと、意味がない」

「まあ、それはそうなんだが……」

別に一日くらいずれてもいい——どうせ家に帰っても何もないのだから。疲れた中でやるよりは仕切りなおして明日にした方がいいのではないか。

最後のダッシュが効いたのか、全身に疲れが溜まっていた。こうやって電車の中で立っているだけでも億劫だ。

「やっぱり、明日にしよう」

アナウンスと共に電車が停止し、ドアが開いた。俺は電車を降りようとしたが、すぐに長門は特大マシユマロが当たっていた部分の袖を掴んで、引きとめた。

「今日でないと、せっかく準備したのが無駄になってしまう」

上目遣いでそんな風に懇願する長門を見て、それでも引き止められぬ者などこの世にいるのだろうか。項羽でも引きとめられたかも

しない。項羽の好みは知らないけども。

「分かったよ。せっかく長門がそこまで言うんだったら、好意に甘えるとするか。でも、あまり遅くなる前に帰らないといけないから、そんなに長居はできないぞ」

「それでもいい」

ドアが閉まります、ご注意ください。プシュー。

「一体何を準備してくれているのか、楽しみだな」

「秘密」

多分、ケーキかなんかだろう。誕生日を祝うのはケーキと昔から相場が決まっている。長門が必死になって地球人の事を調べて用意してくれたんだ、精いっぱい喜んで、楽しもう——そんな甘い考えを、このときになっても捨てきれないでいた。

すでに電車のドアが閉まった時点で、仏の蜘蛛の糸は切れていたというのに。

家に着くと、雪女が鍋焼きうどんを食しているくらい珍しく、長門が少しはしゃぎながら（といっても表情にほとんど変化はなく、少なくとも俺にはそう見えたというだけだが）地球人男性9割方の予想通り、ケーキの最後の盛り合わせを一生懸命完成させようとしていた。

ケーキの端をスプーンで少しだけすくって味見する。

「ばっちり」

両手で大事そうにケーキの乗った皿を抱えながら運び、目の前の机の上に置いた。

長門作誕生日ケーキの俺の第一印象は——これは何だろう？ だった。

ケーキのクリームには——おそらく——かたつむりのグチャグチャにかき混ぜられた死骸が塗りこまれていた。ミキサーかなんかでグチャグチャにしたのだらうと思う。ケーキの端から飛び出した目

玉がまだ生きているのか、それともお好み焼きにかかったかつおぶしのように何らかの力によってか、ピクピクけいれんしながらこちらを見ている（ように見えた）。

一瞬これは食べ物ではなく、宇宙人的な何らかのインテリアのよなものかと思ったが（玄関に飾っておくと恋愛運アップ！ みたいな）、さつき長門が味見をして「ばつちり」と言っていたのだからやはり食べ物のつもりなのだろう。もし俺に古泉のような予知能力が備わっていて、このケーキ（のようなかたつむりのお墓）を事前に見ることができたなら、さっきのところで長門の懇願を振り切つて電車を降りていただろう。それからまっすぐ家に帰つて、いつも通り冷めた食事が食卓に並んでいる光景を見て誕生日なのに何もないなんて、冷たい家族だなあ、とか心の中で不平を漏らしながら休日はまたもやハルヒの不思議探索に付き合わされていたことだろう。

だが、俺は電車を降りなかった。

その結果、冬の鼻づまりをもたらす、あのしつこい鼻汁めいた色をしたかたつむりの死骸が一面に塗りこまれたケーキ（といえるのなら）が俺の目の前にある。

「あ、忘れていた」

いったんは座った長門がいそいそと立ち上がり、台所のほうへ向かった。

長門はまたもやミキサーを取り出した。ミキサーはかたつむりの中身をかき混ぜるときにも使ったのだろう、中に緑色の体液がこびりついたままになっているのが俺からでもちらつとかいま見えた。見たくもなかったが、映像が目に飛び込んでくるのだから仕方あるまい。

何を忘れていたのだらうと思っていたら、長門はミキサーの中にかたつむりの殻を投入し始めた。カラカラと乾いた音を立ててミキサーをあつという間に埋め尽くす。

やがてミキサーのスイッチを入れる音と同時に殻は細かく砕かれ

てゆく。

ひと通り砕き終わったら、それを皿の上に出して長門の3分クッキングは終了。

あとはケーキの側面に塗りつけるだけ。

「これでカルシウムもばっちり」

皆さんもぜひご家庭でお試しあれ。

「こういうのは鮮度が大事だから……だから絶対、今日来て欲しかった。早速だけど、ちょっと食べてみて」

いそいそと包丁で化物じみたケーキを切り分けはじめる。

「キヨン君の好みに合わせて作るのはすごく大変だったけど……でも私なりに一生懸命頑張ったから」

確かに、かたつむりは好きだと言ったが、それは食材としての好き嫌いではない。いまさら言っても、もう遅いが。

「とにかく、食べて」

6分の1に切り分けられたケーキが、小皿に乗せて差し出された。俺は、ひよっとしたら中のスポンジの間のクリームにはかたつむりが入ってないのではないかという、はかない希望を抱いていた。そうならば、適当にその部分だけ食べてごまかそうと思っていた。

だがその希望も一瞬で打ち砕かれた。

で〜んでんむ〜しむし、か〜たつむり、お〜前の頭はどこにある？スポンジの間にあった。ついでに内臓もあった。

久々に外の空気に触れたせいだろうか、目玉が背伸びするように、うによーと伸びてきた。

「あ、そうだ。本で読んだことがある。親しい男女はこういうときにするのか」

長門は俺のそばまで寄ってくると、長門からの物体Xの切れはしをフォークですくった。

「あーん」

さっきの伸びた目玉が、フォークの上からじっと俺を見つめている。

その距離はだんだんと縮まってゆく。

ついに、俺の口の中へ、ほとんど無理やり物体Xは放り込まれた。

「どう、おいしい？」

ゲツツ・アンド・ターン、そしてリバーズ。

胃の中身を——昼間食べた消化しかけのチキンカツも含めて——
全て小皿の上に吐いたところで、俺の記憶は完全に途切れている。

15時限目（前書き）

一瞬、前の死んだところで本当に死んだことにして終わらせようかと真剣に悩んだことがある（マジで）

15時限目

「仕方ないわね。じゃあ、今日は4人で鶴屋さんの家を探しに行くわよ」

市内だけでもけっこうな数の家があるのに、それを全部調べる気なのか。そもそも、鶴屋さんが市内にいるかどうか分からないのに——俺はハルヒの言うこと聞きながら、そんな風に思った。いつもなら、このクソ暑い季節に何クソめんどくさいことほざいてんだこのクソアマ、と思うところだったが、今回は空中から眺めているただの傍観者なのでその点、俺には関係のない話だった。

「私とみるちゃんが生市内の北側を探すから、有希と古泉君は南側を探して。とりあえず暑さがきつくなる前に、午前中に終わらせるからね。午後からはクーラーの効いたゲーセンで練習でもしましよ」

ほほう。ハルヒにしてはなかなか計画的だ。『計画的な——ハルヒ』というのは『楽しい——古典』と同じくらい破たんした用法で、俺はこの光景が夢でなければいいのに、と思っていた。しかし、上空から駅前に集合するSOS団一行を眺めていることから、多分これは夢なんだろうな。夢の中では破たんも良くある話だ。

「それじゃあ、各自探索開始！」

二組、各自思い思いの方向へと向かっていく。

俺はどっちを観察するか迷ったが、結局長門・古泉ペアの方をさらに観察を続けることにした。

歩いてしばらくすると、古泉の方から喋り始めた。

「それにしても、えらいことになりましたね」

「キョン君、死んじやつたの？」

ああ、そうか。俺は死んでしまったのか。まあ、あのケーキを食ったのだから死んでもしかたがない。やり残したことが多い人生ではあったが、それが俺の運命として受け入れるしかない。それにし

ても、長門の「死んじやつたの？」の言い方が、飼っている犬でも死んでしまったような言い方で——不思議と怒りはなく、宇宙人にとっては地球人なんてそんなもんか、と思うことができた。

「いえ、まだ生きていますよ。かろうじてですが」

「でも、キヨン君はもう動かなくなつた。死ぬと動かなくなる、とキヨン君が言つてた」

そういえば、そんなことを言つたような気がする。まさか、今度は俺が身をもつて死を教えることになるうとは。

「今は意識がないだけです。ちゃんと生きてることは生きてますよ」

「じゃあ、また動くようになるの？」

「それは本人次第でしょうね。体には、もうなんのダメージもないはずです。あとは

精神のショックからいかに早く回復するか、そこでしょうね」

しかし、あのケーキは今思い出しても吐き気がこみ上げてくるほど強烈だった。今の俺は死んで浮遊霊になっているか、夢の世界にいるかのどちらかなので、もう関係のないことだが。

「もし、回復しなかつたら——」

長門が疑問文とも、独り言とも取れるような感じでつぶやいた。

「一応、周囲には軽い食中毒で寝込んでいる、という風に言っておりますが……それにも限界があるでしょうね。とにかく、今は彼を信じましょう。大丈夫ですよ、あの涼宮さんが彼の死を願っているわけでもないですし、必ず回復しますよ」

信じる者は救われる。

信じる、というのは便利な言葉だと思う。と同時に、安易な言葉でもあると思う。便利と安易は表裏一体だが。

それを承知であえて言うなら、できれば今までの光景が全部夢だと信じたい。

朝比奈さんと長門の陰湿な戦いや、ハルヒに暴行を受けたこと、鶴屋財閥が解散して鶴屋さんが行方不明になっていることや長門の

ゲテモノ料理を食べたこと、妹が反抗的で家族が冷たいことなど、あと5分くらいして目が覚めたら実は全部夢であって、俺はいつも通り「もつと寝かせてくれよ」とかいう慣用句で、起こしに来てくれた健気な妹に懇願しながら何とか目覚めて学校に行くのだろう。きつと、学校に行ったら真っ先に鶴屋さんが来てるかどうか確認するだろう。そこでいつも通り「おはようっ！ キョン君！ 今日は遅刻せずに済んだだねっ！」「鶴屋さんこそ、珍しく早いですね」なんて会話を交わしながら元気な姿の鶴屋さんを見て俺は今までのことが夢であったと悟り、果てしない安堵を得るのだろう。

そういう脚本を、俺は望んでいる。

マジで頼みますよ、神さま。信じてますんで。

「ところで」

古泉が話題を変えた。

「どうして彼にあんな……宇宙人的なモノを食べさせたんですか？ 僕が来るのが少し遅れていれば、あのまま死んでいたとしても不思議ではありません」

古泉が来た時、俺がどのような状況だったかは想像の範囲ではないが、おそらく小皿の上に俺の吐いた“ブツ”が鎮座していたはずだ。この暑さで汗ひとつかかない古泉でも、あれを見れば冷や汗の一つもかいたに違いない。どうだ、まいったか。

「そそのかされた」

雑踏の中、長門がぼそつと言った。

「誰かに、余計な情報を吹き込まれたんですね。誰にそそのかされたんですか？」

長門は何も答えようとしなかった。

「答えにくいかもしれませんが、教えてくれませんか。少なくとも、機関は長門さんの敵ではありません。まさか、朝比奈さんに？」

「違う」

「では涼宮さんですか？ 涼宮さんの言うことなら、信じたとしてもおかしくないですね」

「それも違う」

長門の言葉は相変わらず短かったが、そこにはどこことなく、悔しさや――もしかしたら虚無感すら含まれているように感じられた。

「一体、誰なんですか？ 珍しいですね、長門さんがここまでためらうなんて」

ホント、ツチノコくらい珍しいと言っていいだろう。

「言っても、信じてくれないかもしれないから」

大丈夫、長門の場合、愛の言葉以外は全て信じるから。

「大丈夫ですよ、僕たちは長門さんが嘘をつくなんて思っていないよ」

あの爽やかな笑顔で長門を見つめる。

そうやってならんで歩いていると、そこら辺の通行人の皆さんにはお似合いのカップルが仲良く歩いているか、ホストが獲物にもつと貢ぐように諭しているようにしか見えないだろう。

それでも長門がしゃべりだすまでしばらく沈黙があつたが、ついに意を決したのか重い口を開いた。

「私にあのケーキの作り方を教えてくれたのは」

くれたのは？！

「キヨン君の妹」

「確かに信じがたい……でも長門さんが言うからには、本当なんでしょうね」

「キヨン君はいつもかたつむりを生で殻ごと食べる、それくらい大好物だと教えてくれた」

「彼の妹は、たしか小学校5年生でしたね。おそらく、軽い悪戯か冗談のつもりで言ったのでしょう」

「あと、『うんち』も同じくらい大好物だと言ってた。できたてに醤油をかけて食べるのが特に好きだと」

「小学生のスーパースターですからね、そういう類は。今回のところは、かたつむりで済んでよかったというところでしょうか。『うんち』だったら確実に死んでいたでしょう」

「その点は、私の見解とも一致する」

「しかし長門さんが妹さんの嘘を見抜けなかった、と言うのは少々つかつでしたね」

「音声分析から判断するに、キョン君の妹が嘘を言っている形跡は一切認められなかった。全てのデータは妹の話を真実と裏付けていた」

「あの年齢の子供には、全く平気で嘘をつくことがあるんです。まあ、今回はちよつとした不幸が重なった、ということでしょうか。ところで、残ったケーキはあの後どうしたんですか？」

「私が食べた」

「たしか、情報生命体にとってのカタツムリは、地球人にとってのキャビアのようなものらしいですね。機関ではそういうふうに教わりました」

「厳密には違うが、おおよそはその通り」

「おいしかったですか？」

「ユニーク」

俺はずいぶん前から突っ込む気力すら無くしていたが、こちら辺で古泉・長門ペアの観察も飽きてきたので、その場を離れることにした。これ以上二人の話を聞いていると、本当に気持ち悪くなってきた。あとで妹の水筒の中身を醤油に替えといてやろう。

ゆつくりと空中に浮上してから、くるりと方向を変えた。

朝比奈さんとハルヒが向かったのは多分あっちの方だろう。

「ほんと、いい気味ね」

いきなりハルヒにそう言われた。といっても、それは空中にいる俺に言っているわけではなく、朝比奈さんに語りかけているのであるが。

「床に落ちたチキンカツ拾い食いして食中毒なんてさ。とってもバカキョンらしいわね。みくるちゃんもそう思うでしょ？」

「床に落ちたとまでは、言っていなかったような気が……」

「そうだけど、キヨンならやりそうじゃない。だいたい、あいつが普通の弁当食ったくらいで食中毒になると思う？」

ハルヒに長門特製のケーキをごちそうしてあげたかったが、ここはグツと我慢した。どの道、今の状態でできることなど何もありません。

「この季節なら、ありそうだと思いますけど」

「分かってないわね、みくるちゃんは。キヨンと同じクラスにいれば、アイツがどれだけバカがよくわかるから。だいたい、授業も半分くらい寝てるし」

ちなみに、ハルヒは7、8割の睡眠率を誇る。まあ、半分寝ている俺の統計だからあまり当てにはならないが。

「ところでみくるちゃん、鶴屋さんの居場所について、何か手掛かりはない？」

「うーん……」

「ほら、思い出して。最後に会ったあの日、鶴屋さんがなんて言っていたかを。きっとそれが重要な情報になっているはずだわ」

「ええと……」

ハルヒが朝比奈さんの肩を掴んで向き直らせる。

「あなたはだんだん鶴屋さんの事を思い出したくなる……」

ハルヒの指が、あのSOS団のエンブレムのような奇妙な輪を描く動きを始めた。トンボの目を回すときの、単純な円の動きなどではない。正常だったときの長門曰くペタバイトクラスの容量がある紋様の動きだ。間違いない。

「だんだん鶴屋さんのことを思い出してくる……」

指の動きを眺めている朝比奈さんの目の色が、さっきとあきらかに変わっていった。ここではない異空間——例えば閉鎖空間を眺めているような、それが惚れ薬を飲んで始めて目覚めたばかりのような目の色へと——確実に変化していった。

「思い出してくるっ！」

ハルヒのひとさし指が朝比奈さんの額の、ちょうどテンシンハンの三番目の目があるであろう場所を突いて止まった。

「どう?」

朝比奈さんの目の色が、ふつ、と元に戻った。

「何か思い出せた?」

「思い出しました。鶴屋さんと最後に会った時、なんて言っていたのかを」

いつも間にか、俺もハルヒと一緒に思わず身を乗り出していた。

「それで、なんて言っていたの?」

「『今から妹ちゃんを送って行くから、また何かあったときはいつでも呼んでねっ! すぐに助っ人に行くからさっ!』と言っていました」

それなら俺も覚えている。なぜか俺の妹は鶴屋さんにものすごくなついて、野球大会の後、俺たちより一足早く一緒に帰って行ったのだ。

それより、朝比奈さんの記憶の中で鶴屋さんの最後の発言が野球大会のときというのが驚きである。確か、二人は同じクラスのはずだ。同じクラスでありながら名前すら覚えてないとは、どういう状況なのだろうか。

もしかして互いに嫌っていた?

それなら、なおさら名前くらい覚えていないとおかしい。

ハルヒの胡散臭い催眠術が効いたと思ったのだが――やはり名前すら忘れていた人間が重要な情報など知っているわけもなかったか。

「妹ちゃんを送って行くから、てところが怪しいわね……これは何かのダイイングメッセージの可能性があるわ」

どうやら、一緒に野球をしたことすら忘れていると思われるバカが一人いた。大真面目にさっきの言葉の意味を考えている。

勝手に殺してるしな。

「とにかく、まずはキヨンの妹に会いに行くわよ」

「え? でも、キヨン君の家は市内の南側にあったんじゃ……」

「それがどうしたって言うの。せつかくの有力情報を掴んだんだから、全員でそこを搜索するに決まってるじゃない！」

やっぱり、ハルヒに計画性はなかった。

方向を変えて走り出すハルヒのはるか上空を越えて、俺は一足お先に自分の家に帰ることにした。なぜかそこへ戻れば、この夢から覚めるような気がしたからだ。

家に戻る途中で、またもやキワモノ超能力使い&ゲテモノ宇宙人コンビに遭遇した。

「とりあえず、今からお見舞いにでも行きましょうか。もしかしたら、すでに意識を取り戻しているかもしれないよ」

そう言つて人ゴミの中をズカズカ進んでいく古泉だったが、長門に袖を掴まれてその足も止まった。

「どうしたんですか、急に」

だが古泉の疑問も振り返るまでだった。長門の指さす先には、色とりどりの花があつた。

「本で読んだことがある」

「ああ、そういうことですか。確かに、最近の彼はちよつとばかり不幸続きのようだし、いい考えだと思えます」

「でも、何を買ったらいいのか分からない」

「大丈夫ですよ。もし分からなければ店員さんにきけばいいだけです」

長門がコクリと頷いた。

店内へ入って行く二人。

多分、店員さんは二人を恋人か、もしかしたら仲のいい兄妹だと思つているのかもしれない。もしくはホストとそのセフレだとか思つかもしれないが、キワモノとゲテモノだとは予想すらできないだろう。

とりあえず、俺は一刻も早くこの悪夢から目覺めたいので、中学

生時代の光速帰宅部並のスピードで家に帰る計画を実行に移すことにしよう。俺はそう決心すると体の方向を変えて、夢の中特有のつそりとした動きで家の方へと泳ぎはじめた。

「これにする」

「長門さん……さすがに菊はまずいですよ」

空中をゆっくり飛び去っていく俺の背後から、そんな声が聞こえたような気がする。

重油の中を泳ぐようにしている内に、ようやくうるわしの我が家が見えてきた。幽体だからお構いなしに壁でも通り抜けてやるか。一回こういうのやってみたかったんだよね。

それではお邪魔しますつと。

中に入ってみたら、妹の部屋だった。どうやら、今日はお友達が来ているみたいだ。

「ふ〜ん。お兄ちゃん、今は食中毒で寝込んでるんだ。じゃあ、静かにしてなきゃダメなんだね」

「別に大丈夫だよ。普段寝てるときとか、踏んでも蹴っても絶対起きないもん」

それで起きた時にときどき腰が異常に痛いことがあったのか。てつきり勉強のしすぎかと思っていたぜ。ちなみに、その頃は受験勉強の追い込みで本当にそれなりに勉強していた。そう疑うなよ、全部本当のことだ。今の俺からは想像もつかんが、俺にもそういう時代があった、てことさ。

「それもしかして、死んでるんじゃないの？」

「あのまま死んじゃえばいいのにね」

そこで二人とも、無邪気な笑い声をあげた。

さらに俺への罵詈雑言が続くと思われた頃、家のインターホンが鳴った。

「お母さん、帰って来たの？」

「銀行に用事があつて帰るの遅くなる、て言つてたから、多分セ
ールスカ新聞の集金だよ」

「出るの？」

「うん。もし新聞屋さんだったらお金払うように言われてるし」
妹がちよつとめんどくさそうに部屋を出て行つた。コイツが留守
番してるなんて珍しいな。

だいたい銀行に用事、ていうのは一体何なんだ？ まさか借金とか
そういう危ないモンじゃないだろうな。

まあ、いいや。考えてもしようがない。俺もそろそろ自分の部屋
へ戻るとするか。

一刻も早く、この悪夢から目覚めることができますように。
そう願ひながら壁をすり抜けると、俺の安らかな寝顔がすぐそこ
にあつた。

「どうやら、意識を取り戻したようです」

「顔が近い」

「これは失礼」

「で、どんな花を買つてきてくれたんだ？」

「どうしてそれを知っているんですか？」

古泉の例の微笑が一瞬消えたが、俺が「長門が持っているのがさ
つきチラツと見えた」と言うと、納得したのかまたいつもの微笑が
戻つた。

「これ、気に入つてくれるか分からないけど……」

長門が不安そうな顔をして、白い紙に包まれた花束を渡した。

なんか名前はよく分かんが、（菊以外の）かわいらしい花が中
心のバラを取り囲んでいた。

「とてもいいと思うぞ。俺なんかにもったいないくらいだ」

「本当に、早く良くなつて欲しい」

「大丈夫。もうかなり回復してるみたいだ」

そう言いながら、俺はかたつむりケーキのことを思い出さないようにすること、口から「お前のせいだよ」という言葉を抑えるのに必死だった。今のところ世界は順調に回っているようであり、俺があえてそれを乱すようなことをしなくなかった。

多分、俺は本当に食中毒が何かでベッドに寝込んでいて、今までのことは神のちよつとしたいたずらが見せた幻覚にすぎないんだ。きっと明日くらいに体調がよくなって学校に行けば、また普通の生活にもどれるに違いない。

食中毒というのも、どうせまたハルヒの退屈しのぎかなんかで、なぞなぞみたいなの、かわいらしい些細な事件が起こったにすぎないんだろう。

「こつちこそ、わざわざ来てくれて、ありがとうな。この花はさっそくどっかに飾っとくよ」

長門の頬が、色づき始める桜みたいにつつすらと染まった――ように見えたが、ヒューマノイド・インターフェイスに感情なんてないだろうし、きっと俺の目の錯覚なんだろう。

「そうしてくれると、とても……」

「ん？ どうしたんだ、長門？」

その続きをきこうとしたが、その時またしてもインターホンが鳴り、「あ！ ハルヒお姉ちゃんだ！ わーい！」という妹の声がここまで響いてきた。

「おや、涼宮さんも来たようですね」

「珍しいこともあるもんだな」

「彼女も、彼女なりに気を使っているんですよ」

ドタドタという足音が近づいてきて、一瞬止んだかと思うと、いきなりドアが開いた。

「じゃあん、ジャジャーン！！ 団長直々にお見舞いに来てあげたから、感謝しなさい！」

「おじゃまします」

朝比奈さんも来てくれた。

「わざわざ床に落ちたチキンカツ拾い食いしたアンタのために、ケーキ買ってきてあげたんだからね。後で妹ちゃんと仲良く一緒に食べなさいよ！」

「ああ。今度は床に落ちても食べないように気をつけるよ。みんな、ありがとうな」

「……………」

「どうしたんだ、ハルヒ？」

「なんか、やけに素直になったわね。いつもなら『ハルヒがお見舞いに来るなんて、これは大地震か天変地異の前触れか？』なんていいそうなのに。あるいは、『俺はそんなに食い意地張ってない！』とか！ だいたい、床に落ちたチキンカツなんて食ってない！』とか」

「なんだ、そう言っただけじゃなかったのか」

「……………」

「どうしたんだ？」

「……ホント、バカなんだから」

ハルヒもうつすらと頬を染めながら、ぷい、と横を向いた。

「どうやら、俺の季節はずれな桜前線は急遽北上中らしい。来たれ、わが世の春よ。」

「まあ、かなり回復しているようで何よりです。こういうのは命に関わることはありませんからね。もう、普通に食事とかもできるんですか？」

「グ、ぎゅるぎゅる、ギュー」

俺が答えるかわりに、胃袋が先に返事をした。

長門が少し驚いたような表情を見せ、朝比奈さんがクスクスと笑い、古泉が声をあげて笑い、ハルヒが爆笑した。

俺の顔も、ひよつとしたら桜色に染まっていたかもしれない。

「そうそう、キョン」

ハルヒが爆笑をなんとか抑えて言った。

「せっかくみんなが集まったんだから、久しぶりに妹ちゃんと遊びに行こうと思うんだけど、借りて行っただけいい？」

「そうだな、あいつがいいって言うなら別に構わんぞ。だいぶ回復してきたから、留守番くらいはできそうだし」

「じゃあ、借りてくわね」

「元気そうですね、そろそろ私たちは退散しましょうか。今はまだ静かに休んでいるのが一番です」

「あした、また会えるといいですね」

朝比奈さんがにつこりと笑って言った。部室で夕陽を浴びた時の笑顔とはまったく違う、

屈託のない笑顔だった。古泉と朝比奈さんが部屋から出て行く。

「早く、元気になって」

長門がそう言っ、名残惜しそうに部屋から出て行った。

「じゃ、わたしもそろそろ行くからね」

「そうそう、ハルヒ」

「ん、何なの？」

「今日は、わざわざ見舞いに来てくれてありがとうな」

部屋から出て行くとするハルヒの足が一瞬止まり、奇妙な静寂が数秒間続いた。

「今日はあくまで、妹ちゃんの方に用事があったんだからね！！
かんちがいしないでよ、バカ！」

背中をこっちに向けたまま、乱暴にドアを閉めて出て行ってしまった。

だが、俺にはその顔がバラみたいに真っ赤になっているのが、透視能力でばっちり見えていた。

そういえば、長門のくれたバラ、いい匂いがしてるな。

15時限目（後書き）

長いわ。

16時限目（前書き）

みなさん、お気づきだろうか？
一番キャラクター崩壊しているのはキヨ
ンだということを。

16時限目

どうやら、俺は花束を持ったまま、またもや寝てしまったらしい。昨日の晩くらいからぶっ通しで爆睡し続けていたから、今までにないくらい気分スッキリ真夏の太陽、て感じだった

ベッドから起き上がって、立ち上がってみた。なんだか久々に立ち上がったので、さっきの夢の続きのような奇妙な浮遊感があった。しかし足自体は好調で、現実をしっかりと感じるということができた。とりあえずトイレに直行して今までに溜まりたまったものを放出しに行った。それから台所へ行って冷蔵庫の中からお茶を取りだして一気に飲み干した。冷蔵庫の中に、ハルヒが言っていたケーキの箱らしきものが置いてあった。後で食べようと思ったが、長門特製のかたつむりケーキを食べた（というより無理やり口に放り込まれた）、非常にリアルな夢がまだ記憶に残っているため、今はまだそこまで食べたいとは思わなかった。

お茶が胃袋に染み込んでいく。このとき飲んだ烏龍茶に匹敵するうまいお茶など、朝比奈さんが俺のために入れてくれたお茶くらいだろう。

飲み終わったグラスを台所の流しに置いて、2階の自室へと戻った。

静かである。

住人のいない家というのがこんなにも静かだと、このとき改めて知った。

もう一回寝ようとも思ったが、これだけ目がさえていればもう眠れそうにもない。

俺は、あることを確認しようとベッドから腰を浮かせかけた。だが、それには限らない恐怖が伴う。まあまあ、このまま寝てしまえばいいじゃないか。明日は学校だし、どうせ今から何もすることなんてないんだ——普段の疲れを一気に癒そうじゃないか、キョン

君。いったんそう考えてベッドにもぐりこんでも、すぐに布団をはねのけて起き上がってしまう——おいおい、キヨン君、どうしたんだい、そんなに落ち着きを失くして。君らしくもない。

胸の動悸が、異様に早くなっていた。周りの静けさが、急に気味の悪いものに感じられてきた。

まあまあ。こういうときこそ、むしろ落ち着いて考えていくべきだ。そうすることで今までに見えなかったものが見えてくると同時に、落ち着きも取り戻していく。

まず、俺は今までに起こったことは全て夢だと考えている。

その根拠は、困ったことに、特にない。ただ、なんとなく俺の肌ではいつもの日常に戻ったように感じているだけだ。このクソ暑いジメジメした季節、拾い食いなどしなくても食中毒になる可能性は十分に考えられる。

確かパスカルも、この世はすべて夢であると唯心論で言っているではないか。別に今までのことが夢だと考えても、どこもおかしくない。

あるいは、あれは全て本当のことで、俺は本当に長門の宇宙製ケーキを食べたのかもしれない。そして本当に死んでしまったのかもしれない。

死んだあとに、ハルヒによって世界が再構築されたのではないかな？　なんか古泉も『世界は5分前に作られた』とか、そんなこと言ってたような気がする。確か、ハルヒは俺の死を望んでいない、ともどつかで言ってたな。だったら、『世界再構築説』も十分ありえる話だ。

それに、『夢である』という証明もできないが、『夢でない』という証明もできないわけで——考えてもしようがない、さっさと寝るか。宇宙戦争で人類が滅ぶとか荒唐無稽にも程があるぞ、バカバカしい——と思ってまたもや布団をかぶるも——やっぱり寝れるわけがなかった。

なぜならベッドのすぐ横に夢か現実かを決める証拠が、決定的証

拠とまでは言えなくともあるからだ。

そうだ、分かっているじゃないか。カバンの中からあれを取りだして中身を確認めればすぐに分かる話じゃないか。ほら、早く見るんだ。お前なら簡単にできることだろ。今の睡眠たっぷり絶好調のキヨン君なら。

それくらい、考えなくても分かっている。

カバンの中から財布を取り出して確認すればいいことくらい、その作業がものの20秒くらいしかからないことも含めて知っている。

もし中身が18円だけなら、今までのことは全部真正銘、神に誓って本当ということだ。もちろん、ハルヒにすれば俺の財布の中身なんてどうでもいいことの最たるものだろうし、再構築を忘れるというのも無理のない話ではある。

だから100%決定的と言う訳ではないのだが――

俺はいつのまにかベッドから降りて立ちあがっていた。

椅子に座って、カバンを引き寄せる。中には長年愛用してきたくたびれた財布がある。

財布を取り出して机の中央に置いた。

それでも、ここまできてすら俺は財布を開けるかどうか迷っていた。まるで財布ではなく銀行の強化ジェラルミン鉄鋼製金庫でも目の前にしたかのように、手も足も出ないでいた。シュレディングアの猫のような、掴みどころのない化け猫。

俺は生きているのか、死んでいるのか。

財布を目の前にして、しばし迷っていたが（だが、実際にはかなりの時間迷っていたと思う）俺は全てに結論を出すために、財布のジッパーをゆっくりと引いた。

なるべく中身は見ないようにして、それから一気に財布の中身を机にブチ撒けた。

コインが4枚、チャリチャリと虚しい音を響かせながら回転した。最後の回転が止まった。

やあ、お久しぶりです。

5円玉の穴越しにそんな声が聞こえてきそうだった。

いや、まだだ。まだあの夢が現実だと決まったわけではない。俺の財布もご多分にもれず小銭と札と、入れる場所が分かれている。

千円札が一枚でもあればいい。その千円は、もしかしたら再構築された世界なので織田信長（ハルヒの知っている唯一の歴史上の人物だ）でも印刷されているかもしれないが、何でもいい。何か出てきてくれれば、シュレディングーの猫は生きて箱から出られる。

何か出れば。

俺はだんだんと視界がぼやけて霞んでいく中、必死にそれだけを祈りながらジッパを開いた。

紙片が一枚出てきた。

真っ白い紙には『帝愛グループ 地区長 遠藤――

下の名前は、俺の視界がグニャグニャに溶け去って見ることはできなかった。そこまで読めば、俺の目頭から熱い液体がほとばしるには充分だった。

宇宙戦争勃発、どーん。

“突然、すいません、実はあなたに頼みが…… おやおや、泣いているんですか？　そこまで喜んでくれるなら、僕たちもお見舞いに行った甲斐があります”

別にしゃくりあげるわけでもなく、声を上げるわけでもなく、この現実を否定し流し去りたいかのようにして涙だけが溢れ出続けた。
“いやあ、それにしても、あなたのとっさの機転によって、先程は事なきを得ました”

頭の中に、勝手に入り込んでくる。あの悪夢の続きを知らせる決定的証拠が。俺の精神は、全く『事なきを得て』ない。

“どうやら、あまり状況をよく分かってないようなので、説明しますね”

頼んでもないのに古泉先生の超常現象の授業が始まった。もう寝てしまいたいと思ったが、なんせ今のキョン君は睡眠ばっちりの絶

好調であつて、眠気は財布の中身より少ない。そして俺の涙は、このときになつてようやく止まりかけていた。

“あなたの部屋に涼宮さんと朝比奈さんが入ってきたとき、実はあの部屋は通常の空間の定義を大きく逸脱した、いわば『異常空間』に変質しました。『異常空間』というのは、涼宮さんのような神の介入を必要条件として発生する空間のことで、これは涼宮さん自信が単独で発生させる閉鎖空間とは全く違う性質を持っています”

ここでいったん古泉の説明は途切れたが、これ以上聞きたくはなかった。どうせ俺に「先生、異常空間、て何ですか？ 教えてよ、かつこいい古泉先生！」とでも言わせたかつたんだろうが、ハルヒももう高校生なんだ。閉鎖空間でも異常空間でも普通空間でも絶対空間でも暗黒空間でも四次元空間でも、なんでも好きな空間を作らせてあげればいいじゃないか。俺たちが他人の空間にとやかく文句をつけるのは野暮つてもんだぜ。憲法にも個人の自由は基本的人権として保障されてるんだぞ。

“こういうことは一般人のあなたには分かりにくいことかもしれませんが、異常空間は閉鎖空間より、さらに不安定で厄介です。閉鎖空間はだんだん大きくなるという性質からある程度こちらが観測して対策を取ることが可能です。しかし異常空間は一瞬にして狭い空間に展開される。そして、その狭い空間に異常なまでの高エネルギーが蓄えられてゆく。この場合は、あなたの部屋全体がその範囲で、エネルギーの総量は最新型水爆に換算してだいたい1000万〜2000万発分くらいです。それが、涼宮さんが部屋に入ってきて僅か1分くらいで蓄えられたエネルギーの総量です”

ようし、じゃあ、俺はここに閉鎖空間でも作っちゃおうかな。広さはこの部屋と同じくらいでいいよ。そこに最高級ソファと最新型液晶テレビとプレステ3でもあれば完璧だな。

“このエネルギーがビッグバンに相当する量に到達すると、現在の世界は崩壊し、新たな世界が創造されることになります。さっきの状況を思い出してください。”

涼宮さんが部屋に入ってきて、まず最初に見た光景は、あなたに花束を渡す長門さんの姿です。しかも、長門さんは本来なら鶴屋さんの家を探していないといけないわけで、本来の任務をサボって――それも非常に長門さんらしくらぬサボり方をしていたわけです。それだけでも涼宮さんの精神に多大なストレスを与えるに充分なのに、ましてやあなたの部屋に、先に長門さんが乗り込んでいる。これは、たとえて言うなら病気で寝込んでいる朝比奈さんをお見舞いにいったらタキシードを着てバラの花束を持った谷口さんがすでに来ていたようなものですね。しかもあなたと長門さんは、古典の一件でただでさえ疑われている”

谷口にタキシード？ 志村建に殿様の恰好させるくらい滑稽だな。“さて、ここからがあなたの大活躍の場面です。あなたと涼宮さんの会話が始まった時点で、5分から10分で世界が崩壊するのはほぼ確実でした。ましてや、今回は長門さんの情報閉鎖空間や朝比奈さんの時空移転空間も発生しており、それらが混ざって非常に力オスな状況です。二人とも、涼宮さんが発生させた異常空間のエネルギーを利用して、互いに互いを葬り去ろうとしていたようですね。僕が「もう普通に食事とか出来るんですか？」と聞いた時には、これがこの世界で交わす最後の会話になるだろうと思っていました。ですが、あなたがとっさの機転で腹の虫を鳴らしたことにより、パズルのピースがはまってゆくように、うまく3者の空間は相殺され世界は滅亡を――

「変態覗き魔のクソ野郎。俺は今、ひとりにして欲しいんだ！とつとと頭の中から消え失せろ！」

気がつくと大声を出して、握りしめた拳を机に叩きつけていた。振動で、硬貨がチャリンと音を立てる。

またしても視界がかすんでいた。

古泉は俺が珍しく取りみだしたのに驚いてか、急に静かになった。そして、そのまま俺の頭の中から消え去った。俺はしばらく涙を流れるに任せたあと、窓の外を眺めていた。部屋から見える風景はい

つもと全く変わらなかったのに。

俺の高校生活だけが、不条理に変わってしまった。

これから、ますます長門と朝比奈さんの戦いは激しくなっていくだろう。そんなことはゲームを眺めているだけでもう十分だというのに。

泣いたせいかな、早くも適度な疲労感がかなりの絶望感と一緒になつて襲ってきた。

今は、寝よう。

どうせ月曜日になればつまらない授業と共にハルヒの相手もしなければならぬだろう。鶴屋さん探しも残っている。ギルティ・キルの練習も全く進んでない。もっとも、進んだところで勝てる気などこれっぽちもないが。

まあ、いいや。とにかく、古泉が何とかしてくれるだろう。あれだけ言つといて、結局のところ俺の味方は古泉だけなんだから。

ベッドにもぐりこんで、儂く散つていった俺の青春の桜を忍びながら目を閉じた。

今度は、夢を見ることはなかった。

目が開いた。それは目覚めたというより、本当にまぶたが勝手に開いたと言った方がよかった。別に自分を聖人と比べるわけではないが、死んで三日たってから復活したキリストもこんなふうに目覚めたんだと思う。時計をみると、夜の7時少し前。外では梅雨を告げる大雨が降っていて、雨粒が屋根を叩く音だけが響いていた。

流石にハルヒの鶴屋さん探索も、もう終わっているだろう。今頃は特に成果がなかったことについて、いつものファミレスで『ハンバーグと海老フライの豪華セットご飯大盛り』を食べながら反省会でもしているに違いない。

ぐるぐる、ぎゅー。

またもや腹が鳴った。そういえば、あれからまだ何も食べてない。

かと言って、ハルヒみたいにバクバク食べる気は全く起こらなかった。たぶん、体は食事を求めているのだろうが、心の中では食べたくないのだろう。

コン、コン！

ノックする音がしてから、ドアが開いた。

「あ、キョン君、生きてたんだ。ハルヒお姉ちゃんが少し心配してたよ」

言葉の端々にトゲを感じたが、無視しておくことにした。もし寝ていたら、また腰でも蹴られたのかもしれない。さっき起きたのは幸運というべきだろう。

「お母さんが、何か食べたいものはない？　て言ってたよ」

「じゃあ、うどんでもいいや」

「ふん」

特に興味もなさそうに返事をしてから、妹はドアを閉めて階段を下りていった。

俺はしばらく、さっきのことについて考えていた。いくら古泉が俺の頭の中に勝手に入ってきたとはいえ、あれは少し言いすぎたかもしれない。何と言っても、古泉はこのクソ暑い中ハルヒのわがままに付き合わされて鶴屋さんを探していたのだ。それが比較的涼しい午前中だったとしても。

いや、多分ハルヒの性格から察するに鶴屋さん搜索は午後も行われたと思う。俺の妹を連れて行って、鶴屋さんの居場所を捜しまわったんだ。午前中だけであきらめるわけがない。

だったら余計に、いくらなんでも言いすぎたか、という気になってきてしまう。

まあ、いいか。どうせ明日には学校で会うんだし。そのときには二人ともいがみ合ってる場合じゃない。元の世界に戻るためには、一致協力しなければならぬからだ。

しばらくそんなことを考えていると、下から声がした。たぶん、頼んだうどんができたんだろう。降りていくと、うまそうなうどんが

湯気を上げて俺を待ってくれていた。

うどんはすぐに俺の胃袋に収まったが、俺の食欲はまだ収まり切らなかった。

確か冷蔵庫の中に、ハルヒが買ってきてくれたケーキがあるはずだ。いまだトラウマは残っているが、今なら少しは食べれそうな気がした。それに、あいつがどんなケーキを買ってきてくれたのか、少し楽しみでもあるしな。期待を込めて冷蔵庫を開けてみた――

「そうそう、リング切ってあるから」

「ああ、うん」

母親の呼び掛けに上の空で返事をしたが、実際のところは全く聞いちゃいなかった。

そこにあるはずのケーキの箱が、すでに跡形もなく消えていたからだ。

犯人はもう分かっている。

妹だ。あいつが一人で、全部食い尽くしやがったんだ。

16時限目（後書き）

いい加減涼しくなって欲しい。

17 時限目（前書き）

今日の『たかじんのそこまで言って委員会』で江川達也氏が出演されてました。僕は江川さんの意見に大筋賛成だし、とても面白くて魅力にあふれる人だと思いました。でも漫画作品はだいたい大っきらいですww なんかおもしろいとは思うけど、なんか嫌いです。

17時限目

翌朝、俺はいつにない調子の良さで登校した。

つい昨日に地獄の底から這い上がってきたばかりというのに、なぜ調子がよかったのか？

答えは簡単。あの日長門の家で、愛とかたつむりたつぷりの誕生日ケーキを食った瞬間から今日の登校まで、俺はずっと寝続けていたからだ。もちろん、その間にSOS団全員の訪問を受けたり、晩御飯の雑炊をかきこんだりはしたが、夜寝るのも早かった。リンゴを食った後、風呂からあがって一応学校の宿題に手をつけてみたものの、30分ほどで今までの体力を急激に消耗。やっぱり病み上がりに性にもないことをやるもんじゃなかった。とにかく「これはいかん、また病気が再発するかもしれん」と自分の健康を第一に考えて寝た。ちなみに、朝はいつも通り7時に起きた。

道理でいつものハイキングコースの足取りが軽いと思ったわけだ。まあ、足取りが軽かったのは梅雨らしからぬ快晴だったこともあっただろう。

それも相まっていつもより早い時間に校門をぐり抜けて教室にたどり着いたわけだが、残念なことに1時限目の古典から早速寝てしまった。これに関しては俺自身でもしまったとは思ったが、俺の絶好調より古典教師の催眠術のほうが一枚上手だったということでご了承願いたい。

俺はかろうじて授業終了間際に目を覚ましたものの、すでに項羽は漢の大軍に突入し、自分で自分の首を刎ねた後だった。

この時間に当てられなくて良かったと思う。昨日あれだけ古泉に怒りをぶちまけて今日になって助けてくださいとは、控えめで謙虚な俺にはさすがに言えない。

しかし、こうも居睡してしまったのには原因がある。あれだけ寝ておいて原因がどうこう言うのは政治家が勝手に借金を作りまくっ

て勝手に増税するのと同じかもしれないが、まあ、どっちにしても俺の方はまだ可愛い話だ。

まず、その日は月曜日だった。月曜日には全校生徒を集めて行われる、校長先生の季節のあいさつから始まるくだらない話を聞かなければならない。それも朝とはいえ、そろそろ陽が高くなりだす頃。この一年でもかなり暑く日差しも容赦ない時期なら、なおさら体力を消耗するのも仕方のない話。グラウンドで直射日光を浴びていると、網の上で焼かれるサバみたいに汗が噴き出してくる。もちろん、サバほど食欲をそそるものではないが。

グラウンドでは、すでに時間がきているというのに盤上にコマを散らかしたみたいなお状態だった。みんなダルそうだったが、ひとりだけさっきまで冷蔵庫の中にでもいたのかと疑いたくなるような顔をした生徒がいた。

「やあ、どうも、おはようございます。昨日は悪いことをしてしまったそうですね」

「いや、俺の方も言いすぎたと思っている。おまえにも悪気があったわけじゃないのにな」

「悪気がなければすべて許されるわけでもないですよ。昨日の僕は———なんというか、少し浮かされていたんだと思います」

「まあ、良く分かんが昨日は世界の危機を間一髪で避けたみたいなんだから、お前が浮かされるのも仕方ないことだ」

「とにかく、これからあなたはあなたのプライバシーにまで踏み込むようなことはなるべく避けるようにします」

ああ。そうしてくれると助かる。

「まあいい。昨日のことはお互い水に流そう。俺たちまでいがみ合っても何もはじまらん。それより古泉」

「なんでしょう」

「まわりの空気の温度を10度くらい下げる超能力とかが実は備わってしまっている、なんてことはないか？」

「本当に、そういう能力があればいいですね。涼宮さんにそれと

なく言ってみてはいかがですか。それか向こうの長門さんに頼んでみるとか」

古泉が示した先には長門が氷の像みたいに無言で——というより、もはや無音で突っ立っていた。この騒がしいグラウンドの真ん中に、ポツカリと穴でも開いたみたいなの、そんな感じの防音閉鎖空間が自然と出来上がっていたみたいだ。

「いや、遠慮しておく」

「そのほうが無難でしょうね」

まあ、そうだろうな。

俺と古泉はこのままこのまま話をしていたら、ときどき暑さとハルヒを愚痴りながら永遠に話をしていたら、先に教師の方が我慢できなくなつたようだ。

いつまでたつても整列すらできない生徒たちに怒号をあげながら、牧羊犬みたいに追い立てて並べていった。

「そういうえば、昨日は鶴屋さん、見つかったのか？」

「いいえ。困つたものです。涼宮さんは、完全に鶴屋さん固執していますからね」

そういう古泉の表情は全く困つた様子もないように見えた。

俺はこれからの対策——特にコンピ研対策についても話し合いたいところだったが、あいにく教師の怒号が近くまで迫ってきたので、急いで自分の列へ戻つた。

戻つたら、女子はとつくの昔に全員ならび終えて静かに朝礼の始まるのを待っている。

普段はよくしゃべるくせに、こういうときはさっさと並んでさっさと朝礼を終わらせるのが得だと知っていやる。

あのハルヒですら——というより、損得勘定のシビアなハルヒだからこそ、というべきだろうか——すでに黙って列にもぐりこんでいる。まあ、ハルヒの場合は学校で喋るような相手がほとんどいないのも一因だろうけどな。なんせあいつは俺以外の一般人とは喋らない。

並び終えて静かになったとき、ようやく校長の長くてつまらないスピーチが始まった。

ふとハルヒの方を見ると、『つまらない説教をするジジイはさっさと死ねばいいのに』と汗だくの顔に書いてあった。

それにしてもなあ。

本当に話の長いジジイだ。

皆も分かってくれるだろう。こうやって校庭に突っ立っている一分一秒ごとに貴重な体力は汗として流れ、蒸発してゆく。

貴重な青春の1ページが、校長の毒でも薬でもない言葉で埋められてゆく。

いい加減にしないと、マジでハルヒに殺されてしまうぞ。

そうやって1時限目の古典は陥落したものの、残りの授業はなんとか持ちこたえることができた。

核爆弾が落ちてきても続くだろうと思われる、絶望的なまでにつまらない授業。

今度古泉に時間の流れを早くする超能力がないかどうかきいてみるか。

ようやく昼休みになった。核爆弾は落ちてはこなかったが、まだ残りの授業は長い。

ハルヒは昼休みのチャイムが鳴ったと同時に墓場から復活したゾンビみたいに起き上がると、そのまま購買部の方に走って行った。

まあ、校舎の影を、直射日光をさけて走るやつの動きは吸血鬼並だったに違いない。

教室の向こう側で谷口が手招きしていた。横に国木田も座っている。

やれやれ。またいつものメンバーか。

このところ、このいつものメンバーというのが曲者だった。つい最近の古典での漢文語訳事件のせいで、谷口が俺に執拗に下ネタを振ってくるようになったからだ。

そして大抵は、谷口が俺に新コレクションのAVを貸してやろう、という話になってしまふ。

もちろん食事中であるし、根がお上品で繊細な俺にとっては、こんな谷口にホトホト困っている。教室内にも付き合があるから仕方なく借りていているものの、これ以上の密輸はやばい。

まずクラス内に露見するリスク。誤訳事件で俺の変態度は谷口に及ばないにしてもそれに半馬身くらいの差で迫っている、とクラスからは見られている。正直、これ以上しょうもないところで注目されたくない。

そしてもう一つの懸念が持ち物検査のリスク。これでバレたら本当に俺の学園生活は終りになってしまふ。退学になることはないだろうが、少なくとも学校内での居場所は確実になくなる。昨日の水溜りが今頃蒸発してゆくようにして。

今度は国木田も手招きしだした。俺もハルヒ程友達が少ないわけではないが、そんなに多いわけでもない。一緒に昼を食べる人間など、結局こいつらしいかない。

よっこらせ。

口から小さい呟きとともに立ち上がろうとしたとき、後ろからそれと同じくらい小さい声で「ここに座ってもいい？」というのが聞こえた。

反射的に「ああ」と承諾してから振りむいて、断っておけばよかったと心底思った。

すでに長門はハルヒの席に座っていた。

もう、この時点で予想はできていた。谷口の大好きな学園物のギヤルゲーではこのあとどういう展開になるのか——そしてそれが長門の人格に組み込まれていることも。

「お弁当、作ってきたの」

長門が取りだした弁当を見て、俺は唾をのんだ。

まだ中は見えないが、おおその見当はついた。

すぐに助けを求めようと谷口の方へ振り返った——が、やつはもう諦めたのか国木田と弁当を食べ始めていた。

「大丈夫。今度は、ちゃんと地球の文化を研究してきたから」

そっぴいながら、長門は弁当を包んでいるナプキンをほどこいた。

長門の白くて細い指が弁当のフタにかかる。ここまできたら、もう長門の言葉を信じるしかなかった。俺は、この弁当箱の中身が鮭や卵焼きやウインナーをタコみたいに切ったやつであることを本当に、心の底から、多分生まれて初めて真剣に、神に祈った。

——弁当のフタが完全に持ち上げられた。

普段なら学校の授業と同じく全く気にもかけないような弁当の具でも、このときだけはそれらが高級レストランのフルコースにも匹敵する料理に思えた。

——フタが横に移動していく。ちらりと白いものが見えた。

多分、ご飯だろう。問題は残りの具材が何かだ。

胃の底からこみあげてくる吐き気が抑えきれない。

——ついに、フタが完全に開いた。

あそこに見えるのはなんだろう。小さい頃、野原で追いかけたバツタに似ていなくもない——ふとそんなことを思ったりしたが、もうどうでもよかった。

「イナゴのバター炒め」

その横には黒い塊があった。さらによく見てみると、ひとつひとつに小さな肢と触角が突き出ているのがわかる——なんだ、小さい頃、巣穴にお湯を流し込んで『ありま温泉』とかやってた蟻さんじゃないか。まさかこんなところで会えるなんて思ってもみなかった。

「蟻の油揚げ。白いのは蟻の卵蒸し」

ああ、俺がご飯だと思ってたのは実は蟻さんの卵だったのか。どおりで光沢が米らしくなかったわけだ。蟻の黒山に添えるようにして、小学生の頃プールの上を飛んでいたのと同じトンボさんが横た

わっていた。虚ろな目は、もうどんな色の空も映すことはないだろう。あの夏の強烈な太陽すらも。

「トンボの酢漬け」

弁当の一番端には、何やら衣で包まれた物体があった。衣の上からでは良く分からないが、形からみて多分――

「ゴキブリの天ぷら」

しぶとい悪友だ。俺が生まれた時から、そしていまもどこかで見守っていてくれている、そんな悪友。困難に立ち向かう勇氣、退かぬ心。それを忘れないよう、いつも教えてくれる存在。

この長門の弁当には懐かしい思い出がたくさん詰まっている。

長門の箸が動いた。ゴキブリの天ぷらに蟻の卵蒸しを乗せると、なにやらタレをつけて持ち上げ――その箸はそのまま俺の顔へと動いていった。

「あゝん」

止めてくれよ、と思ったが、長門はそんなことおかまいなしに容赦なく俺の口の中へゴキブリの天ぷらを押し込んだ。卵。先に口の中で弾ける。次々と誘爆するように弾けてゆく。弾けるたび頭の中に遠い声が聞こえるような気がした。友の呼ぶ声。いや、俺が呼んでいるのか。だが、友の姿は見えない。

俺はいつの間にか、草原を走っていた。

ついに歯が、天ぷらの衣を切り裂いた。サクサク感。もはや、何を噛んでいるのかさえ分からなくなってきた。これは本当にゴキブリなのか。本当はエビ天ではないのか。しかし、直感がゴキブリだと告げていた。

切り裂いた衣の隙間から、肉汁のようなものが溢れてきた。

俺はまだ草原を走り続ける。たぶん、あの坂を越えた先に友はいるはずだ。それだけを信じて。

だんだんと視界が白くなってきた。かまうものか。

それでも、走る。そうすれば口の中の味から逃れられる。そう信じて。

走る。ただ、坂の上だけを目指して。

視界。だんだんと白くなってゆく。待ってくれ。そう叫ぼうとしたが、声はでなかった。

待ってくれ。あともうちよつとなんだ。

草がなびいている。かすかに見えた。

視界が、完全に白く染まった。

17 時限目（後書き）

長門の愛の食卓第二弾。最後は敬愛する北謙三先生風にしてみました。特に理由はないです。しかし、ここらへんから長門が完全に制御不能になってきたのでちよつと作者も困っています^^；でも、ちゃんと責任とって最後まで長門と一緒に完結させるつもりです。

だって長門は僕のお嫁さんだもの——みつを

18時限目（前書き）

仕事が忙しく、久しぶりの投稿になってしまいました。

これから年末に向けてちよつとペースを上げていこうと思います。

多分、これからへんから折り返し地点です。絶望しか待ってない折り返し地点、て人生でたくさんありますよね。ちょうどそんな感じですよ。

18時限目

今度は夢も何も見なかった。目を覚ましたとき、俺はすでに薬品臭いにおいが充満する保健室に運びこまれていた。まさかこの俺が身体測定以外でこの部屋のお世話になるとは思ってもいなかった。

「ホント、お前には同情するぜ」

白いベッドの横から声がした。いや、ベッドだけでない。保健室全体が白一色だった。枕もシーツもカーテンも。天井も

「谷口。国木田もか」

「うん。谷口と二人で運んだんだけど、大変だったよ」

「お前らが運んでくれたのか」

「ああ。だいたい俺ら以外にだれがやるんだよ」

くやしいことに、その通りだ。それから3人でとりとめもない話をした。

そしてそろそろ弁当を食べに教室に戻ると言って谷口が立ち上がると、去り際に「愛妻弁当作ってもらってるようなやつは、もう友達じゃねえよなあ」と言い残して行った。

俺からしたら、あんなゴミ処理場の残飯に匹敵するブツを弁当などと呼べるかどうか疑問が尽きないところだったし、ぜひとも谷口にも試食願いたいものだった。

それでもまだ「これは愛妻弁当だ」と主張できるのなら、仕方ない。俺と谷口はもう友達ではないことになる。

かつての友人が立ち去ってから、意外な人間はなれしたやつが入ってきた。

「また酷い目にあっただんですね」

そうだと言いたところだったが、言ってしまうと長門を悪者にしてしまうような気がした。いや、間違いなく悪者にしてしまうだろう。たぶん、日曜日に長門は地球の食文化について必死に調べたはずだ。後で俺も調べたところ、確かにゴキブリや昆虫を食う文化は地球の各地に存在しているらしい。

「口では言えないほど酷かったんですね」

俺が下手なことを言えずに沈黙しているだけなのを、どうやら肯定と受け取ったようだ。最初の一瞬は俺も朝比奈さんが来てくれたことを喜んでいたがこんなターミネーターモードの朝比奈さんと正面切って話をするくらいなら、まだ見舞いに来てくれなかった方が気楽だった。

とはいえ、このまま俺が黙っていたところで朝比奈さんは長門をいくらか罵ってから帰っていただけだろうし、それでは二人の関係になんらしいこともない。

俺もそろそろ覚悟を決めて言うべきかもしれない。たぶん朝比奈さんには不快に思われるだろうが、それでも言うべきだと思った。

「たしかに酷いかもしれない。でも長門に悪気はなかったんです。長門はいわば宇宙人で地球の文化も全然知らなかったんですから」

「キヨン君、大丈夫ですか？」

「ああ、もうだいぶ具合もよくなってるから、5時間目の授業から――」

「そういう意味じゃないんです」

俺は一瞬わけが分からなくなった。どうみても朝比奈さんの様子のほうがおかしい。

「あれだけのゲテモノ料理を食べさせられてそれでも相手をかばうなんて、普通じゃないです」

「いや、俺はべつにかばってるわけじゃないんだ。ただ――なんていうか――今回のことは俺と長門の問題であって、朝比奈さんがどうこうするようなことじゃないと思って」

朝比奈さんは、それを聞くと椅子に座ったままうつむいて黙り込んでしまった。

やはり、まずかったか。しかしこのまま俺の方が黙っていれば、長門が悪者ということで押し通されてしまっただろう。下手をすれば、なんらかの報復をすべきというところまで話は進んだかもしれない。もちろん俺には報復なんてする気は一切ない。ただ元通り仲

のいい二人に戻ってもらいたいだけだ。

「朝比奈さん、いい機会だからもう全部言いますね。俺は未来がどうなっているのか、古泉から聞いてだいたいのところは把握しているつもりです。なので、朝比奈さんが長門を嫌いな理由は、現代人としてある程度は理解しているつもりです」

「何がいたいいんですか？」

いつもと違ってなんの抑揚もない口調。俺はイージス艦ばりの威圧感に別な意味でまたしても吐き気がしてきたが、それをなんとか抑えこんだ。

「だから……それでもいいいます。長門と争うのは、もうやめにしましょうよ。朝比奈さんの未来の問題を解決したい気持ちもわかります。でも、このままじゃ結局何も解決しない。そうでしょう？」

「やっぱりキョン君、おかしくなってますね。たぶん、情報操作で人格を改造されてるんだと思います」

「そんな……長門は少なくともそんなことするようなやつじゃないし、俺にもそんな自覚は全然ありませんよ」

「自覚がない、ていうところが逆にあやしいんです。洗脳された人間にその自覚がないのと同じです。そのうち、あのかたつむりのケーキをおいしく食べるようになってますよ」

朝比奈さんの目に憐れむような光がさした。多分何を言っても無駄だろうが、言わなければならぬような気がした。ここで黙り込んでしまうと、それこそ洗脳されたと認めるようなもんだった。

「仮に洗脳されているとしても、俺の言っていることはその前と変わりません。未来人と宇宙人が前みたいに仲良くなってもraitaiということは」

「もう、戻れないんです」

朝比奈さんの目が、沈みゆく夕陽を眺めるような遠い眼つきになっていた。多分本当にどうしようもないんだろ。夕陽が沈むのを止められないのと同じで。

「もうそろそろいかないと」

朝比奈さんがそう言って立ち上がった。

「最後に、ひとつだけキヨン君に教えておかないといけないことがあるんです。鶴屋財閥の崩壊、あれ、実は私のせいなんです」

「え？」

「またもや、わけが分からなくなった。いくら未来から来たとはいえ、たった一人で財閥を崩すなんてできるはずがない。演技かどうか知らないが、いつもはハルヒにおっぱい掴まれて苛められるだけの女子高生にすぎないのだ。」

「でも、それって多分禁則事項ですよ」

「ええ、そうですよ」

意外にもあっさりと認めた。

「未来の人間なら、株価を調べるくらいなんでもないですから。ちよつと操作すれば会社ひとつに打撃を与えるくらい、キヨン君にもできますよ。ちよつと予想外の出来事が重なって倒産しちゃいましたけど」

「俺は遠慮しときますよ。その言い方だと、本当は倒産までさせる気はなかったようですね」

「たぶん、私が介入したことによって微妙に歴史が変わっちゃったんだと思います」

考えられない話ではなかった。まあ、あれだけの超能力を見せつけられて宇宙人のゲテモノ料理を食わせられれば自分の死以外はなんでもこいだ。だが、それを除いて考えてみても、歴史に小さな力が加えられただけで思わぬ方向へ行ってしまうのは、俺ら常人の人生を振り返ってもすぐに納得のいくものだろうと思う。

あのとときああしていれば。そう思わずに生きていくのはテストで100点をとるより難しい。

ましてや、財閥といえども昔のような一枚岩ではなくなっているだろう。俺も新聞のニュースで見たがけっこういろんな問題が複合して起こったらしく、単純に朝比奈さんの株価操作だけで倒産したわけではなさそうだ。

ただ、とどめの弾を撃ち出す引き金を朝比奈さんが引いたことは確かだろう。朝比奈さんは当てるつもりはなかったが、微妙に変化した歴史の力が加わって弾は鶴屋財閥へと導かれていったというところか。

「そろそろ部室に戻りますね。涼宮さんが待ってると思うから。」

「ごめんなさい。お見舞いに来たのにこんな話ばかりしてしまつて」

「いえ、いいですよ。それより、最後にひとつだけ教えてくれませんか」

「なんですか？」

「鶴屋財閥の株価を操作しようと思つた動機です」

ただの気まぐれでそんなことをしたとは思えなかった。鶴屋さんの家の会社でもあるんだから。

「鶴屋さん、てけつこう鋭いところがあるんですね。なんていうか、たぶん私や長門さん、古泉君の正体に薄々感づいているというか。それがとうとう、私と長門さんのいざこざも感づいたみたいなんで、邪魔になる前に排除しようと思つて。家庭が乱れれば、こっちにかまつてるところじゃなくなるでしょ？」

「まあ、確かにそうですね」

ちよつと残酷だが、下手に巻き込んでしまうと死ぬ危険があるのは俺が身をもつて体験済みだ。また鶴屋さんもハルヒと似たところがあつて、いろんなところに首を突っ込みたがる性格でもある。

「俺はもう少しここで休んでいますよ。あと、朝比奈さんが禁則事項を破つたことは誰にも言いませんから。もちろん、古泉にも。だからそこら辺は安心してください」

「大丈夫ですよ、言っちゃつても。あともう一回だけ、禁則事項を破るつもりですから。とにかく、キョン君は早く体調良くなつてください。涼宮さんがそれとなく心配してましたよ」

朝比奈さんは立ち去つた。俺の好奇心をビンビン刺激することを言い残して。

『あともう一回だけ』。確かにそう言つた。

正直なところ、体調はすでにほぼ元通りになっていた。

でも――

『あともう一回だけ』。

古泉にこのことを話したほうがいいのかもしれないな。

朝比奈さんに『誰にも言わない』と約束した舌の根も乾かないうちに、俺はそんなことを考え始めていた。

この日の最後の授業は世界史だった。まあ別にどうでもいい話なんだが、確か後漢末の三国時代が、ちょうどその授業の内容だったのは鮮明に覚えている。

なんたって、友達の家でやったゲームでそんなのがあったので、俺も少しは気になっていたからだ。眼鏡をかけてないムツゴロウのようなこの爺さんの授業を、俺が真面目に聞くのは有史以来の大珍事といってもいい。

なぜならこいつの授業は絶望的に分かりづらい上に、爺さんの字があまりに汚くてまるでエジプトの古代文字みたいだったからだ。最初はヒエログリフ講座と間違えてんのか、と思ったほどだ。なんとか判読しようと必死になっているうちに、これまた入れ歯の調子でも悪いのか聞きとること絶望的に不可能な古代言語で授業をサクサク進めていく。勇気と善意ある生徒が、このムツゴロウにもつとゆつくり話してくれるようにいったところ、辞書に載せてもいろいろの見事な逆切れで教室中を啞然とさせた。怒りでさらに呂律が回らなくなつて、余計に聞き取れなくなつた怒声が多分廊下にまで響いていたと思う。各々の生徒がなんとか聞き取れた場所をつなぎ合わせて、ようやく爺さんが「生徒が教師に口出しするな」的なことを言っていたんだということがだいぶ後になって説明された。

多分これからもこの授業を真面目に聞くことはないだろう。まさにヘレン・ケラーばりの三重苦を背負った教師だが、肝心のヘレン・ケラー精神に欠けてるんじゃない。

そういう中でやっと興味をもった分野ができたというのに、結局三国志の部分はものの15分で終了した。俺はずっと魏が天下統一したと思っていたが、結局は魏の内部を乗っ取った晋が三国を統一したのも束の間、すぐに騎馬民族に滅ぼされて五胡十六国の戦乱の世に戻っていったという。

歴史にもしもは禁物だが、もし曹操が赤壁の戦いで勝っていたら俺の思った通り魏が天下統一していただろう。

三国時代が早くも過ぎ去って世界史の爺さんに全く興味がなくなつたんで、俺はふと後ろを振り返ってみた。ハルヒは気持ちよさそうに真つ白なノートに頭を沈めて眠っていた。

もしハルヒが歴史に興味を持っていたら――多分、こいつの能力は過去に対しても効果があるんじゃないか？

しかし、こいつの寝顔を眺めていて思った。こいつにとって『スイコデン』なんて居酒屋の名前以外の何ものでもないだろう、てなそうこうしているうちに、チャイムがなった。

チャイムが鳴ったとたんにハルヒはタイマーでも仕掛けられてるかのように目を覚ました。

「どうしたの。そんなにじろじろ見て。顔になんかついてるの」

「いや、よだれ垂れてるぞ。ノートも濡れてるし」

俺が指摘してからやっと口の周りについたよだれを制服の袖で拭き取って、ふやけたノートのページに目線を落とした。

「真つ白だな」

「別にいいの。わたし、未来にしか興味ないから」

「そんな誇らし気に言うことじゃないだろ」

「だからキョンも過去をふりかえらずに、対コンピ研戦にむかって頑張るのよ。ただでさえ昨日寝込んでた分だけ練習不足なんだから」

「まあ、頑張るよ。なんせ俺の金が費やされてるんだもんね」

「どうやらわたしの先行投資の効果が出てきたみたいね」

何が『わたしの先行投資』だ。俺流の皮肉をどうやったらここま

で好意的に解釈できるのか。どう見ても『先行強奪』だろ。思わず眠気も吹き飛んでそう言い返してやろうと思ったが、かろうじて抑え込んだ。確か古泉が機関に頼んで経費で落としてくれると言っていた。俺の心の中の諸葛亮が「ここは耐えるのが上策」と言っている。

「ところで、昨日のケーキはどうだった？ おいしかったでしょ。あれなら食中毒も一発で吹っ飛んだんじゃない？」

非常に困る質問だった。正直に妹に全部食べられてしまった、と答えてもいいが、ハルヒが俺に満面の笑みを向けてそう質問している。うかつなことは言えなかった。

「ああ、すごくおいしかったよ」

「ほんと?! どころへんがおいしかったの?」

もうおいしかったんだからいいじゃねえか、俺の妹のほうに聞いてくれよ、と心底思ったがどうしようもなかった。すでに「おいしかった」と答えてしまった以上、今さら「食ってない」なんて言えるはずもない。

ハルヒが期待を瞳に宿らせて俺の方を見ていた。

なにか適当なことを言うしかなかった。

「ああ、クリームが違うね、クリームが」

言いながらチラッとハルヒの様子をうかがう。表情に大きな変化はなかった。今ならいける。このまま押し込んでしまえ。

「なんていうかな、全体的にまるやかで、おしとやかなお姫様って感じかな。一口食べただけで、舌が赤ちゃんの肌のごときめ細やかな春の雲に優しく包まれたよ。まるで虹でろ過されたアルプスの天然水ように繊細でエレガント。その味は、まさに甘みの嶺上開花」
イホウ

「つぶ。なにそれ」

「まあとにかく、おいしかったということさ」

「気に入ってくれたみたいでよかったわ。けっこう選ぶのに苦労したのよねえ」

よかった。完全にこのピンチを乗り切ったみたいだ。俺の頭脳にかかればハルヒひとりを煙に巻くくらいちよるいもんさ。

このあとは定番のホームルームでお開き。ハルヒは珍しく掃除当番なのでしばらく教室に残るらしい。

「さきにあっちに行つて練習しといて」

あつちとはゲーセンのことである。

「サボつたら死刑だから！」

「はいはい、ちゃんと練習するつて。対戦ももうすぐだしな」

正確には3日後だった。

だがこのときは対戦前の不安よりもハルヒの追及をうまくかわした安堵感でいっぱいだった。

18時限目（後書き）

サントさん、僕にクリスマスの予定をください。
それが無理なら金塊1キロでもいいです。

19 時限目（前書き）

朝起きたら、枕元には何もなかった。
ただ、何かの液体で濡れて、乾いた跡があるだけだった。
さあ、皆さん、メリークリスマス。

19時限目

先にゲーセンに到着していた朝比奈さんは一生懸命練習していたものの、俺の眼精疲労回復以外に何の成果も生みだすことなく元・俺の財布の住民をコイン投入口に慣れない仕草でほうりこみ続けていた。

意外とドジっ子なのは元からかもしれない。少なくとも俺には画面に顔を近づけながら、必死にレバーを握り練習している様子は演技に見えなかった。もし演技ならアカデミー主演女優賞を47車一台分くらい進呈してもいい。

俺がしばらく朝比奈さんの左手に握られたレバーになりてえとか思いながら眺めていると、後ろから声をかけてくるやつがいた。

「やあ、お待ちしました」

振り返ると、客の財布の中身にしか興味がない自動車セールスマンみたいな微笑を顔に張り付けている古泉がいた。

さあさあ、こいつにさっきの事を話してしまうべきなんだろうか。本人のいる前で。

もし古泉がこのとき例のテレパシーを使って話しかけてきたなら、俺は朝比奈さんが言ったことを話してしまっていただろう。だが俺が昨日言ったことで余程気を使っているのか、このときは一切こやつの心の声を聞くことはなかった。

朝比奈さんが「えいつ、えいつ」とか画面に向かって言ってるのを尻目に、とりあえず俺たちは俺たちで練習を始めることにした。今日こそはあの筋肉ダルマのキャラを倒そうと意気込んでいたものの、その前に向かいの台に対戦者が現れた。数十秒後、俺の操作していた金髪の雑魚は燃え尽きた線香花火の灰のように画面に横たわる運命となった。

やっぱり今日は最悪な日だ。またもやゲテモノ料理は食わされるし、練習もできねえ。そんな風に考えていると、すでに線香の燃え

カスと化した金髪が突然炎をあげて燃えだした。

「死体殴りですね」

古泉が、横から野球の解説みたいな声で教えてくれた。俺が死体殴りとは一体なんぞや？と問いかけようとしたが、その前に古泉曰く
「勝利確定後に無抵抗な相手に攻撃を加えることをゲーマー達の間ではそう言うんですよ。いわゆる、一種の挑発行為ですね」

だそうだ。これがハルヒみたいな単細胞相手なら効果てきめんだっただろうが、SOS団の、いや、北高の、いや、北市の諸葛孔明と呼ばれる俺には残念ながら――

「ここまで挑発されて退くなんてSOS団にあるまじき行為だわ。徹底的に叩きのめすのよ！」

まあ、総大将がそういうんだからしょうがないよな。古泉はいつの間にかハルヒが後ろに立っていたのに驚いていたが、ワープ航法かレポートでも使ったんじゃないかと思うほどの神出鬼没ぶりに俺はそろそろ慣れ始めていた。だいたい、こいつがクラスの掃除をまともにやるとは思えない。どうせそこら辺のやつに押し付けて脱兎のごとく教室から抜け出してきたんだろう。何が『退くなんてSOS団にあるまじき行為』だ。まずは自分の短期記憶をアメンボ並みに引き上げることから始めた方がいいぞ。

「なんか言いたそうね。どうせ掃除はちゃんとやったのか、とかそんなことでしょ？」

「どうして分かったんだ？」

「顔に書いてあるわ。だいたい、わたしが本気をだせばあんなの5分で終了よ！ 他の人にも頑張ってもらったし」

多分、他の人の頑張りが9割くらいを占めているんだろう。

「とにかく早く連チャンしなさい！ だいじょうぶ、お金ならユキが勝ってくれたおかげでだいぶ余裕があるから」

余程てめえの目玉にねじ込んでやろうかと思ったが、心の中の張良が自重するよう促したのでそれは諦めることにした。古泉から硬貨を受け取りコイン投入口へ入れる。

チャリン。

画面が切り替わり、バトル開始を告げる音声が流れる。

ヘブナヘル、ファイツ！

しかし結果は同じだった。まあそりゃそうだよな。さつきと唯一違うのはこの台の売り上げがさきの1分間で100円増えたことくらいだ。

「なによ。だらしないわね」

「じゃあお前がやってみるよ」

「ふん」

ハルヒは小さく鼻をならすと俺を椅子からどかし、古泉から硬貨を受け取って――投入口に乱暴に押し込んだ。

チャリン。

ハブナヘル、ファイツ！

また一分から一分半後に、この戦闘開始の音声をまた聞くことになるだろうと思っていた俺の予想に反して、ハルヒは素早い操作で相手を押し込んでいった。

どうやらこのゲームは攻める側が有利に作られているらしく、多少ガードが甘くてもゴリ押しでどうにかなってしまうようなのである。まさにハルヒの為に作られたようなゲームだな。それに、ハルヒの選んだ忍者みたいなキャラは動きが速いので攻撃を避けることも――難しくはあるが――可能ではある。鶴屋屋敷で見たあの指さばきが、（コイツにしては）珍しく遺憾なく発揮されているではないか。多機能高性能なのにたいした使い道のない最近の家電と同じと思っていたのに、ときにはハルヒの力も役に立つときがあるんだな。正直言えば谷口のアソコと同じくらい、使われないほうが世の中の為だろうけども。（谷口のアソコが高性能かどうかはいまだに知らんがね）

そんな風に思っている間に、とうとうコイツは挑戦者を倒しやがった。

最後は負けたものの俺に勝ってちょっとはスッキリしたのか、挑

戦者はあっさりと席を立つてどこかへ消えて行った。

ハルヒは俺の方に振り返って言った。子供がテストで100点取ったのを見せびらかしに来た様な目を向けながら。

「これが団長の実力よ！」

まあ、お前がそこまで操作を上手にできるようになったのは褒めてやってもいい。そこに俺の金が投入されているとしても、その努力は確かに、認めてやるに吝かではない。よくやったよ。頑張ったな。あとで賞状でもくれてやるよ。

涼宮ハルヒ殿。あなたの健闘と努力と雀鬼並みの読みの鋭さと強運と、儚く散って逝った名もなき財布の住民たちを称え、ここに賞状を授与します。

どうだ、完璧だろ？

「そんなことはどうでもいいの。問題はキョン、アンタがどこまでできるかなんだから」

やはり俺の賞状に御不満のご様子だった。

「感謝しなさい。今日はわたしに勝てるようになるまで直接指導してあげるわ。寝込んで遅れた分を、きっちり取り戻すの！」

俺はかつて挑戦者が座っていた台に座ると、古泉からもらった100円を投入した。

チャリン。

ヘブナヘール、ファイツ！

俺は地獄のシゴキから逃れようと必死になって頑張ったが、素早く翻弄する動きについていけず、体力ゲージとやる気をゴリゴリ削られていった。やがて画面の中の俺は動かなくなった。

「言っとくけどわたしに勝つまで帰れないからね！」

台越しにハルヒが言った。

だったら住民票をここに移しといたほうがよさそうだな。少々騒がしい場所だが、北高に近いというのは魅力的な立地条件だ。卒業までならいてやっていいぞ。

心の中でそんな皮肉を言っているうちに、早くももう1ラウンド

もなす術もなく取られた。3本先取なので、あと一回負ければ終わりだ。

しかし、俺はどうしても負けなくなかった。このままヤツを調子付かせれば、閉店までここにいる羽目になるかもしれない。それだけは御免こうむる。

仕方ない。使いたくはなかったが、最後の手段だ。

俺は向こうでハルヒの台を眺めている古泉に、捨てられた子猫の「拾ってください」的視線を送った。あいつなら予知能力とテレパシーで俺をこの地獄から救ってくれるだろう。

古泉、おい、古泉！

心の中で必死に呼びかけてみるが、全く返事がなかった。

ああ、全知全能の古泉神よ、我が願いを聞き届け給え、アーメン。違うようだ。

古泉イツキ、古泉イツキ、こちらデルタフォースα小队！ ただちに救援を頼む！ 繰り返す、ただちに救援を頼む！

これも違うのか。

エロイム、えっさーむ……奉霊の時来たりてここに集う……われ焦がれ誘うは焦熱への儀式……出でよ、汝時空を超えしもの、古泉イツキ！

俺の自信作だったのに、それでも返事がなかった。

返事はなかったが、古泉は何かおかしいと感じたのか、それまで台に釘付けだった視線を動かして俺の方へ向けた。心の中の諸葛亮と張良が「今です」と告げていた。

ああ、世界で一番かっこいい古泉イツキさま俺をあなたのお力で救ってくださいあなたの方で悪鬼ハルヒを追いつけてくださいそうすればあなたを神として称え末代まで祝いますそれに今ならセブンスター1カートンどころか10カートンくらいつけてしかも谷口秘蔵のAVコレクションの中から好きなのを選んでもらってけっこうですだから頼むよ古泉俺を助ける古泉俺たち友達だろ古泉――

そうやって純情な乙女のような祈りを捧げたところで、頭の中に

なにか違う感触があった。脳細胞に直接触れてくるような感触だ。しばらく頭の中をくすぐられているような嫌な感覚があったが、それもすぐに消えた。

“どうかしたんですか？　あなたが全く動かさないから、涼宮さんも怪しんでますよ”

雪山で遭難して、山小屋の壊れたはずの無線がつながったときの気持ちがこのときほどよく分かったことはないね。

とりあえず古泉、俺にハルヒの次の行動を教えてくれ。お前ならあの予知能力でバツチりだろ？

“ああ、そういうことですか。まずは落ち着いて画面を見てください”

そついや祈るのに必死で操作を完全に忘れていたな。

画面内の俺は馬鹿みたいに中央に突っ立ったままだった。ハルヒは俺のこの突然の棒立ちが何らかの罠ではないかと警戒して、画面端で落ち着きなく飛んだり跳ねたりしている。

だがそのうち意を決めたのか、空高く舞い上がると俺の方へ向って飛び込んできやがった。

“ここで対空迎撃技です”

なんか昔に聞いた覚えがある。思い出しはしたが、急に言われてもすぐに体は反応できない。結局古泉のアドバイスが間に合うこともなく、俺は無防備なままハルヒの空中蹴りを顔面にまともに喰らって後ろに吹き飛んだ。

調子に乗ったハルヒが、またもや空中に舞い上がって俺の方へ飛んできた。起き上がりざまを狙おうって魂胆か。

迎撃は間に合いそうにないので、手堅くガードしよう。

ハルヒの攻撃をしのいだ後、飛び道具で距離を稼ぐ。しかし、また飛び込んでくる。

“彼女の戦法はそれほど複雑ではありません。飛び込んできたところを対空技で撃ち落とせばいいんですよ”

教えてもらえばどうってことはなかった。何回かタイミングが合

わずに攻撃を喰らいはしたが、コツさえつかめば古典のテストよりはるかに簡単だった。しかもハルヒの選んだこの忍者のようなキヤラクター、素早さはあるが防御力は格段に低いため、俺が何回か空中からきたところをはたき落とすと、すぐに気絶してしまった。

もちろん、こんな早く帰れる好機を逃すわけではない。すぐに超必殺技——ゲージを消費する技のことで、通常の必殺技とは別物である——を発動、金髪の剣士は光をまとって忍者に突撃、このラウンドを見事勝利することができた。そしてそれは俺の帰り道の3分の1が終わったことを意味している。あと2本もさつさと取って帰ろう。俺たちがいくら上手くなったところでたかだか知れている。本番まであと2日しかないのに、コンピ研に勝てるわけがない。勝てないのに練習するのは徒労でしかないんだぜ。俺は徒労とセロリが大っ嫌いなんだ。

よって俺は早く帰るほうを選ばせてもらっね。

19 時限目（後書き）

臨時ニュースです。12月25日、世界各地でリア充爆殺同時多発テロが発生しました。リア充のみなさんはラブホテルからすぐに避難してください。

20時限目（前書き）

もう大晦日ですよ。今年中に第一稿終わらせよう。今年の汚れ、今年うちに。

20時限目

それからは俺の見事な逆転三連勝によって、SOS団は無事帰路につくことができた。

よほど悔しかったのか、俺に負けた瞬間ハルヒは台を思いっきり叩いて

「今日はこれで解散！あとは各自で練習！」
と言い残して店を出て行った。

むろん、残った団員が素直にハルヒの遺言に従うわけがなかった。んなもんクソ喰らえだ。朝比奈さんと古泉を促してさっさと店から出て行ったね。

帰り道、ニヤケ野郎を半ば無視して朝比奈さんと他愛もない四方山話をしたのがその日一番の楽しいできごとだった。長門がいなければ、朝比奈さんはおとなしくておつちよこちよいな未来人にすぎない。逆に朝比奈さんがいなければ長門も無害な文芸部員に——いや、そうでもないか。何せ中身は一部分谷口だ。ニトログリセリン入りホッカイロくらい危ない代物だな。

だが楽しい時間は本当にはやく過ぎ去るもんだ。帰り道がこんなに短かったのか真剣に悩みながらも朝比奈さんは途中で別の道へ姿を消して行った。

あとに残ったのは計算間違いでなければ古泉と俺だけだ。ひとりで帰るよりはマシだと思っしがあるまい。家についたら、あとは別に大した愛情のこもってない晩御飯を食べて適当に宿題でも済ませよう。俺がそんな人畜無害なことを考えているとき、古泉が横から話しかけてきた。

「実は、あなたに伝えたいことがあるのですが」

「愛の告白と惚気話のうけ以外ならなんでもいいぞ」

こいつがこういう風に話しかけてくるときは、大抵悪い話に決まっている。

「どうせコンピ研との対戦のことだろ。確かに時間がないし、そろそろ対策を考えた方が――」

「いえ、今回の話はその件ではありませんよ」

こいつが俺の話を途中で遮ってまで話したいなんて珍しい。というかはじめてのことじゃないのか？

「いまのところ、閉鎖空間も発生していないようですし」

「なら、その話したい、っていうのはいったい何なんだよ」

俺は強烈な陽光を避けて、なるべく建物の影に入るように歩道の端に寄った。一方古泉の方はといえば、正面からまともに陽光を喰らっているにもかかわらず、涼しい微笑を張りつけたままだ。

「2つあります。2つとも鶴屋さん関連のことなのですが。ひとつはいいニュース、ひとつは悪いニュースです」

「……じゃあ、いい方から聞かせてもらおうか」

「鶴屋さんのだいたい居場所が分かりました。今日、『機関』の他の仲間から報告があったので」

それは確かにいい知らせだ。もうハルヒの鶴屋さん探しに付き合わされることもなくなった、てわけだ。俺は夢でしか参加してなかったけどな。

「まあ、それ自体は確かにいい知らせなのですが」

古泉が俺に遠慮するように言う。

「今は少し厄介な場所にいましてね。そこで今晚、我々が鶴屋さんを迎えに行くので、あなたにも協力を仰ぎたいのですが」

「厄介な場所、ていうのが引つかかるな。まさかハルヒの言ったように黒幕にでも監禁されているとかか？」

いくら先輩のためとはいえ、俺はただの善良な一般市民である。両手にマシンガン持って敵本拠地に乗り込んでワイヤーアクションでも決めればいいのか？

「そんな危ないことはできんぞ」

「いえ、行き先自体は到って平穏な場所ですよ。生命に危害を加えられるような場所ではなく、ごくごく平和な場所です。ただ、少

し特別な場所、とでもいいまいでしょうか。今晚、機関の車であなたの家の前まで迎えに行きます。詳しい話はまた車中で」

なるほどな。今回は鶴屋さんが閉鎖空間にでも閉じこめられたのだろうか。きこうと思ったがどうせまたあとで説明してくれるらしいし、ここはもう一つの知らせをきいておこう。

「んで、悪い方の知らせっていうのはなんだ？」

「愛の告白と惚気話以外ならなんでもいいんですよね？」

古泉が念を押すように言う。こう言われると俺も少し不安になってきた。風呂敷を広げ過ぎると後でどんな厄介事を背負わされるかわかったもんじゃない。

「まあ、そうだな。あとは借金の頼みとかマルチ商法や新興宗教の勧誘とかも禁則事項だな。無論、諸々の法律に違反するような行為の依頼も禁止だ」

「こんだけ言つとけば大丈夫だろう。」

「なら大丈夫です。実は、あなたに少しだけ知っておいてもらいたいんですよ」

「お前の好きなＡＶ女優をか？」

そう言つて古泉の顔を見ると、そこには確かにいつもの微笑が張り付いていたが、明らかにいつもとは違う影が差していた。俺がちょっと目を離れた隙に、１０年くらい年を取った古泉と入れ替わったのかと思われるくらいだった。

「ええ、実はそうなんです」

横断歩道の長い赤信号で止まってそう言ったが、そうでないことは谷口でも分かる。

「んなわけあるか。２つとも鶴屋さん関連なんだろう？ まさか鶴屋さんが生活苦のせいでＡＶ女優にでもなるのかよ」

「だったら買っぞ。」

「いえいえ。まあ、本当に言いたいのは、要するに鶴屋財閥の崩壊についてなんですよ」

「やっぱりハルヒが言つてたように、裏にカラクリでもあったの

か」

「おおよそ、その通りです。単刀直入に言うと、鶴屋財閥を崩壊させた一因は、少なくとも僕にあります」

木材を積んだ大型トラックが、目の前をガタガタいいながら通り過ぎて行った。

俺は言葉を失っていた。確か、昼休みの保健室でも朝比奈さんからそんな話をきかされた。朝比奈さんは、未来からの情報をもとに株価を操作していたらしいが。

「実は、鶴屋財閥はこれまで『機関』の有力なスポンサーでした。しかし、現鶴屋家の当主が援助の見返りを求めてきたんです。超能力を悪用すれば、いくらでも自分の利益を得ることができますから。しかし『機関』はそれを許さず、逆に鶴屋家に懲罰を与えました」

「それを実行したのがお前というわけだな」

「ええ、御名答です。正確には、僕は実行した人間のひとりにすぎませんがね」

いつの間にか古泉の顔から、モザイクみたいな鬱陶しい微笑が消えていた。今度機会があれば、その超能力で俺の持つてるDVDのモザイクも消してくれないか？

「しかし、何も財閥を崩壊させようという気はなかったんです。なにせ鶴屋財閥は我々の強力なスポンサーです。ほんのちよつとお灸をすえるつもりで、内部の機密情報をリークしたにすぎません。大抵の会社は知られたくない情報のひとつやふたつはあるものです。ましてやそれが由緒正しい財閥となれば尚更でしょう」

まあ、確かに経営一族と政治家との癒着とか、いろいろありそうではある。

「そうはいつても、実際に財閥はバラバラになってるじゃねえか」
「そこが問題なんですよ。なぜか我々が機密情報をリークしたとき、それに合わせるかのように株価の乱高下、リコール問題などが噴出した。まるで何者かが裏で糸を引いているかのように」

一瞬、ドキッとした。

なるほどな。そのうち株価の乱高下の犯人は俺もお前もよく知ってる人物だよ。

「おそらく、涼宮さんの言う黒幕がいるはずです。彼女は黒幕の出現を望んでいるようですし、いてもおかしくありません」

「絶望して未来の人類滅ぼすくらいだからな。確かにありえそうだ」

俺はこの時点で今回の事件のだいたいの真相を掴みかけていたが、あえて言わずに話を合わせておいた。通知表と同じく、知らない方が心安らかでいられるだろうからな。

「ですから、もし『黒幕』が何かしてきた場合は、遠慮なく僕に言ってください。全力であなたを守りますよ。もちろん、SOS団もね」

「ずいぶんと頼もしいな」

「ええ。それでも今回の件に関しては、僕なりにかなりの責任を感じていますから」

古泉の顔にいつもの微笑が戻った。

同時に、長かった信号が青になった。

俺と古泉は横断歩道を渡り切ったところで、別々の帰路についた。

「それでは。とりあえずは、今晚また会いましょう」

何とか生きて帰れますように。それだけ祈りながら、俺は家路についた。

家に帰ると、冷めた晩御飯を無視して2階の自室に直行した。

一応、机の上には世界史のノートが広げられているが全くのアウト・オブ・眼中で、頭の中では別のことを考えていた。

鶴屋財閥崩壊についてである。

まず、お見舞いに来てくれた朝比奈さんの言葉をよく思い出してみる。

朝比奈さんは鶴屋財閥を崩壊させる気はない、と言っていた。

なぜ崩壊させる気はなかったのか？

簡単なことだ。未来において多分、鶴屋財閥は健在だったからだ。『だった』と過去形を使うのは、鶴屋さんにはかわいそうだが仕方がない。俺の予想ではすでに未来は変わっちまったんだからな。

あと、朝比奈さんは「禁則事項を『もう一回だけ』破ります」とも言っていたような気がする。ということは記念すべき一回目の禁則違反は今回の株式介入で決定的だろう。

まあ、そもそもが未来を変えるために現代に来ているんだから、多少の手違いはどうでもいのかもしれない。ハルヒじゃないが、俺も過去をいつまでも悔やんでも仕方ない。俺としてはその「もう一回」の方を未然に防ぎたいところだ。

さて、もう一つの要因——古泉の秘密情報リークについてだ。古泉がいうところの『ちよつとしたお灸』らしいが、これは単なる情報流出では片付かないほどの大打撃を鶴屋財閥にもたらしたみたいだ。

銀行という場所は企業の機密情報が飛び交う場所で、それが漏れ出したとなれば銀行の信用が土台から妹歯建築と化す。もっとも、肝心の会計にも妹歯主義が大胆に導入されていたらしく、そう言った改ざんは古泉と愉快的仲間たちによって広く天下に知れ渡ることとなった。加えて、これは後で知ったことなんだが、どうやらそういった失態からどこかの新聞が『鶴屋銀行は倒産する』というデマを流したらしい。

しかし、このデマは計ったかどうかしらんが近い未来の出来事となった。

デマが発端となり、全国にちよつとした取り付け騒ぎが発生したそうだ。そういやニュースにもなってたな。4時間くらいかけて化粧したと思われるニュースキャスターのお姉さんがそんなことを言っていたような気がする。おかげで銀行は最後の金と信用まで失ってしまったという。

爺さんなら5秒で炭火焼鳥になっちまうだろうこの火力のどこが

お灸なのか理解に苦しむが、相手がイージス艦では火炎放射器くらいもってこないとお灸にもならんのかもしれん。

そして最後の鶴屋電機のリコール問題である。これも「あ、ちょっと間違えちゃいました、てへ」（朝比奈さんがそういうなら俺は喜んで許すだろうが）で済むようなことではなく、死者こそ出なかったものの死者が出てもおかしくないくらいの欠陥が全国各地で見つかった。当然リコールで、まずは該当製品を回収して無料で修理し、ついで発売中の製品についてもすぐさま小売店から自主回収、しばらくは販売を自主禁止である。

この一連の騒動も、選挙期間中の政治家であれば大変喜びそうなくらい大々的にマスコミで宣伝、もとい報道され、結果消費者の信頼は完全に地に落ちた。

他の製品も全く売れなくなってしまった鶴屋電機は、それでも生き残りをかけて再起を図ることにしたのだろ。だが、世の中先立つものは金である。鶴屋銀行にその金があれば良かったものの、肝心の親玉銀行はその頃には倒産していたか、でなくとも倒産寸前の状況だったのは間違いない。

結局他の銀行から金を借りるしかない。そして、それを契機に鶴屋電機は完全に鶴屋財閥の傘下から抜けることになった。鶴屋電機という、財閥傘下でも有力な企業が抜けたことによって、他の傘下企業も完全に財閥を見限った。もとより、財閥なんてすでに時代遅れの象徴みたいなアンモナイトのごときモンである。株価の不安定もあって、資金調達に苦しむところはすぐ他の銀行に畑の大根みたいに引っこ抜かれていったであろう。

そして平らな地平線だけが残った、というわけだ。

以上の鶴屋財閥崩壊に対する見解をノートに書き込んでゆく。だいたい間違っていないと思うが、俺が重視したい問題はそこではない。

実行犯は誰なのか、だ。

株価操作は朝比奈さん。

情報リークは古泉。

では残るリコール問題は？

どこぞの名探偵でなくとも分かるような簡単な答えだぜ。

長門しかないじゃねえか。

動機はよく分からないが、現鶴屋家当主は『機関』とかいう組織に首を突っ込み過ぎるような人だ。もしかしたら宇宙人側にも何らかの接触をしていたのかもしれない。

そして邪魔になってきたので体よくお払い箱にされた。

いや、まどろっこしい説明なんぞ不要かもしれん。なんせぶっ壊れた宇宙人端末が何をするかなんて予想できるわけがない。それこそ、ただの気まぐれかもしれない。

もしくは鶴屋さんは妙に鋭いところもあるので、ひよっとするとSOS団の秘密を知ってしまったのかもしれない。しかしあの鶴屋さんがハルヒに「ねえ、実はハルにゃんは神様なんだってさっ！」とか言うだろうか。

言うわけねえ。

言うわけねえが、もし鶴屋さんを親の会社の都合で転校させることができれば、さらに言うわけねえということになる。念の為の保険としてそういう措置をとったということは十分にあり得る話だ。

まあ、正直言っただけの話は全て俺の推測で本当は違うのかもしれないが、おおよそこれでいいだろ。たぶん、あの3人が実行犯で間違いない、と思う。

もう一個大事なことがあったな。黒幕だ。

これらの事件は単発では大打撃だが、財閥崩壊まではいかないだろう。しかし3連コンボ場外ホームランとなれば話は別だ。偶然か？

しかしハルヒは「黒幕がいる」と言っていた。だいたい、これら全てが偶然重なったなんてあり得るか？ 確率的にあまりありそうにないよな。

といって、宇宙人、未来人、超能力者を操れるような人間か何か知らんがそんなすごい黒幕なんて想像できるか？

俺もできないね。できたら後ほどテレパシーで答えを教えてやって欲しいくらいだ。

そこまで考えていたところで、携帯が鳴った。どうやら古泉が到着したようだ。

さて、これから鶴屋さんを迎えにいかなくちゃな。

20時限目（後書き）

今年は糞のような一年でしたね。来年はもっと酷いことになるだろうけど。もはや嫌な予感しかない。

21 時限目（前書き）

とりあえず新年一発目の投稿に間に合うようにしよう。
あけましてクソおめでとう。今年もクソよろしくお願いします。

21時限目

車は家から少し歩いた場所に止めてあった。

なんかヤケに柄の悪い黒い車だと思ったら、中にいたのはもつと柄の悪そうなオッサンだった。

「よう、坊主。久しぶりだな」

全くうれしくない『久しぶり』だったが、俺はドスのきいた渋い声の主を見て驚愕した。

「遠藤さん……ですか……？」

「ハハ。正解だ。覚えておいてくれてうれしいね」

このときほど記憶力を無駄に使用してしまったことを後悔したことは、今振り返ってもない。後になって、どうしてこの記憶力を勉強に使えないのだろうかと真剣に悩んだ。

「ええ、まあ。名刺、もらったんでよく覚えていますよ」

とにかく、ここは俺の無限の資源、オベッカを使うのがいいだろう。

「まあ、とにかく座れよ。話はそれからだ」

そのまま港の倉庫の裏にでも連れて行かれそうな雰囲気だった。

俺が後部座席の奥に身を滑らせたすぐ後に、古泉が乗り込んできて俺の横に座った。

「それでは、例の場所へお願いします」

古泉がそう言うのと、遠藤さんはギアを変えて滑りだすように車を発進させた。

すでに帰宅ラッシュの時間も過ぎたのか、車はまばらだった。

「おい、古泉」

俺は聞きたいことがいっぱいあった。鶴屋さんのことやなぜ遠藤さんがここににいるのかも。どうみてもただの運転手には見えなかった。

「まあまあ。そんなに慌てなくても、順を追ってちゃんと説明し

ますよ。ではどこから説明しましょうか」

古泉は少し考えていたが、すぐに遠藤さんが話しだした。

「まずは俺の正体から話してやるのがいいだろうよ。そっちのほうに分かりやすい」

「そうですね。では遠藤さんから種明かしを」

「ああ。実は俺はな、フフ、異世界人なんだよ」

赤信号で車を止めると、自慢げな顔をこちらに向けて

「ちよつと驚いたか？」

と言ったが、正直そんな程度では俺は全く驚かなくなっていた。

それどころか、なんか笑いながら言われて少し信頼できなかったの
で古泉にきいてみた。

「本当なのか？」

「ええ、本当ですよ。彼、遠藤さんは正真正銘まごうことなき異
世界人です」

「じゃあ、あの鶴屋屋敷の一件もお前と遠藤さんの芝居だった、
てわけか」

「そうです。あのまま放っておけば、涼宮さんが鶴屋さんの屋敷
に居ついでしまうかもしれないからね。僕が遠藤さんと呼んで、
ひとつ協力してもらったんですよ」

アハハハ。作り物のような笑い。

「まあ、そう驚くのも無理はねえよな」

こっちの疑いを驚きと受け取ってくれたようだ。

「一体、どうして異世界人が機関と一緒にいるんですか」

「ええと、それはだな……あれ、たしかここの辺に置いたはずなんだが」

遠藤さんはダッシュボードをガサガサと探って何かを探しだした。
それを見た古泉はすぐに何を探しているのか悟ったのだろう、ポケ
ットから何かを取りだすと

「どうぞ」

そう言うといつの間にか遠藤さんが口にくわえていた煙草に火を

つけた。ちょうど信号が青になったので車を走らせる。

「サンキュー。それはだな、俺たちの事情を知っててかくまってくれるところ、ていえば『機関』しかなかったからさ」

煙を吐き出しながらそう言った。

「あなたは、『世界には同じ顔をした人間が3人いる』という話を聞いたことはありませんか？」

今度は古泉が煙を吐き出しながら俺に語りかけてきた。おいおい、ここは湾岸工業地帯か？ だいたいいつの間にお前もちゃっかり吸ってるんだよ。

「失礼。しかし、あなたも話くらいは聞いたことはあるでしょう？」

遠藤さんが気を利かせてくれたのか、車内の空気清浄機の電源を入れた。煙がファンの中へほとんど吸い込まれてゆく。

「ああ。ドッペルゲンガーとかそんなもののことか」

「ええ。まあそんなところですね」

「あんなモン都市伝説の類だと思ってたぜ」

「しかし実際にあなたの目の前にその異世界人の方が存在している——まあ、口だけで言っても説得力がないでしょうから、ちよつとした証拠をお見せしましょう」

古泉はそう言うつと遠藤さんに何か耳打ちし、その柄の悪そうなオッサンは今度こそダツシユボードからなにやら怪しげなA4くらいの大きさの封筒を取り出すと古泉に手渡した。

古泉が中から2枚の紙を取り出し、そのうち1枚を俺に見せた。

「こちらが今、目の前にいる異世界の遠藤さんです」

少し大きめの顔写真が貼つてある。写真の横に書いてあるデータは俺にはよく分からなかったが、確かに顔は遠藤さんそのものだ。

「そして、こちらが同世界、つまり我々と同じ世界に住む遠藤さんです」

もう一枚の方には、喫茶店で難しい顔をしながら難しそうな新聞を読んでいる遠藤さんの写真が、それも明らかに遠くから撮ったと

思われる写真が張り付けてあった。

少なくとも、俺が見たかぎりこの二人は瓜二つ、全く見分けがつかなかった。

仮に、明日俺の目の前に俺の知らない方の、つまりこの世界の遠藤さんが現れて「よお、また会ったな」と言われればそのまま何の疑いもなく信じてしまうだろう。

「両者は外見だけでなく、指紋やDNAも完全に一致、趣味・嗜好・性格もほぼ同じであるということが、機関の調査で判明しています」

ここまで調べるなんて御苦労なこった。

「だが、古泉。別にお前のことを疑っているわけじゃないが、同じならそれを捏造することも簡単にできるんじゃないか」

コピー機に通すだけで簡単だ。写真は遠藤さんにそれっぽい恰好をさせて撮ればいいだけの話だろう。

「ええ、確かにそうです。フフフ」

なんだ、その気味の悪い笑い方は。

「遠藤さん、その角を曲がって30メートルくらい進んだところでいったん車を止めていただけませんか？」

「あいよ」

遠藤さんの巧みなハンドルさばきで車は古泉の指定した場所にピタリ停まった。

「もうすぐ現れるはずですよ。ほら、言ってるそばから——来たようです」

これにはブツたまげたね。なんせ遠藤さんの双子かと思われるほどよく似た人物が、建物の角から現れたんだから。たぶん会社帰りだろう。着慣れたスーツ姿だ。

こっちの車はスモークガラスだし、車内の電気もすでに消してあったので向こうに悟られることはなかった。そのままもうひとりの遠藤さんは信号を渡って暮れなずむ街の中へ消えて行った。

古泉が肺いっぱい吸い込んだ煙をゆっくり吐き出しながら言っ

た。

「どうです、これで少しは信じていただけましたか？」

少しどころか多いに信じるね。信じるから、将棋で勝ったときの小憎たらしい微笑を俺に向けるのを止めて欲しい。

「じゃあ話も終わったみたいだし、そろそろ車を出してもいいかな？」

遠藤さんの問いかけに、『いいとも！』とは言わずに

「ええ、そうですね」

と普通に答える古泉。つくづくおもしろくねえ野郎だ。

「そして少し話は変わりますが――あなたがもし自分の分身を自由に生み出せるとしたら、一体どうしますか？」

そんなことはひとつに決まってる。

「その分身に学校に行つて代わりに勉強してもらつ」

さすがの分身も毎日だと嫌になるだろうから、なんなら交代制にしてやつてもいいかな。二人いれば、あのハルヒにも勝てるかもしれない。

「まあ、そんなところでしょうね。しかし、世の中そうそう『良人』ばかりではありません。もし異世界人が何か犯罪をしたとしたら、どうでしょうか？」

当然、罪はこの世界にいる人間に及ぶだろう。

「ようするに、もう一方の自分に罪を着せて自由に完全犯罪ができる、てことか」

「ええ。しかし、もつとタチの悪いことにこの両者が手を取り合つたとしたら？」

「たぶん、二人とも思考回路もそっくりだろうから、ろくでもないことばっかりやらかしそうだな」

特に異世界からもう一人ハルヒがやってきたら、相当ヤバいことになるそうだ。想像したくもない。

「さらに、もしこちらの世界の自分が、元の世界とは違って金持ちだったりした場合も厄介です。下手をすれば殺してでもその人に

なり替わろう、ということになりかねませんからね。とにかくそういった諸々の事情があつて、機関では異世界人を見つけてはかくまっている、というわけです」

「そりゃあいい。どうせ異世界人、ていうのは最近になって増えてきて機関のお偉方はその原因をハルヒのせいだと考えているんだろ？」

「なかなか理解が速くて助かります」

煙で輪をつくりながら笑つてそう答えた。

遠藤さんが異世界人だということは俺もよく分かった。

「けれど、俺たちはこれから鶴屋さんを迎えに行くんだよね？」

「いたいこの話がどう関係するんだ？」

「それは、今から僕たちが異世界へ行くからですよ」

古泉は0円スマイルを向けて俺に言った。

「鶴屋さんが飛ばされてしまった異世界にね」

フーッと吐きだした煙で、さっき空中に作つた輪を吹き飛ばしながら。

21時限目（後書き）

リア充と仕事に死んで欲しい。

22時限目（前書き）

ついに完結した！ 第一稿なのでもうちよつと推敲等必要になるが、見事完結しました。この間に実人生でもいろいろ経過し、読み直す感慨深いものが……

俺のキヨンは本当によく頑張ってくれたよ。

この作品から得たものは必ず次に生かします。

22時限目

それから細かい疑問を遠藤さんや古泉にきいているうちに——遠藤さんが異世界では金融業に従事していたこと——そしてその経験を生かして今回の騒動で屋敷を差し押さえるのに成功したこと——鶴屋屋敷に乗り込んだときにいたチンピラみたいなのも異世界人で、昔は暴走族だったらしいが今は更生したこと——あと車をへこませてごめんなさい——いいよ板金屋のオヤジ脅して修理させといたから——誠に申し訳ありませんでした——いや冗談だって、そんなにビックリするなよ（正直これが一番びっくりしたね）——鶴屋屋敷についた。

遠藤さんは車で待機し、俺と古泉のふたりで勝手口から屋敷へ入り込んだ。

どう見ても前にみたことある屋敷と完全に同じだ。扉の『売り家、現在買い手募集中！』の張り紙まで同じだ。

「ここが異世界なのか？」

「いえ、まだ違いますよ。しかし、ここには異世界への扉がある」古泉が遠藤さんからもらった鍵を差し込む。なんだか重い金属音とともに扉は開いた。

「さあ、どうぞ」古泉が執事のように開いた扉へ俺を導く。

これが異世界への扉だったとはな。俺はアンパンマンみたいに勇気を振り絞って扉を通り抜けた。

「あんまり変化はないな」どこかへ飛ばされる、という感触など何もない。ただ長い廊下が前と同じく、暗闇の中へ伸びているだけだ。

「いえ、まだ違いますよ。そう焦らないでください」

お前が思わせぶりの演出をするからだろ。

「僕は『異世界への扉がある』と言っただけで、何もこの扉がそうだとは言ってませんよ」

シレッと言いながら電気をつけた。つくづくいけすかない野郎だぜ。まあいい。それならサッサとその扉を探して鶴屋さんを連れ戻してくるまでさ。

「扉は、2階の鶴屋さんの部屋の中にあるそうです」

古泉に先導されて2階の部屋へお邪魔した。

中は鶴屋さんらしくきれいに片付いている。それでいて机の上にはミニサボテンや熊のぬいぐるみなど、女子高生らしいアクセントも忘れない。流石である。ハルヒもちょっとはこれを見習って欲しいくらいだ。心中を投影したような悪魔的カオス空間の部屋にはもううんざりしてるんだぜ。

「んで、まさかここが異世界とか言うんじゃないだろうな？」

年頃の女の子の部屋だ。ある意味異世界とも言えなくもない。

「まさか。機関の超能力者によれば、この中のどこかに異世界への扉が隠されているそうです」

どうせならゴーグルアース並に「机の上から2番目の引き出しです」とかいう風に特定して欲しいもんだが、仕方ない。あまり他人のプライバシーに超能力で踏み込むのはよくないしな。それがどれだけ嫌なことなのか、俺も身をもって体験済みだ。

とりあえず、古泉と二手に分かれて広い部屋を搜索することにした。

まずは机の引き出しだ。有名な青い猫もここから登場するし、一番怪しい場所でもある。

開けてみると、中にはかわいらしい文房具やらが散乱していたが到底異世界には見えなかった。ここで俺には一抹の不安が芽生えたので、念のために他の引き出しも全部開けて調べてみる——よし大丈夫だ、コンドームはない。俺が断言するから安心していい。

「ちゃんと調べていますか？」

「ああ、ばっちりだ」

たったひとつの真実を告げて捜査を続行する。

そういえば、ベッドの下も定番だ。調べてみると、見たこともな

いような少女マンガが並んでいた。後はよく着るような普段着。

ここにもコンドームや避妊薬はなかったから安心していいだろう。あと他に怪しいところといえば、クローゼットの中くらいか。ナロニア国物語ではここから異世界に移動したし、ひよっとしてビンゴじゃないのか——だが開けてみるとそこは俺の部屋と同じくらいの広さがあるウォーク・イン・クローゼットだった。おそらく外行き用だろう、高級そうな服がところ狭しと並べられていた。中には和服もある。

ここも隅々まで探したが見つからなかった。

収穫なく引き揚げたところで、ちょうど古泉が声をかけてきた。

「見つかりました。ここですよ」

意外とあっさり見つかったんだな。古泉の方に歩み寄り、コイツの指さす方に目をやる。

そこには服の下につける布切れ——いや、もう遠慮せずにはつきり言ってしまうおう。

要するにパンツやブラジャーがきれいに折りたたまれて、ぎっしりとタンスの引き出しの中に詰まっていた。

さすが我らが古泉先生、これは世紀の大発見だ。今からヤフオクで売りさばこう。だが、その前に意外と黒が多いことはハルヒに報告しといたほうがよくないか？ あいつも同じ年頃の女子がどんな下着をつけているのか、きつと興味があるだろうし。

「まさか本当にこんなところにあつたなんて。僕も信じられませんよ」

邪馬台国の場所を特定する重要な遺跡を掘り当てた考古学教授のような口調で言った。

「少し確認してみますね」

俺は、多分その下着の中からひとつ摘まみ出して検分するんだろうと思っていたが、そこはさすが、古泉教授のやることは俺の想像を遥かに超えていた。

教授は両手で引き出しの取手を掴んで体を固定すると、勢いよく

その頭を下着の海へ突っ込んだ。

「どうやらこれで間違いないようです」

ブラジャーの隙間から古泉のくぐもった声——今まで聞いた中で一番確信のこもった力強い声だ——が聞こえた。こんだけ気合いを入れて確認してくれたら鶴屋さんも本望というものだろう。

しかし俺の方はといえば——正直いうとこのジメジメした季節に、背筋にうすら寒いものを感じていた。

古泉の勇気と根性には大いに好感が持てるが、いくら谷口でもこれは引くだろう。当然、ウブな俺ならドン引きだ。

どうやら明日になったらみんなに古泉は遠くの学校へ転校したと伝えておいたほうがよさそうだな。多分ハルヒのやったことの後始末に超能力を使いすぎて、脳細胞が半分くらい死滅してしまったんだろう。市内にいい脳神経科の病院があったはずだ。大丈夫、3カ月に一回くらいはお見舞いに行つてやるよ。

俺がそんなことも考えているとは知らず、古泉はようやく鶴屋さんの下着が織りなす異世界桃源郷から顔を上げた。こういうときになんて言えばいいのか、俺は全く分からなかった。そりゃそうか。日本語作つたやつも、こういう事態を想定して作ってくれたわけではないしな。

だがそんな心配をよそに、頭の右側にブラジャーをぶら下げた古泉が先に口を開いてくれた。

「そういえば、あなたは普通の人でしたね」

そうだ。俺が平均的地球人とすれば、今やお前はアンドロメダ性人が神の寵愛を受けた下着性人だ。どっちにしても、俺の手の届かない人間になっちまったんだよ。

「あなたにも分かるようにしますので、少しの間だけ目をつむつてもらえますか？」

俺は言われた通りに目をつむると、古泉の未来に神の御加護があるように祈りを捧げた。

ああ、天におわします我らが神よ、いつか古泉イツキが普通の人

間にもどれますように。あと、せめて刑務所だけは勘弁してあげてください、アーメン、ソーメン、シクラメン。

「大丈夫です。それでは、目を開けてください」
目を開けて驚いた。

なんせ、それまで下着がギッシリ詰まっていたはずのタンスの中が空っぽになってたんだからな。かわりに、どこまでも続く真つ暗な空間だけがそこに広がっていた。

「おい、これは一体どういうことなんだ」

「どういうことも何も。これが我々の探して求めていたもの、そう、異世界への扉です」

それは雰囲気でなんとなくわかる。どう見たってタンスの中がこんなに広いわけないしな。ウォーク・イン・タンスなんて聞いたことすらない。

「それよりも、どうして今まで見えなかったものが急に見えるようになったんだよ」

「僕が最近、自分の意思とは無関係に新しい超能力を身につけている、そこまでは大丈夫ですよね」

俺は無言でメンドくさく頷いた。

「また最近、新しい超能力を習得したんですよ。今回の能力は、どうやら他人に超能力を譲渡する能力みたいです。こういう異世界へのワームホールというのは、普通の人間には一切知覚できません」

なるほど。宇宙人、未来人、超能力者がそれに準じる存在でないとそもそも見ることでできないというわけか。

「なので、あなたにはさつき目を閉じてもらっている間に超能力者になっていただきました」

ほう、それはすごい。ついに俺も世界を救う超能力者の仲間入りか。思わず両手を広げてその手のひらを眺める。

「一体どんな能力が俺に譲渡されたんだ？」

時を止める能力か？ 遠隔視や未来予知もなかなか使い勝手が良

さそうだな。ハルヒがよからぬことをたくらむ前に阻止できるかもしれん。それかオーソドックスに念力か？ だったら暇つぶしに妹のクマのブーさんのスプーンをみじん切りにしてやるう。

「いえ、あなたに譲渡した能力は、臭いを消す、というものです。えらく地味だ。どんなときに使えばいいのかもわからない。

「別に臭いなんて消さなくても納豆ぐらい食えるぞ。まあ、回転寿司の安っぽい磯臭さが消えるのはありがたいが」

「いえ、その能力はもつと特定の場合にしか効果を発揮しません」

「いったいどんな場合なんだよ」

「つまり、体から放出されたメタンガスの臭いを消す場合です」

「要するに」

俺は一瞬躊躇した。言えば負けのような気がしたが、自分の能力くらいは把握しておきたい。

「それはオナラということか？」

「まあ、端的に言えばそういうことになりますね」

古泉の微笑に、猿が餌欲しさに瓢箪の中に手を突っ込んで抜けなくなったのを見て憐れむような色が混ざった。いい加減にしないと俺はいつかその顔にオナラの親玉を叩きこむことになるだろう。

だが古泉はそんなこと僕にはお構いありませんねといった感じで、得意満面に追撃を始めた。

このとき俺は初めて『死体殴り』の本当の意味を知ったね。

「ちなみに、スカシ専用のようです」

言い終わった瞬間、古泉の口の端が大きく持ちあがった。どうやら爆笑をこらえるのに必死のようだ。よく分かったよ。ちゃんと保険には入っているかな？ これから階段を降りるときは背後に気をつけた方がいい。

「そんなこと実験してるお前も相当笑えるぜ」

俺はせめてもの反攻を試みた。

「いえいえ。実験はあなたに任せますよ。僕はただ、そういう能力が身についたと直感で認識できただけです。涼宮さんのおか

げでね」

およそ10秒で撃退されたようだ。

古泉は急に真面目な顔に戻ったが、その1ナノメートル下には爆笑が渦巻いていた。もしデスノートブックを拾ったら死因のところは『ボットン便所に落下して臭死』で決定だな。俺にその超能力を譲渡したことを後悔しながら、ジワジワ死んでいくがいい。

「まあ、そんなことは置いておきましょう。それより、僕たちにはやらなければならないことがあります」

古泉が改めてタンスの引き出しの中を指さした。

その黒い空間をまじまじとよく眺めてみると、ボットン便所より薄気味悪く見えてきた。

まあ鶴屋さんを助けるためだ。覚悟を決めるしかあるまい。

「着きましたよ」

真っ暗な空間の中で、古泉っぽい声が俺にそう言った。一体どこに着いたというんだよ。俺はそう言い返したはずなのに、まだしつこく俺に語りかけてくる。

「着きましたよ」

もついい加減にしてくれ。タンスに飛び込んだときと全く変わらない暗黒空間じゃねえか。宇宙にでも放り出されたのか？ その割には星のひとつも見えんぞ。それか本当にボットン便所の中なのか？ だったら蜘蛛の糸が降りてくるのを待った方がいいかもな。

「まもなく 電車が 発車します お降りの際は 足元に ご注意ください」

無機質な音声が暗黒空間に響き渡る。おなじみの声だ。こいつも実は宇宙人製のアンドロイドもどきだったりしてな。もしそうならSOS団のみんなと一緒に銀河の中心で白鳥の湖でも踊ってるよ。タリリラ〜タリリリラ〜ラ〜ラ、ラ〜ラ、タリリリラ〜

“早く起きてください！”

次の瞬間、俺はハッとして辺りを見渡した。どこにでもありそうな回送電車の光景が、目の前に広がっていた。

俺はさっきまで鶴屋屋敷の中にいたはずなのに——そんなことを悠長に考えている間もあればこそ、車内アナウンスはあと2、3秒で扉が閉まることを告げていた。

“とにかく早くそこから降りて！”

コイツがエクスクラメーションマークをこんなに使うなんて余程のことなんだろうな。どうせどっかの車庫に入ってまた戻って来るだけだろうが、戻ってきたときにコイツに馬鹿にされることだけは何としても避けねばなるまい。

とにかく、全力で走った。ドアまでわずか数メートルの距離だったが、ドアが閉まってゆくことに古泉の微笑も首を絞められているかのように引きつっていった。今度は俺を馬鹿にするような笑いではない。

ドアは見る見るうちに狭くなっていったが、なんとかすり抜けてホームの黄色い点字ブロックに着地した。全力とはいえたかだか数メートル走っただけで、俺の心臓はメロディックスピードメタルのドラムばりにドコドコ脈打っていた。

「危ないところでした」

ああ。危うく車庫まで連れて行かれるところだったぜ。膝に手を当て、ぜいぜいと息を継いだ。

「あともう少しで異世界の狭間に迷い込むところでした。僕も少し焦りましたよ」

いや、それなら少しどころが大いに焦ってくれ。だいたいそんな底なし沼みたいなところに迷い込む可能性があるなら、到着5分前から起こしてくれよ。

「どうやら僕たちは別の電車で作ってきたようです。ここで待っていて良かったですよ。ちなみに異世界の狭間というのは文字通り世界と世界の狭間——隙間のことですね。どういうことかというところ、物理学者たちによって提唱された超ヒモ理論で説明される11次元

の

「んなことは後でメールでも送ってくれ
すぐに消去するから。」

「それより」俺は呼吸を整えてから言った。

「ここはどこなんだ」

「だから異世界ですよ。我々の元いた世界とは違うね」

「陽が高すぎる」

確か元の世界で遠藤さんの車に乗った時点で、すでに陽は地平線
ギリギリだった。

「いわゆる時差みたいなものですよ」

まあ、古泉が言うんだからそうなんだろうな。周りの駅の光景は
一般的なものだったが、よく見ると全く知らない駅名だった。これ
が異世界だからなのか、もともと俺の知らない場所なのかは分から
ない。

「ここまで来ればあとは簡単です。鶴屋さんの居場所はだいたい
分かっていきますので、僕についてきてください」

「それより古泉」

「なんででしょう？」

「のどが渴いた」

さっきの猛ダッシュと古泉の気持ちの悪い説明のせいで、嫌な汗
をかいたからだ。

「売店で何か買おう」

「いいえ、それには及びませんよ」

古泉がメタンのような鼻につく微笑を浮かべながら言った。

「これから行く先でゆっくりと飲めますのでね」

最初からそこにワープしてくれれば手間が省けたのにな。後ろを
振り返ると、俺が乗ってきたはずの電車は跡かたもなく消えていた。
一体あの電車のようなブツが本当は何だったのかは、今でもあまり
考えたくない。

この駅を出る前に切符はどうするのかききたかったが、ポケット

に手をやってみるとそこには全く買った覚えのない切符が入っていた。いや、切符というより回数券のようなものだったが、なにせそれは見たこともない種類のものだったし鉄道マニアでもない俺にはよく分からないな。

「そうそう、その切符は大事なもので絶対なくさないようにしてください。なくした場合、最悪この世界から帰れなくなる可能性がありますのでね」

まあ、切符のことは先に言ってくれただけマシということにしていやるか。

なくしてから言われたって、それこそどうしようもないからな。

「あと、頭についてますよ」

古泉が俺の頭を指さして言う。

「何がだ？」

「一刻も早く取った方がいいと思います」

「だから何なんだよ」

さっきのこともあるし、俺は少しビビりながら頭へ手をやった。やわらかくてなめらかな感触。なんだ、これは？

「幸いまだ誰にも見られてないようです。今の内に、早く」

それを掴んだ手をおろして俺は驚愕した。そこには宇宙空間を切り取ってきたと思えるほど真っ黒な、鶴屋さんのおしりを長期間にわたって保護してきたであろう布切れが握られていたからだ。

「さあ、どこでもいいから早くしまってください」

そんなことを笑顔で急に言われてもすぐに対応できるように人間はできていない。

しばらく——といっても1秒に満たぬ時間であつたらうが俺は迷った末、手に持ったブツを切符の入ったポケットに無理やりねじり込んだ。

「なかなかハラハラさせてくれますね」

ああ、全くだ。俺も危うく普通の人間でなくなるところだったぜ。

謎の切符で改札を抜けしばらく歩くと、そこらじゅうがコンピ研の部員みたいな人間で埋め尽くされたビル街に出た。中にはハルヒに強要でもされたのか、朝比奈さんのようなコスプレ姿で歩いている人間もかなりいた。このクソ暑い中ゴテゴテした衣裳を着ようなんて、俺には強要されたとかしか思えないね。大抵は俺のテストの答案並に直視するに耐えないような人間ばかりだったが、ドブ川の中にも稀に金塊が混ざっていた。無論、そんな程度の金塊に朝比奈さんを上回る人間はひとりもなく、なぜか俺自身はそれでもとても誇らしい気分になった。

誇らしい気分になれるのは滅多にないことで非常にありがたいのだが、俺も古泉も制服のままだった。普段なら何の問題もないが、この場所を制服で歩いているとどう見ても直視するに耐えないコスプレ集団の一員のように見えてしまう。

「むしろ、それでいいですよ。郷に入っては郷に従えます。その方が正体を隠すのにも都合がいい」

「何の正体だ？ お前はともかく俺はただの一般人だぞ」

少なくとも下着に頭を突っ込んだりはしない。

「しかしここでは違う。あなたは異世界人で、あなたという人間はもうひとりいる——さっきの遠藤さんのようにね」

それを聞いて、俺はすこし気味が悪くなってきた。だってその角から「よお、元気か？俺」とか言うか言わないかは分からないが、とにかく俺と全く同じ人間がそうやってひょっこり話しかけてくる可能性があるってことだ。そう考えるとただのオタクの集まった場所に過ぎないこの腐った歩道も、アスファルトに浮かぶ塵気楼かと思っくらいに現実感を失っていくから驚きだ。

それこそ映画かドラマの中の街みたいに見えてきた。

「案外その通りなのかもしれません。この世界をひとつの映画とたとえるなら、僕たちはそこに入り込んだ観客、予期せぬエキスト

ラといったところでしょいか」

迷い込んだのがハルヒでなくてよかった。あいつならエキストラで満足するはずがない。主役を奪っちまうだろうからな。

「ええ、確かに彼女ならやりかねません」

そこまで話したところで古泉の足が止まった。

「どうやらこのようですね。着きましたよ」

小洒落れた西洋風の家みたいな店が、このビル街のど真ん中に建っていた。場違いにも程がある——そう思っていたのは看板を見るまでの間だけだった。

看板には『メイド喫茶』と書かれてあった。古泉曰く喫茶と書いて『カフェ』と読む——というか読ませるらしい。

洒落てるだろ？

こついのをマネして、俺もこれからは『犬のフン』と書いて『かりんとう』と読むことにするよ。

なあに。どっちも似たようなモンさ。

22時限目（後書き）

完結して思ったことは、もう小説なんて書きたくない、てことです
ね。（けっこうマジで）

23 時限目（前書き）

「何かもつと斬新な料理が食べたいな」とか言うので斬新なものを食わしてやったら「これはちよつと合わないなあ」とか言う人いますよね。

そいつが俺だよ。

23時限目

店の中に入ると谷口ならAランクに分類しそうなメイド二人が俺たちを出迎えてくれた。ハルヒがいたら狂喜乱舞してここに朝比奈さんを研修に出し、これからの集合場所はこのメイド喫茶に変更になったであろう。俺はそれでもいっこうに構わない、と言いたいく所だった。がメニューを見てやっぱり気が変わった。コーヒー一杯400円じゃ俺の財布は外堀を埋められた大阪城より早く陥落する。だいたい、同じようなコーヒーが近くの喫茶店では200円だ。言っちゃ悪いがこういうイロモノ的な店のコーヒーなんて缶入りのをそのままカップに注いでいるだけだろう。あんまりあこぎな商売をしていると地獄に落ちることになるぜ。

「何にしますか？」

「普通のコーヒーでいい」

半分はどっかの薬みたいにメイドさんの愛情が詰まっているとしよう。そうでないと値段の割に合わない。

「それだけでいいんですか？ せっかくだし何か食べましょうよ」

「そうは言ってもメイド喫茶だぜ。正直、飯が美味いとは到底思えん」

「イロモノだと思っただけでナメているとしたらそれは考え違いです。

ここはかなりのやり手ですよ。他の席に座っているお客さんを見てください」

いや、古泉に言われるまで全く気付かなかった。道路にあふれていたオタク臭い人間はなぜかこの店にほとんどいない。代わりにどこから引つ張ってきたのか普通のサラリーマンやあまつさえ家族連れの人までが隠れキリシタンの礼拝堂みたいにここに集まっていた。

「まさか全員異世界人とか言うんじゃないだろうな？」

「いえいえ。ここにいるお客さんは全て『一般人』ですよ。わざわざオタクの街に、この店だけが目当てで客が来る——それだけこ

この料理はレベルが高いということです」

思わず確認するかのように俺は客のひとりひとりを眺める。

「さらにさつき少し厨房を覗いてみたんですが（おそらく超能力で、ということだろう）、どうもかなり気合の入った、本格的な厨房のようです。『料理を見なくても厨房を見ればだいたいの味は推測できる』と言いますが、僕の未熟な経験とはいえこれだけの設備をそろえた店はそうそうお目にかかれるものではないと言えるでしょう」

そこまで言うと言超能力を使った疲れか、異世界に来てようやく落ち着ける場所に来てホッとしたのか、懐からおもむろに煙草を取り出して火をつけた。

「ご心配なく。料理が来るまでです」

また空中に煙の輪を作る。お前、それ好きだな。

「しかし、金なんて持つてないぞ」

ハルヒにほとんど奪われたからな。

「大丈夫です。ここは僕にお任せあれ。機関の調査機密費という名目でかなり持つてきてますので」

ああきつと越後谷の甘いお菓子を受け取る悪代官もこんな微笑を浮かべていたんだろうと思いつながら、俺はメニューの中で一番高そうかつ美味そうなのを瞬時に選んだ。

「どうやら決まったみたいですね」

表情で悟られたか。古泉は煙草を灰皿に押し付け、さつきのアラシクメイドを呼んだ。

「とりあえず仙豆のスープとイヴァリース風チヨコボの手羽先、焼き加減はファイガで、あと不思議の海の新鮮リゾットとラクーン風ピザ・ハーブ多めで」

「俺はラダトームのキャセロール、焼き加減はベギラゴンで、あとアカギのチキンランミネストローネパスタ時速150キロ」

一体どんなメニューなのかすらよく分からないが、多分これで大丈夫なはずだ。

複雑な注文だったが、そこは流石メイドさんで、朝比奈さんなら
噛み噛みであろう復活の呪文を長門のようにスラスラと復唱した。
でもまあ、朝比奈さんの噛みまくる姿もそれはそれで見てみたいよ
うな気がする。

「そうそう。あと前菜で生ハムたっぷりなサイヤ人盛り合わせ・
ギャリック砲をお願いします。デザートはどうします?」

「チョコレート攻城ラピュタ、飛空石つきで」

「いきなりそこに行きますか」

古泉がいかにも常連というような顔をする。そりゃ機密費でタダ
なんだから3000円くらいどうってことないだろ。このためにわ
ざわざメインディッシュの注文を少なくしたりと、一応は気を使っ
てるんだぜ。

「お前は何にするんだ? 早く決めろよ」

古泉はかなり迷っているようだったが、しばらくしてから意を決
してメニューの一点を指さし「では、この最終人型決戦ケーキの式
号機をお願いします」と言って注文は終了。

「かしこまりました、ご主人様」

メイドが完璧な作法でメニューを下げて厨房の奥へ消えてゆく。

「実はコードギアス逆のミルフィューとどちらにしようか迷っ
ていたんですよ」

「両方とも頼めばいいだろ。残したら俺が食ってやるよ」

そう言った瞬間、古泉は「すいません」とさっきのメイドを呼び
戻してすかさず追加注文、そんな無茶な追加にも嫌な顔ひとつせず
対応するメイドさんの笑顔は店内を照らす100ワット電球より明
るく輝いていた。いやあ、できればこのメイドさんと一緒に食事で
もしたいもんだ。古泉、財布だけ置いて今すぐ元の世界に帰ってく
れないか?

「さてさて、どんな料理が出てくるのか、正直言って待ちきれま
せんよ」

俺の心情も知らずに、そのエセコスプレイヤー気取りは悠然と2

本目の煙草をフカしだした。

まさか——いや、あり得ない。一抹の不安が頭をよぎったが、すぐさま打ち消した。

だってここには一般人しかいないんだぜ。ほら、そこにいる無邪気にはしゃぐ子供たちを見てみるよ。ゲテモノ料理で子供があんな顔できるか？ できるわけないだろ？

だから、落ち着いて料理を待つんだ。いくらなんでもゲテモノ料理でオチはないだろ。長門にエグイものを食わされたからそういう杞憂が浮かんでくるんだ——

そうやって無理やり心を落ち着かせている俺を尻目に、古泉が呑気そうな微笑を浮かべながら空中に煙の輪を作り始めた。今度は2つ3つと重ねてから、その中心を一気に吹く。古泉の口から出た煙の槍は見事3つのドーナツツの中心を貫き、天井へ溶け去っていった。

本当にお前はそれが好きだな。今度ハルヒに見せてやれよ。超能力とか言って喜んでくれると思うぜ。

そうこうしているうちに、意外と早く前菜のサイヤ人盛り合わせがテーブルの上にやってきた。普通サラダと言えばレタスばかりな印象があるが、ラディッシュからはじまりゴボウや菜の花といった、普通サラダには使われないような野菜も入っていた。むろん、食べやすいようにちゃんと料理して洋風に盛り付けてあり、そこに職人のただならぬ意気込みが感じられる。ん？ なんだ、あのレタスの下にある巨大な芋虫のような物体は——ただのアスパラガスだった。思わず本気でビビっちまった。

俺は、まずオーソドックスにアスパラガスにレタスを巻いてさらに生ハムで包みこんでから、ハルヒに殴られた傷もそろそろ癒えかけた口に入れて頬張った。

噛んだ瞬間、俺の舌に電撃が走った。

生ハムの肉汁と野菜が混じり合い、一瞬にして俺の口の中は春うららかなアルプス牧場と化してしまった。こうなると、薄暗い芳醇

な森に差し込む木漏れ日のような味を心のなかでひたすら賞賛し続けるしかない。

しかもこの上にかかっているソースのようなものは一体なんだ？
「おそらく、オリーブオイルをベースにガーリックと胡椒その他諸々を加えたものでしょう」

古泉はそう言いながら、俺が食う予定だったトマトをサツと取って口の中に放り込んだ。

しまった。くだらないウンチクを聞いていたせいで獲物を取り逃がしたじゃねえか。俺は一番ソースが多くかかってそうなところへ瞬時に照準を移し、フォークで丸ごと突き刺して口へ運んだ。このソースに俺は完全にハマっていた。バラのトゲのように気品があつて柑橘類のように香ばしい。まさに料理にかける香水。きつと朝比奈さんの黄金水もこんな味がするに違いないと思いながら、モツシャモツシャと口を動かし味わい続けた。

ものの2、3分でサイヤ人が絶滅すると、他の頼んだ料理がAクラスメイドに運ばれて次々とやってきた。

俺の頼んだチキンミネストローネは、なんとパスタが麻雀牌の形になっていた。しばらくの間、俺は夢中で麻雀牌を胃袋へほりこんでいったが、途中であることに気づき手を止めた。皿のふちにパスタを並べてゆくと――

「見る、古泉。国土無双じゅうさんめ――」

「どうやら始まったようです」

古泉が国土無双十三面待ちを蹴るほどだから、さっきのAクラスメイドのストリップショーでも始まるのかと思っていた。だが、実際に俺の目線の先にいたのはそれよりも驚くべきものだった。

23 時限目（後書き）

この場面書くのにもものすごく時間かかったのを僕たちは今でもまだ覚えてる。

24時限目（前書き）

誕生日という呪われた一里塚。
（中二病）

24時限目

店の中にはステージがあり、そこで演奏会なんかを行えるようになっていた。しかし俺たちが店に入ってきたときには視線はAクラスメイドに釘付けになっていたし、席についてからは他のテーブルの影なんかで死角になっていたし、注文が来てからは古泉すら眼中にないほど料理に夢中だったため、今まで全く気付くことはできなかった。

壇上に鶴屋さんがいたのも驚きだったが、まあ本来の目的が鶴屋さんを迎えに行くことなのだから、いてもおかしくはない。むしろここにいなければ、俺たちはただ単にメイド喫茶にお食事をしに来ただけのコスプレイヤーになっちまう。それも機関の金でな。

それはさておき、俺が国土無双に心臓を吐きだすんじゃないかと思つたのは、その横にいるAAランク+のメイドのせいだった。

壇上の二人は静まり返った店内の客に向かって軽くお辞儀をする——パチパチと拍手があがる——さっきよりも深い静寂——鶴屋さんは横のピアノへ、AAランク+はひとあし前へ歩み出してから持っていたバイオリンを高く掲げた。

俺は古泉に、なんでここに朝倉涼子がいるのかききたくてしやうがなかったが、どう見てもそんな雰囲気ではなかった。いまここで口を開くことは、授業中に立ちあがってマスターションするに等しい行為に思える。

俺が戸惑っている間に、朝倉と鶴屋さんは目線で合図を交わしてからリズムをとって、演奏を開始した。

よく優雅さを表現するときに『水面を舞う妖精のようだ』というが、最初の音はまさにその妖精が水面に足を乗せた瞬間だった。俺は音楽なんて全く知らないが、それでもそれだけは分かった。

情熱的なバイオリンとピアノの儚げな伴奏。この曲をなんていうのか未だ知らない。あのあと探してみたがどうしても見つからなか

った。いまでもこの曲を思い出すと、なぜだか七夕の夜に校庭にナスラの地上絵を描いていたハルヒの姿が思い浮かんでしまう。

やがて二人は音の階段を駆け上がり、駆け下がり、曲調が変わってまた音階を駆け上がって——最後の音が店の壁に吸収された。

店の中は静まり返っていた。演奏が始まるまではしゃぎまわっていたガキも、最後まで静かにお行儀よくしていた。それだけの効果があった、てことだろうな。

それから鶴屋さんが立ちあがり、壇上で二人並んでお辞儀をした。さつきよりもひと際大きな拍手があがった。

二人が壇上から消え去った後、客たちはさつきの演奏がどれ程素晴らしかったのかを賞賛しながら料理にナイフやフォークを突き刺していった。俺も、国士無双十三面待ちが張り付いたまま少し冷めたミネストローネに視線を戻した。手を休めていた麗しきメイドたちも、すぐに持ち場に帰っていった。

「それにしても、すばらしい演奏でした」

古泉が何か微笑ましいものを見たような表情で言った。いや、確かに微笑ましい光景ではあったが、自分を殺そうとしたやつを目の前にするのは相当心臓に悪い。それがたとえ異世界の別人であったとしてもだ。

「どうしたんですか？ 早く食べないとその国士無双が冷めてしまいますよ」

「んなもんはどうでもいい」

本当にどうでもよくなっていた。鼻汁並にぬるくなっていたし、残したとしてもどうせこの代金は古泉持ちなんだからもつたないと思うこともない。

「それより、どうしてやつが——朝倉涼子がここにいるんだ」それは古泉に言っているのではなく、むしろ独り言に近いものだった。だいたい『どうして』なんてことはわざわざきく必要がない。なぜなら全てのことは——

「おそらく涼宮さんがそう望んだからでしょう」

「ワンパターン極まりないな」

そこら辺のＡＶでももう少しひねってあるぜ。

「全くその通りですね。まあ、だからこそ我々の仕事というのがあるわけですが」

その我々の中には俺も含まれるのだろうか。だとしたら労働基準法違反もいいところだ。イカレ女のお守りをこちらから金を出して請け負ってやっているんだから、自分で自らの大いなるボランティア精神を褒めてやりたい。自画自賛とか言われそうだが、別に構わない。どうせ文句を言うてくる奴はボウフラ並にこの世に満ち溢れているが、誰かが褒めてくれることなんて滅多にないんだからな。だったら、たまには自分で褒めてやるくらいいいだろ？

「だから今日はここに招待したんですよ」

「どういう意味だ？」

「実をいうと、すでにお二人には事情を話してあります」

「どういうことだ？」

「つまり、今日はあなたをもてなす為にここにお呼びしたというわけです。鶴屋さんと朝倉さんをこちらに連れてくるだけなら僕だけで十分ですから」

「じゃあ、鶴屋さんが行方不明とかいうのも全部嘘だったのか？」

「いえ、それは全部本当ですよ。ただ、あなたの誕生日があまりに……その、あまり良くなかったようなので」

「ああ、あれは最悪だったよ。神が見えたな」

「なので、せっかく鶴屋さんが異世界のこのような場所にいるのだから、というわけで、こちらで用意させていただきましたよ。任務のついでで申し訳ないですが、これは機関のあなたの献身的活躍に対するお礼です」

俺が「それは何なんだ？ かたつむりケーキ２号機か？」と言おうとした時、

「キヨン君、誕生日おめでとぅっ……！！」

と背後から久しぶりに聞き覚えのあるハイテンションな声がした

ので、重くなつた胃袋ごと体をひねって後ろを向いた。そこにはメイド姿の鶴屋さんと朝倉涼子の姿があつた。といっても、鶴屋さんは大きなラピュタ城を持っているせいでほとんど顔が見えなかつたが。朝倉は例のバイオリンをまだ持っていた。それで俺の後頭部でも殴るつもりなのかと思つたが――

“大丈夫です。外見は似ていても、実際には異世界の別人ですから”

俺は自分でも意識してない内に、まじまじと朝倉の顔を見つめていたらしい。朝倉は、それを急な誕生日イベントでビックリして呆然としているのだと思つたのだらう、子供がクリスマスの翌朝目を覚まして靴下の中を見てみると欲しかったモノが入っていて「何これ、すっごい！」と言つてふとママの顔を見上げた時に目にするであろつ表情をこちらに向けてきた。

俺はそれでも、この急な誕生日プレゼントにしばらくはあつけに取られたまま――多分、そのクソガキみたいにアホみたいな顔をしていたに違いない。そうしている間にも、鶴屋さんは懷から口ウソクを取り出し、目の前にそびえたつチョコレート之城に手際よく突き立て始めた。古泉がご自慢のライターをさも当然というかのように取りだして、口ウソクに火を灯してゆく。気がつく、いつの間にか店内の照明が暗くなつていた。チョコレートの表面に口ウソクの火が反射している光景が、これ程美しいなんて今まで知らなかつたな。テーブルの上が中世の夜景のようだつたよ。

「それじゃあ、いくよっ！」

鶴屋さんは朝倉に合図を送つた。朝倉が頷いてバイオリンを持ち上げる。朝倉の伴奏に合わせて、鶴屋さんが誕生日定番の曲を歌い始めた。すぐにその中に古泉も加わり、他のメイドも加わり、いつの間にか調子のいい他の客も加わつて軽い合唱のようになっていった。そして最後の1小節で、いったん全員の声が止まって――

「ハッピーバースデー、トゥーユー…… おめでとぅっ！ キョ
ン君っ！」

最後は鶴屋さんが一人で歌った。意外にも、しんみりとした歌声だったのが今でも印象に残っている。

歌声が壁に消えていった直後、店中を揺るがすかと思えるほどの大きな拍手の渦が巻き起こった。それはいつまでも続くように思えた――が、しばらくするとようやく止んだ。

客の視線がなぜか俺に集中していた。俺は悪いことをしてクラス全員の前で説教を受けているような気分で―― 一体みんなは俺に何を期待しているんだ？

“ 早く、ロウソクの火を ”

そんなことは小学生の低学年以来だったので、完全に忘れていた。煌々ともるロウソクに顔を近づけ、一気に吹き消す―― 2 / 3 本は、火が小さくなってからまた燃えだしたが、それに構わず、さっきの鶴屋さんと朝倉の演奏の時より大きな拍手が鳴り響いた。

ロウソクはキレイに消したかったが、まあ仕方あるまい。俺の年齢よりかなり多かったから、一回で全部消すには肺が4つくらいないと無理だっただろう。

拍手が鳴りやむと同時に、店内の灯りが元に戻った。鶴屋さんが消えたロウソクを忙しく片付ける。

あとに残ったのは廃墟になったようなケーキの残骸だけだった。いや、確かにロウソクの挿した後以外に何も変わるところはない。ないが、店の照明がついた瞬間に俺の目に映ったのは中世の夜景ではなく、すでに住民も消えて時の流れに取り残され、遺跡になったケーキの残骸でしかなかった。

さっきのは夢だったのか？ 今でもそう思うときがある。

ポンッ！

俺の耳元でコルクの栓が抜ける音がした。

「どうぞ、召し上がって」

朝倉はそう言って俺の目の前にそつとグラスを置くと、中に赤い液体を注ぎ始めた。

「では僕もいただきますか。やはり、誕生日と言えばワイン

でしょう」

いったい何をもってそう断言しているのか分からなかったが、とにかく俺たち二人は俺が生まれたことに乾杯してから一気にグラスの中身を飲み干した。

こりゃあいい。俺の疲れた体の中にじわじわ染み込んできやがる。

「どうぞ、どうぞ、もう一杯」

「悪いな」

「もうキョン君っ、こっちが主役なんだからっ！」

少し呆れながらも、鶴屋さんが廃墟と化したケーキを皿に切り取ってくれた。

「僕も少しもらっていいでしょうか？」

「ああ。どうせひとりで食いきれん」

「ありがとうございます。それでは」

パリパリと音を立ててまたもや城が切り取られ、中の飛空石が露わになった。

俺もまず一口、ラピュタ城をスプーンですくって口の中に放り込み、しっかり味わってからワインと一緒に流し込んだ。

その間だけ、俺は全ての面倒なこと——明日も学校の退屈な授業があるということやハルヒの相手をしなければならないということ——を忘れることができた。

そして誕生日に初めて、自分が生まれてきて良かったと思えた。

もはや白いテーブルクロスの上には、空になった食器以外何も乗ってはいなかった。

まあ、俺の予備の胃袋が急遽作動し、すべてをブラックホールよろしく飲み込んでいったからなんだが。俺の食いつぶりに、古泉はもちろん、俺自身ですら驚いていたくらいだ。

多分、長門の家で味わった『新世紀ディナーゲリオン“残酷な食事のテーゼ”』のせいで俺の食欲の一部が欠落していたのが、今回

の料理で復活したというのが理由だろう。今まで抑えつけられていた食欲が、今回の料理で復活、抑圧されていた分、凄まじい勢いでラピュタ城を食い散らかしたというわけだ（ついでに人型決戦ケーキ式号機の下半身と反逆のミルフィューの半分も食べた。ミルフィューは俺の胃袋に入るとすっかりおとなしくなったが。もう少し反抗的でもよかったと思う）。

「さて、まだまだ鶴屋さんが仕事を終えるまでに時間があります
が、どうしますか？」

さすがの古泉も、満腹感を隠せないでいた。

「ゲーセンでも行きますか」

「それもお腹いっぱいだ」

古泉がゲップを抑えながら笑った。

「全く、その通りです」

「しばらくはここで休んでよう」

そうしないと、道中で俺のブラックホールがホワイトホールと化すことだろう。

「2、30分休んで歩けるようになってから、どこかゆっくりできそうなところを探す」

なんとか吐かずにそれだけ言い終えることができた。

「ちよつと、いつまでここにいろつもりだいっ!？」

「鶴屋さん、あと2、30分だけここに座ってあなたの麗しい御姿を眺めていてもよろしいでしょうか？」

「キョン君つてば、そうやってごまかさないでよっ!」

鶴屋さんは、俺自身も社交辞令なのか本気なのか分からない戯言に少し顔を赤らめながらも

「並んで待つてる人がいるんだからっ!」

メイドとしての任務を最後まで遂行した。いや、あなたはメイドの鏡ですよ、あのアホ女にも見せてやりたい。

鶴屋さんが指さした方を見ると、うざそうなクソババアとエロそうなクソジジイの集団が待合席に座っていた。

ここに来る前に天国に行ってくれと思ったが、来てしまったものはしょうがない。俺たちは重くなった胃袋を引きずりながら何とかレジまでたどり着いた。

「誕生日だからって、割引はやってないよっ！」

俺が言おうとしたことを見事に見透かしたつもりだろうが、今日に限っては関係のない話だった。

合計9430円を、俺の心強い財布野郎が全額支払った。

「まいどありっ！」

「そうそう、鶴屋さん」

俺は去り際にきいた。

「ここら辺でどこかゆつくりできそうな場所、知りませんか？」

それから2、3時間、俺たちは鶴屋さんが教えてくれたネカフェでオタク集団と満腹感に首までどっぷり浸りながら過ごした。

俺はずっと、最近気になる漫画『ガッソ』を読みふけていたが、時間がくると古泉が声をかけてきたのでそろそろ良い頃合いなのを悟りながら、長門と血のつながりでもあるのかと疑いたくなるようなくらい無愛想な店員に料金を払い——店を出た。

駅のホームに着いた時はまだまだ高かった陽が、もうかなり傾いている。ビルに反射したオレンジ色の陽光が俺の目を刺した。

思わず閉じたまぶたの裏側に、夕陽で真っ赤になった微笑を浮かべる朝比奈さんの顔が浮かんだ。

俺たちは——SOS団は今回のことで、元通りになるのだろうか？最後に本当の意味で朝比奈さんの笑顔を見たのはいつのことなんでしょうか？——束の間、朝比奈さんが俺の美濃囲いにお茶をぶちまけたあの日に見た湯呑の底が思い浮かんだ。そんなに遠くはないはずだ。なのに今では、あの平和な時が宇宙の外側くらい遠くに感じられる。

そして俺たちのせいで鶴屋さんの会社も倒産し、メイドに身をや

つす羽目になった。

俺たちは今まで精いっぱいハルヒの暇つぶしに付き合ってたはずだ。何が不満でこんな訳の分からんクソのど真ん中みたいな状態になっちまったんだよ。頼むから、前の世界に戻してくれ。

多分、俺だってなんやかんや言いながらも楽しんでたんだ。ハルヒは俺の退屈な日常を、本当の意味で青春にしてくれていたんだ。頼むから、全て元に戻してくれ——そう願っているうちに、いつのまにか日陰に入ったので目を開けた。信号の向こうに鶴屋さんと朝倉涼子が、すでに私服に着替えて待っていた。鶴屋さんがこっちに向かって手を振っている。

ああ、今ならあの時の千本ノックを受け切れる自信があるぜ。

24時限目（後書き）

よくこんだけしょうもない描写書けるなあ、とマジでオモタ。でもまあ、描写するのが目的に書いたようなもので、これはこれでいいか。

25時限目（前書き）

『後書き』はワシが育てた。

25時限目

駅に着いたので俺はポケットから例の胡散臭い切符を取り出し、改札へ近づいていった。

「あれ、キヨン君、ハンカチ落としてるわよ」

後ろから朝倉にそう呼び止められたが、ハンカチなんて持つてきた覚えは全くなかった。多分、どっかの誰かがたまたま落として、それをたまたま朝倉が見つけて俺が落としたと勘違いしたんだろう、すぐに駅員さんにも渡しておくか——と思って後ろを振り向くと、確かにあった。黄色の点字ブロックのど真ん中。宇宙空間を切り抜いてきたと思われるほど真っ黒で、鶴屋さんのお尻を長年に渡って保護してきたであろう布切れが。

「あ、俺ってホントどこか抜けてるような、大丈夫です、自分で拾いますから」

と言おうとした。言おうとしたが、俺が口を開く前に朝倉の指先がハンカチに擬態している黒い布切れに触れる方が早かった。

そのまま黒い布切れは空中へ持ち上げられ、朝倉の目の前で蝶が羽化するように広がった。

しばらく時が止まっていた。それが数秒なのか数年なのかは分からない。ただ、あれほど騒然としていたホームが、急に銀河の淵みたいに静まりかえった。その空間には時間の止まった俺と朝倉しかいなかった。

俺も朝倉も何を言えいいのか分からないでいた。二人は無言で見つめ合っていた。少なくともロマンス小説的な織姫と彦星という意味以外で。

「ああ、それはですねえ——」

古泉が朝倉の背後から声をかけてきた。きつと何か上手いことを言っでごまかしてくれるに違いない——頼んだぞ、古泉。朝倉の信用を失うかどうか、全てお前にかかっているんだ。

「彼自身が着用するためなんですよ」

「え？」

俺も朝倉と同じことを言いそうになった。一体こいつは、俺をどこの時空の狭間に突き落とそうとしてるんだ？

「彼は大好きな美少女アニメキャラに心の底から切り切るため、こうして女性用の下着を身につけているというわけです。いえ、決していやらしい目的のためではありませんよ」

笑った口の隙間から見えた白い歯を、バールのようなもので思いっきり叩き折ってやりたいと心の底から思った。

「あ、それと朝倉さんがもっているのはいわゆる『お守り用』で、着用したものではありませんので、ご心配なく」

「ふーん、そうなんだ……」

朝倉は古泉の説明を聞いて明らかに心配そうな表情で、布切れを摘まんだ状態で近づくと、そつと俺の手のひらの上に置いた。俺も、本当は手のひらを差し出す気なんてなかった。しかし、いきなり変態コスプレイヤーにされ戸惑っていて、どう対応すればいいのか分からなくなっていた。なにも、それが欲しかったわけではない。たまたまこつちの世界に来るときに頭に引っかけただけだからな。

朝倉は黒い布切れを俺に渡すと、動物園の檻から離れるみたいに素早く後ずさりして言った。

「でも趣味は人それぞれだと思うの」

何やら意味深でいろんな意味に解釈できる言葉だったが、少なくとも俺をフォローする意味は全くこれっぽっちもミジンコの涙ほど含まれてないことだけは、何よりもよく伝わってきた。

とにかく執拗に俺と目線を合わせないようにしながら、朝倉は俺を迂回して自動改札機の向こうへと渡った。その後を古泉が続く。

俺はしばらく、ただ茫然としていた——俺は何を得て何を失ったのか？——じつと手を見つめる。

古泉、ちょっと失ったものが大きすぎやしないか？

“確かに普通の人間ではなくなったかもしれないが、犯罪者よ

り良かったと思いますよ。下手をすれば、元の世界へ戻る前に駅長室へ行く羽目になっていたでしょうね”

そしてもし鶴屋さんにバレれば、銀河の淵で時間が止まるどころの騒ぎじゃなくなるだろう。足元からブラックホールに吸い込まれるような感覚を味わうことになりそうだ。

それでもなあ……　なんとかならなかったのかよ。お前は超能力者だろ？

「キヨン君っ、早く早くっ！」

背後から改札機越しに、鶴屋さんが呼んでいる。

鶴屋さんに見つかってしまいう前に、俺は素早く手の中のブツをポケットの中に――さっきよりも深く――ねじり込んでから、改札に切符を通した。

“まあ、超能力者と言っても、所詮神ではありませんからね。万能ではないんです”

なんか時間吹っ飛ばすスタンドみたいな使えただろ？　あれでどうにかならなかったのか？

“そういえば、そんな能力もあつたような気がします。それならなんとか誤魔化せたかもしれないですね。しかし、急にいろんな能力が備わって、僕自身でも把握しきれず困っているくらいです”

今度、ハルヒに記憶力を上げる超能力を使えるように頼んどくよ。もう二度とこんなことが起こらないようにな。

“それはいいですね。テストで使えそうです”

階段を上がっていくとすでに電車が到着していた。3人とも、すでに電車に乗り込んだ後だった。

ぶるるるるる。あの宇宙人じみたアナウンスだ。

『電車が　まもなく　発車します』

俺は急いで、ハルヒがよくやる2段飛ばしで階段を上がっていった。

「キヨン君っ、もつと走ってっ！　乗り遅れちゃうよっ！」

クソッ、慣れないことはするもんじゃないな。もう限界だぜ、精

神的にも肉体的にも。ハルヒはこんなキツイことをスキップ・スキップ・ランランランとこなしていたんだな。しかも、今回はラピュタ城の残骸がまだ胃の中でうずいてやがる。

「あゝっ、もうっ、ヤバイよっ！」

今度こそ落とさないように、少しポケットを気にしながら、全力で閉まりゆく扉へ向かって走った。

目が覚めると俺はいつの間にか、ガラガラになった電車の中にいた。

車窓から外の景色を眺めると、もう夜の帳に丸い月がかかっている。眼下には家やビルの看板が、銀色の夜に文明の彩りを添えていた。きつとあの灯りの下の一つ一つに、日常があるんだろうなあ。

退屈で、うんざりするほど繰り返される日常が。でも、貴重な日常が。今では遥か彼方に逝ってしまった日常。どうすれば見つかるんだ？

「どうも、こんばんは」

そう言われてふっと横を見ると、古泉が真横に座っていた。

「なんだよ急に。気色悪いな」

わざわざそんなところに座らなくても、他にも座る場所なんていくらでもあるだろうに。

「いえ、なんとなくですよ。ようやく元の世界に帰れた感想はどうですか？」

「早く家に帰って宿題があつたことをスッパリ忘れて寝たいね」

「同感です」

元の世界に帰ったからか、古泉のニヤケ顔にも若干安堵した表情が混ざっているように見えた。

俺は改めて薄暗い車内を見回した。

「そういえば、朝倉は？」

鶴屋さんは仕事で疲れたのか、俺の向かいの席に座って寝ている。

朝倉も、確か電車に乗ったはずだった。

「途中で降りて帰りましたよ。今日は長門さんの家に泊ってもらいます。明日に復学の準備ですね——と言っても復学するのはたった一日だけです」

それが明後日のコンピ研との勝負の日というわけか。

「大正解です」

「わざわざその日に復学させる、ていうからには朝倉も『一般人』じゃないんだろ？」

「またまた大正解です。異世界の朝倉涼子はアーケードゲーム大会で優勝するほどの腕前を持っています」

俺はため息ともゲップともつかない空気を口から吐き出した。全く、お前らのやっていることはエグイとしかいいようがないな。

「いえいえ、『エグイ』のは僕らではなく、涼宮さんの方ですよ。鶴屋さんが異世界に迷い込み——そこで朝倉さんに出会い——僕らが迎えに行く——そして異世界の朝倉さんは格闘ゲームプロ級の腕前——これが一体どれだけの確率だと思います？」

多分、鶴屋財閥が崩壊するくらいの確率だろうな。

「ひとつだけ言えることは、涼宮さんはこの勝負に関して絶対勝利するつもりでいる、ということです。どんな違法、無法な力を行使してでもね。普段なら彼女の力がこうやって異世界に及ぶことなどあり得ない話ですから。もしそんなことが許されるなら、全ての並行宇宙が滅茶苦茶になってしまう。ある宇宙Aの涼宮さんが、とある思いつきで別の宇宙Bを勝手に改変する、そしてその改変によって今度は宇宙Bの涼宮さんが宇宙Cを改変する……指数関数的玉突き現象でカオスは全ての並行宇宙へと広がってゆくでしょう」

不思議なことに、さっき目覚めたばかりなのに早速眠くなってきた。古泉が長い話をするたびに『たまたま偶然』眠くなるなんてすごい確率だと思う。そう考えると古典の教師もなかなかの確率の魔術師といえよう。

しかし俺は鶴屋さんの安らかな寝顔を見るためだけに、眠気に耐

えながらクーラーで乾燥する目を開けておく必要がある。

鶴屋さんは座席に座って手すりに寄りかかりながら、夢の中の草原を走り回っていた。

多分。

とにかく、鶴屋さんの寝顔は無邪気で罪がなかった。夢の中まで俺を奴隷扱いしているような、後ろの席で爆睡している鬼畜女^{ハルビ}とは違ってた。

「やがてカオスが極限に達すると、全ては虚無に却ってゆくでしょうね」

「お前、明日から新興宗教の教祖にでもなれよ。けっこう稼げると思うぞ」

「遠慮しておきます。他人に担がれるのは、なんとなく苦手なので」

「担ぐのは得意だけどな」

「大正解です」

「担ぎあげた後、突き落とすのが楽しくて仕方ないんだろ？」

「アハハ、それは誤解ですよ。だいたい、改札で『アレ』を落としたのはあなたの不注意じゃないですか」

相変わらず痛いところを突いてきやがる。

まあ、確かに俺の不注意だったと言えなくもない。そこら辺は認めてもいいが、お前のあの釈明は駅のホームに散らばっているゲロよりたちの悪いシロモノだったじゃねえか。朝倉からは完全に変態だと思われただろうな。

「ええ、完全にね」

電車の窓から放り出してやりたい。もっとも今のこいつなら本当に放り出されたとしても、次の駅辺りで「やあ、またお会いしましたね」と爽やかな笑顔で乗り込んでくることだろうが。

「しかし、あなたが寝ている間にはうちりフォローしておきましたので、ご安心を」

「なんてフォローしたんだ？」

神社のおみくじくらいの期待を込めてきいてみた。

「3次元の女性には興味が無い、という風にね。あなたはアニメの美少女にしか興味が無い、という設定にしておきました」

もう隕石が降ってきてても大丈夫って感じの頼もしい笑顔をこっちに向けてきたが、どうやら隕石はすでに落ちた後のようだった。それも特大のやつが。どちらにせよ、すでに朝倉の誤解が解けることはないだろうと諦めていたけどな。

でも、古泉、とっさの言い訳にしてはまあまあだよ。

「そう言っていただけだと嬉しいですね。改札のときと同じく、時間を止めて考えた甲斐があるというものです」

「お前、もう無敵だな」

「そうでもないですよ。この能力にも弱点と言うか、副作用がありましたね。時を止めている間、息を止めなければならぬんです」
「費用対効果は充分だろ」

MP5でバハムートを召喚できるくらいの効率だ。

「以前とは大違いだな。前は例の閉鎖空間内で、変な赤い玉になるだけだったからな」

「そうなんですか」

「覚えてないのか？」

「ええ。ただ、なんとなく以前の状況に戻らなくてはならないような気がするんです。おそらく、僕もあなたと同じく前の世界の方が楽しかったんでしょうね。こんな超能力なんて使えなくても」

俺には十分、これ以上にないくらい楽しんでるように見えたが古泉がそう言うんだからそうなんだろう。

「それほど楽しくもないものですよ、実際に使ってみると」

「そんなもんかね」

「そんなもんです」

「「次は〽️終点〽️終点でえ〽️す、お降りの際はあ、傘などお忘れ物がないよあ〽️ご注意くださいあ〽️い」」

駅員独特の間の抜けたアナウンスが響き渡った。と同時に、鶴屋

さんが乙女の純情夢世界から戻ってきた。鶴屋さんは眠い目をこすりながら何とか状況を把握しようとしていた。

「ん……？ あれ、もう着いたのかいつ？」

「いえ。しかし、もうすぐ到着しますよ」

「んっ」

両腕を上大きく伸ばしてから

「ふぁっ！」

と大きなあくびをした。流石は鶴屋さん。あくびまで若干テンションが高めだ。

「最近疲れてるのかなあ。なんかよく変な夢を見るんだっ」

少し笑いながらそう言った。後ろの車窓から見える夜景に、八重歯が映えた。

駅で降りたら、そこで鶴屋さんとは別々になった。鶴屋さんはそのまま街の灯りの中へと消えてゆき、俺たちは待ちかまえていた遠藤さんの車に乗り込み、また鶴屋さんとは違う灯りの方へ向かっていった。

車の中では特に会話はなかった。というより、俺自身が満腹感とアルコールのほろ酔い気分とで、ほとんどあっちの世界へ飛び立っていたからではあるが。

そのまま家の前まで送ってもらい、車を転げるように出てから2階の部屋へ直行した。途中、酔いが回っていたせいで階段を登る途中で足を踏み外してしまった。あとコンマ何秒か遅れていたら病院か天国へ直行していただろうが、なんの偶然かそのときは体がすぐに反応し、手すりを掴んで事なきを得た。

「キヨン君、だいじょうぶ？」

妹が階下から俺を見上げながらそう言った。

「ああ、何ともないさ」

「ふっん」

妹は俺の横をさつさと駆けあがって2階の部屋へ消えていった。
なんか今日はやけに疲れた。きっと駅のホームでダッシュしまく
ったせいだ。

残りの階段を登る途中、宿題のことがチラツと快速急行くらいの
スピードで頭の隅をかすめたが、当然全くやる気はおきず、そのま
まベッドへ直行した。

ベッドに駆け込み乗車すると徐々に意識が薄れてゆき、すぐに寝
ているのか起きているのか分からないような領域にさしかかった。

全く……俺はただの高校生だぜ。あんまり無茶はさせないでくれ
よ……

俺の周りの人間は、どうして俺にばかり重荷を背負わそうとする
んだ………

25時限目（後書き）

別に読んで欲しいなんて思っていないんだからねっ！

26時限目

6月の蒸し暑い教室の中、俺は一人冷や汗をかいて突っ立っていた。

「わかりませんかあゝ、キヨン君？」

英語の教師が、歯の間に犬のフン（かりんとう）でも挟まっているかのような口調で、俺をあだ名で呼びやがった。そのせいで俺は鼻の頭にクソを押し付けられたような落ち着かない気分になった。実際のところコイツの口はドブ川みたいな臭いがするらしく、裏ではみんなが『スカトロ先生』と呼んでいた。

「いえ、わかりません」

昨日の宿題で出たところだ。結局カバンから教科書を取りだすことすらしてない俺がやっているわけがない。

「一体昨日は何やってたんだ、おまえら？」

スカトロの口調が明らかに今までと変わった。4連続で「わかりません」と言われて、もう怒りの許容量を超えかけているんだろう。ちよつとカルシウムでも摂って落ち着いてから、昨日俺たちが何をしていたか聞いてくれよ。

俺は世界を救うために異世界へ遠足に行っていた。谷口は多分、頼まれたAVのコピーにいそしんでいたことだろう。今じゃあ、それ専門のDVD屋さんとして大変繁盛しているらしいな。その次に当てられた手島は、家が母子家庭だからバイトでもしてたんだと思う。見た目はチャライやつでときどき問題を起こしたりもしたが、ときどきこつちもびっくりするくらい大人びた言動を取るときがある。そういうときは、口調までいつもと違って全くの別人になっちゃう。そして最後は俺の前に座っている山根。こいつは俺とは違って本当のアニメオタクだから、多分深夜アニメの視聴にいそしんでいたと思われる。

みんなそれぞれ自分の『宿題』を抱えているんだよ、スカトロ先

生。

だから、みんな当てられても「わかりません」と即答するしかなかったんだ。

と心の中で言っても先生には分からんだろうなあ。

「おい！ 手島あ！」

スカトロがいきなり教壇を叩いて怒鳴り声をあげた。

瞬間、手島の、腕の中に沈み込んでいた頭がびくつと持ちあがった。

「おまえ、さっき当てられたのに何もう寝てんだ？」

「いえ、すいません」

これはマズイ。スカトロはなぜか手島を目の敵にしている。

「どうせクソ集めみたいな仕事でもやってこづかい稼ぎしてたんだろ？ あんまりナメた授業態度だとこれから先、こづかいが稼げなくなるぞ？」

「はい、すいません」

嘆きの壁に向かって懺悔するユダヤ教徒みたいになだれて、手島はなんとかそれだけ答えた。

当てられてからずっと窓際で突っ立っている俺には、教室中の生徒がとにかく一刻も早く授業最後の5分間が過ぎ去りますようにと祈っているのが視界中から感じられた。流石に今回ばかりはハルヒも俺の不幸を笑うどころではなく、クラスのみんなに加わって必死に神に祈っているようだった。

「本当にわかったのか？」

「はい、わかりました」

「チツ」

まあ、今回はこれで済んでくれたようだった。

「それじゃあ、キヨン、谷口、山根」

名指しで呼ばれて嫌な予感しかしなかった。この拷問が長引くという予感しか。

「わかるところだけでいいから、今から考えてみる」

やっぱりな。問題の箇所は英文の和訳だった。俺はしばらくローマ字の羅列を眺めていたが、さっぱりわからなかった。あとの二人も同じだった。

俺は一度目線を英文からそらし気分を落ちつけると、朝の通学電車で週刊誌のヌードグラビアを凝視するおっさんよりも強い眼差しで、下線部の英文を見つめ直した――が、当然ながら全く答えは思いつかなかった。谷口も山根も、同じような状況のようだった。

「おまえら、また黙秘権の行使か」
バンツ！

また教壇を叩く音。

「もういい加減にしろ」

スカトロがそう言い終わった瞬間、授業終了を知らせるチャイムが静まり返った教室に響き渡った。

スカトロはしばらく小言を誰に言うともなくブツブツつぶやいていたが――このままだと生徒のやる気のなさで授業の進行が遅れる、それはゆくゆく君たちの進路に影響するかもしれない、とかなんとか、そんなところだ――それもひと通り言い終わると、黙秘権を行使しまくっている教室から足早に立ち去った。

スカトロが立ち去って5秒くらいしてから、教室に休み時間の喧騒が戻った。

俺も自分の席にへたりこむようにして座った。

ああ、やっと宿題が片付いたぜ……

そう思っただけとしたのも束の間、すぐに俺の肩を例の不審者が後ろからつついた。

「ついに明日ね、明日。分かってんの？」

そんなに耳元で言わなくても、よく分かってるさ。

「なんかさ、古泉君が助っ人連れてきてくれたらしいじゃない」

「まあ、みたいだな」

俺はゆっくりと後ろに向き直りながらそう言った。

「ホントに彼は頼りになるわね。どっかのだれかと比べるまでも

なく模範的なSOS団員だわ」

ああ、分かってるよ。

「助っ人が誰だかきいても教えてくれなかったけど、きっと頼りになる人に違いないわ」

まあ、俺は分かってるんだけどな。

「それと今日は最後の練習だから、納得いくまでみっちりやるわよ！」

ああ、それも……分かってたよ。おまえがそう言うであろうことぐらいは。

最後の一番重要な宿題はまだまだこれからだってこともな……

そんなこんなを経て、放課後は無事にゲーセンにて決戦前夜祭となる総練習を始めることができた。といっても、俺たちはほとんど基本操作+αくらいしかできていないし、朝比奈さんに至ってはもはや8月31日の宿題並に絶望的な状況——つまり、最初から腕前は何も変わってなかった。もはやあとは古泉の頼もしい助っ人に頼るしかない。日本の食料自給よりひどい依存率だぜ。

放課後の最後の足掻きは、いつも通り長門抜ききの4人だと思っていたが、今日は意外な——いや、別にそうでもないか。まあ、俺にとっただけはお馴染みの鶴屋さんが来てくれていた。

ゲーセンに入るやいなや横から鶴屋さんが飛び出してきて、いきなり声をかけてきたのだ。

「やあっ！ はるにゃんっ！ 元気だった？！」

「あ」

鶴屋さん？ まあ、なんて意外な人がここにいるのかしら——とでもハルヒは言おうとしたんだろうが、肝心の名前が思い出せないので英語の授業中の俺みたいに答えに窮しているようだった。

「えーと、そう、ずいぶんと久しぶりね、うんうん」

と当たり障りのない台詞を鶴屋さんと自分にひたすら言い聞かせ

て時間を稼いでいたが、やがて

「ずいぶん探したのよ。なんか大変なことになってるみたいじゃない」

先日の探索のことをようやく脳細胞からひっぱり出してやることに成功したようだ。

「うん、まあ、ちょっとしたゴタゴタがあってさっ！でももう大丈夫っ！完っ全っ復っ活っ！だよっ！」

「うんうん、よかったわね」

微笑みを顔に張り付かせたままそう言うハルヒだったが、目の色は完全に笑ってはいなかった。どう見ても終電間際に急いで家に帰ろうとしたところをしつこいポン引きにからまれたサラリーマンのような目をしている。

「今日はちょっと用事があるから、後でまたゆっくり話しましょ」
「そうそう、それなんだよっ！その『用事』のことなんだけどさっ！」

この時点で、ハルヒの顔面に張り付いていた微笑にヒビが入った。そばにいる俺のところまでヒビの入る音が聞こえてくるくらいだったぜ。

「なんかまたハルにやんたちがコンピ研と勝負するみたいだけど、人が足りないって聞いちゃってさっ！こうなったらやっぱりSOS団名誉顧問の出番じゃないかっ！」

「もう間に合ってるから、大丈夫よ」どうやら、鶴屋さんが助っ人ではないことは分かっているらしい。

「そんなに遠慮しなくても大丈夫だってっ！さあっ！これでSOS団の全力前進快進撃の始まり始まりっ！」

「どうしても参加したいの？」

「どうしたんだいっ？！急にそんな――」

「参加したいの？」

ハルヒの問答無用の問いかけに、流石の鶴屋さんも快進撃を止めざるを得なかった。もはやその微笑は蜘蛛の巣みたいなひび割れが

縦横に走っており、一部から下の表情が垣間見えるくらいまでになつていた。

「あたりまえじゃないっ！ SOS団はいつも一心同体なんだよっ！」

「それじゃあ、ちよつとした問題に答えてもらうわ。今回の『用事』に関する適正検査のようなものだと思ってくればいいから」

「大丈夫だよっ！ クイズなら得意だからさっ！」

「それじゃあ、問題」

ジャジャン！

「ウザくてうるさくて、語尾に『っ！』を連発している緑色のキモイモ虫、てな〜んだ？」

「う〜ん、これは難しいねっ！ さすがに全然分かんないよっ！」

「ヒントは、そのトイレの鏡に映ってるものだから。ちなみに制限時間は無制限よ。しばらくはここにいると思うから、分かつたらいつでも声をかけてきてね」

そう言い残すと今や完つ全つ沈つ黙っ！した鶴屋さんを尻目に、ハルヒはゲームセンターの奥へと足を伸ばしたが、そこで何を思ったのかまたもや鶴屋さんの方へ振り返った。

「そうそう。これ、渡しとくわ」

鶴屋さんは何か言おうとし、そのときハルヒと目が合った。そして結局は何も言えないまま目を伏せた。

鶴屋さんが手に握らされていたのは200円だった。いつの間にやらハルヒが渡していたようだ。

「わたしたちの邪魔しない程度になら、適当に遊んでいいから」ハルヒはそれだけ言つと、鶴屋さんを背後に残して今度こそゲーセンの奥にへ入って行つた。んで、俺はこの残された鶴屋さんのお守りでもすればいいのか？ ていうかお前は、鶴屋さんの名前くらい思い出せたのか？ そう思っていると、ハルヒが俺たちの方を振り返つた。

「さあ、みんな。心おきなくみっちり納得するまで練習するわよ

！それにいつまでもそんな入口でウジウジしてたら他の人にも迷惑じゃない！」

それでまず古泉がついて行き、その後を朝比奈さんが追った。一人取り残されることが決まった鶴屋さんの前を横切るとき、朝比奈さんは無言でちらつと鶴屋さんを見たが、それだけだった。そのままハルヒのほうへ、巨大惑星の引力で引き寄せられる小惑星みたいに引き寄せられていった。

俺も三人を追いかけようとしたさ。俺もあの二人の超能力者と未来人のように、ハルヒにはやっぱり逆らえない——今日は特に意気込んでいるようだし、と思っていたさ。

しかし通り過ぎる時の鶴屋さんの表情を見て、一人俺だけ心が変わった。

鶴屋さんがこんな表情をしていて良いわけがない。

そうだ。鶴屋さんのおでこはもつと明るかったはずだ。そこでまたもや野球大会の一連の出来事を思い出した。あ那时的鶴屋さんと今の鶴屋さんが俺の瞳の中で重なった。

あときは鶴屋さんにふさわしい、もつと明るい場所にいた。こんな薄暗い騒音だらけの場所ではなく、もつと健康的な場所。こんな騒音の肥溜めじゃなく。

「えっ！？　ちよつとキヨン君っ……！」

気がつくと俺は鶴屋さんの手首を掴んで、そのままゲーセンの外へと飛び出していった。

「きっかけは些細なことだったんだ。昼休みに一緒にお弁当食べてるときだったんだけどね」

鶴屋さんが、座っているブランコを小刻みにキーキー揺らしながら話し始めた。

「みくろがカフェオレか何か飲もうとしたんだ。紙パックに入ってるやつ。そしたら、ストロー挿した瞬間にぶわぁーって、先から

噴水みたいにカフェオレが吹き出してきてさ。よくあるじゃん。膨らんだ紙パックにストロー挿したら先から吹き出してくる現象って普通はちよつと手が汚れる程度だけど、その時の勢いはもう尋常じゃなかったんだよ。みくるの顔までベトベトになったし、お弁当もカフェオレでビチャビチャになっちゃってさ。んで、そのときの勢いがあまりにすごかったから、私、爆笑しちゃったんだ」

俺は隣りのブランコに座ったまま、黙って聞いていた。ここでは余計なツツコミなど不要だろう。しかしまあ、聞いているだけでその光景が想像できる。朝比奈さんならありそうな話だ。

「それ以降だね。口をきいてくれなくなったのは。しばらくすると、クラスの間みなも同じようになっちゃってたよ。自分で言うのもなんだけど、私の家、てみんなよりお金持ちでしょ。いや、お金持ち『だった』、だね。それで、元々僻んだ気持ちがみんなの中にあつたと思うんだよ」

俺と鶴屋さんが座っているブランコは、今日一日の仕事を終えて帰宅しようとする太陽の位置によって、ちょうど木陰の中だった。

「鶴屋さん、それは気にしすぎですよ」

俺はさつき近くのコンビ二で買ってきたペットボトルを差し出した。こんなものは末期ガンの入院患者にウマイ棒でも渡してやるよなもんだ。しかし、このときの俺にはこれくらいしかできなかった。いや、今の俺でも怪しいもんさ。なにせ落ち込んだ人間を慰める、ていうのは水の中に溶けた綿アメを元に戻そうとするのと同じ行為だからな。結局は水が蒸発するまで、ただ時間が過ぎるのを待つしかない。それでも出てくるのは歪な砂糖の塊だけだ。

鶴屋さんは黙って首だけ俺の方へ動かすと、ゆっくりと手を伸ばして俺の差し出したペットボトルを受け取った。

「昔に戻りたいよ。そしたらみくるちゃんとも、ハルにやんとも楽しくやり直せるのに」

しかし、受け取っただけで蓋を開けようとしなかった。

俺も昔に戻りたいよ。そうだなあ、それこそ誕生日にはケーキに

ロウソクを立てて祝っていた時代に。そして今度は絶対に北高へは行かねえ。それだけは確かだ。

「鶴屋さん、大丈夫ですよ」俺の置かれた絶望的状况に比べれば、まだマシだ。

「ハルヒだって、今はコンピ研とのことでカリカリしてるだけで、これが終わればまた元のようにつき合ってくださいよ。なにせアイツは飽きっぽくてすぐ忘れるタイプですから」

「ねえキョン君、私、最近変な夢をみるんだ」

急に何を話したんだ？　だが、止めるにすれば、鶴さんの声には何やら重大そうな響きが含まれていた。

「なんだかよくわからないけど、草原みたいなところにいるんだ。果てしなく草が広がっててさ……見渡す限り地平線しかなくてさ……」

俺にはさっぱりわけが分からなかった。いや、俺でなくともわけの分かるやつなど誰もいないだろう。本人の鶴屋さん自身ですら、分かってないかもしれない。そして、鶴さんは地面をただ一匹、茫洋とさまよう蟻をぼんやりと眺めながら、話を続けた。

「そこで気付くんだ。ここには私以外誰もいない、て。ほら、夢の中でよくあるじゃん。なぜだか知らないけど、その夢の中の設定が分かっちゃうってことがさ。ここいるのは私だけで、誰も私を悩ませたりしない、て。当たり前だよな。そもそも『そっち』じゃ、人間が私しかいないんだからさ。他の人間はみんな消えちゃってるんだ。ふと草を見てみると、そこに一匹だけかたつむりがいて——たまにいないこともあるんだけどね。でも大抵いるよ」

そこで鶴さんは地面から視線を上げて、俺の方を見つめて言った。

「そいつを手のひらの上のせて地平線を眺めていると、不思議と今までの孤独を感じなくなるんだ。他に誰も人なんていないのに、そっちのほうで寂しくないんだ……それでね、私……私ね、その変な夢が醒めてから……みんな……みんな死んでしまえばいいのに……」

……」

鶴屋さんの澄んだ瞳が見るうちに潤んでいき、やがて涙がまつ毛の堤防を乗り越えて赤くなつてゆく頬を流れ落ちてゆく頃には、鶴屋さんは俺から視線をそらして完全に泣き崩れていた。

「私、おかしくなっちゃたのかな……？ あんなに仲良かったはずなのにさ……死んで欲しいなんて……」

そこから先は、もはや続けることができなかった。完全に泣き崩れ、嗚咽が言葉を飲み込んでいた。それにしてもこの状況――

まるで俺が泣かせたみてえじゃないか。泣かせた原因の6割くらいが朝比奈さんで残りがハルヒのような気がするが、学校でハブラ父親の会社が壊滅的打撃を受けて長年住んだ豪華な家を追い出されたら、俺でも泣きたくなるよ。ついでに言うと、かたつむりケーキを食ったときも別の意味で泣きたかったね。幸か不幸か、あのときの俺には泣く暇すら与えられなかったがな。

ここで俺は今までの不幸な経歴を話すこともできた。ハルヒの我がままのせいで未来の人類が滅亡に追いやられ、その結果SOS団は殺伐としたヤクザの事務所みたいになっちまったとか。そのとばっちりで宇宙人の頭が少々おかしくなつて、俺はゲテモノ満漢全席プレタリアン大宴会を食わされ、本当にあつちの世界で草原の中を走り回っていたことや、その余波でただでさえ低い成績がさらに落ちてもはや卒業できるのかどうかというレベルに達していることや、ついでに古泉に古典の授業中くだらない下ネタを言われたことや、UFOキャッチャーにへばり付いていたブスのぬいぐるみを古泉の超能力で叩き落してやったことなんか教えてやれば、もしかしたら「他人の不幸って面白いねっ！ あはははははっ！」と大爆笑してくれるかもしれない。

しれなかったが、この状況で今までの経緯を面白おかしく編集し、話して差し上げるほどの話術は俺にはなかったから、俺はブランコからゆっくり立ち上がると泣きじゃくる鶴屋さんの前に屈みこんで、そのまま肩に腕をまわしてハグした。

俺自身でも、自分のやったことにビックリしたよ。家で飼ってるクソ猫シャミセンや妹ですら、俺が抱きつこうとするとホモのストーカーに追いかけられた谷口くらいの勢いで逃げていくというのにましてや、つい最近再会したばかりの鶴屋さん相手に、だ。犯罪者として訴えられ、去勢されてもおかしくない。

こうなると俺の自由意思ではなく、もはや何ものかがそうしろと命令したと思えなかった。きっとすぐに鶴屋さんは振りほどこうとするだろう。そうならなんて弁解しようかと必死に考えていたので、鶴屋さんの細い体の線や、控えめな胸が俺のブレザー越しに当たっている感触など一切考慮する暇などなかった。いや、マジで。

だが、俺の予想に反して鶴屋さんは全く抵抗してこなかった。やがて激しかった嗚咽も、だんだんと小さくなっていくと、すすり泣きに変わった。しかしそれも、すぐにやんだ。

数秒経ってから、鶴屋さんが聞こえるかどうか知らないくらいの小さな声で言った。

「ごめん、キョン君……」

「大丈夫です、鶴屋さんのせいじゃないですよ」

そうさ、全部ハルヒのせいだろ。機関の大方もだいたいそのように考えているらしいしな。

「本当にゴメンね…… SOS 団もむちゃくちゃになっちゃってさ。名誉顧問失格だね……」

俺は何か答えるかわりに、鶴屋さんをさつきよりもいつそう強く抱きしめた。この場で必要なのはくだらない慰めの言葉ではない。そう、あのコンピ研の憎らしいサンドバッグを叩きのめして、この荒れ果てた世界を元に戻すこと、ただそれだけが鶴屋さんを含む俺たちにとって必要なことだ。

公園の日陰が伸びていく中、このまま永遠に止まった時間が続くと思われた。だが突如として俺の携帯の着メロに設定してあった『エレクトリックギターとオーケストラのための協奏組曲変ホ短調』

新世紀』が静かな公園の中に響き渡った。

俺はこのまま無視してしまおうかと躊躇していた。なぜかここで離れてしまうと、鶴屋さんにはもう二度と会えないような気がしたからだ。決していやらしい目的ではない。

だが結局は、俺は鶴屋さんから腕を離して立ち上がると電話を取った。どうせハルヒだろうと思ったら、古泉からだった。

「もしもし」内容は分かっていたが、何も知らないような口調で電話に出た。

「やあ、どうも。急ですが、あなたに大事な用件がありまして」

「へえ、そんなに大事なのか？」

「ええ、あなたの命に関わることです」そこで古泉は一拍置いてから言った。

「いますぐ戻って来ないと、死刑だそうです」

「やっぱりな。そういうことだと思ってたよ。」

「すぐ行くよ。まだ死ぬ予定はないからな」

「ええ、なるべくすみやかに戻ってきてください。こちらとしましても、彼女をこれ以上なだめておくのは困難かと思われますので」

「はいはい、すぐ行くって」

そう言い残して、ぶっきらぼうに電話を切った。ああ、ハルヒのやつが騒音の台風みたいなゲーセンの中で騒音の竜巻みたいにわめいているであろう様子がありありと想像できるぜ。

それから俺は鶴屋さんにこのことを言うためにブランコの方に振り返ったが、そこにはすでに鶴さんの姿はなかった。代わりに、長くなった日陰の中でブランコが小刻みにキーキー揺れていただけだった。

27 時限目

そうして俺は古泉の助命嘆願もあって、無事に決戦の日を迎えることができた。ゲームの出来はどれくらいかと訊かれたら、テスト勉強と同じくらい、とだけ答えておこうか。まあ、それでも古典よりはマシだと思う。

そうやって迎えた決戦の日だが、ひとつだけ奇跡が起こった。なんとあのハルヒが授業中に全く寝なかったのだ。これはある日突然日本の赤字国債がなくなるくらいの奇跡に匹敵する。ていうかコンピ研に目を向けるより、そろそろそっちのほうを望んで欲しいよ、こいつには。

とにかくこの日のハルヒは授業中そわそわしっぱなしだった。といっても、原因はコンピ研との決戦だけではない。今日の朝のホームルームで朝倉が戻ってきたことも、ヤツにとっては好奇心を爆発させる最高の燃料になった。しいて言うなら小学生がそこらへんのゴミ箱からポルノ雑誌を拾って来たありさまに非常によく似ていたな。

「ねえキョン、聞いてるの？」

「すまない、なんの話だ？ 全く聞いてなかったよ。」

「あー、ホントにつまんない授業ね。早く終わらないかしら」

その時はスカトロの英語？とは別の英語？の時間で、担当の教師がやる気を童貞と一緒に故郷のラブホテルにでも忘れてきたかのような調子で授業を行っていた。

「俺たちだけ早く終わっても意味ないだろ。コンピ研も早く終わらないと意味がないぞ」

「ええ、おっしゃるとおりね。アンタの現実把握能力にビックリだわ」

「そりゃどうも。驚きを提供できて何よりだ。」

「ていうか、なんでまだ3時間目なのよ。もう10時間くらいた

ったような気がするわ」

そんなことを俺にきいて少しでもまともな答えが返ってくると思ってるのか？ お前にまともな答えを返す前に、テストの答案にまともに答えてやりたいよ。

「時間の相対性理論、てやつだな」適当に言っというた。適当に納得しやがるだろう。

「高速で動くと時間が遅くなる、てやつでしょ？ 高速で動いてないじゃん」

「時代はいつも高速で動いて俺たちを置き去りにしてゆくのか」「イマイチね」

なんだよ。俺の抒情感あふれる詩に文句つけよう、ていうのか？ 「相対性理論では高速で動いてる側の時間が遅くなるんでしょ。」

だからアンタが言った場合だと、時間の流れが遅く感じるのは時代の方で、私たちじゃないわ」

もう面倒くせえやつだな。

「まあ、アンタの場合はいつもスツとろいから時代に取り残されて時間の流れが早く感じるのよ。でもまあ、私ぐらいになるともう逆に時代を追い抜かしちゃってるから、もはや時間の感覚もアンタと違うつてわけ」

なるほど。お前はまさしく時の路肩を駆けるハイウェイスターというわけか。俺は普通に信号守りながら一般道でも走っとくよ。俺がそんな風に考えていると、英語？の教師がヤギにでも話しかけるようなやる気のない口調で俺たちに何か日本語のような言葉を投げかけた。

「私語するくらいなら寝てていいですよ」

こいつはいつもこんな調子なんだ。実際、クラスの人間はそこるところをよく分かってるから、だいたいみんな安息の睡眠時間に当たっている。

だからまあ、俺もそうすることにするよ。じゃあな、ハルヒさんよお。

「いいわね、こんなときまでよく寝れて」

ああ。それだけはコンピ研にも未来人にも超能力者にも宇宙人にも負けない、俺の唯一の特技だからな。

そのあとの授業も、だいたいそんな感じで時間は経過していった。いつもと違っていたのは、昼休みに団長じきじきの緊急ミーティングと称するコンピ研罵倒演説が繰り広げられたことだけだろう。ハルヒを除く俺たち4人は、昼下がりの元文芸部室でハルヒのいうことに「もつともだ」という表情をしながら聞く作業に徹していた。といっても、例のサンドバッグ部長の下りには、俺にも大いに賛同するところアリだ。だいたいあいつは嫌な奴なんだよ。いくらパソコン5台取られたからといって、帰り道に待ち伏せみたいにはち合わせて嫌味を言いやがって。絶対今日は後悔させてやる。頼みましたよ、朝倉さん。

そして演説のシメにハルヒはより一層声を張り上げて言った。

「でもみなさん、このままのメンバーでは少々不安があるでしょう」

ああ、俺の進路と同じく不安しかないな。

「なので頼れる助っ人を呼んできました！」

呼んできたのは古泉だけだな。

「特に有希とみくるちゃんの二人にとっては驚くべき人です。それでは助っ人さん、どうぞー！」

コンコン、と貧相な扉を弱々しくノックする音が響いた。

「どうぞー！」

扉自身と同じような貧相な音を立てながら、ゆっくりと部室のドアが開いた。扉の外に立っていた人物は、さっきまで演説でうるさかった部室を停電したゲーセン並の静けさで包み込むに充分だった。そいつは一步ずつ、ゆっくりと足音を立てながら部室に入ってきた。そして3、4歩進んだところで足を止めて言った。

「確かノックしたから主権侵害にはならないんだよね？ それにしても素晴らしい演説だった。さすが団長さんだ。さあ、みなさんもう一度拍手を！」

サンドバッグのひと際大きい拍手だけが、異様に部室の中を反響していた。俺は完全に呆気にとられていたな。いつの間に助っ人が朝倉からこんなクソ袋みたいなサンドバッグになったんだと思ってドアの方を見たら、朝倉のすまなさそうな顔が見えた。多分ハルヒと朝倉の間で、演説が終わってから朝倉が堂々と入場する、というようなシナリオが描かれていたのだろう。そしてシナリオ通り、朝倉はドアの外でハルヒの演説が終わるまで待っていた、そしてさあ入場という頃、またまたちょうど通りすぎたサンドバッグにしてやられたというわけだ。

ハルヒの演出を逆手に取って最も効果的な入場を果たした達成感か、サンドバッグはやけに機嫌がよく、そのせいかこいつの孤独で熱狂的な拍手もずいぶん長く続いたように思われた。

だが、やがてそれも終わった。あとには地球が滅亡した後のような、異様な静寂だけが残った。

「お前らにはもう心底うんざりなんだよ」

サンドバッグは特に誰に向かってというわけでもなく、ポツリとそう言った。

「俺たちは——そう、ただ部活動をしていただけだった。そこにお前がやって来たんだ。そうだ、お前だ。そして本来俺たちの所有物であった貴重な財産を持ち去っていった。それが何を意味しているか分かるか？ 確かに俺はお前がさっき言った通り、青春をモテもしないくだらない機械いじりに費やしているだけの糞オタクかもしれない。そこは認めてもいい。けどな——」

ここでサンドバッグはいったん息継ぎをした。

「そう言うお前はただの泥棒じゃねえか！ これ以上俺の隣でふざけんじゃねえよ、糞が。学校にも正式に認められてないようなこんな肥溜めみたいな場所を、俺だって一切認めはしないからな！」

あのサンドバッグも、とうとう切れちまったようだな。やつはここで、言い終わると同時に横にあった長机を思いつき蹴飛ばした。幸い、机の上には何も乗っていなかったため、机が横転した時の音で朝比奈さんが「ひゃっ！」と小さな悲鳴をあげただけで済んだ。だが、横転した机が本棚にぶつかったときだけは俺も本当にビビった。

机が当たった衝撃で、本棚が一瞬ぐらついた。最悪の事態——長門所蔵の愛書が本棚から集団飛び降り自殺をする光景がありありと目に浮かんだ——が、実際には本が少し動いただけでなんとか済んでくれた。

「おかげで俺が部員からなんて呼ばれてるか知ってるか？」

サンドバッグじゃなかったのか？

「『キチガイ女の子守役』だぞ？ あるいは『女王様におもちゃを差し上げている大人のおもちゃ』とも呼ばれている。どうだ、なかなかうまく言ってるだろ？ でもな、俺はもうこんなことにはウンザリなんだ」

そしてハルヒの方を指さして言った。

「これからおもちゃになるのはお前の方だ。俺じゃなくなてな」

ハルヒはこのとき特に何も言い返さなかった。よく耐えていた、とこのときは思ったが、今思うとこのときすでに後の復讐、というか一方的な加虐行為を計画していたのだろう。本当に恐ろしい女だ。一方サンドバッグは、もはやなすべきことはなしたという感じで、扉へ向かって足を進めていた。が、何を思ったのか急にまたハルヒの方を振り返った。

「俺はお前が奪っていったもの、その全てを取り返すつもりでいる。ああ、全てをな。たとえお前の汚ったねえ腐れドブマンコをほじくり返してもだ」

今度こそ言いたいことは全部言いきったようだった。サンドバッグはそのまま廊下に出ると、困惑する朝倉を全く考慮せずに部屋のドアを壊れるくらいの力で思いっきり叩きつけるように閉めて去っ

て行った。あとには、ドアを叩きつけた音だけが部室に異様に反響していた。

数秒してから、再度貧相な音を立ててドアが開いた。明らかに動揺している朝倉が恐る恐る部室へ入って来たところでチャイムが鳴った。

「みんな、いい？」

ハルヒが、サンドバッグとは違った冷静な声で言った。まあ、ここで追いかけていってとび蹴りカマさないだけマシだったのは間違いない。ハルヒにしてはよく耐えたと思うよ。俺ですら今からパイプイスを持って行ってヤツがドアを閉めたのと同じくらいの勢いで後頭部に叩きこんでやりたいと思ったくらいだからな。

「私がいいたいのはひとつだけよ。絶対勝つの！！ 絶対に！！」

ちなみに、長門の本はあとで俺が元通りに並べておいた。

そうやってついに決戦の時がやってきた。とにかく、こうなった後は古泉と朝倉の活躍に期待するしかない。

ホームルームが終わった瞬間、ハルヒはクラスメイト全員を残してダッシュで教室を飛び出して行った。なんなら教室の窓からでも飛び出して行きそうな勢いだったな、あれは。

俺はゆっくりと朝比奈さんや古泉と合流してからゲーセンに向かった。どうせそんなに急いでもコンピ研のやつらは来てないだろうとタカをくくっていたのだ。しかし、実際に到着してみるとすでに俺たち3人以外のメンバー全員が揃っていた。コンピ研の眼鏡をかけたデブの目が、異様に脂ぎった輝きを放っていたな。やがてサンドバッグが俺を見て口を開いた。

「やっと来たか。キチガイ女の取り巻きども」

そう言う風に言われるのはちょっとどうだろうか。俺も好きでキチガイ女を取り巻いているわけではない。

「まあいい」

全然よくないけどな。何一つとして。

「とにかく座れよ。早く来て取っておいてやったんだぜ」

なんてやさしいサンドバッグだ。感動のあまりみぞおちにストリートを叩きこんでやりたい衝動に駆られるな。まあ、とにかく俺はそこらへんの空いてる席に適当に座った。

「それでは早速はじめようか。最初の対戦相手はどなたかな？」

「その前に、ルールと何を賭けるかを再確認よ」

「それもそうだな。決着のついたあとでゴネられたらたまらない。今回のやるゲームはこの『ギルティ・キル』。対戦方式は3本先取の勝ち抜き方式。だから最後まで油断できないな。選択キャラは途中で変更禁止。ゲームとしてのルールはこれくらいか。あとは言うまでもないことだが、しょうもない妨害行為も禁止だ。たとえば台をゆすつたり、対戦中のプレイヤー自身を邪魔するような行為だ」

「そんなことくらい言われなくても分かってるわよ」

ハルヒがそう言った途端、サンドバッグは椅子から立ち上がって座ったままのハルヒの方へ近づいて、さらにどこまで顔を近づけるんだ、というぐらいまで接近して言った。

「俺は今、お前のそのクソ生意気な顔を整形手術してやりたい衝動でいっぱいなんだ。こっちが話しているときくらい、ちよつとは黙って聞け」

すごい勢いでにらみ合いながら、サンドバッグは席へ戻った。

「さあ、続きを話そうか。ルールは今ので終りだ。あと妨害行為に対してひとつ付け加えておくなら、妨害があつた時点で妨害した方の負けとする。そうすればどちらも姑息なことをしないだろう。そして最後、ある意味一番重要な何を賭けるか、を再確認しよう。こちらが賭けるのは夏の北海道合宿、5人分。そしてそっちが賭けるのは、前に俺たちの部室から盗って行ったパソコン5台。これで

間違いないな？」

「ええ、確かに」

俺たちも一応うなずく。

「じゃあ、始めようか」

「待つて。順番を決めるから」

「おいおい、そんなの最初から決めとけよ。こっちはもう決まってるぞ」

「そんなに待たせないわ」

ハルヒはこっちに向き直り、SOS団員を呼び集めた。

「朝倉涼子は？」

「確か、掃除当番だったかな」俺が答える。

「なんで転校生にそんなことさせんのよ」

「いえ、違いますよ」古泉が訂正した。「確か、生徒手帳をもらいに職員室に行ったはずですよ」

「仕方ないわね。アレがないと北高生徒、という証明ができないし」

「とりあえず、順番どうするんだよ」

「まずはミクルちゃんから。勝てるとは思わないけど、最初は様子見が無難ね」

「はい！ 期待にそえるように、頑張ります！」

朝比奈さん、馬鹿にされてるんですよ。何もそこまで健気に返事しなくても。

「次はキヨン、古泉君、そして私、てとこね。涼子はまだ来ないから何とも決め難いけど、秘密兵器や必殺技は一番最後っていうのがセオリーね」

セオリーというより、この順番だとほとんど朝倉が来るまでの時間稼ぎだろうな。

そうやって順番も順当に決まり、いよいよ決戦が始まった。アーケード台についた朝比奈さんは、いつもより緊張した面持ちだ。それを後ろから励ますハルヒ。

しかし、この決戦の行方は古泉の超能力でも読みきれないだろうな。

「ええ、全くそうですよ。彼らのこのゲームに関する技量、今回の勝負に関する執念は計りしれません。勝負は朝倉さんの力を借りても5分5分でしょうね。しかし、ひとつだけ確かなことがあります」

「負けたら終わり、てことだな」

「よく分かってるじゃないですか」

当たり前だ。SOS団雑用係をなめんじゃねえぞ。

28時限目

意外にも、コンピ研側の最初の相手はあのサンドバッグだった。どうやらヤツ直々に、

SOS団全員に引導を渡すつもりらしい。そして、その目論見はどうやら達成されるのではないかと思われた。まず、朝比奈さんが様子を見る間もなく、いつの間にかやられた。そして次の俺も、3本先取というルールにも関わらず1分も持たぬ間に陥落した。

すまない、古泉。ちよつとは向こうの人数を削ぐつもりだったが、どうやらまた、お前に全部任せることになっちまったらしい。

「いえ、別に構いませんよ。部長氏が先鋒をつとめたときから、僕にとつてもここまでは想定の範囲内というやつです」

「しかし、全員はさすがにきついんだろ？」

「ええ。しかし、今日は強力な助っ人が来ているじゃないですか」確かに、今日に限っては朝倉という最後の砦がある。しかし、その肝心の朝倉は宇宙人でも超能力者でもない、ただゲームのうまい『異世界から来た一般人』に過ぎないんだ。いつ、なんのミスで負けてしまうか分かったもんじゃない。だから古泉――

「とにかく絶対勝ってくれ。仮にハルヒが世界をブツ壊さなくてこの世界が存続したとしても、俺はもう長門にゲテモノを食わされる世界にいたくないんだ」

「大丈夫ですよ、任せておいてください。なんと言つても、僕はSOS団副団長なんですから。必ず勝つて、前の世界に戻るようになります。今回の件で勝てば、涼宮さんの気も晴れて、必ず元通りになるはずですから」

このときばかりは、こいつの金メッキみたいなニヤケ顔が金塊に見えた。しかも自分からSOS団副団長に任せとけ、と来たもんだから、俺はすっかり信用しきっていた。そりゃあ、確かに今まで古泉がこう言うときに失敗したこともないし、誰でも信用してしまう

だろう。

だから、3分後に台から戻って来て

「駄目でしたね」と爽やかな笑顔でのたまったときは、正直言つてその顔面にハンマーを投げつけてやりたいと思った。

「お前、さつきと話がだいぶ違うじゃねえか」

「まさか僕の予知能力を上回る読みと激しい攻撃力を持っているとは、予想できませんでした」

肝心なところは全く予想できない困った能力だな。

「いや、それにしても、君はずいぶんと強かったね」

今まで黙々と殺戮にいそしんでいたサンドバッグが、台越しに急に声をかけてきた。

「僕もまさか1本取られるとは思ってもみなかったよ。それに、もう一本も運が良かったから勝てたようなものだった。いや、君は実に素晴らしいよ」

そこで、ハルヒが部長と古泉の間を遮るように横断して、ゆつくりと台に座った。

「団長さんも、さつきと同じくらい強ければ僕も退屈しなくて済むんだけどね」

「アンタ絶対、将来ロクな人間にならないわよ」

「でも君みたいに泥棒にはならないと思うね」

「泥棒も方便なのよ。つまり、あんたらみたいな社会のゴミクズがパソコン持つてるより、私たちが有効に活用した方がほど社会のためになるでしょ。だから、アンタの言ってることは泥棒というより、むしろリサイクルと言った方が正しいわね」

「能書きは互いにもういいだろ？ 早くキャラクターを選択してくれ」

「ふん。まあ、見てなさい」

最後の言葉はサンドバッグに聞こえない程度に、しかし見守っている俺たちには聞こえるような大きな声だった。きつとこいつも薄々分かってたんだと思う。世の中に奇跡なんて存在しない、つま

り、神なんて存在しないってことをさ。

分かっていても、それを認めるかどうかはまた別問題だ。こいつはそういう自分にとって都合の悪いことは中々認めようとしなからな。

ハルヒは、俺を困らせたあの忍者のキャラで画面中を飛び回っていた。しかし、すぐにサンドバッグにサンドバッグにされて動かなくなっただけ。

「あれ、おかしいな？俺はただ基本コンボをしただけなのに、いつの間にか相手が地面に倒れていた。何を話しているか分からねえと思うが、俺も何をしたのか分からねえ！超能力とか幻とか、そんな超常的なモンじゃ断じてねえ、もっとチャチなものの片鱗を感じたぜ！」

ギヤハハハハッ！とコンピ研全員が腹を抱えて笑いだした。

「さあさあ、だんだん楽しくなってきた第二ラウンドだ！」

「あんたらねえ」

ハルヒが体を傾けて台から乗りだして言った。

「言っとくけど、今までののは指慣らしだから」

「おーっと！出ました指慣らし宣言！じゃあこっちからも言わせてもらいましょう！俺も今のは指慣らしでした〜！」

と言って中指を立てた両手を天井へ向けて突き上げた。

それと同時に「ヒュー！部長カッコいい！」という、今まで聞いた中で最も鬱陶しい部類に入る歓声と拍手が巻き起こった。いくらパソコンを盗られた恨みがあるからと言っても、もう少し普通にできないものなのか。俺はこの時、初めてといていくくらいハルヒに同情していた。それはどうやら古泉や朝比奈さんも同じだったみたいだ。古泉の笑みはだんだん引き攣ってきているし、朝比奈さんはもはやこの光景を直視すらしてなかった。

ましてやハルヒ本人の怒りは相当のものだったに違いない。そして、怒りに捕らわれた人間ほど畏れにハマりやすくなる。

「おお〜っと！こんなのに引つかかるのぉ？ SOS 団の中で

「一番手ごたえがない相手だな、こりゃあ！」

「やっぱりそう来ると思ってたよ！ うんうん、君ならきつとそうしてくれるはず！ 君と僕との美しい信頼関係に万歳！」

サンドバッグはその気になればいつでもこの第二ラウンドを終わらせることができた。にもかかわらず、アイツはわざとコンボを途中で止めたりして試合を長引かせていたんだ。

俺だったら途中で台をこっさり抜け出して殴りに行ってただろう。しかし、ハルヒはそんなことはしなかった。なぜなら、そんなことをすれば妨害行為で即座にSOS団の負けになってしまうからだ。ハルヒはおちよくられるのはもちろん嫌いだが、負けるのはもっと嫌いだった。

それでも、第二ラウンドを負けた時に、握りしめた拳で思わず台を叩いてしまった。台がグラリと揺れた。

「おおっと。どうしたんだい？ 生理でもきてんのかい？ もうちょっと落ち着けよ。リラックス、リラックス」

後ろから眺める俺からすれば、ハルヒは表面上、静かだった。ただし、握りしめられた右拳はブルブルとふるえてはいたが。

「さあ、もう第三ラウンドだ。これが最終ラウンドにならないように頑張ってくれよ」

ここまできて、どうやら一気に決着をつけようとしたらしい。最後は開幕からの怒涛のラッシュで、10数秒かそこらで地面のゴミと化した――ように思われたが、どうやらゲージで見ても分からないほど少しはあるが、まだ体力が残っていたようだ。

もちろん、サンドバッグが弄ぶためにわざと残しておいたに違いない。ハルヒだってそこは分かっていただろう。

それでも画面の中のサンドバッグに向かっていくのは、勝つためではなかった。あいつはSOS団団長の意地を見せつけるためだけに、最後まで戦った。

そしてついに最終ラウンドが終わった。

終わった瞬間、ゲーセン中を揺るがすような大歓声があがった。

一方俺たちSOS団の方は葬式会場か、てくらい静まりかえっていた。

ハルヒはしばらく座ったまま自分のキャラが地面に倒れている光景を眺めていたが、やがてゆっくりと立ちあがった。相変わらず右手の拳を握りしめたままで。

俺は止めようと思った。多分、ハルヒはこのままあのサンドバッグに一騎打ちをしかけるつもりなんだろう。でも、そんなことをしたらそれこそ負けたも同然だ。

俺はサンドバッグのほうへ、のしのし歩いていくハルヒを引きとめて、「もう十分良くやったよ」と言ってやりたかった。「どうせあんだだけパソコンあっても使わないんだから、もう別にいいだろ。誰もそんなこと気にしてない」とも言ってやりたかった。それで納得するかはともかく、とりあえずハルヒを引きとめなくてはならない。本当にハルヒが負けてしまう前に。俺と古泉がそのことを察し、ほぼ同時にハルヒの方へ向かった。

しかし俺たちより前に、髪の毛長い北高の女子生徒が俺たちより早くハルヒの肩に手を置いた。

「涼宮さん？」

「え？」

「やっぱりそうだったのね。すごい騒音が聞こえたからちよつと気になって来てみたの。そしたら、涼宮さんがものすごい表情して立ってたから」

「もうー！ー！」

ハルヒがコンピ研に負けないくらいの歓声をあげた。

「ずっと待ってたのよ！ もう来ないかと思ってた」

「大丈夫よ。私があの涼宮さんの言ったことを忘れるわけがないじゃない。それで」

朝倉は、いまだに馬鹿騒ぎの最中であるコンピ研のほうに視線を移した。

「この人たちを静かにさせればいいのね？」

「ええ。もう二度と喋れなくして」

こちらへんで、サンドバッグがちらりと朝倉の方を見た。口の端が歪んだ。もう一人獲物が来た、とも思っているんだろう。

「あんたらねえ、もう終わったと思ったら大間違いだから！」

ハルヒがビシッとサンドバッグに人差指を向けて言った。

「この朝倉涼子がSOS団最後の秘密兵器よ！」

「なるほど。それが君たちの用心棒か。まとめてブツ倒してやるよ」

ハルヒはサンドバッグに背を向けると、そのまま朝倉を台へと促した。

そうやって、世界の命運はすべて朝倉に託されることになったのだ。

それにしても、見てるだけなのに今までで一番緊張するな、これ。

俺は、自分の目の前に繰り広げられる光景が信じられないでいた。それは古泉も同じだったようだ。そりゃあ、あの超能力を使っても成し遂げられなかった偉業を朝倉が素手で成し遂げてしまおうというのだから、驚くのも無理はない。朝比奈さんもようやくさっきの不安な表情から解放されたようだったし、何よりハルヒが一番喜んでいた。

朝倉は、サンドバッグをサンドバッグにしていた。といっても、さすがにサンドバッグもそれなりには腕に覚えがあるのでハルヒのように一方的な展開ではなかったが、それでも確実に体力ゲージを削り、サンドバッグを地面に打ち伏せていった。

それで今度はSOS団が歓声をあげる番になった。

サンドバッグは、おそらくコンピ研の中で最もこのゲームが上手いようで、朝倉大先生はそれ以降も次々と快調に4人目まで倒していった。ここまでくると、もはやコンピ研の他の連中も授業中に携帯が鳴った間抜け野郎みたいに焦り始めていた。いや、ここまで来

なくても、すでにサンドバッグがやられた時点で内心かなりの動揺はしていただろう。

最後は副部長らしかった。部員の思わずもらした言葉から察するに、サンドバッグの次にうまいようで、技量面だけをとるならサンドバッグをも凌駕するとか。

いや、まあよく頑張ったとは思うが、やはり彼も朝倉大先生には勝てなかった。

ついにコンピ研最後の闘士が地面に倒れ、全てが終わったかのよう to 思えた。俺も思わずハルヒと柄にもないハイタッチまでして喜んでたくらいだったからな。今までの苦勞がようやく終わったんだと、俺はテスト最後の日が終わったかのような心境だった。

本当の修羅場はここからだ、てのによ……

28時限目（後書き）

ちなみにサンドバッグの使用キャラは設定上エディのつもり。

29 時限目

「うだ！」

「イエーイ！！　これがSOS団の実力よ！　いえ、実力というより私の人望というべきかしら」

お前には間違っても人望なんてないし、あつたとしても人望と言う名の変人扱いだよ。

「うだ！！」

「みくるちゃんのおっぱいが大喜びの舞い〜！！」

いつもなら止めるところだったが、今日は仕方ない。俺もゆつくり楽しむとするよ。

「こうだ！！！！」

「う〜ん、やっぱりSOS団の戦いはこうでなくっちゃ。私、きつと神さまに愛されているんだわ」

ああ、俺もそう思うよ。お前は自分のことがハーゲンダッツミルフィーユ味より好きだからな。

「お前らしい加減に俺の言うことを聞け！！！！」

そういえばさっきから誰か何か言ってたような気がするのは、サンドバッグだったのか？　こいつの一喝で、SOS団はもとよりゲーセン中の人間が静かになった。むろん、あのうるさい電子音は鳴り響いたままだったが。

「この勝負は無効だ」

「あ、そうそう。北海道行きチケットはいつくれるの？　できるだけ早い方がいいわね。それとお土産は何がいい？　リクエストがないなら適当に安いのも買って帰るから」

「とりあえず、パソコン5台全部返してもらおうか」

「え？」

急に何言ってやがるんだ、このサンドバッグは。

「勝負は無効だと言ったんだよ。いや、無効なんかじゃないな。」

むしろこっちが勝ったといえる」

「おもしろくないギャグはいいから――」

「ギャグなんかじゃない。俺はいつだって真剣さ。特にお前が相手のときはな。とにかく、俺たちはお前から対戦人数を聞かされていなかった。お前たちは最初4人でそこにやってきた。そして、俺はその4人に勝った。だから勝ったのはコンピ研だ」

「はあ？」

ハルヒでなくとも疑問に思うのも無理はなかった。麻雀でロンしたら相手が川の牌をイカサマで入れ替えたせいでフリテンチョンボになったようなもんだろう。

「だから、勝ったのは我がコンピ研だ。早くパソコン5台返してもらおうか。お前がその薄汚い手で奪い去っていったパソコンをな」

「はああああ？！ だいたい、あれは元はと言えばあんたらのイカサマのせいでしょ！？ 今回だってちゃんと朝倉涼子が勝ったじゃない！ 北高生徒なら誰でもいいんじゃないの？」

「だが対戦前に人数を言っていなかったのはそっちの落ち度だろ？ 最初は4人しかいなかった。だから俺たちは4人だと思っていたし、普通は対戦前に人数を揃えておくもんだ」

「でもあんたらだって最初の確認のときに人数をきかなかったじゃない。それに朝倉が来た時、まとめて相手にしてやるとか何とか言って、同意したでしょ？ アンタ自身が！」

「ああ、そのことか。それは、その朝倉個人と僕たちが対戦すると言っただけで、SOS団の助っ人として認めたくえで対戦する、という意味ではなかったんだよ。まあ、君が頭の中でどう解釈しようと自由だけだね」

「何言ってるの？ パソコンのしすぎで頭バグったんじゃないの？」

「ハハッ。いくらなんでも君ほどバグっちゃいないさ。今でも君よりはるかに冷静で、ちゃんと物を考えている。とにかく、俺たちはその朝倉個人には負けたが、君たちSOS団には勝った。だから

ら、早く約束通り俺たちから奪ったパソコン5台を返すんだ」

「へえ、そういう風に言うんだ。言っちゃうんだ」

「俺たちはルールに乗っ取った正当な要求をしているだけに過ぎない。まあ、君が認めたくないのは分かるけどね」

「そこまで言うなら返すしかないようね」

何を返すつもりなのか、俺には瞬時に理解できた。

ハルヒはその台詞を言い終わった瞬間、サンドバッグのネクタイを掴んで顔を引き寄せ、顔面に頭突きを叩きこんだ。

「いっかあい！」

サンドバッグの鼻から赤い液体がほとばしる。

「にかあい！」

衝撃でのけ反ったサンドバッグを、またもや引き寄せて頭突きを喰らわせる。もう、こちら辺で止めさせなくてはならない。いくらなんでもこれ以上やれば向こうもただの軽傷では済まないだろう。下手すれば学校に知られて面倒くさいことになりかねなかった。

「さんかあい！」

俺はここでハルヒの頭を押さえ、サンドバッグから引き離そうとした。

「ちよつと、キョン！ 何するのよ！ 放しなさい！ あんただってくやしいでしょ！」

しかし、ハルヒはものすごい力でサンドバッグのネクタイを握っており、俺一人で引き離すことはできなかった。

「おい、古泉！ 早く手伝ってくれ！ 朝比奈さんも！」

「放せ、て言ってるでしょ！ いい加減にしないとセクハラで訴えるわよ！」

「いい加減にしろ！ こんなやつ殴っても仕方ないだろ！」

ここでようやく古泉がハルヒのネクタイを掴んでいた手を引き離すことに成功した。俺はそのままハルヒの右腕を押え、古泉はそのまま左腕を押えながら、後ろに引きずっていった。

「ちよつと、まだ足りないわ！ あいつがもう二度とSOS団に

なめた口をきけなくするのよ！」

「いいからとりあえず落ち着け！」

足をバタつかせながら、ものすごい力で振りほどこうとしてきた。しかし、さすがに俺と古泉が両側から押えているかぎり、それはいくらハルヒでも無理な話だった。

一方、サンドバッグは普通に何事もなかったかのように突っ立っていた。相変わらず変態的な鼻血が垂れていたが、意外と出血量はそれほどもなく、しかも今回は自分でハンカチまで用意していた。他の部員がサンドバッグを支えようと駆け付けたが、それを手で制して止めた。それからゆっくりとハンカチで血を拭いとると、押さえつけられたハルヒの方へ近づいてきた。

ハルヒとサンドバッグの目が合った。

「お前はかわいそうな奴だよ」

ハンカチをポケットの中へしまう。

「お前は——自分がかわいくて仕方ないんだ。もちろん、人間誰でもそういう欲求は持っている。しかし、成長する過程でだんだんと分別をつけてゆくものなんだ。お前はそれができずにただ周りに自己愛を強制している、私を見て！私を愛して！という感じでな」

「へえ、そうなんだ。さすが機械しかお友達のいないやつは言うことが違うわね」

「機械とすらお友達になれない君よりマシだよ。お前、クラスでも浮いてんだろ？ こっちまで噂で流れてくるくらいだから。誰もがお前の自己愛にウンザリしているんだ。君のSOS団、他のやつになんて呼ばれているか知っているか？ シット・オブ・シット団だぜ！ 俺たちだけじゃない。なんせ俺たちが名付けたわけじゃないからな。学校の中でも、少なくとも一部のやつらはそう言って噂している。名付け親のネーミングセンスに脱帽するよ」

「ぶっ殺してやるわ」

「言い返せなくなると『ぶっ殺す』か『殴る』しか言えなくなるんだな。さんざん自己愛をふりまいてそれが否定されたら暴力か。

まさに『クソの中のクソ（シット・オブ・シット）』だな」

「もう一度その名前で呼んだらぶっ殺してやる！」

「へえ、やってみるよ。シットオブシット！ シットオブシット
！ シットオブシット！」

「キョン！ いい加減はなしてよ！」

「シットオブシット！ シットオブシット！ シットオブシット
！」

「こいつ、SOS団全員を馬鹿にしてんのよ？！ いいから早く
はなしてよ！ あんたも後で許さないわよ！」

「シットオブシット！ シットオブシット！ シットオブシット
！」

「もお！ いい加減はなしてつてばあ……キョン……」

このときになって、ようやくハルヒの腕の力が抜けた。こうなる
とハルヒの腕も細くて頼りなく思えた。

「絶対ゆるさないんだから……」

このときのハルヒはうつむいていたからはっきりと見えたわけ
ではない。それでも声が震えていることから泣いているか、少なくと
も泣きそうになっていることは明らかだった。

「もういいでしょ。はなしてよ……」

「泣けば許されるとかいつの時代の話だと思ってるんだ？ こっ
ちが泣いても許さなかっただろうに、私は泣いたら許してくれ、か
？ とんだ傑作だな！ シット・オブ・シイイイイイイイツ
ト……！」

ここで俺はハルヒをの腕をはなした。俺自身もどこまで意識して
やったかは、今となっては定かではない。だが、もはやこいつの不
快な音声を聞くのにもはや耐えきれなくなったことは確かだ。

ハルヒを解放した瞬間、俺はサンドバッグの顔面中央、まだ拭い
きれてない血を目印に、思いっきり右ストレートを叩きこんだ。そ
れはまさしく叩き込むという形容がふさわしい一撃で、ゲーセンの
中だというのにスイカを割ったような、鈍い音がこの場の全員に聞

きとれたくらいだった。サンドバッグは2、3メートルほど後方に吹っ飛んで倒れた。俺はそこまでコンピ研の部員を押しつけて歩み寄ると、大の字になって地面に横たわったままのサンドバッグを見下ろしながら言った。

「いい加減うるさいんだよ、クソサンドバッグが」

半ば気絶した状態のサンドバッグに聞こえているかは定かではなかったし、そんなことはどうでもよかった。

俺は向きをかえると、ゲーセンの床にへたりながら一連の光景を眺めて呆然としているハルヒの腕を取った。

「ほら、早く行くぞ」

「え？　ちよつと待ってよ」

俺は半ば無理やりハルヒを立たせると、そのままゲーセンの自動ドアの方へ引っぱっていった。

自動ドアが開くと、湿った暑い空気がむわつと包みこんできた。

太陽はすでに傾いていたが、それゆえに強烈な太陽光線が直接俺の目に飛び込んでくる。

「早く帰ろう」

俺はポツリとそう言った。

「ええ、そうね。それにしても、あんたもやればできるんじゃない。ちよつと見なおしたわ」

「お前は大丈夫だったのか？」

「何が？」

「頭が」

「それってひょつとして中身の話？」

「いや、違うよ。さっきサンドバッグ殴って分かったんだが、アイツの顔面はすごく固い。いまだに右手が痛いくらいだ。その顔面に頭突きしてたおまえはどうなんだ？」

ハルヒが前頭部をさすりながら言った。

「まあ、髪の毛がある分、キョンよりは軽傷で済んだみたい」

「ラッキーだな」

「まあね。だって私は神に愛されているから」

そう答えるハルヒの顔が輝いたように、俺には見えた。

「涼宮さん！」

朝比奈さんもやってきたようだ。

「カバン、忘れてますよ」

「あ、そうだったわね。ありがとう」

「今日はずいぶん疲れましたね」古泉のいつものニヤケ顔だが、そこには確実に安堵の表情があった。

「何だか私、あまり役に立てなかったみたいで。ごめんなさい、涼宮さん」

朝倉が済まなさそうに言った。

「別にいいのよ。悪いのは全部コンピ研なんだから。だいたい、負けたからって屁理屈こねるとか最低じゃない！」

そうだな。もうやつらとは関わり合いたくない。まあ、あいつらの方もしばらくは関わっては来ないだろうけどな。

「それより、北海道合宿が消えた分、夏の予定をどうにかする必要があるわね」

おいおい。まだ期末テストすら終わってないんだぞ？　ちょっと気が早すぎないか？

「何言ってるの！　SOS団は！――」

もう言わなくてもだいたい分かる。

「常に時代の先を駆け抜けるんだろ？」

「ちよつと、団長の台詞をとらないでよ！」

おいおい、SOS団雑用係をナメんじゃねえぞ。

29 時限目（後書き）

ここが活動報告で完結宣言した箇所です。しかしあまりに投げっぱなし感が強かったので、もうちょっとだけ続きます。

30時限目（前書き）

季節は現在の南半球をご想像ください。

30時限目

翌日、俺はいつもよりたまたま早く目が覚めたので、そのままちよつと早めに家を出ることにした。おかげでいつもよりちよつと空いた電車に乗れたし、いつものように遅刻を気にしながらハイキングコースを登ることもなかった。

朝から太陽の日ざしは容赦なく照りつけ、まだ6月だというのにすでに空は夏の装이었다。ひとつだけ変わったところと言えば、衣替えの結果昨日より着る服が軽くなつたことくらいだ。

「おはよう、キヨン君っ！ 珍しいね、こんな時間につ！」

「鶴屋さんこそ、珍しいですね」

「なあに言つてんのさっ！ わたしはいつも通りで、キヨン君がいつも遅いだけじゃないかっ！」

そういうと、鶴屋さんは軽快な足取りで坂道を登り、見るみる間に俺を追い抜かして行つた。よくあんな日なたを歩けるもんだ。体内にソーラー発電装置でも仕込んであるにちがいない。

俺が鶴屋さんの生態について考えている内に、いつの間にか校門まで来ていた。その頃には全身から汗が噴き出していた。これでもなるべく日陰を歩いていたんだがなあ。本格的な夏になったらどれほど暑いのか、想像するだけでもはや寒気すらしてくる。

下駄箱の並んだ校舎入口に入ると、朝比奈さんがいた。

「おはようございます、キヨン君」

いつも通り、と言つてもこの時間に雪どけした春の大地から目覚めた女神のような御尊顔を見ることは珍しいのだが、表情はいつも通りだ。朝比奈さんの制服の袖も、すでに短くなっている。

「今日も暑いですね」

そうですね。でも朝比奈さんの笑顔を見ただけで、俺は朝早起きしてよかったと思えるよ。朝比奈さんの全てにありがとう。

もっと朝の優雅な時間を朝比奈さんと一緒に楽しみたかったが、

日直の仕事があるそうなので足速に去っていった。そんなもんもう一人の日直に任せりゃいいんだよ、と思ったが、その優しいところも朝比奈さんらしい。俺はそういうところを大切にしたいと思っているんだ。だって俺も優しい人間だからさ。

それから自分の靴箱に移動すると、なんと1学期で一番驚くべき光景——谷口が今まさに靴箱を開けようと手を伸ばしているところだった。

そいつはそのまま馬鹿みたいに口をぽかんと開けたまま、しばらく俺を眺めていた。

「驚いたな」

いや、俺もだよ。

「こりゃ、台風直撃コースだな」

「二人合わせて隕石直撃コースだな」言いながら、俺は下駄箱から上履きを取り出した。

「ていうかキョン、お前何しに来たんだよ？」

いや、そこまで言うか？ 学校来た目的なんてひとつだけに決まってる。

「真面目に勉学に励むために決まってるんだろ」

「それもそうだな。俺はてつきり寝るためだと思ってたけど、寝るために寝る時間削って早く学校に来るなんて矛盾してるよな」

俺にきくなよ。

「いや、まさかビックリだぜ、キョンとこんな時間に会うなんてよ」

「そういうお前もなんでこんなに早いんだよ」

谷口は暫く下駄箱のフタに手を当てながら、天を仰いで考えていた。

「そっぴや、どうしてだろうな」

まあ、最初っからまともな答えなんて期待してなかったけどな。上履きを履いて、靴を下駄箱に入れる。それから一足お先に教室に向かって寝ようかと思っていいたら、谷口が

「うおっ！」と奇声をあげた。

「どうした？ 猫の死体でも入ってたのか？」

「嘘じゃないよな……」

谷口の手が震えていた。ゆつくりと下駄箱から取り出したのは、一通の白い封筒だった。

「これは…… ついに俺にも来たんじゃないかよおお！」

ああ、これは普通に考えればラブレターというやつかもしれないな。

「今まで都市伝説の中でしか語られなかったが、ついに実物を拝めるなんてな！ あゝあいらぶゆゝ」

そう言いながらラブレターと思しき紙にしきりに口づけしていた。封筒に青酸カリでも塗ってあればいいのに。

「どれどれ、中身は本当にそうなのか？」

「おいおい、俺への手紙だぞ？ お前に見せるわけにはいかないなゝ」

チツチツと舌打ちしながら指を振る光景は、昨日のサンドバッグとウザさなら十分に張り合える。

「いや、俺は一応確認しておくべきだと言ったんだよ。誰かがゴミ箱と間違えて放り込んだのかもしれないだろ」

「キョーン、それは見苦しいなあ。嫉妬したくなる気持ちは分かるけどよゝ」

今、横からひよい、とショットガンを渡されたら、そのままこいつの顔面に向けて発砲していたかもしれない。

「まあ、一応差出人くらい確認しておくか。あ、でもキヨンには内緒だからな。封筒のどっかに書いてないかなゝ。願わくば差出人がかわいくて巨乳で料理が得意で優しい女の子でありますよゝに」

そりやお前の頭の中にしかないよ。

俺の視界を体で遮りながら封筒を検分し始めたがすぐに何やらおかしい感じになった。谷口の全身がブルブル震え始めたのだ。

俺はゆつくりと谷口の横から回り込んで様子をうかがった。

「どうしたんだ、急に。期待値がデカかった分、失望したのかよ」
「クッソ」

「おいおい、朝から汚いな」

「お前――」

振り返った谷口が鬼のような形相をしていた。

「これお前宛の手紙じゃねえか！！！」

谷口が半ば叩きつけるように差し出した手紙を、俺はかろうじて受け取めた。

「紛らわしいことしやがってよおおおお……」

確かに、封筒の裏には小さな丸い字で『キヨン君へ』と書かれてあった。

「クッソオ…… 多分その手紙は脅迫状か果たし状だな。それが差出人がホモか。ったくラッキーな奴だぜ。もし俺一人で見つけたらそのままゴミ箱に捨ててといてやったのによ」

「嫉妬は見苦しいぞ」

「うるせえ！ もうお前は友達じゃねえ！」

かなり怒りながら、そそくさと教室へ立ち去っていった。

俺はひとり残された後も、しばらく封筒の字を眺めていた。
特徴的な丸い字。

この字に、俺は見覚えがあった。それと同時に、これが決してラブレターではないことも悟った。

後になって考えれば、谷口がゴミ箱に捨てておいてくれた方がマシだったかもしれない。

今日の3時限目の体育は、幸運なことに体育館だった。こんな日ざしのキツイ日に外の運動場でサッカーやるなんて、女子には不幸としかいいようがない。まあ、体育館の中ではむさ苦しい男子が密集しているので、それほど体感気温が下がるわけではないが。

それはさておき、今は目の前に飛んできたボールに集中すべきだ

った。サーブを打った谷口に似たいやらしい回転を加えながら、それはネットを越えてやってきた。俺は、とにかく落ち着いて対処した。自分ではうまいことレシーブしたつもりだったが、いやらしい回転のせいで、いやらしい方向へと飛んでいった。古泉がそれを追いかけて、かるうじて拾い上げる。

ボールは、また俺の方へ飛んできた。

どうやら、俺にスパイクを決めると言っているらしい。古泉の目が、俺にそう語りかけている。

だったら決めるしかないだろう。

行け。古泉が目で訴えかけてきた。その期待にこたえるように、足が自然に動いた。

助走をつけ、跳んだ。全力で天井へ向かって跳んだ。あとはボールに合わせて手を振り下ろすだけだ。

今——そう思った。体は自然に動いた。

俺は、思いっきり叩きつけるようなスパイクを打つ——と見せかけてボールの尻をひよいと押してやった。だってスパイクとか苦手だし、このときはブロックが3枚もついてやがったから、どうせ打ったって弾かれただけだろう。とはいえ、もし俺に予知能力があつて幾ばくか先の出来事を予知できたなら、ブロックされてもいいからスパイクを打つ方を選んだらうな。

だが俺はそうしなかった。フェイントで押し出したボールは、そのままブロックを超えて床に一直線に落下していった。向こうは3枚もブロックを出していた。どちらも14対14で最終ラウンドだったし、点を入れられたら終わりなのだから、当然かもしれない。

だが、そのせいで後方にぼっかり穴があいているのを俺は見逃さなかった。

そのままボールがコートに落下すると思ったが、俺が着地する頃には、谷口がボールの落下地点へ飛び込んでいた。

やばい。こいつ、完全に俺の思考を読んでやがった。谷口は体勢こそ崩したものの、落下地点を完全に読んでいたため、なかなかき

れいにボールを跳ね上げた。

それを山根がボレーでつなぐ。手島がコートの後ろから走って来た。

これは由々しき事態と言えた。手島はそこそこ運動神経がいい。放課後はスーパージ打ち部に所属していてバレーは専門外だ。だがそれでも、バレー部員に匹敵する実力をいかに発揮している。警戒して、古泉ほか数名がブロックに回った。

ひよつとしたらここでフェイントが来るんじゃないか——一瞬そう思ったが、それはなかった。手島は俺のように、策を弄するタイプの人間ではない。

スパイクを打つ音が体育館中に響き渡った。

これで勝負が決まってもおかしくなかったが、古泉のブロックに当たったため、ボールは勢いをなくしてコート後方へ舞っていった。後衛が走っていつて、それを跳ね上げる。天井へ届くかとも思われるくらいの高さに上がったが、俺は冷静に着地地点を見きわめ、ボレーで古泉に全てを託した。ボレーのとき、もしかしたら突き指するかと思ったが、それはなんとか避けられたようだ。

古泉、あとは頼んだぞ。

——ええ、任せてください——

そんな声が聞こえるようだった。

「ふん、モツツッ！」

そんな何だかよく分からない間抜けな掛け声をあげながら、小泉は限界まで伸ばしきった腕をボールに叩きつけた。

古泉は身長もなかなか高く、つまり打点もかなり高い位置にくる。そこから繰り出されるスパイクは相手側4枚ブロックの万里の長城の頂上を乗り越えてコート後ろのラインいっばいに突き刺さると俺は信じて疑わなかった。

まさかそのボールが、最後の力を振り絞って予想以上に高く跳び上がった谷口と手島のブロックに弾かれて、完全に試合が決まったと思ってどというハイタッチでもしてやろうかと思案していた俺の

方へ飛んでくるとはね。

気づいたときには、ボールは黒い塊と化して俺の視界をどんどん占領していった。まさに隕石直撃コースまっしぐらだな。

すぐに視界全部が黒い塊に占領された。

「ぐぐぐ……ガギっ……くくくくハハっ……!!」

「どうしたんだ、ハルヒ。ずいぶんと楽しそうじゃないか」

体育の後、数学の授業終了のチャイムと同時に後ろから奇声が聞こえたので、振り返ってそう問いかけてみた。しかし、当のハルヒは椅子に座ったまま、体を二つに折って相変わらず地面に向かって、必死に噛み殺した口の隙間から奇声を漏らし続けている。

「キヤハハハ……ひいひいひい……」

顔に両手を当てるが、それでも指の隙間から奇声は漏れ続けている。

「おい、聞こえてんのか？ 何がそんなに面白いんだ？ 俺にも教えてくれよ」

一瞬、指の隙間から眼光が覗いた。俺の顔面に視線が突き刺さる。その間だけなんとか奇声を抑えてはいたが、すぐに視線を床に戻すと、また

「ククク……きゃはははは……!!」

と子猫の首を締め上げたような奇声が漏れだした。お前、いい加減にしないと本当に首締めんぞ。

「あ、ごめんごめん」

そんな俺の殺気を感じたのか、ようやくハルヒが深呼吸しながら顔を上げた。

「ふう〜」

ため息のような吐息を吐き出したときには、その顔は砂場で犬かりのフンを踏みつけた同級生を笑う小学生から、いつものSOS団団長へと戻っていた。

「それにしてもひどい顔ね。新手の整形手術？」

「お前もその手術を受けたいか？」

俺の顔にはブロックで弾かれたボールが直撃し、真ん中に真っ赤な跡がクツキリ刻まれていた。ついでに鼻からの大量出血を止めるために、鼻の両穴にテッシュが詰められていた俺の顔はさぞや滑稽だっただろう。しかも鼻がふさがっているせいで口呼吸しかできないため、口が半開きになっている。鏡で自分の顔を見てみたが、その様は陸に上がって窒息死寸前のマンボウにしか見えなかった。

「遠慮しとくわ。アンタほど似合わないと思うし。あ、それ以上近づかないでね。もう笑いすぎて顔面釣りそうなんだから」

近づく元気すらなくなっていた。いまだに赤く腫れている部分にはジンジンとする鈍痛が居座っている。

「それで、本当にやるのか？ 例のやつ」

答えはもう聞かなくても分かっている。だいたい、こいつが一回やると言い出したら俺が言っただくらいで止まった試しがない。

「やるに決まってるじゃん。アンタもあれじゃあもの足りなかったでしょ？ ボロ雑巾になるまで痛めつけてやるの。SOS団全員でね」

そう言うハルヒの顔面に、今度は別の意味の笑いが広がった。まあ、俺はアレで十分に物足りていたが、ハルヒは直接復讐したわけではない。俺が物足りてない、というのはハルヒ自身のこれから行うエゲツナイ行為に大義名分を与えるための泊づけに過ぎない。

「ターゲットはどうするんだ？ まさかコンピ研全員じゃないだろうな？」

「それはあのクソサンドバッグだけで十分よ。頭を潰しとけば雑魚にはいい見せしめになるでしょ」

「そうだな」

そうとしかいいようがないし、全員相手にするのはさすがに骨の折れる難事業になるだろう。なにせこちらには戦闘要員が俺、古泉、ハルヒの3人しかいないんだからな。

「それで、いつその作戦を実行するんだ？」

「今日の昼休みね」

えらい急だな。

「みんなにはもうメールで伝えてあるから」

「なんで俺にだけ今まで黙ってたんだよ？」

裏切るとでも思ってたのか？

「いーえ、アンタにはね、もっと重大な役割を果たしてもらうの。事前に情報が漏れるのを恐れて今まで黙ってたけど」

ああ、これだから雑用係は嫌になるんだよ。だいたいなんだよ、『情報が漏れる』ていうのは。忘れてて、今偶然思いついただけじゃないのか？

「アイツをおびき出すのよ、部室までね」

そういうと、ハルヒの笑みがまるで本人の性格を表すように、さらに大きく歪んだ。それからすっかり夏模様に張り替えた空へと視線を移してから、

「はあ、朝倉涼子、また帰ってこないかなあ」と小さく言った。

31 時限目

正直、「おびき出せ」と言われたところでどうすればいいのか全く分からなかった。

もし恨まれているとすれば、第一位はハルヒで第二位は俺だろう。いくらしょうもない屁理屈をこねたからといって、顔面にパンチをお見舞いすれば犬だって俺を恨むだろう。

むしろ、コンピ研の信頼厚い長門あたりをこの役目に回したほうが良いんじゃないか？

俺がハルヒにそう進言したところ、「ユキにまともな会話ができると思う？」と至極まっとうな返しが来た。確かに、宇宙人に人類とのコミュニケーションはまだ早すぎると思う。それは俺がほかの地球人の誰よりもよく知っている。

一応、ハルヒから（どうやって調べたのか知らないが）、サンドバッグは必ず食堂で昼を摂るので、3年の教室と食堂へ向かう廊下で待ち伏せしていれば必ず捕獲できるということだけ教えられていたから、今こうして受験を控えた慣れぬ生物で溢れかえった学舎に來ているというわけさ。

「なるほど、そういう事情でしたか」古泉がポツリと言った。そういうことになっちまったんだ。

「そういうことになってしまいましたか」

ああ、そうさ。大丈夫なんだろうな？

「大丈夫ですよ」

古泉がこっちに振り返って言った。

「多分ね」そう言って、また教室の方へ目を戻した。多分じゃあの女は多分満足しないぜ。

「何事にも絶対という保証はありませんよ」
「そうだよな。」

「そうですよ」

それを承知で一つ保証してもらいたいことがあるんだ。

「何ですか？」

このミッションをクリア出来たら、元の世界に戻るのか？

しばらくの間、古泉は沈黙したまま振り返りもしなかった。しかし、やがて観念したのかさつきより小さな声で（しかし視線は変えずに）

「多分ね」とだけ答えた。

いいや、その多分じゃ、今度は俺が満足できない。大いに満足できねえな。

「お前に答えてもらわなくちゃならないと思うんだ、多分」他に誰にきいたらいいのか分からないしな。

「それは、僕たちが今こうしていることの根本原因、ということでしょうか？」

相変わらず回りくどい言い方だが、多分そういうことだろうな。

「お前は言ったよな、ハルヒを満足させてやればそれで元の世界に戻る、て。俺が保証してもいいが、ここは元の世界じゃない」

「それは僕も保証できます」

ようするに、ハルヒは俺が殴っただけじゃ満足しなかったわけだな。

「そういうことになりますね」

そうなるの一つ問題が起こってくるよな？ 俺たちがうまくサン

ドバックを拉致してきて、ハルヒがそいつを使い込んだとしても――

――古泉がまた俺の方へ振り返った。

「果たして満足してくれるのか？ それで僕たちはこの狂った牢獄から出してもらえるのか？」

そういうことだな。

「かなり厳しいでしょうね」

俺もそう思うよ。しかしここで第二の疑問が湧きあがる。これで戻れないとしたら、果たしていつ戻れるのか？ そもそも、あいつが何かに満足するなんてことが有り得るのか？

「今回は無理でも、いつかは必ずそういう日がくるはずです」

それが世界最後の日でないことだけを祈るよ、俺は。

「あ、どうやら出てきたようですよ」

古泉が見逃さないように急いで視線を3年の教室のほうへ戻した。ようやく、キチガイ5センチ手前を光の速度で爆走している馬鹿女のお世話を俺たちがする羽目になった根本原因のお出まじだぜ。

後のことを考えれば、あいつもさっさと北海道行きの手ケットを渡してくれれば病院行きになるくらいのケガを負わずに済んだのにな。

「その前に、少しあなたの不幸なケガを治しておきますね」

いいや、それは保健室でもう済んだよ。お前がやったところで同じだし、今日一日では鼻血は止まりそうもない。

そう言おうとした俺の鼻先に、古泉はすつと手を伸ばし指先で触れた。

「どうですか、4時間目に神から授かった能力の効き目は？」

俺は今までずつと鼻に刺さりっぱなしだった紙撚りを引っ抜いた。少なくとも痛みは何も感じなかった。試しに、新しいティッシュを取り出して鼻をかんてみた。本来ならこんなことをすれば一瞬でティッシュが赤く染まるのだが、俺の鼻から出てきたのは乾いて凝固した血の結晶が少しだけだった。

「確かに治つてやがる」痛みも全くない。

「それは良かったです。一応、これからの演技のために紙撚りだけ刺しておいてください」

「あいよ」

バラのつばみを、渋々鼻の穴へ戻してやった。

ようやく教室からサンドバッグのお出ました。こちらへ近づいてくる。俺たちも隠れていても仕方ないので、堂々と廊下の影から出て向こうへ近づいていった。

昼休みの騒然とした廊下で、視線が空中でぶつかりあう音がした。互いに1メートルくらいの距離をあけて、立ち止まった。

「どうも。お久しぶりです」

古泉が会社の得意先の受付嬢に会ったかのように和やかな笑顔で言った。一瞬、サンドバッグも古泉の図太い神経にあっけに取られていたが、それでもようやく口を開いた。

「二人がかりで何の用だ？」

「いえいえ、用があるのは涼宮さんを除く、SOS団全員なんですよ」

「全員いるようには見えないが」

「代表して、二人できました。それに4人だとさすがに目立ちますしね」

「ふん」

サンドバッグは俺たち二人を互いに眺めながらしばらく思索していた。

「何の用かは知らないが、もう終わったことを蒸し返す気は、ない」

ここまで黙っていた俺が口を開いた。

「いえ、むしろ終わらせるために、来たんですよ」

足早に立ち去ろうと踏み出したサンドバッグの足が俺の言葉を聞いたとたんに、反射的に止まった。

「なるほどな。終わってない、つまり蒸し返しに来たってことか。モノは言いようだな」

サンドバッグはまたもや足を踏み出そうとした。

「もう結論から言いますね。パソコン4台を返却したいんです」

俺の言うのを聞いて、全身が硬直して止まった。

「俺たちは確かに賭けには勝ちました。けど、どうせSOS団にパソコンなんてあったって、使わないんですよ。それも5台全部なんてとても」

「どうして4台なんだ？」

俺と古泉は、このとき獲物が完全に餌に食らいついたか、そこまですでいなくても、もはやこの獲物に釘付けなのを確信して互いに心の中でほくそ笑んでいた。俺は説明を続けた。

「デスクトップパソコン以外の4台です。あれは、まずハルヒ自体が使っているのです。さすがに無理です。まあ使っている、て言っても机の上のインテリアみたいになっているんですけどね。そのデスクトップですら全体の容量の5分の1も使っていないんです」

5分の1の内の8割以上は秘密のミクルフォルダだ。そして今日も世界はいつも通り回っている。

「それで、どうせ使っていないならもう返しちゃっても同じじゃないか、て思ったんです。ご近所同士だし、これからもくだらないことでいつまでもいがみ合うのも、何か嫌じゃないですか。それならいつそ返してしまつて、今までのことを全部精算したほうが、互いに有益だと思っんです。ただし、さっき言ったデスクトップだけは、こちらのものであるとコンピュータ研究部にも認めてもらいます。理由はハルヒのこともありますけど、去年の冬のイカサマと、先日ゲーセン対決で勝負がついたのに最後に屁理屈を言ってひっくり返そうとした、その代償としてです」

「そういうことか」

ゆっくりと考えているようだった。だが悩んでいるフリをしたつて何を考えているかは超能力者でなくとも丸分かりだ。

「まあ、妥当なところだろうな」

「ええ、そうでしょう」

古泉があとを継いで言った。

「ノートパソコンはインテリアにもなりませんし、部室の隅で埃をかぶっているくらいならそちらで有効活用してもらった方が、パソコンにとつても本望でしょう。とりあえずこちらも1台は認めてもらえるわけです。それを彼は涼宮さんに進言したんですよ。SOS団員全員の総意としてね」

そこで古泉は俺の顔を指した。

「その結果がこれです」

サンドバッグの中でこの別々のピースがつながり、ひとつのフィクションが創造された。

「それもパイプ椅子か？」

「いいえ、綺麗な右ストレートでした」俺も即座に話を合わせてやった。

「まあ、どっちも同じようなもんだよな」

「ええ、そうだと思います」

俺はサンドバッグみたいにパイプ椅子も右ストレートも両方喰らったわけじゃないから本当のところどうか知らなかったが、本人が言うから多分そうなんだろう。

「で、まあその」

古泉が本題を切り出した。

「そちらさえ先の条件で合意できれば、今からパソコンを譲渡したい、と考えている訳ですよ」

サンドバッグの目に映っているのは、食堂で衣が全体の厚みの3分の2以上あるトンカツ定食を食べに行こうとしたところ曲がり角で可愛い女の子とぶつかってパンツが見えたがこれは夢ではないのだろうかという疑いだけだった。しかしそんなものは所詮、道端で1万円札が落ちていたのを発見して、周囲に人がいないか確認するに等しい行為にすぎなかった。その疑いも俺の顔の真ん中が赤く腫れているのを見てすぐに消えていった。あとは捨うだけだ。

——とりあえず、こいつらの中で何かあったことだけ確からしい——サンドバッグはそう考えていたに違いない。

「今なら涼宮さんも食事中ですし、気づかれずに部室からパソコン4台を持ち出すことは可能です。僕たちも手伝いますので」

「しかし、肝心の団長が納得してないんじゃないかな」

「それは大丈夫ですよ。さっき言ったとおり、パソコンは使われることなく部室の隅で埃をかぶっている状態です。まず失くなったことにすら気づかないでしょう。仮に気づいたとしても、我々4人が口裏を合わせることはすでに打ち合わせ済みです」

この状態でも、まだサンドバッグは迷っていた。

「まあ、そこまでいいでしょう。でも部室の鍵は？ それも団長

が持つてゐるはずだぞ」

古泉は自信満々でポケットの中から木の札のついた鍵を取り出した。

「今日は、涼宮さんは掃除当番でしてね。放課後は僕が先に部室に行つて、鍵を開けるように仰せつかつていてというわけです」

鍵をサンドバッグの目の前でぶら下げたまま続けた。

「どうしますか？　今日はそういう意味でもチャンスでもありません。しかしまあ、急な話ですし、後日でもチャンスはあるわけですし――

古泉がポケットに鍵を戻そうとした。

「いや、待つてくれ」

とうとう落ちてた金を拾い上げたぜ、このサンドバッグ。

「とりあえず、部室まで一緒に行こう」

3人は昼休みの喧騒に包まれた校舎を離れ、部室棟に行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7453g/>

涼宮ハルヒの絶望

2012年1月12日21時48分発行